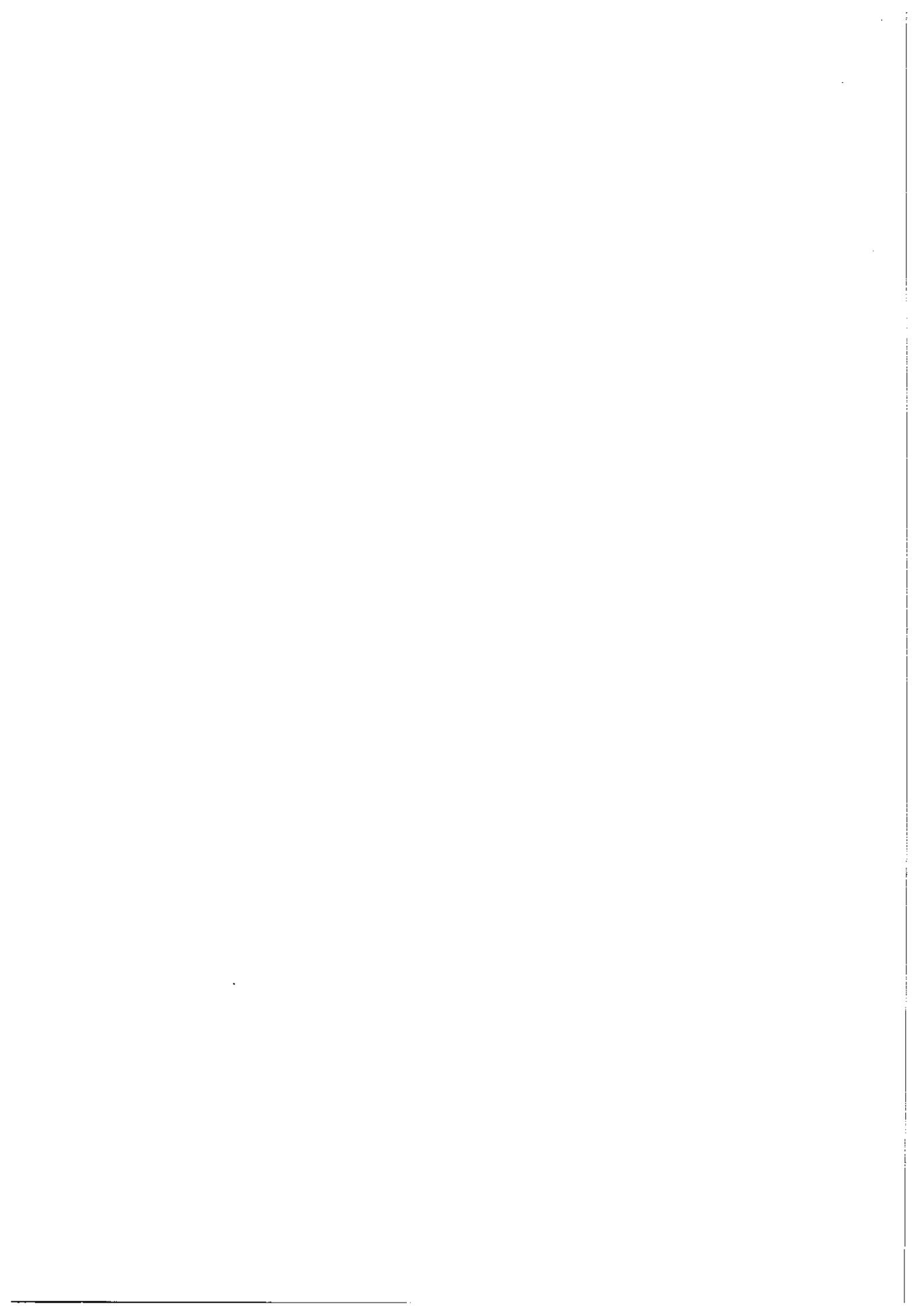


読谷村民話資料集 10

座 喜 味 の 民 話

沖縄県 読谷村教育委員会
歴史民俗資料館編



あいさつ

読谷村長 山内徳信

このたび、読谷村民話資料集第十集『座喜味の民話』が発刊されるにあたり一言ご挨拶を申し上げます。

遠い遙かな昔から語り継がれてきた民話は、民衆の文化遺産であります。私たちはこれを読むとき、先祖の素朴で純真な心や、教訓、人間の生きる知恵やユーモアに触れ、郷愁にもにた沖縄の昔の心に接することができるのであります。

それは、祖先の心をさぐり、現代に生きる私たちの思いが激しく燃焼するとき、明日に生きる灯ともなり、勇気ともなるのであります。

教育の中で、ふるさとの歴史や民話を学ぶこと（知ること）は大変重要なことであり、この民話集が家庭教育・学校教育・社会教育の中で活用され、子供たちや青少年の心の糧となり、更に新しい文化創造への礎になりますよう期待するものであります。

座喜味は、十五世紀初期、護佐丸が築いた座喜味城の麓にあり、文化の香りただよう由緒深い地であります。現在、座喜味には、やちむんの里、読谷山花織伝統工芸センター、村立歴史民俗資料館、村立美術館、読谷総合福祉センター、勤労者体育館、読谷村民運動広場（平和の森球場）などがあり、県内外から利用者が集まり、文化村としての中心をなしています。

座喜味のおじいさん、おばあさんが語つていただきたお話がこの本になりました。今や「地方の時代」「文化の時代」といわれており、次々と発刊される民話集が、「読谷ルネッサンス」の一環として、また、沖縄口（沖縄語）を継承するという意義も含めて、読谷村の「人間性豊かな環境・文化村」づくりに大きく寄与するものと信ずるのであります。

人の歩いた跡が道となり、その道がやがて文化となります。私たちは道を拓き、文化を創造するため、今後とも歩み続けることが大事であります。

最後に、このように素晴らしい民話集が発刊できますのも関係者の深い情熱と努力の賜物であり、ご協力を賜りました皆様方に心から敬意と感謝の意を表しご挨拶といたします。

あいさつ

教育長 岳原宣正

この度、読谷村民話資料集、第十集「座喜味の民話」がめでたく発刊される運びとなりましたことは、皆様方と共に慶賀の至りに存じます。

このようすばらしい企画が、読谷村立歴史民俗資料館の事業として進められ、昭和五十四年三月に創刊号「伊良皆の民話」が発刊され、以来今日に至る長い間、當々とその努力が積み重ねられ、遂に第十集の発刊を見ることが出来ました。私達は今ここに、あたたかい多くの村民の心からの支えと、関係者の情熱的な努力の継続によつて、本村に残る大事な有形無形の多くの文化財が守られ、人々の心の絆を深めていることを思う時、深い感謝の念と、又村民としての大きなよろこびと、誇りを感じるものであります。

このように、民衆の文化遺産として、多くの村民に愛読されるすばらしい民話集の発刊に際して、いろいろ御協力を賜わりました字座喜味の先輩の皆様方をはじめ、その他多くの諸氏の情熱と御誠意に対しまして、心から敬意を表します。

古里の歴史は人々の心を温かくいつくしみ、明日を楽しく生きる希望と勇気を育て、明るい人生の道を拓いてくれるものであります。

座喜味には、豊かな歴史の広場があり、古くから語り伝わつて來た、素朴で純真で情味深い多くの民話があります。そしてその心は、自ずと古里を愛する心となり、新しい文化創造への芽となり、豊かな人間性が培われ、地域の文化活動への胎動となりましよう。

今、社会は物の豊かさから心の豊かさを求めています。この民話集が学校教育の中で教材として生かされ、又社会教育に活用され、伝説や民話の心が、ふれ合う人々の心の中に、うるわしい夢となり魂を培つてくれるものと信じ、多くの村民の皆様方の御愛読をお奨め致します。尚、この事業を今後更に長く続けて行かれると思いますが、関係者の深い情熱と努力と村を愛する心に対し、深甚なる謝意を表してごあいさつと致します。

座喜味部落の概況—序にかえて—

館長名嘉真宣勝

座喜味部落は、読谷村の中央部に位置し、かつては間切番所が置かれ行政の中心をなしていた。座喜味部落が文献に登場して来るのは、一六四九年に編集された『絵図郷村帳』で、それには「城村」とある。「城村」の名は、すぐ集落の後方に一四二〇年頃に護佐丸によつて築造された「座喜味城」と関係がある。『御当国御高並諸上納里積記』（一六八〇年）や『琉球國由來記』（一七一三年）には、現在使用している「座喜味」の漢字が当てられるようになった。行政上の読み方は「ざきみ」であるが、方言では「じやちみ」である。

人口の推移は、明治十三年に一一九〇人、戸数二五〇戸で、明治二九年には人口一四一七人、戸数二七八戸、明治三六年には人口一四七四人、戸数三〇九戸と漸次発展してきた。平成二年二月現在の人口は一六二二人、戸数三九五戸である。

座喜味部落の主なムンチュー（門中）は次のとおりである。マチグヤ（松奥屋）門中、メーダイーイチ（真栄田上地）門中、ニガンドウンチ（根神殿内）門中、コーチハソジャ（幸地波平）門中、サクサ（百佐）門中、イーシ（江洲）門中、マーチヨーグワ（松尾小）門中、クシマーチンニー（後松根）門中、ヤマグシク（山城）門中、ユージヤ（与儀）門中、メーカナグシク（前金城）門中等がある。その中でもつとも古い草分けはマチグヤ門中で、屋号マチグヤ（松田正和）には部落の祖神が祀られている神家がある。正和氏が二一

チュ（根人）をつとめている。姓は、比嘉姓、当山姓、島袋姓、喜友名姓、松田姓、山城姓、波平姓、照屋姓、仲宗根、宇座姓等が多い。

戦前は、農業を主体とする専業農家が多数を占めていたが、戦後は急速に農家戸数が減少し始めた。昭和四年の統計資料で一七九戸だつたものが、昭和六〇年に一〇一戸と減少した。限られた耕地と、収入の乏しい農業に見切りをつけて、軍作業や他の職業に切りかえたためである。

戦前の農業の主体をなすものは、換金作物としてのキビ作と、主食としての甘藷作があつた。キビの品種は読谷山種で、明治初期から昭和初期まで栽培されていたが、昭和四年に大茎種二七二五（P0J）に変わり、戦後一九五五年頃からNCOO三一〇号が普及し現在に至っている。戦前は、栽培したキビは部落共同のサーチャー（製糖場）で黒糖にして出荷していた。サーチャーは、東原に十四幹、前田原に三幹、西原に一幹（個人有）、合計十八幹あつた。昭和十二年には、これらが統合されて座喜味共同製糖工場ができた。同工場は株式によつて運営され、一株二円、株数一二〇株、株主四名で発足している。昭和十八年には、旧日本軍による読谷飛行場建設のため畠地を強制接收されたため、キビ作をする耕地がなくなり同共同製糖工場も解散に追いこまれた。

ンム（甘藷）は主食として欠かすことのできないもので、どの農家でも年中栽培していた。甘藷の種類としては、スピクラガード、サクガード、メーディー、トウマイクル、ヌンドルチ、タイワナード、ハナウティード、ヒヤクゴード、ナガハマード、トウマイクル、ティルマー等があつた。現在でも甘藷の生産は盛んで、座喜味芋生産組合が中心になって、「読谷紅芋」を生産し販売している。

稻作は、一九六三年頃まで行われていたが、旱魃による被害と、甘藷栽培の普及によって衰退した。戦前の稻の品種としては、ヒジメード、サクメード、カバムチグミ、ハニジクル等があつた。大寒の終りの節にモミを水にひたし、立春の節にナーシルダー（苗代）に蒔いた。種子蒔きの日には、アチビーメー（熱い粥）を仏壇に供えて豊作祈願をした。このアチビーメーは、どんなに熱くても息を吹きかけてさますことを許されなかつた。息を吹きかけると、苗代に蒔いた種子が風に吹き飛ばされるという。苗代に種子を蒔いたら、御神酒を三度ふりかけた。種子蒔きに関する次のような禁忌俗信がある。

△種子蒔きの日は掃除をしてはいけない。掃除をすると苗代がネズミに荒される。

△種子や、カマドの灰をかきまわしてはいけない。かきまわすとネズミに苗代をかきまわされる。

メーダニ（苗）は苗代に三〇～四〇日間育成させる。苗につく害虫には、バッタ、ネズミ、猪、スズメ等がいて、駆除法としては、

ネズミはアダンの葉を畦の内側に立てて侵入を阻止したり、エンチユーヤ（ネズミ捕獲器）で捕獲した。猪は体臭のしみこんだ着物類を畦において、その臭気で退散させ、バッタは見つけ次第手で追い払つた。田植えはムシウドルク（盛蟻）の節にイーカー（結）をして植え付けた。除草は田植えの四、五日後と一ヵ月後の二回行つ

た。肥料は甘藷、ユウナの葉等の綠肥を用い、特に深田には甘藷の葉を用いた。稻の収穫は五月で、明治期まではクーラと称される竹製の道具であったが、その後にカナバ（千歯）が現われ、戦後にかけて足踏み式の脱穀機が普及した。クミウファと称して、新米を各戸一人当り一勺ずつ集め、それをノロ殿内に献上した。ノロ殿内では半分はノロの役職分として貰い、残りは首里王府に献上した。これは大正八年まで続けられ、この米を納めない場合、ヤミクシンと呼ばれる神罰が加えられるといわれた。

漁業は座喜味部落西方の都屋屋取りで盛んに行なわれていた。都屋における画期的な漁業の始まりは、明治四三年、大城徳氏が天浜に寄留し、漁業を専門に生計を立てた頃からである。それ以前の先着寄留民たちは、農業を主とし漁業は余暇のもの、あるいは農業の片手間のものであつた。

雇子のことをヤトウイングワとか、単にヤウイと称した。戦後はこのような制度はなくなつたが、戦前までは貧乏な農家の子供たちを都屋の漁師の家に、ドウシリ（身代）と称する前借金をして雇入れをさせた。都屋では次の六軒の家が雇子を入れて、当時としては大規模な追い込み漁業を行つていた。
①照屋正明氏、雇子一六名、
サバニ二隻所有。
②諸見カマ氏（マチャグワ）雇子一五人、サバニ四隻所有、
③前後家、雇子一六人、サバニ二隻所有、
④島袋又五郎氏、雇子八人、サバニ一隻所有、
⑤島袋義宗氏、雇子六人、サバニ一隻所有、
⑥前兼久家、雇子六人、サバニ一隻所有。

話者の上原亀吉氏や、山内政徳氏は照屋正明氏のヤトウイングワで、彼等同志はヤトイチヨーデー（雇兄弟）と呼ばれ、照屋正明氏はシュジン（主人）となる。また第三者からは照屋正明氏のヤトイシンカと呼ばれる。普通は屋号で呼ばれ、例えばマチャグワ一シンカとか、メークシシンカ、前兼久シンカと呼ばれていた。雇子

が主人を呼ぶ時はウトウ（父）、主人の妻はアンマー（母）と呼び、雇子たちは本人の童名で呼ばれた。山内さんの場合は一五〇円で九歳から二七歳までの契約であったが、実際は二三歳までヤトイの期限が済んだ。その後もそこで働いたが、半年で一、〇〇〇円のモーキを貰つたり、また一年で一、五〇〇円のモーキを貰つた。当時としては莫大な金で、一軒の家が四〇〇円程度で建築できた時代である。

また、山内さんはヤトイ時代、昭和十五年から十九年まで六〇人の大集団で長崎や鳥取、朝鮮までムレージの追い込み漁業に従事した。

ヤトイの中には女性もいた。女性は主にイユワヤー（魚売り）に当つた。

主人は普段は家でアミツクヤー（網つくろい）をして漁には参加しなかつた。アラバショ（新しい漁場）を探したりするは主人の役目であつた。また、ミジュンギリ等の最盛期には参加した。普段はシンドウ（船頭・トウムヌイとかいう）はヤトイのシーダヤカタ（兄貴分）がなつた。

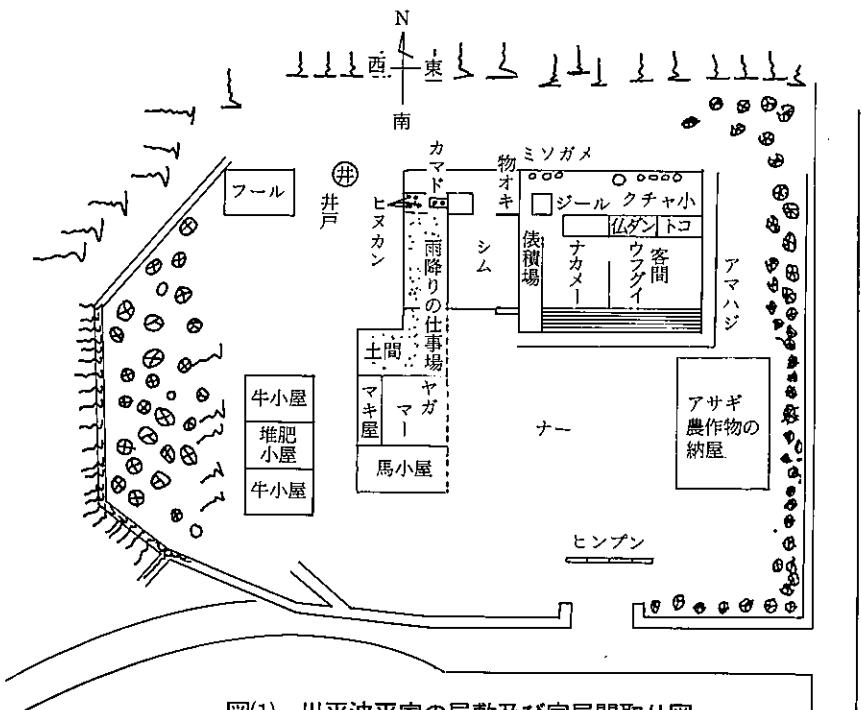
ヤトイ期間中は給与はないが、年に三回、正月と五月五日、八月十五日にハナモーキと称して、幾らかずつの配当金が貰えた。ソーム（高瀬具）十斤とると、ハナモーキとして五錢の配当がつく。上原亀吉さんの場合三円から三円五十銭のハナモーキと称して、特に功勞のあつた雇子に五円の配当があつた。それで、仲間の競争意識も盛んであつた。

衣・食・住

戦前の衣服は、芭蕉木から纖維をとつてバサーイン（芭蕉衣）を

織つたり、木綿の白カシを購入して布を織つた。バサーインは夏着で、冬はムミニンジン（木綿衣）を用いた。『日常着のこと』をヒージーと称し、筒袖で袖丈、着丈が短かつた。夏の仕事着には芭蕉の七ヨミで平織にしたものや、着古したもの藍染したもの、クルジナーと称するものがあつた。冬はウーシャーと称する木綿の着物を着けた。寒い日は、ノーロー（ぼろ着を重ね合わせて縫つたもの）を着けた。晴着のことをトウンジヘージと称し、袖は袂で着丈も長い。夏はバサーの一〇ヨミ以上の細織であり、裕福な家は麻や絹を着けていた。冬は木綿で一〇ヨミ以上で、その上からリンクア（衿で衽は無く襟が下までついていて、着丈はひざまで）を着けた。特殊着としては、死者に着けさせる着物をグソージン（後生衣）とか、シリジン（白衣）等と称してナナクビ（七重）に着けさせる。この着物は、嫁入りの時に母親が婿のものまで織つて持たす。花嫁衣裳は特別ではなく、晴着を着けて嫁入りをした。赤子の服をウブジン（産衣）と称し、縫う時に魔除けとして、背縫の上中央に赤布があるのは赤糸で印しをつける。これをマブイウシと称する。着物を新調して着ける際に、「ヌチエーチューケ、チノーヨーク。クワチージンドー、カリユシジンドー」（寿命は永く、着物は弱く。祝いの着物ですよ、喜びの着物ですよ。）と、唱えながらモーヤ柱（大黒柱）に襟をあわせて東に向つて着ける。

主食は芋であった。稻もわずかに栽培されていたが、ウーユミ等の晴の食物として、また病人や客用として使用された。糲のままで俵か砂糖樽に保存していて、使用する際にその分量だけを取り出して、シリウーシ（搗り臼）で脱穀し、チチウーシ（突き臼）で精米した。食事は一日三食制で、朝食のことをシティミティムンと称し、芋と葉野菜の汁か豆腐汁で済ませた。芋は一日分を朝で炊いた。起きた時期、アサジャー（朝茶）と称しお茶を飲んだり、ミークファ



図(1) 川平波平家の屋敷及び家屋間取り図

ヤー（日さまし）と称して残り物を食べることもあった。昼食をアサパンと称し、畑が近くにあるので殆んど家で済ませた。田植えの時にはムツチアサパンと称して弁当を作る時もあつた。子供たちの学校への弁当はンムムツシープグワ（芭蕉の纖維で編んだ籠）に、芋三～四個と油味噌を入れて持たせた。時たま午後三時頃に、サンジ（三時）と称して簡単な食事を取ることもあつた。夕食のことをユーバンと称し、一日の中では美味しい献立であつた。

住居は、戦前は三三五軒のうち二四六軒が茅葺で、七六軒が瓦葺、一軒がトタン葺、不明三軒となつてゐる。屋敷内に井戸を所有していたのが三四軒である。図(1)は、戦前の豪農川平波平（島袋）家の屋敷及び家屋間取り図である。屋敷の面積は一八〇坪位で、ジョー（門）は南東隅側にあり、門に近い位置のナー（庭）にヒンブン（前隠し）があつた。庭に豆等の穀類を干したりする場所であつたので、かなり広くとらねてゐる。

ウフヤ（母屋）は、屋敷のやや中央部にあり、東南側にアサギ、シム（台所）の前方西南側にヤガマ一、タムンヤー（薪小屋）・ンマヌヤー（馬小屋）があり、西南隅にウシヌヤー（牛小屋）、兼クエーヤー（堆肥小屋）、西北隅にフルヤー（豚小屋、兼便所）があつた。井戸は台所と豚小屋の間にあつた。大正三年前は茅葺であつたが、大正四年頃に母屋はヤガマ一、馬小屋は瓦葺にふきかえた。間取りは、ウフグイ（一番座）、ナカメー（二番座）、クチャ（裏座）、シム（台所）等からなつてゐた。

産育

結婚して数年も子宝に恵まれない場合は、喜名觀音堂を拝んだり、ミシクーガ（見せ卵）と称して親戚の子供をもつて育てると子供が授かるという信仰があつた。実子が出来てもその子供は大きくな

るまで養つた。

妊娠すると、旧暦の一日と十五日には、火の神と仏壇に「カリュシヌクワ、ナチクミソーリ」（健康な子を産んで下さい）と、安産祈願をした。妊婦や夫に対する禁忌として、①一家に二人の妊婦がない場合、一つのナベから、一つの杓子を使って食事をしてはいけない。もし、そうすると双兎が生まれる。②首にタオルを巻いてはいけない。巻くと胎児のヘソの緒が首に巻きついて死産する。③洗骨に立ち会つたり、墓の中に入つてはいけない。④妊婦はイカやタコを食べてはいけない。⑤妊婦は欠けた碗を使用してはいけない。使用すると兎（唇）口の子が生まれる。

産室はジール（地炉）のある部屋で、九日間火を焚いてぬくもらせた。フス（臍）は、シーグ（竹ヘラ）で五寸位の長さに切り、芭蕉糸で結んだ。カリフス（乾臍）は、初髪と一緒に大事に保管していく。イヤー（胞衣）は、夫が産室の裏側の軒下で雨漏れの落ちない内側に、男の子を一、三名集めて笑いながら埋め、上に大きな石を置いた。出産したらでくるだけ早いうちにカーウリと称して、妊婦の母親や叔母、姉など身近かな人々が、火のついたヒーナー（火縄）、イラナ（鎌）、シーグ（刃物）を持ち、汚れ物を洗いに近くの海へ行く。帰りは各班で定った井戸でウブミジ（産水）を汲んで帰る。この水で産婦の顔や手足を洗う。赤子を浴びせる水は各戸の戸を使用した。ナーチキスージ（名付け祝）もその日に行なわれた。年長者が、火の神の前に、酒、花米、塩等を供えて出産報告をし、それから祖父母等の名前を持ち寄り、花米を指先でつまみ、いろいろのしぐさの結果ワラビナー（童名）を選定した。供え物の一つにカサビウバギーメー（御飯の上に一個のおにぎりをのせたもの）といふものがあり、それは産婦やまだ子供のいない友人に上げて子宝をあやからした。出産した最初のカノエの日に、ウワーミシー（豚

見せ）とかウティラウガマシ（太陽拝ませ）と称する儀式がある。

まず、満潮時を見計らつて、桃の葉とススキを結んだサンで赤子の頭上を三回まわし、「ハサミマキスナヨ」（鉗負けるな）と唱えて初髪を切る。その後、火の髪と仏壇を拌み、ススキを赤子の額につけた。それが済むと、祖母が餅を持ち、これまで外へ出したことのない赤子を抱き、フール（豚小屋）道から庭を一廻りし、ティーダ（太陽）を拌ませた。その日に初めて着物を着せる。それまではフクター（ぼろ着）や母親の着物でくるんでいた。六日目にウバギーメーや豆腐等の簡単な御馳走を作り、親戚や隣近所の人々を招いてマンサンス！ジを行つた。七日目の干潮時にジールビチナイ（地炉下り）をした。一時、母親と赤子を一番座へ移し、ジール周辺に敷いてあるムシロを外へ出し、近所へ聞えるように大きな音を立ててゴミを払つた。出産して二十日程のカノエの日に、ハチアツチ（初歩き）と称して、鎌を持たせた男の子を伴い、里家の仏壇に出産の報告をする。一年目に、親戚や隣近所の人々を招いてタンカースージ（誕生祝）を行う。子供の前に、帳面、鉛筆、硯、ソロバン、お金、赤飯、トウフ等を並べて置き、その子が最初に手に取るもので将来を占う。

婚姻

戦前は青年男女によるモーアシビー（毛遊び）が盛んで、イーヌモー（ナカモー）で午後の八時頃から十二時頃まで三味線に合わせて歌い踊つた。旧暦の一月十六日と、二十日にはミヤラビ（娘）たちが手作りの御馳走を持ち寄り、ヤガマーに集つてニーセー（青年）たちをもてなし、また、旧暦五月五日にはニーセーたちがミヤラビたちに御馳走をした。これらの機会に交際相手を見つけて結婚に至る場合もあつたが、むしろ親同志の取り決めによる強制婚が多かつた。部落内婚がほとんどであつたが、時には部落外婚もあつて、こ

の場合ンマディマという料料があつて、男方は女方の青年会へ女の

容姿によつて三円から五円の金を納めた。青年会はこの金で豚をつぶし御馳走をした。この時の豚肉のことをホージシと称している。他部落へ嫁ぐ女のことをホーリムン（おちこぼれ者）と見られ軽蔑された。

話がまとまるごと、吉日を選んでサキムイ（酒盛り）の儀式がおこなわれる。男方から三角豆腐、アズキ豆などの御馳走をミシバーチに詰め、酒二合、カラカラ一本等を携え、女方に行く。それらの品物を仏壇に供え、先祖に婚約の旨を伝える。サキムイ以後は男は女へ通い、時々仕事を手伝つたりする。ニービチ（結婚式）も吉日を選んでする。嫁迎えの前に、花婿による嫁方の火の神拝みの儀式があり、その時に嫁方のニーセーたちが花婿に対して、竹馬に乗せてドウドウ馬をしたり、ススをつけたりいろいろの悪戯をした。嫁迎えは満潮時を見計らつて、婿方から、両親、ニービチンチユ（仲人夫婦）、クワン持ち、チョーチン持ち、近親者等が迎えに行く。嫁の家では、まず火の神を拝み、次に仏壇を拝み、そして親同志が盃を交わす。儀式が済むと、敷居を踏まないよう気に気をつけて花嫁を連れて行く。その際、花嫁側からは花嫁の友人数名が同行する。道中、後をふり返つてはいけない。

花嫁の家に着くと、上座から入り、二番座で仲人による花婿と花嫁に盃の儀をやり、両人の額にミジナディ（水撫で）をする。これらが済むと花嫁は台所の手伝いをする。上座では、三味線や太鼓に合わせて婚礼の歌が歌われ祝宴が行われる。花嫁は結婚式から三日間は実家に戻つてはいけない。三日目にムーケマカネー（婿まかないと）と称して、婿と婿の友人を交えて内輪で祝いをした。

葬 制

死の呼称として、シジャン、マーチヤン、ユーシリタン、ウシジリシミソーチヤン等がある。臨終の場には近親者が集まる。死が確認されると、居合わせる婦女子は号泣する。しかし、カミンチュ（神人）が亡くなつた場合は、門中の宗家を拝んで来るまでは声を出して泣いてはいけない。通夜のことをユートウジとか、ムツトウマイと称する。通夜は、夕方に亡くなつて、その日のうちに葬式をすることが出来ない場合に行う。部落有のウームンガチャを借りて来て、東側を開いて三隅を吊り、その中で夜を明かす。孫娘などが足元に座わりチンシダチャ（膝頭をもむ役）をする。湯濫のことをウビーウエースンと称する。水はビンス（葬式組）の男子二人で、ヒザイナー（左縄）を巻いた桶でウブガ（産井戸）から汲んで来た。湯をうすめる場合もサカミジ（逆水）と称して、冷水に湯を注いで作る。家族や親族の女性が中心になつて浴びせる。浴びせ方もクサガキと称して、腕を反対にひねつて腕で水をかける。髪も結い、チユティーアンダと称して一滴だけ油をつける。その後グソースガイ（死装束）をさせる。必ず奇数枚で、一番下はハータリカカン、次にミチガキ、アヤバサ、晴着（三枚一一番上にはシルニー（白芭蕉衣）を着けさせる。カサジン（重衣）と称して、一度に袖を通させる。サカバーリ（逆針）と称して、左胸に七本ずつの二ヵ所にさす。この場合左手です。この針はグソー（後生）で水にかけて飲むためだといわれている。副葬品のことをナーギムン（みやげ物）と称し、親戚から手拭などが贈られる。ジングラブルと称する三角袋に、フージョウ（煙草入れ）、煙草七本、花米等を入れて持たせる。死者はイリマツクワー（西枕）にして仏壇の前にねかせる。カタチヌメーと称する枕飯を仏壇に供える。

葬式のことをダビ（荼毘）と称す。野辺送りの序列は次の通りで

ある。

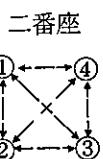
①テー（松明）、②ガラサーグワ（三本）、③葬式旗（三本）、④ニンブチヤ（念佛僧）、⑤ティングエ（天蓋）、⑥シリイヘー（白位牌）、
⑦コー（龜）、⑧家族、親族、⑨ビンス、一般人。女は白芭蕉をかぶ

り道中号泣しながら行つた。コー（龜）は青年四名で担ぐ。墓地ま

では約半里もあるので、途中でカタケーラシ（肩替え）を行ふ。そ
の時コーを地面につけていけないとされている。又、道中コーの綱
をつかまえて墓まで行く役目の子供も居る。これをガンウサギヤー
と呼んでいる。墓の口は前に亡くなつた門中の家族を中心として五
～六名が葬式二～三時間前に祓い清めてから開ける。棺を墓に納め

る作法等については聞いていないのでわからない。墓口は納棺後す
ぐ閉じてしまう。葬式から家に帰ると門に塩水を置いて身体にはね
かける。又、柱を抱きしめる事もあつたという。夕方になるとボー
ミチャヤーと称して魔物追いの儀式がある。そして戸主が亡くなると
その家の畑に竹が立てられる。これはその死者が畑に仕事をしにこ
ない様にとの示標であるといふ。又、家族の女人の人達はダビの日か
ら四十九日までダキジーフアをしたことである。

葬式が済んだその日の夕方ボーミチャヤーといつて魔物追いの儀式
があり、ボーミチャヤーは二人で、一人にテー（炬火）と砂を持
ち、もう一人はボーミチャヤー（竹を割つて作る）を持ち、屋内をく
まなく祓い淨める。その様子をここに記述して見る。まず次の矢印
の順序で祓い淨める。ボーミチャヤー持ちが先頭になり、それにテー
持ちが続き「アネアネ、クネクネ」と互いに叫び合いながら①→②
→③→④→①という順で隅々を三回一周する。次に①→③を一往復、
②→④を一往復し、計七回廻るわけである。



屋内の祓いが済むと、玄関に置かれている臼を蹴り飛ばして部落
境のキザマガ（南方）の所まで行き、テー、ボーミチャヤーを捨て
てくる。再びその葬家に戻つて来て、カタチヌメーを外で食べ、碗
はそのままそこにおいておく。ボーミチャヤーはビンスの人が
やる。

葬式の翌日、墓参りが親戚、近所の人々の間でなされる。これを
ナーチャヤミーと称している。墓参りが済むと海へ行き、潮水を汲ん
できて全員これで手足を洗い淨める。その後部落を流れている小川
(キザマガ)で次の様な儀式をとり行う。まずナーグデン(スス
キ)を二本左結びにして、アーチ形にし、それを川の中に立てて、
その中をくぐり抜けて男はヘラで草をすき取る真似をし、女は櫛で
髪をとく真似をする。このアーチを川の中に作るのは後にはただ一
本を結んで二本のサンを作り、それをさわつて渡るというまで簡素
化され、現在ではこの風習は行われていない。この儀式をした目的
は三日目からは忌みが晴れて、仕事をしてもよいし、髪を結つても
良いという表示のものであつたらしい。実際村忌みは三日ではれた
が、家族は四十九日間、いとこは三十五日間、またいとこは二十一
日間の忌みごもりをしなければならなかつた。

昔は死産児や幼児（七歳以下）が死ぬと墓には葬らないでフール
(豚小屋)の側に埋葬した。又何も供養は行われなかつたとの事で
ある。今では大人と同様に立派に葬儀を行つてゐる。そして龜にも
七歳以下は乗せず、おんぶしてスバヤド（幼児墓で本墓の側に造る）

に連れていった。

洗骨の事をタマギレーといふ。洗骨は死者が出た時とか、長い間死者が出ない場合は七月七日の七夕にする。この時は先祖の靈が墓を留守にして、仏壇にゆくといわれていると信じているからである。

墓を開ける時は線香十二本を立て、酒、餅、お菓子等を供えて御願してから開ける。洗骨に墓庭に於いて天幕を張り、遺骨が日光に照らされない様にし、普通主婦がこれを行う。まず頭蓋骨から先にやり順序よくやつていく。もし一年内に二人以上も死者の出た場合はクワンカサビーと称して洗骨は出来ないという。洗骨後、厨子甕に入れてずっと奥の方に納めておく。

年忌は一年忌、三年忌、七年忌、十三年忌、二十五年忌、三十三年忌、の六回行う。特に二十五年忌、三十三年忌は盛大に行われる。

座喜味の拝所と祭日

(1) グシクについて

①ザチミグシク……部落の北西、城原にある。グシク内には七カ所の拝所があり、一月の初御願やウマチー等に拝まれている。

②タカヤマグシク……部落北東、数キロの所にある。西側ふもとに三基の岩穴墓がある。門中清明祭に拝まれている。

(2) 御嶽について

①ユーシジンヌウタキ……部落の東、一班にある。岩屋にウスクの根がはつてある。岩の前に一個のだ円形の石があり、セメント製の香炉が設けられている。石と香炉が南側にあり、そこから岩に向つて拝む。

②カニマンウタキ……別名ウースファヌウタキとも称す。かじ屋の神・セメント製の香炉二基が設けられている。東方に向つて拝む。

⑤クシマーチュグワ……別名ザチミマーチュグワとか、ニーヌファヌウタキとも称している。部落の発祥の地であるという。

森をなしている。小さな岩があり、その前にセメント製香炉が三基設けられている。東方に向つて拝む。

③シラシウタキ……上地部落にある。座喜味城跡から波平に抜け道の途中の松林の中にある。白い岩がありそこを北向きに拝んでいる。かつて、山原船などにのろしをあげる場所であったという。

④タータモー……別名トウイヌファヌウタキとも称する。波平部落の中にある。ちょっととした広場で香炉二基が設けられている。北を向つて拝む。

⑤イーチウグワン……もとは上地部落で、読谷中学校敷地内にあつた。十年前に座喜味部落の波平宗信家の近く、道の側に移動してある。セメント製香炉三基が設けられ西北を向つて拝む。

⑥ユレーヌウタキ……別名ナカジンヌウタキとも称す。公民館前の松林の中に石垣で北方を向いて拝む。

(3) 神アサギについて

カミアサギというのがヌンドンチの東、県道そいにある。広場にコンクリート製の九本柱の建物がある。北隅にセメント製の香炉七基が設けられている。西隅にセメント製の小祠 シーシ屋が昭和五十二年に造られている。

(4) その他の拝所について

①ナーカユクダ……サチヌールの出た家で現在空屋敷になつている。南隅にブロックの小祠を設けている。

②マーチューグワチヂ……ユレーヌウタキの西側の丘。林の中にセメント製の祠がある。中には石の香炉が祀られている。首里の真壁殿内から分けてきた火の神で、地頭火の神として拝んでい

る。

⑤ テイラ、ビジュル、トウティクン、観音堂等は存在しない。

(5) 神井戸について

① エーガー……エーガー原にある。イリガサーのミジナディーをする水はここから汲む。沖縄各地から拝まれている。

② ジョーガー……西座喜味原にある。

③ ティランカー……島袋宗英家の近くで畑の下にある。

④ ダッチンガー……アガリ与久田の北方にある。

⑤ ナーカヌカー……部落東方入口で橋の下。

⑥ ウツチンガー……部落東方入口で橋のやや下流。

⑦ エンダカリガー……トラ山城ミーヤの下。

⑧ モーガー……照屋寛次郎家の下方。

⑨ ミーガー……モーガーの北方、当山家の下。

以上の井戸は旧9月のミジナディーに字や門中で拝んでいる。

(6) 旧家について

① マチグヤ……部落の根所、戸主松田正和氏

② ニガンドンチ……戸主、喜友名善好氏

③ コーチハンジャ

④ ヤマグシク（山城）

⑤ マーチヨーグワ

⑥ サクサ

⑦ ブイーシ

(7) 神墓について

① ヌール墓……部落東方、玉城五衛門家の前の森。

② スーチヌハント……東ユクダの北側の森。洞穴墓。

③ ザチミスーの墓……ナーカヌカーの東

④ タカヤマグシクの下のアジバカ（三カ所）

⑤ ニッチュバカ……クシバルにある。

⑥ ヌールバカ……ニッチュバカの下方

⑦ カサンジャーのウファカ

⑧ ウェーユーのウファカ……長浜、カンジャガマの西側。

⑨ ネーネ波グシク……北向きのガマ

⑩ マテージグシク……現在、瀬名波の川平に移動している。

⑪ 楚辺のタキンチャーのヌール墓……ナーカユクダの管理。

以上、戦前まで部落で拝んでいたが、現在ではマチグヤ門中が拝んでいる。

(8) 主な祭祀行事

① ハチウグワン……一月三日～七日以内で、できるだけ早く行なう。マチグヤの神、ヌンドンチ、神アサギ、ナーカユクダ、ユーシジヌウタキ、ニースファヌウタキ、ザチミグシク、シラシウタキ、タータモー、イーチウグワン、マチヨグワーのチヂ、ユ

レーウタキの計十三カ所を拝む。

② ウマチー……ウマチーは、二月十五日、三月十五日、五月十五日、六月十五日、八月十五日の五回行なわれる。部落で、タキダキを拝み豊作の祈願をする。

③ 神清明祭（三月イリヒ）……現在は門中で神墓を拝んでいる。

④ カンカー（十一月吉日）……部落の出入口に、ヒザイナーに豚の血を塗り、それに骨を結えて吊るす。カンカーウスメー（五十六～六〇歳の男子）、区長、組長、ノロ等が各御嶽をめぐつて悪風抜いの祈願をする。

現在は行なっていない。

【参考文献】

『沖縄民俗』第十一号、琉球大学民俗研究クラブ

島袋勉「川平波平家の屋敷及家屋間取り図」

名嘉真宜勝「読谷の聖地と信仰」（『読谷村立歴史民俗資料館館報』

第三号

名嘉真宜勝「読谷村の漁業」（『読谷村立歴史民俗資料館館報』第

五号



神アサギ



カニマンウタキ

目

次

あいさつ

読谷村長

山内徳信

あいさつ

読谷村教育長

岳原宣正

序

館長

名嘉真宣勝

『座喜味の民話』伝説地名地図

『座喜味の民話』地名地図

座喜味民俗地図

第一編 翻字資料

〈動物昔話〉

1 十二支由来	照屋 寛良	1	10 五月五日由来	比嘉 ル	22
2 雀孝行	当山 三次郎	3	11 五月五日由来	上地 弘治	27
3 クラーとターアイユくえー	照屋 寛良	6	12 食わざ女房	山内カナ	30
4 雀酒屋	上地 弘治	9	13 クスケー由来	当山 トミ	31
5 雨蛙不孝	嘉利 吉	10	14 クスケー由来	嘉山 ハツ	33
6 犬の足	嘉利 吉	11	15 鬼餅由来	嘉テル	34
7 猫と鼠	照屋 寛良	12	16 鬼餅由来	波平	37
8 猿の生き肝	照屋 寛良	13	17 キジムナー	城内 常安	39
9 豆と糞と炭	島袋 龜次郎	14	18 キジムナー	盛吉 松	37

21	四畳半由来	山	内	地	弘	吉	41
22	ハブよけ呪文	山	内	嘉	利	吉	43
23	アカマタ聟入	當	山	ハ	ツ	ナ	44
24	アカマタ聟入	照	屋	カ	マド	ナ	44
25	木魂女房	比	嘉	利	吉	51	46
26	子育て幽靈	当	山	ウ	シ	51	46
27	子育て幽靈	比	嘉	利	吉	53	46
28	塩吹き臼	島	袋	嘉	利	吉	53
29	塩吹き臼	島	袋	テ	ル	53	46
30	唐旅をした兄弟	当	山	三	次郎	59	46
31	モーイ親方	比	嘉	利	吉	71	46
32	勝連バーマ	比	嘉	利	吉	75	46
33	床柱の逆立て	照	屋	嘉	利	吉	75
34	肝試し	山	城	盛	吉	79	77
35	肝試し	波	平	蒲	助	81	81
36	喜屋武ミーベーウ	比	嘉	利	吉	82	83
37	本部サークルーと喜屋武ミーベーウ	比	嘉	利	吉	82	83
38	佐久川三郎	比	嘉	利	吉	84	84

39	田場大工	比嘉利吉
40	恐いもの比べ	山城盛吉
41	垢湯は腹薬	照屋寛良
42	夕顔と人の頭	山城盛吉
43	果てなし話	照屋寛良
44	高名の鼻きき	山城盛吉
45	聞き違い（ヒル）	山内松
46	牛泥棒の話	照屋寛良
47	鳩料理	玉城マツ
48	屁ひり嫁の踵栓	當山ハツ
49	山原と団亀	當山ハツ
50	黄金の瓜種	上地弘治
51	箱の鼠	山城盛吉
52	真玉橋の人柱	當山ハツ
53	真玉橋の人柱	比嘉テル
54	願いごとは大きく	照屋寛良
55	ちぎりの話	島袋亀次郎
56	子供の寿命	照屋寛良
57	脈とり名人	当山三次郎
58	親の声は神の声	照屋寛良

59 神の美作	当山	三次郎	145
60 東上地の粟上納	照屋	カマド	148
61 薫しへ長者	山内	松	149
62 城間仲	玉城	五衛門	150
63 繼子の肝	山内	カナ	151
64 繼子の弁当	喜友名	ウシ	152
65 繼子の麦つき	当山	チヨ	153
66 繼子と杓子	松元	ウト	154
67 繼子の竹の子取り	當山	ハツ	155
68 繼子の井戸掘り	照屋	寛良	158
69 繼子話（通り池）	山内	カナ	160
70 繼子と二十日月	与儀	マス	161
71 繼子と赤肉	照屋	カマド	162
72 繼子の茶腹飯腹	山内	カナ	162
73 繼子と姑（うどんはミニズ）	上地	弘治	163
74 繼子と姑（肝焼木）	玉城	マツ	163
75 繼子と姑（芋にとげ）	波平	ハツ	166
76 繫と姑	當山	ハツ	167
77 繫と姑（麦搗き）	玉城	マツ	168
78 繫と姑（二十日月）	當山	ハツ	169
79 親捨て山	当山	チヨ	170
80 親捨て山	玉城	五衛門	172
81 仲順大主の話	照屋	カマド	174
82 大晦日の棺	当山	三次郎	176
83 城間仲（盜人）	比嘉勝一	一	187
84 宝物の話	照屋	寛良	189
85 炭焼き長者	波平	ハツ	191
86 大年の客	照屋	寛良	193
87 タンヤチブラー	島袋	亀次郎	198
88 もの言う牛	比嘉利吉	吉	200
89 塩が一番おいしい	山内	カナ	201
90 後生貧乏	当山	カナ	202
91 ニーブイ虫ジラード	当山	三次郎	209
92 蚊になつた男	上地	弘治	215
93 易者の話	照屋	寛良	218
94 マジムンと友達になつた人	当山	三次郎	223
95 国頭大宜味のカナチク	当山	三次郎	226

〔伝説〕

96 夫振岩	當山	トミ	230
97 一日橋の由来	當山	ハツ	232

98	名護親方と具志頭親方	比嘉利吉	233
99	チヨーフグン親方	比嘉利吉	235
100	仲泊親方	当山三次郎	236
101	支那の張良の話	照屋寛良	237
102	西ぬ松金	比嘉利吉	239
103	護佐丸	比嘉利吉	240
104	名護の親方	山城盛吉	244
105	白銀堂由来	比嘉利テル	247
106	普天間権現	山内力ナ	252
107	屋良ムルチ	山城ウシ	254
108	屋良ムルチ	比嘉利吉	255
109	赤犬子(水船速船)	比嘉利吉	256
110	墓の始まり	又吉矢之助	257
111	盆踊りの由来	山内力ナ	259
	参考文献		
112	位牌の始まり	又吉矢之助	260
113	ナーチャミー由来	山内力ナ	262
114	クラガード発見	山内力ナ	263
115	友人の茶毘には行くな	照屋寛良	263
116	ハジチ由来	当山千代	268
117	お茶二杯	當山ハツ	270
118	吉屋チル	喜友名ウシ	271
119	吉屋チル	比嘉利吉	272
120	多幸山フェーレー	照屋カマド	273
121	多幸山フェーレー	當山ハツ	274
122	大木フェーレー	玉城マツ	275
123	山田ヌン殿内	當山ハツ	276
124	喜名トウクハンジャーの話	与儀マス	277

参考文献

第二編 資料

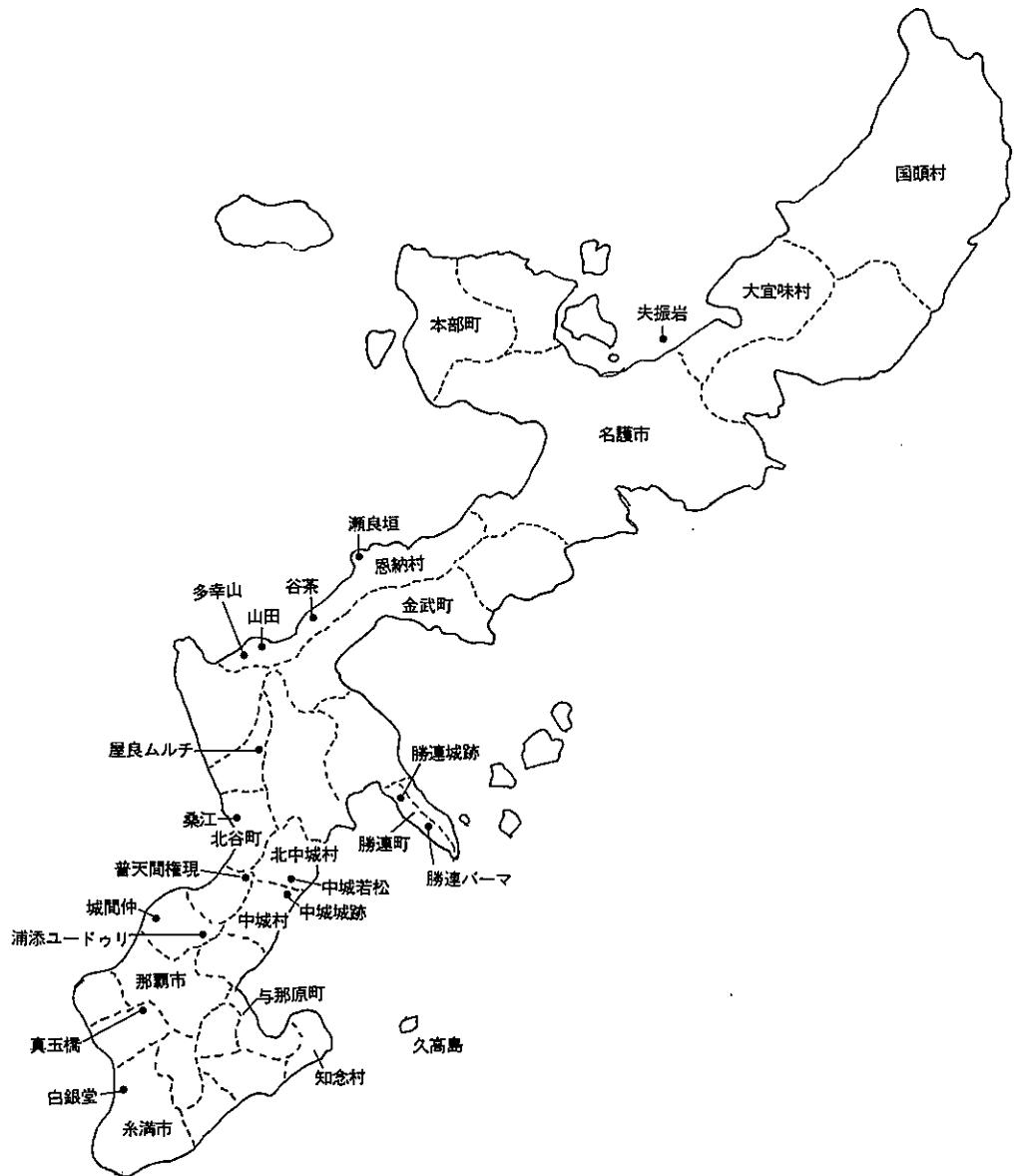
話者別一覧表

調査者名簿

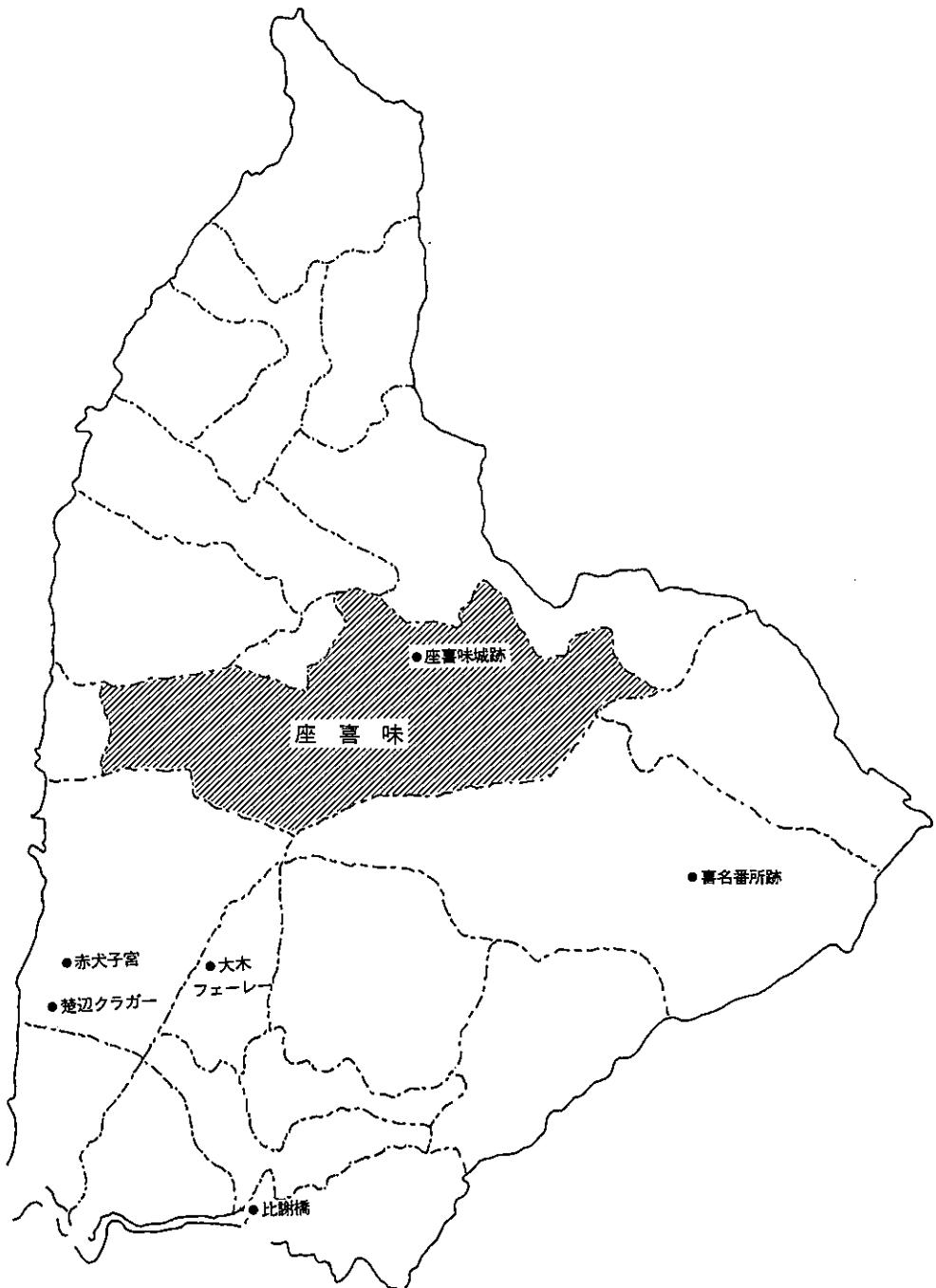
翻字者一覽表

編集後記

〔座喜味の民話〕伝説地名地図

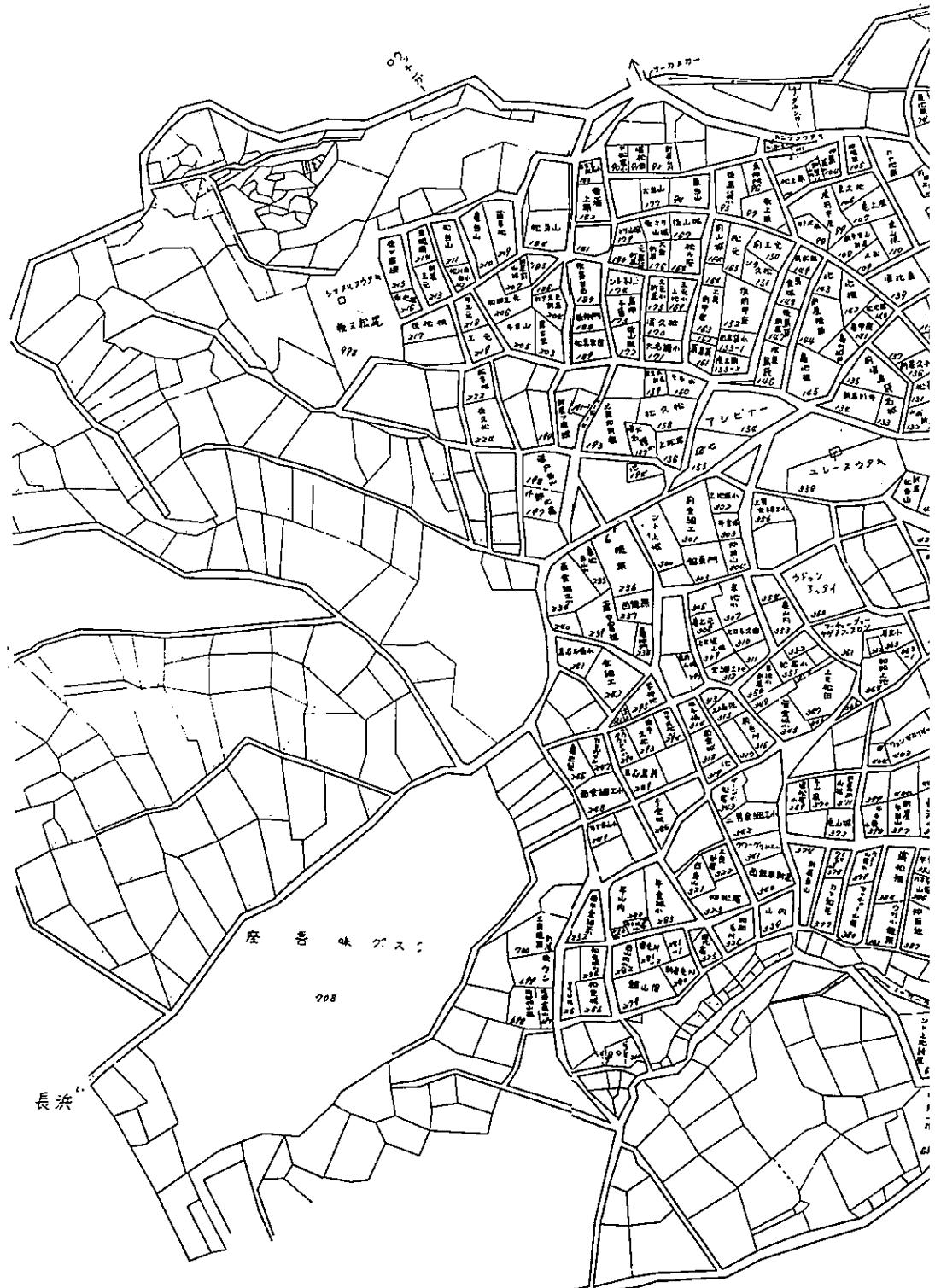


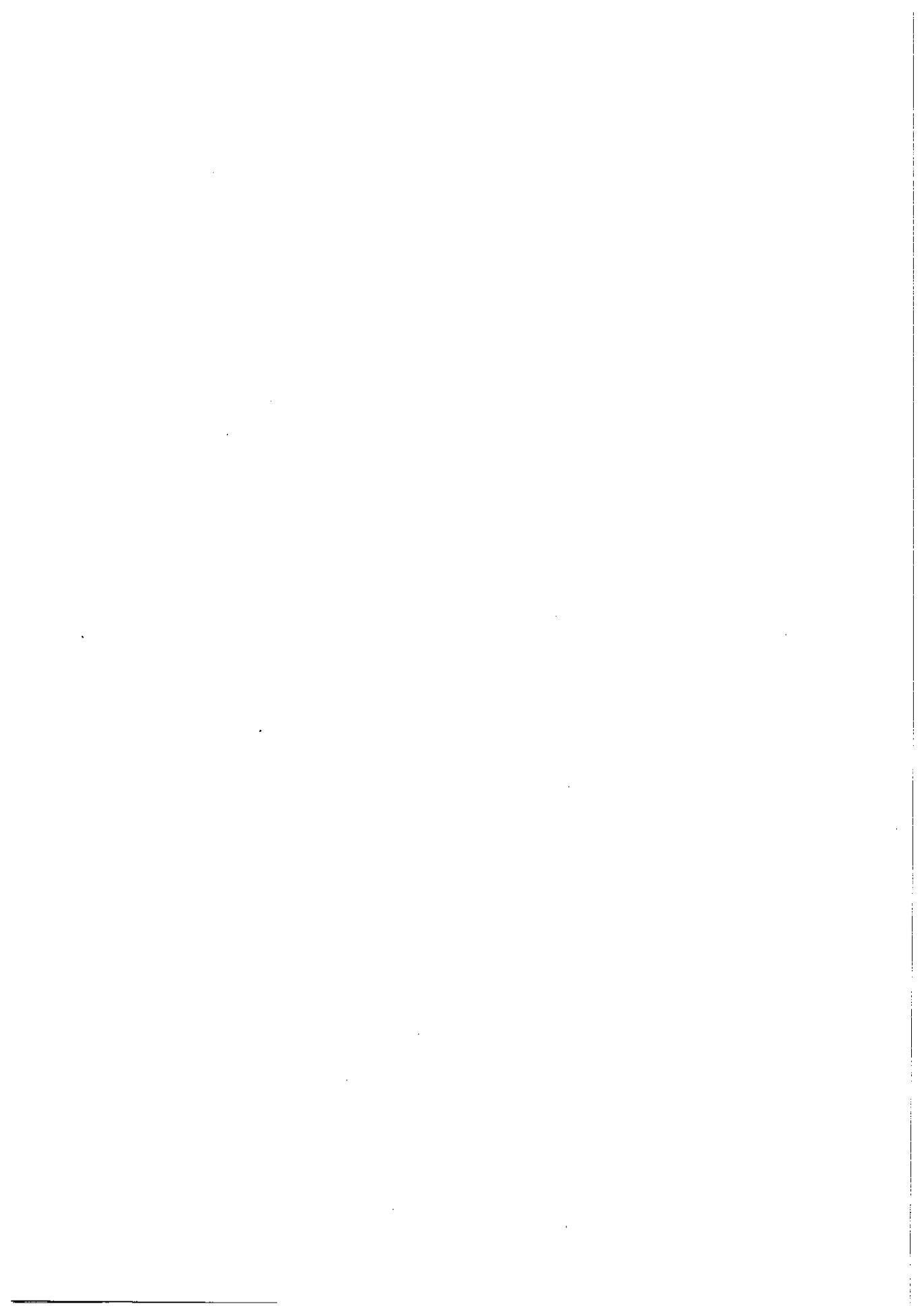
(座喜味の民話) 地名地図 (読谷村全図)





座喜味民俗地図





第一編
翻字資料



一、翻字対象話の選定基準

- ①昔話（動物昔話、本格昔話、笑話）伝説を翻字対象とした。
- ②聴取できたすべての話型（話型として認定される可能性のあるものも含む）を網羅すべく、断片的な話でも翻字の対象とした。
- ③類話がある場合は、最も良い語りと思われる話を選定した。
- ④方言・共通語両方の語りを収録してある場合、原則として方言の語りを翻字対象とした。

二、翻字について

- ①語りに忠実に翻字することを原則とした。
- ②語りの場面を反映している事柄や、話の伝承に関わる事柄については、すべて翻字した。
- ③話者の語り口調に区切りがない場合、翻字者の判断により、適宜句読点を打った。また、話の展開に従つて適宜段落を設けた。
- ④語り手自身が、補足的に説明しているところはそのまま翻字し、△△で示した。

三、方言表記について

- ①表記は漢字仮名混じり文とし、漢字には全て読み仮名（平仮名）を付けた。また、漢字のあてられる箇所にはできるだけ漢字を用いたが、無理にこじつけた当て字は避けた。
- ②民俗行事や特殊な民俗語彙などは、片仮名で表記した。
- ③引き音（のばす音）はーで表わした。但し、引き音に助詞（～は、～が、～の、～を、～に等）が含まれている場合は、助詞の部分を小文字で表わした。

例　うぬ^{はなし}話い出^だじとーさにやー

四、対訳について

- ①方言（共通語混じりも含む）翻字には、共通語の対訳をつけた。
- ②対訳は方言翻字に忠実に行い、できるだけ意訳を避けた。また、勝手な付加や削除はしなかった。
- ③共通語語りの場合でも分かりやすくするために、下段にその話を清書したものもある。
- ④難解な語句や抽象的な表現を避け、できるだけわかりやすい言葉で対訳した。
- ⑤対訳上、補足説明の必要な箇所には（ ）を付して補なった。
- ⑥方言翻字文と対訳文の行数を調整し、段落を揃えた。

五、本文について

- ①上段に方言翻字文、下段に対訳文の二段組みにした。題名の上に通し番号を付した。

②話の初めには、題名、話者名、話者の生年月日、翻字者名を明記し、話の終りに採集年月日、調査団名、採訪者名を明記した。

題名は「日本昔話名集」(柳田國男監修)、「日本昔話集成」(関敬吾著)によつたものもあるが、多くは方言翻字に即した題名を付した。

③語りの中の会話部分(文脈上、会話と判断される部分も含む)や、思慮している部分には「」を用いた。「」は会話中の会話を示す。但し、会話部分は特に改行しなかつた。

④歌の部分は、改行して全体に二字下げて書いた。一行には二句程度記入し、句間は一マスあけた。

六、注記について

①人名、地名、年中行事などについては可能な限り注記して説明した。但し、地図で補える分については省略した。

②地域独特な意味をもつ語句については、注記して意味を説明した。

③注記は、できるだけ読谷村座喜味の民俗を中心として行つたが、中には文献を参考にしたものもある。参考文献はまとめて示した。

一
十
二
支
由
來

話者 照屋 寛良(明治四十一年五月十日生)

翻字 知花春美

これは何處の国にあつたことが分からぬが、だい
たいインドか中国からその話は出たんでしょうね。

くれー何処ぬ國んかいあたんりちえー分からんしが
だいたいインドか中國からる、うぬ話い出じとーさ
にやー。

くぬ十一支ぬ決まらん昔、くぬ月え十一カ月あしえー
やー。うり、うりになぞらりやーい 十二支決みらん
あれーならんりち、なー県下ぬ動物んかい布令みぐら
ちよーるふーじ、「何月何日ぬ何時までいに、私達
王ぬ宮殿ぬんかい、先着次第十二番までい番付けてい。
くれー後世んかい残いるくとうやぐとう、動物んな集
まり」りち、布令しえーるふーじ、県下んかい。

あんさぐとうなー、動物ぬちやーや、なー準備やる
ふーじや、ずっと前から。あんさい 明日あなーう
ぬ集まりりる日に鼠えなー、あれーてーげーぬ知恵ぐわー
ぬあしやぐとう 「私ねーなー歩ちえー遅さぐとう、
牛とうか馬とうか犬とうか、私ねー負きーぐとう歩ちゅ
んりねー、明日うていなー準備そーきわるやる」りち。

と全土に布令を出したようだ。

それで、動物たちはずっと前から準備をしていたよ
うだ。そうして、明日はその集まりという日、鼠は、
だいぶ知恵があるので、「私はもう歩いては遅いので牛
や馬、犬とかに私は負けるので、歩くとなると明日で
準備しないといけない」と考えた。

あんさーい、牛ぬ小屋ぬ天井んかい鼠おうてーる
ふーじよー。あんし、下うとーてー牛がなー、明日あ
しゆつぱつ出発ぬ日やるむんりやーなかい、背中んかい、くぬ食
りよう料んぬーん積ち、自分ぬ背中んかい。

あんさぐとう、鼠おうり見じやーい、「あーとー、
いーばーやつさー。牛ぬ背中んかい乗てい行きわるや
る」りち、あんし天井裏から、うつ飛んじ乗とーしが。
牛の一分からんしえー、軽さるあぐとう。背中んかい
荷や積ちえーぐとう 荷んかいる飛んじ乗とーんりー
ぐとう。

あんさーいなー、動物ぬあるうつさ皆、かんし、う
ぬ宮殿ぬんかい行ちゆるふーじやしが、牛えちがきぬ
まんでい、うぬ宮殿ぬ門入口うてー、うぬ受付ぬ座
ちよーる所ぬ入口うてー、「あい！私ねー一番なたん
ろー」りち、やぐいかきてーるふーじ。

あんし、鼠おうつ飛んじやーなかい、チヨロチヨロ
ロし、すぐ王様ぬ前んかい、「はい！私ねー一番やいび
んどー」りち言ちやぐとう、牛え怒みちえーるふーじ、
「あいえー私ねー一番るなでーる」。

あんさーい、子、丑、寅し、鼠お先なとーるふー

そこで、牛小屋の天井に鼠はいたようだ。下では牛
が、明日は出発の日だからと、背中に食料などを積ん
で、自分の背中に（積んで準備をしていた）。

そして、鼠はそれを見て、「あつこれはいい、牛の背
中に乗つて行こう」と、天井裏から飛び乗つたようだ。
軽いので牛は気がつかない。背中に荷を積んで、荷の
上に飛び乗つているのでね。

そうして、動物は全員、その宮殿に行くようだが、
牛は心がけが良くて、宮殿の門の入口で受付の座つて
いる所の入口で、「はい！私は一番になつたよ」とかけ
声を上げたようだ。

そのときに、鼠は飛び下りて、チヨロチヨロ王様の
前行つて、「はい！私が一番ですよ」と言つたので、
牛は怒つたようだ。「どうしよう、私は一番にしかなら
ない」と。

そうして、子、丑、寅となつて鼠は先になつたよう

じ。うりから数えらつてい十二支のこと。時刻や方角、十干と組みあわせて年や日をあらわした。子(鼠)、丑(牛)、寅(虎)、卯(兔)、辰(龍)、巳(蛇)、午(馬)、申(猿)、酉(鶏)、戌(犬)、亥(猪)。

だ。それから数えられて十一支まで付けられたそうだ。
はい！これもそれだけさ。

採集 S 52・2・27 読谷村民話調査団第十六班（照屋寛信・知花利枝子）

注 十二支のこと。時刻や方角、十干と組みあわせて年や日をあらわした。子(鼠)、丑(牛)、寅(虎)、卯(兔)、辰(龍)、巳(蛇)、

2 雀 孝 行

話者 当山 三次郎（明治三十四年八月十日生）

翻字 村山友江

うりん一人ぬ子が、一人やじこーぬまじめぬ子供、
女、二人女。さーにかい、一人やじこーはでな人、
すがい上手。あまくま社会歩ち、自分ぬいりきさばかー
ん考 やーにてー。

あんさーに、いつのまにお母さんが病気なみそーち。
その病気途中やていん、ちゅら着物着ち遊びーがりち。
またなー、くぬお母さんかいちやつぴん情んねーらん
よーくー、ちゅらすがいし歩ちゅしる知つちょーる。

そうしているうちに、お母さんは病気になつてしまつた。お母さんが病気であるのに、きれいな着物を着て遊び歩いていた。そしてお母さんに対しても少しの情もなく、きれいな格好で歩くことしか分からなかつた。

あんさぐとう、一人ぬ親孝行、なー親孝行、長い病気し
もーちやぐとう、なーうぬ女ん子一人さーに親ぬ孝す
んり。

（着ぬ着物ぬん、織ている着たんり、織てい、私達
子供時代ん、お母さんたー、布織ているくしーセーした
ん。夏物、冬物りち。あんし、なまー長ならんよーく
りがちりたしん、くぬ戦後なでいからやる。うぬ女ぬ
方あ着物、むる記憶やしが）

うぬ場にあんやぐとう、くぬ親孝行すしえー着物織
てい着る機会んなーねーらんりぬあたいなやーに。カ
ナ、カナ、布織いるカナ、糸てーひやー、糸、
うりあり布あじている織りわる着らりーさい。着らりー
ぐとう、うぬ暇んねーらんよー。カシかしげてい、カ
シから糸まーさーに身体うすてい、親孝行しち。
またくぬくれー親ぬ孝んねーらんしえー美ら着物着
ち自分ぬ身体びかーんほがらかに、まーんくい社会面
歩ち楽しみばかーん。親にん孝行さんぐーとうー、病
氣の途中もさんよー。しちやぐとう、なーくぬ子供お
親不孝、なー神様からやんしえーてーさに。

それで、お母さんの病気が長ひいたので、親孝行な娘一人で看病をしていた。

（以前は）着物は（自分で）織つて着けるのであつた。私達の子供時代にも、お母さんたちが布を織つて、夏物、冬物というふうにつくつていた。その風習がなくなつたのは戦後のことであつて、そう長くはない。女の人はみんな、（布を織つていたと）記憶しているんだが

その時もそうであつたので、この親孝行な人は着物を織る暇もないくらいだつた。糸を紡いで布を織らないと、着物を作つて着けることもできないからね。（その親孝行な人は、親の看病をするために着物を織る）暇もなかつた。カシに糸も巻きつけて、体にかけたまま親孝行をしていた。

また親孝行することも知らないのは、きれいな着物で自分だけを着飾り、あつちこつち楽しんで歩きまわつていた。お母さんが病気中であるのに、看病することもしなかつた。そしたら、もうこの子供は親不孝、神様からそういうふうにされていたんでしようね。

あんさぐとう、くぬ親孝行しちやしえーあぬクミム
ドウヤーリち、うぬ赤色ぐわー黒色ぐわーふーじーが、
なんじゅみーだつたん鳥ぐわーぬうしえーや。ゆう軒
下んかい来しが、うれー親孝行しちやる子やんり。

へまたくれー、くぬ必なし店んれー、店んれーぬ戸
口。うまーなまー、なー俵んかい入つち米え、あぬ積
りるあさい店あ。あんすぐどう私達が青年時代までい、
米売いる店あ、箱ちゃつぴなーぬ箱うまんかい並びてい、
うりんかい俵いーんち、五合どうか、二合どうか、三
合どうか、五合いつそくとか計てている卖いたるば
てー

うまつち米ん喰いるくとう、うつさありん上やん、
また親孝行すんり、着物ぬん着さん姿が悪いり。

また親孝行さんたしえーや、カーラカンジユーシー
りち。川端から水ぬ中から、見らん所から物搜めー
てい喰いる立場んかいなたんり、神からぬお授け。

この親孝行したのは雀といつてね、赤か黒に近い色
をした（鳥が）、あまり田立たない鳥がいるでしょう。
よく軒下に来る鳥が、親孝行した子供であるそうだよ。
へまたこの鳥は、店などの入り口付近にね（来たよ
うだよ）。店では、俵に米を入れて積んであつた。私達
が青年時代までもね。米を売る店はね、大きな箱をそ
こに並べてこれに俵の米を移して、五合とか、二合と
か、三合とか、五合いつそくとか計つて売つていたわ
けだ）

（それでその雀は）そこで米も食べなさいといつこ
とになつていて。親孝行するため、着物を織つて着
けることもできなくて、身なりも悪かつた。

また親孝行しなかつた鳥は、川蟬といつてね。川辺
りや水の中から、食べ物を搜して食べるはめになつた
そうだ。神様からのお授け（であつた）

翻字 知花春美

昔、うれー何百年るないらー、あるいは何千年前
ぬくとうやら一分からんしが、親祖父からぬ伝え話。
あるいは、また他人からぬ、古老人ちゃーから話い
聞ちよーしやしが……。

沖縄ぬあるとうくるによ、兄弟二人うしがてー
男兄弟二人やてーるふーじー。一人やじこー親思やー、
親孝行やてーるふーじー。一人やまだなー、親ぬ言いしきー
むる聞かんよー、やてーるふーじやしが。

あんさーい、うぬ一人ぬ子んかい、親ぬ、くれーじ
こーそーいつちょーぐとう、くりが心配あねーらんり
ち、一人やなーそーいつちょーねーんぐとう、くりが
先ぬ案じらりつさーりち、ちゅー心配やてーるふーじ
やしが。

あんさーい、親ぬなーくぬ一人ぬ者ぬんかい、いやー
やつまり、ちゅーやはだきかい行けーりねー山かい行いた
んり。ちゅーまた山かい行い、海んかい行ちゅ

昔、これは何百年になるのか、あるいは何千年前のことなか分からぬが、親、祖父からの伝え話。あるいは、また他の人、古老方から話は聞いたが……。

沖縄のあるところにね、兄弟二人がいるんだが、男兄弟二人だつたようだ。一人はとても親思い、親孝行だつたが、一人はまた、親の言うことにはぜんぜん耳もかきない、そのようであつたそつだが。

それで、その一人の子に対しては、親は、これはとつてもしつかりしているので心配はないが、あと一人はしつかりしていないので、この子の前途が案じられると心配していた。

そこで、親がこの一人の者に、おまえはきょうは畑へ行きなさいといふと山へ行くし、山に行きなさいといふと海へ行く。きょうはまた、これをやりなさいと

ん。ちゅーやまた、くりしーよーりねーありつし、ありしーよーりーねーくりつし むるなー親ぬ言いしえー 反対やてーるふーじ。

一人や、そーいうー、ゆー聞ちゅしが、あんさーい 親があんにーかんにーするうちに 相当年んんじ、なー死ぬ間際なてい、自分くるなーだいたい自分ぬ寿命 分かいぐと、私ねーくれー長 やうらんしが くぬそーいつちえーねーん子に限てい愛さるあぐと、親うりんかい、「むしか私が死にーねー、私ねー川端んじ墓 造てい、大雨ねーうまんかい水ぬちるがいるぐと、あぬー埋みてーとうらしよー」りち。あん言やんあれー、うりが反対に何んくい反対しーるすぐとあんさーい遺言せーるふーじや。

親ぬうぬ遺言の一聞ちやーなかい、親ぬすぐ亡ちや ぐと、なーうにーねー心改みて、親ぬ生ちちめーる間ある限り、親んかい不孝しぇーぐと、今度んちよー親ぬ孝行さんあれーならんりち、親ぬ言し今度んちょー守らんねーならんりやーい、はつきりんちや親ぬ言る通り、川端ぬ大雨ぬ降いねー水ぬかんじゆる所んじ葬てーるふーじ。

いえば、あれをするし、あれしなさいといえばこれをやり、すべて親の言うことに反対のことばかりやつていた。

一人はしつかり者、(親の言うことも) 良く聞くが、親がそうこうしているうちに、相当年もいつて、死ぬ間際に、自分でもうだいたい自分の寿命は分かるので私はもう長くはないが、このあまのじやくに限つてかわいいので、親はその子に「もし私が死んだら、私の墓は大雨のときには水びたしになるように埋めてちょうだい」と言つた。そう言わないと、この子は何でも反対にやるのでそれで遺言したようだ。

親の遺言を聞いて、親がすぐに死んだので、もうそのときには心を改めて、親が生きている間は親不孝ばかりやつたので、今度だけでも親孝行しないといけない、親の言うことを今度だけでも守らないといけないと、親の言つたとおりにちゃんと、川端の大雨が降ると水浸しになる所に葬つたようだ。

あんさーい、くぬ親あちやーなたがやーでいち、見
じやぐとうねーんなどーんりよ。水ぬけー流らち。あ
んさーい、うぬ罰ぬあたてい、くぬターアユくえーり
る鳥やじーー寒さいに限てい、くぬふち崖んじ、く
ぬ崖とうがあるいは木ぐわーんかい止までい、うまん
かい魚ぐわーぬ寄て い来ねー、水ぬ中んかいパツタカ
チ顔ちつくまーい、魚ぐわー取て い食り暮らちえーる
ふーじ。親不孝ぬ罰ぬあたてい。

うりからまた、一人ぬ親ぬ事ゆうさーや徳ちぢやー
い金持人ぬ米倉ぬなーりー米喰てい、五穀ぬ粟マ一
ジン、米干する場ねー、樂そーてい米食り、あんさー
いまたあぬ姿や、ボロ着ちよーる姿やしえー。うぬ
生身やいに、親ぬ生身やいになーじこー働ちよーるた
みなかい、もちろん百姓るやぐとう、やな装いそー
しえー、あぬ色んかい表わりとーんりちる。首んか
いあんし白ぬいつちょーしん、やりサージさきて い身
体ぬ綾いやーそーしん、ボロぬ色表りとーんりる話
聞ちよーるばー。

うりからターアユくえーりしえー、親ぬ元氣やいねー
ハイカラぐわーし仕事おさんるあぐとう、美ら装いぐわー

そうして、この親はどうなつたかなあと見ると、な
くなつていたそつだ。水で流されてしまつて。そして、
その罰で、ターアユくえーという鳥は、とても寒いと
きにも、崖ぶちとか、木に止まつて、魚が寄つてくる
と、水の中にパタツと顔をつつこんで魚を取つて食べ
て暮らしているそつだ。親不孝の罰をかぶつてね。

それからまた、一人の親に尽くす子は、徳がついて、
金持ちの米倉のそばから米を食べて、五穀の粟、黍、
米を干してあるところで樂をして米を食べていた。ま
たあの姿は、ボロを着けている姿でしよう。親が生き
ているときには、とても働いたためにもちろん百姓で
もあるし、装いが悪いのはあの色に表われているそ
だ。首に白い模様が入つてゐるのも、破れた手ぬぐい
をさげて、体に(白い)模様が入つてゐるのは、ボロ
の印であるといふ話を聞いた。

それからターアユくえーといふのは、親が元氣など
きにハイカラな格好をして仕事はしないで、美しく装つ

そーぐとう、あぬ色し、あんしきれいな鳥ぐわーやぐ
とううんぐとうーやんりち聞ちよーるばーてー、ただ
うつびるやる。

ているので、あの色で、あんなにきれいな鳥であるよ
と聞いたわけだ、ただこれだけだよ。

採集 S52・2・27 読谷村民話調査団第十六班 〈照屋寛信・知花利枝子〉

4 雀 酒 屋

話者 上地弘治(明治二十九年十月十五日生)

翻訳 津波古米子

昔、おじいさん達からよく聞いた話によると、雀は
クラーヴわーやじこ一人間にたとういねー、正直な者
なやーなかい。あんさーなかい「いやーや、米食やー
なかい育きよー」り、言らつていせーぎはん。あんし
ちやぐとううぬクラーヴわーや、毎日米ぬむん人ぬ
作てーる米、かんし食やーなかい育ちよーてーがしが。
あんさーいくぬ米え持つち行ぢやーなかい、余いや
持つち行ぢ自分ぬ巣ぐわーんかい持つち行ぢさくとう。

うぬ木ぬ上んじ、かんし人ぬ切つちえーるとうくまぬ
腐りやーなかい、うまんかい水ぬ溜とーぎはん。水ぬ
みじ

昔、おじいさん達からよく聞いた話によると、雀は
人間にたとえると、正直者であつた。それで「おまえ
は米を食べて生きなさい」と言われていたそう
だ。そうしてこの雀は、いつも人の作った米を食べて
育つていたようだ。そのようなことから、この雀は毎
日米の食事、人間が作った米を食べて育つたようだ。

そしてこの余った米は、自分の巣に運んでいた。人
間が木を切つたあとが腐れて、そこに水が溜まつてい
た。そこに水が溜まらないうちに、この雀は米をそこ
に持つて行つた。そのあとに水が溜つて、雀はしばら

くそこに行かなかつた。

溜らんまーる、うまんかいうぬクラーぐわーや、米え
持つち行ぢしちやくとう。あんさーなかい、うりから
うぬクラーぐわーぬ、うまんかい水ぬ溜たくとう、来
らんたくとう。

またみぐてい來、見ぢやくとう、うぬ米ぬ、酒ぬム
ルンなやーなかい。酒ぬムルンなていさーなかい。う
ぬ水ぐわー飲まーなかい、クラーぐわーや酔てい、けー
りんくるびんすんなたくとう、うりから酒作たんりる
話いぬあるばー。

それからまたまわつて行つてみると、この米は酒の
もろみになつていた。雀がその（酒となつた）水を飲
んで、酔つてフラフラしたのを見て、それから酒を作つ
たという話があるんだよ。

採集 S 52・2・27 読谷村民話調査団第四班（富村朝夫）

話者 比嘉テル（明治四十三年七月十八日生）

翻字 知花春美

アマガカーぬ話や、アマガカーや親ぬいい使えむる
反対、「水汲り来う」りねー潮汲りつち、潮汲り来うり
ねー水汲りつち、なーいちぐ親ぬいい使えむる守らん
むる反対なたぐとう。

雨蛙の話は、雨蛙は親のいうことにはすべて反対、
「水を汲んで来なさい」というと、潮を汲んできて、
もう、親のいうことは聞かずに、すべて反対のことを
した。

今度おなー、親や病うしかかたぐとう くりが死ぬ
前にや遺言そーかんねー、なー陸んかい送りりーねー
川端んかい送いん、死ぬ前に、「私ねー川端ん送りよー
やー子供達」りちやぐとう、「しかもや親ぬ遺言やんむ
ん、死ぬ前ぬ遺言やんむん、常平静や、反対しちんや
今度だけー守てい行かんねーならんむん」りち川端ん
かい送たぐとう。

今度お雨ぬ降るかーじ 「あいえーやー私あお母や
川端んかい送たるむの一流さりーさやー、流りーさやー」
りちいつペー泣ちゅんり。

今度はもう、親は病気になつたので、これには、死ぬ前に遺言しておかないと、陸に送りなさいというと、川端に送るし、それで、死ぬ前に、「私は川端に送つてね、子供達よ」と言つたので、しかもね、「親の遺言だから、死ぬ前の遺言だから常平静は反対しても今度だけは聞かなければならない」と川端に送つた。

すると、今度は雨が降るたびに、「どうしよう、私のお母さんは川端に送つたものの流れられないかなあ、流されないかなあ」と、しじゅう泣いているそうだ。

採集 S 52・2・27 読谷村民話調査団第十班〈村山義隆〉

6 犬 の 足

話者 比嘉利吉(明治四十一年十一月二十日生)

翻字 棚原めぐみ

犬は、昔は足は三つしかなかつたということ。うりん作い話がやが分からんしがてー。香炉は足は四つあつたつていうこと。香炉といふものは、動かないさーや動かない。それだから神様が香炉と相談して、「あんたは、どこにも行かないから三つでもいいから、あんたの足一つ、犬に分けてくれないか」と言つてから、そして香炉から足を

ひとつ犬に分けてやつたと。

そして、足あげてシッコする時は、あの神様からもらつた足だから、それにシッコかけてはいけないということ
で、足をあげるといつたこと、あれは非常に物笑いになつてゐるおもしろい話よ。

採集 S 63・4・20 読谷ゆうがおの会（知花春美・村山友江）

7 猫と鼠

著者 照屋寛良（明治四十一年五月十日生）

翻字 知花孝子

ずっと大昔え、鼠とう猫や大事な良い仲やたん
りよー。

あんし二匹共同さーなかい、別の獸殺ち、壺ん
かい漬きて、二匹が食糧やたんりよ。

くぬ食糧ぬ集みぐるさがあたらー、鼠ぬ力ん
強さいなー知恵ぬん鼠や上やてーるばーや。あんさー
ま、あまんかい保管せーる品物の一今うちゅかみーねー、
猫の一「でーいー、なー、やーくなとーぐとう、時期や
ぐどう、あぬ壺んかい、お互ひし隠みてーる食糧か
ま」んり、「まじ待つちよーかやー。まじ待つちよーけー」

ずっと大昔は、鼠と猫は大変仲が良かつた。

それで二匹が共同で、別の獸を殺し、壺に保存して
おいて、それを二匹の食糧にした。

この食糧は集めにくかつたのか、鼠が知恵も力も（猫
より）上だつたんだろうね。それで、あそこに保管し
てある品物を、猫が「ねえ、もうひもじくなつている
ので、時期（食べ頃）でもあることだし、あの壺にお
互いで隠した食糧を食べよう」と言うと、（鼠は）「も
うちよつと待つておこうよ。まず待つておけ」と言つ

りち。

あんさーい、うぬ内に、鼠や力んあい知恵ぬんあんぐとう、行ぢえー上部えうち喰でーるふーじ。上部などーる分のお。

あんさーい、またうぬ次、猫ぬ「でーーなー食ま。なーやーさぐとう一匹が集みてーしるやぐとう食ま」んり。「まじ、なーいへえー待て、なーひん食糧難ぬちつから食むん」んち。また中んうち食でい。あんし、一番底などーしまたん、うち食でい。猫にあぎまーさつてい。

あんさーい、猫や騙さりやーなかい、全部、鼠ぬうち食まつてい。最後ねー、行ぢ蓋あきてい見ちやぐとう、全部うち食でいねーらん。くれー鼠ぬ仕業やんりち分やーに、うりがる一匹しる隠みてーしうりがる分いぐとう、鼠ぬ仕業んち、くれーなー、子孫代々に至るまでー、鼠やなー私達あ敵んりち考てい、子、孫んかい、くれー是非鼠見じーねー、食殺ちうち食みんりち、遺言さーねーならんりち。あんさーいうり以後、猫や鼠見じーねー、全部喰殺ちうち

た。

そうしているうちに、鼠が「ねえ、もう食べてしまお

う。ひもじいから、一人で集めてあるんだから、食べよう」と言うが、(鼠は)「もう、ちょっと待て、まだ

食糧難になるかもしれないから、その時が来たら食べよう」と言つて、(自分だけこつそり)今度は中の方を食べて、しまいには一番底にある分まで食べてしまつた。猫にせがまれていたんだがね。

猫は騙されて、鼠が全部食べてしまつたことを知つた。最後には、壺の蓋を開けて見たら、全部なくなつていた。これは鼠の仕業だと、これは二人で隠してあるので鼠しか知らないことだから、鼠の仕業に違いないと。これはもう子孫代々に至るまで、鼠は私達猫の敵だと考へ、猫の子孫にも、鼠を見かけたら是非、喰い殺しなさいと遺言しなければならないと。そんなことがあって、以後、猫は鼠を見ると、全部、喰い殺して食べてしまうのだという話を聞いたよ。

食むんりち、話い聞ちやつさー。

採集S 52・2・27 読谷村民話調査団第十六班（照屋寛信・知花利枝子）

8. 猿の生き肝

話者 照屋 寛良（明治四十一年五月十日生）

翻字 村山友江

何んち 亀ぬ甲ぬあんし模様入つちよーが、また何んちタクぬ手ぬ八ちあがりちぬくりんかい。うりとうまた猿ぬ何りち赤くなたい青なたんりちあんりが、りちぬ話いやしが。昔話から、昔話聞ち、私にんいーねー真似すぬばーやしが。

なぜ亀の甲羅がそんなに模様が入つてゐるのか、またどうしてタコの手が八つあるのかということね。それとまた猿がなぜ赤くなつたり青くなつたりするかといふことだが。昔話を聞いて、私もそれを真似するわけだがね。

龍宮ぬ神ぬ、龍宮ぬ神ぬ女ん子ぬ重病氣かかていさぐどう。龍宮ぬ医者ぬ言い分ぬ、「くれー陸にしまとーぬ、陸に暮らちよーる猿ぬ生ち肝取てい、生ち肝取てい食ませんかじれーくぬ病氣の一治らんどー」、竜宮ぬ医者ぬ竜宮ぬ神んかい申しあげたぐどう。

あんし龍宮やなー重役ぬちやー集まつて「はい、医者ぬ、陸にしまとーぬ猿ぬ生ち肝食ましわる、私あ

龍宮の神の娘が重い病氣にかかつたからね。龍宮の医者が言うには、「これは陸に住んでる、陸で暮らしている猿の生き肝を取つて食べさせないとこの病気は治らないよ」と、龍宮の医者が龍宮の神に申しあげたからね。

そしてもう龍宮は重役らが集まつて「もう医者が陸に住んでる猿の生き肝を食べさせないと、私の娘の

「なん子ぬ病氣や治いんりちやしが。とーくれー陸んかい行ちゃんりーしゃー、自分なー海にしまとーぬ者のー陸んかい行ちゅるくとおならんしが、ちやーすしゃーましが」りちさぐどう。うまから亀ぬ出じていち、「ハイサイ、ハイサイ、陸んかいやれー私がなんないびーん」「んちや、いやーやれー陸んかい上がてい行ちーすさ。とーあんしゃーいやーしばていくーよー」りち。

あんし亀や泳じ浜口つ来、んちやぐとう、うぬ浜口から近さぬ山ぬ中んかい、猿ぬ木んかい登てい遊ぶてーぬふーじやしが。亀やくれーちやーしくぬ猿、くまんかい浜口んかいくーらすしえーましやがりち考えていし。くれー歌あびてい寄しりわるやるりち、あんさーい歌あびてーるふーじ。くぬ歌あぢやーし呼びてーがやれー、えー亀ぬ「海ぬ高崖、柿ぬ実ぬまんり猿ぬウミンゾウやうり知らん」りち歌でーるふーじ。

あんすぐとうぬ猿や木ぬ上とてひうり聞ちやーい珍しいむん亀ぬ来るぐとーしが、海ぬ高崖、うまんかい柿ぬ実ぬじこーなどーんりしが。なー猿とう柿とーなーゆう一緒、ぐーとうみーとう、猿ぬまーさ

病氣は治らないということだが。もうこれは陸に行くということは、自分達海に住んでいる者がは陸に行くことはできないが、どうすればよいか」と言つたからね。そこから亀が出てきて、「ハイサイ、ハイサイ、陸にでしたら私がもできますよ」「ああ、おまえだつたら陸に上がって行けるさ。よし!それじゃあおまえ頑張つてくれよ」と。

そうして亀は浜口まで泳いで來た。来てみると、この浜口から近い山の中で、猿が木に登つて遊んでいたようだ。亀は、これはどのようにして猿を浜口まで呼び寄せたうよいものかと考えた。これは歌をうたつて呼び寄せないといけないと(考えて)、歌を詠んだようである。この歌はどうして歌つたかと言えばね、亀が「海の高い崖に、柿の実がみのつてあるが、猿よ貴方はこれを知らない」と歌つたそうだ。

この猿は木の上でこの歌を聞いて、珍しいことだ亀が来ているようだが、海の高い崖に柿の実が大変みのつてているということなんだが。もう猿と柿とは大変相性がよく、猿にとつては確かにおいしい(食べ物)であつ

むんやい確に。「いえー亀よ、いやーする歌あ何が」「りちやぐどう。「あいえーやーいつたーや、んじような者やー、海ぬ高崖んかい柿ぬ実ぬいつぱいあてい、私達がなー柿ぬ木んかい登いしえーうらん。食めーやーりやんてーん取てー食みーさんどーやー。いやーがーないはじやぐどう、私と一緒行ぢ、ちゅふあーらむてい食まな」りちやぐどう。「とーとーひーばーやか、あんし私ねえ泳じえーしーうーさんしえーちゃーしまた」「私あ背中んかい乗れー、しぐちゅてー行ちーねー」、「私あ背中んかい乗れー、しぐちゅてー行ちーねー海ぬ高崖なでー、うまんかい柿ぬじこーなーんでいるうぐどう。いやーんかいちゅふあーら食まち、またいやーんかい持たしんすぐどう、とー乗れー」りち、乗してい。

あんさーいたつた海んかい海んかいりち向かいるぶーじ。「いえー亀、いやーや海ぬ高崖りしえーまーやが」「りちやぐどう。「あらんなーいひぐわーあがた、なーいひぐわーあがた」りち、連てい行ぢ。龍宮ぬたつちかいんかいちやぐどう。なーありぬまま言ちえーるふーじ。「いえー猿よーいやーなーちむぐりさーあしが、私達龍宮ぬなー神ぬ女ん子ぬ重病氣かみそーち、

た。「おいー亀よ、おまえが歌つた歌は何か」と言つたらね。「ああおまえたちはかわいそな者だね、崖の上に柿の実がいつぱいあるんだが、私達はもう柿の木に登ることができない。食べようと思つても取つて食べることができないんだよ。おまえにはできるはずだから、私と一緒に行つてたくさん取つて食べよう」と言つたからね。「ああちようじよかつたよ、でも私は泳ぐ」とはできないのにどうして、(おまえについて行くか)」「私の背中に乗りなさい、すぐちょっと行くと高い崖になつていて、そこにはたくさんの柿の実が熟しているからね。おまえにもたくさん食べさせて、またさらを持たせもするからね、乗りなさい」と、乗せて行つた。

そうしてだんだん海へ海へと向かつて行つたようだ。(すると)「おいおい亀よー海の高い崖というのはどこか」と言つたからね。「もう少しうこう、もう少しうこう」と、連れて行つた。(そして)龍宮のすぐ近くに來たので、もうありのままに言つたようだ。「おい猿よ、もうおまえはかわいそうではあるんだが、私達の龍宮の神の娘が重病氣になられたので、おまえの生き肝を

いや一生ち肝取てい食まさんあれーくぬ病氣や治らん
りち、龍宮ぬ医者ぬあん言ちやぐとう。私ねえ使えとう
し、いやー連いがちよーんどーやー。いやーなーちむ
ぐりさーあしが、龍宮んかい行ぢやーに生ち肝取らり
りよー」り言ぐとう。

猿 やなー知恵やまんり。知恵のーまんり、「えーあ
んやんなー、亀、いやーやあんやらーあんやんどー
りれーしむるんなかい。だーあんし私ねー生ち肝お私
が登とーたぬ木んかい下ぎていちやんどーやー」「えー
あんやるばーい、とーあんしぇーまた戻れー」りち戻
やーい。

えー浜口來ぐとう、猿や、うまからうつ飛んじ浜
ぐんかい上てい。亀んかい「いやーぐとーる者、いやー
や私あ生ち肝取いんりち。私ねーいやーんかい生ち肝
取らりーねー、私ねー死にするすつさい」んなかい。猿
やうまんかい転どーる石取やーなかい、背中たつぴら
かちえーぬふーじ。あんしなー亀やなーうぬ甲や割
りてい、あんさーい生ち肝取いはんち、なー泣ぢやー
い龍宮んかい戻てーぬふーじ。

あんしなー龍宮んじなーんな待つちょーんりぐとう。

取つて食べさせないとこの病氣は治らないと、龍宮の
医者がそう言つたからね。私は使いとして、おまえを
連れに来ているんだよ、おまえはもうかわいそ�では
あるんだが、龍宮に行つて生き肝を取られなさいよ
と言つた。

猿はもう知恵があつた。知恵があつたので、「ああそ
うか、亀よおまえはそうであるならそ�であると言え
ばよいのに。もう私は自分の生き肝は、私が登つてい
た木に下げてきたんだよ」「えーそうか、それならも
うまた戻ろう」と、戻つて。

猿は浜の近くまで来たら、そこから飛び下りて浜に
上がつてしまつた。(そして)亀に「おまえみたいなや
つは、おまえは私の生き肝を取るというのか。私はお
まえに生き肝を取られたら、私は死んでしまうじゃな
いか」と(言つてね)。猿はそこに転がつてゐる石を取つ
て、(亀の)背中を叩きつぶしたようだ。そしてもう亀
の甲はもう割れて、そうして生き肝も取りそびれて、
もう泣いて龍宮に戻つたようだ。

そしてもう龍宮ではみんなで待つていた。生き肝を

今、生き肝持つちゅーん、持つちゅーんりち。あんし「だーい やー生ち肝お」りちやぐとう。「なー実際なー、あんかんしくりがーまでー乗していちゃしが、あれーなー生ち肝おなー木、登とーたる木んかい忘でいちょーんりちやぐとう。とーあんしえー取つてい来やーりち、戻たれーありんかいだまさつてい、私ねー背中んたつぴらかさつてい」りち。

あんしタクぬ、「いやーぐどーる者の一知恵のーくじりてい。亀んかい生ち肝お木に忘りてーんりち、取いが行かりちしーるんしえー、生ち肝りーしえー自分にるしがどーる、木ねーねーらん」りち。あんし笑つたぐとう、亀や怒みち、タク取つかちみやーなかい爪さーなかい手やーちあしすんち破ぐとう、手八ちなとーんり、あんしうにーから亀や、ひび入つちやるまま、子、孫ん達かいちやーうぬふーじーなてい。うりからタコやまた手ーちから手八ちんかいかつさかりやーなかい、なー病んりち、色ぬがーし、うぬふーじーなとーんりち。伝話ぬあるばー。

持つてくるのを今か今かと(待っていた)。そして「おまえ、生き肝はどうしたか」と言つたからね。「もうほんとのところ、そうこうして、もうあの生き肝は、(猿が)登つていた木に忘れてきたと言つたからね。それなら取つてこようねと戻つて行つたら猿に騙されで、私の背中は叩きつぶされてしまつた」と。

そしてタコが、「おえまみたいなやつは! 知恵もない。亀が生き肝は木に忘れてあると言えば、取りに行くのか。生き肝というのは自分の体にあるんであって、木にはない」と。そのように笑われたので亀は怒つて、タコをつかまえて爪で手が二つあるのをひきさいでしまつたので、(タコの)手は八つになつてゐるそうだ。それからその時から亀は、ひびが入つたまま、子、孫達までそのようになつてゐる。それからタコはまた、手が二つあつたのを、ひきさかれて手が八つになり、もう痛いといふことで、(顔色も)悪くなつてゐるそうち。そういう伝え話があるよ。

9 豆と藁と炭

著者 島袋亀次郎（明治二十八年一月二十九日生）

翻字 知花春美

んかし、三名ぬいつペー良い友達ぐわーがうたんり。
うぬ三名、友達ぐわーりしえー、一人や豆ジヨー、また藁ベー、
た藁ベー、炭ジヨー、うぬ三人うたんり。豆ジヨーでい
しえー、今、くまぬいるトーマーミーやしが、うぬトー
マーミぬ口ぬまつ黒なとーしえー、ちやーぬちむえー
しー、くぬトーマーミぬ口え黒やがやー、くりから始
まいやしが、うぬ黒なたる理由やしが。

あるとき、うぬ三人ぬ仲良し、友達んちやーや互に
歩ぢやがちー散歩さがちー、わじぬ渡らんとーならん
川んかいはつぢやかてい、うぬ川から渡りわるないし
が、渡らんねー何処んかいにん歩ぢゆるとくろーねー
らん。

あんすぐとう、藁ベーや、なー長え長はぐとう、「とー、
いやーや、うまからくぬ端からあぬ端んかい横たわい
ねー、あまちちゆるはじやぐとう、いやー上から歩ぢやー
に渡らな」かんし相談のーし、「いー、あんすん。よ

昔、三人のたいへん仲の良い友達がいたそうだ。そ
の三人、友達というのは、一人は豆ジヨー、また藁ベー、
炭ジヨーの三人だつたそうだ。豆ジヨーというのは、
そら豆だが、そのそら豆の口が黒くなつてているのは、
どういうことでそのそら豆の口は黒くなつてているのか
と、これから始まるわけだが、その黒くなつた理由だ
よ。

あるとき、その三人の仲良し友達は、互に歩きな
がら、散歩しながら、ぜひ渡らないといけない川があつ
て、その川から渡らないといけないが、何処にも歩く
道がないので、その川を渡らなければならなかつた。

そこで、藁ベーは長さが長いので、「さあ、おまえは、
ここから端まで横たわれば、あそこに着くはずだから、
おまえの上から歩いて渡ろう」と、こういうふうに相
談をして、「うん、そうする。よろしい」と言つて、「そ

ろしい」でいへやーに「とーあんしえー、私ねー橋
ないるちむえーやさやー、とー私がなーうまんかい、
川あ橋かきーんどー」くぬ藁ベーが橋かきてい「とー
橋えかかとーさ。歩けー誰から歩ちゅが」くり始また
るばー。

「私から先ないみ」一人なーる歩かりーる。うぬ
二人なーりちえー歩からん。またうぬ藁ベーが持つち
うさんりやーい、必じなー、一人なー一人なーるない
る。あんすぐとう豆ジヨー や 「んだ、私から先なら」
でい言ちやしが、炭ジヨー や欲お強きぬ。「いいん私か
ら先ないん。いやーが私やか先えなーならん」あん
さーい、くぬ炭ベーが先なーい出じたん。

あんすぐとう、うぬ炭ベー や少え心お悪さるむんや
てーんてー。うりがなー、先なーいさぐとう、うぬ炭
ベーりいる者のー、自分ぬ尻んかい、まーがらんかい
うれー炭るやぐとう火ぐわーぬ少えちちよーてーぎさ
るふーじ。火ぐわーぬちちよーぎさるふーじなーいさ
ぐとう、うぬ藁ベーから、かんし渡てい行ちゅんり、
とーとー途中、真中ちよーるじぶんに なーうぬ火ぐわー
とう、火ぐわー大くなやーに、藁ベーとう摩擦さーに、

れでは、私は橋になるわけだね。私がもう、そこに川
の橋を架けるよ」と、その藁ベーが橋になつて、「はい、
橋は架かっているよ。歩きなさい、誰から歩くか」と
これから始まつたようだ。

「私から先になるか」と、一人ずつしか歩けない。
二人いつしょには歩けない。また、その藁ベーが持て
ないといつて、必ず一人ずつしかできない。それで、
豆ジヨーは、「はい、私から先にならう」と言つたが、
炭ジヨーは欲が強くて、「ダメだ、私が先に行こう。お
まえが私より先ではいけない」と、この炭ベーが先に
出て行つた。

そうして、その炭ベーは少しは心が悪かつたのだろう。
それが先になつたので、その炭ベーという者は、
自分の尻に、どこかに、それは炭なので火が少しつい
ていたようだ。火がついたようなので、その藁ベーか
らこのように渡つて行こうとして、とうとう途中、真
中來ている頃に、火が大きくなり、藁ベーと摩擦して、
藁ベーは炭ベーに焼かれたようだ。焼かれたので、今
度はもう仕方がなく壊れて二人とも川に流されて、藁

藁ベーやなー炭ベーんかい焼かつたるばー。焼かつた

ぐとう、今度おなー仕方あならん壊りてい、川んかい

二人ぐりー流さつてい、藁ベーやまた燃さつてい来る
んばー。あんやたんりさ。

あんさぐとう、うぬ豆ジヨー や、「二人が友達えなー
こういう川んかい流さつてい、くれー私一人生ちちょー
てい大変なことになつたね」と言つて、非常に哀りし、
ワーない、ワーない泣ち、じやつぴん泣ちやぐとう。
じこー泣ちやぐとう、口えなーじやつぴん開ちやぐとう、
今度お口えいかなしん閉ららんなやーに。

うまからまた、女学生ぬ一人や歩ちゅたんでいしが、
うりが、「ぬが、いやーや口え閉ららんるありー」でい
ちやぐとう、「なーじやつぴん泣ちゅんでいうりきぐとう
口え閉ららんかんなとーんでー姉さん。どうにか治ち
きうらんなー姉さん」でい言ちやぐとう。またその学
生は、「とーあんしぇー、いやー口え閉いるないさ」でい
やーに、木綿糸を出して、針と木綿糸を出して、うぬ
豆ジヨーぬ口え、うりが黒糸さーに縫ていとうらちや
んり。

とー、あんさぐとう、じやつぴん割りとーる口え、

ベーはまた燃やされて来なかつた。そうだつたよ。

そうして、その豆ジヨーは、「友達二人もこうして川
に流されて、これは私一人生きていて大変なことになつ
た」と言つて、非常に悲しんで、ワーワーワーとても
泣いた。とても泣いたので、口がもうとても大きく開
いて、今度は口はどんなにしても閉まらなかつた。

そこからまた、女学生が一人歩いたそしが、その
人が、「どうして、おまえは、おまえの口は閉まらない
のか」と言つたので、「もうとても大きく泣いたために
口が閉まらなくなつてこうなつてているよ。姉さん、ど
うにか治してくれないか、姉さん」と答えた。またそ
の学生は、「それでは、おまえの口は閉めるしかないね」
と言つて、木綿糸を出して、針と木綿糸を出して、そ
の豆ジヨーの口は、その人が黒糸で縫つてくれたそ
うだ。

そうしたので、とても大きく割れている口は、もう

なー黒糸さーい縫ていさぐとう、うぬトーマー三ーぬ
くちえうりが縫ていなーちゃー黒なーい、世ぬ中から生
存しえーちゅんりんでー。

とーうれー、いつた一分からんむんやれートーマー
ミぬ口ぬ黒などーしえーあんしやんりさ。

黒い糸で縫つたので、そら豆の口はそれが縫つて黒く
なつて、世の中を渡つているそうだ。

はい、それはおまえたちも分からないのであれば、

そら豆の口が黒くなつているのはそういうことだよ。

採集 S 52・8・16 読谷村民話調査団第三班（阿波根初美・伊波洋子）

10 五 月 五 日 由 来

話者 比 嘉 テ ル（明治四十三年七月十八日生）

翻字 知 花 春 美

あぬ五月五日ぬ由来記ぬ話。五月五日や何りち
菖蒲ぬ葉あ飾てい、あまがし作いがりぬ由来記や。

あの五月五日の由来の話。五月五日はどうして菖蒲
の葉を飾つてあまがしを作るかという話ね。

くれーや、あぬーある女とうある男とう結婚そう
たんりー。あんやたしがうぬ女お、鬼やてーるばーよー、
鬼。あんし鬼やしが、夫ぬ前んかいねー全然鬼ぬ姿あ
見しらんばーよー。また夫ぬ目い隠いねー、なーまつ
たく鬼ないるばーよー。あんしさぐどうなー鬼などー
るばーに、夫ぬ友達が見ちえーるばーてー。あんさぐ

これはね、ある女とある男が結婚していたそうだが、
その女は鬼だったんだね。鬼であるけれども、夫の前
では全然鬼の姿は見せないで、また夫がいないところ
ではもうまつたく鬼になつたようだ。その鬼になつて
いるときに、夫の友達が見たようだ。そこで「これは
確かに、この人の妻は鬼だからそのままではいけない。

とう、「うれー確かにや、くりが妻え鬼るやるむんうんぐとうーしみてーならんさ」りやーによー。「いちか一呼びやーに、うぬ男ああぬ聞かさんねーならんさー」

りちやたんり。

あんしさぐとう、うぬ男あ妻かなきてーんやー。

ていーちゃん信じらんばーよー。あんしやしが全然うぬあ、女おまーんかい出じやさんるあぐとう、取らりーんりち。

いつかは呼んで、この男に言わなければならない」と考えた。

でも、その男は妻がかわいかつたんでしよう。ちつとも信用しなかつた。その女は、男がだれかに取られはしまいかどこにも出さなかつた。

今度は常会を持つて青年を集めた。その男の妻は鬼であるということを、呼んで見せないといけないといつて考えた。そして、青年は集まりなさいと、太鼓やら鉦を打つて、青年だけだよ、女は違うよと、太鼓、鉦を打つた。

あんしさぐとう、今度お青年が集まやーい常会うくさーにてー、いちかーうぬ考え出じやちや、青年呼ばーにかい見しらんねーならん。うりが妻ぬ鬼やんりるくとう見しらんねーならんむーりち。今度お青年集まりよーりち、太鼓、鉦打つちやるばー。青年びかーんるやる女おあらんどーりち、太鼓、鉦打つちやぐとう。妻んかいてー、鬼んかいてー「私にん青年でーむん、青年集まりどーし鉦打つちやぎんむー行かひー」りちやぐとうよー、「行かんけー、行かんけー」するばーてー。「あんしんいやー、私ねー青年りちるやんむー行かんねーならんさ」、押し無理に立つちゆるばー。「行かんけー、行かんけー」すしが。

男は妻にね、鬼にね、「私も青年だのに、『青年集まりなさい』と鉦も打つているのに行こうね」と言うと、「行かないで、行かないで」と言つたようだ。「それでも、私は青年だのに行かないといけない」と、無理やりに立つたようだ。「行かないで、行かないで」と言うが。

今度お男あすんちやーにてー、ある青年が歩ちゅん
とうくまんかい連てい行ぢやーに「いやー妻えや鬼る
やんどーやー」りちやぐとうよ。「まさか」りちょーる
ばーてー、美らかーぎーやいるすぐとう。「いつたー私
離縁しみーんりや、私あ妻え鬼りち物言んなー」りちや
ぐとうや。實際鬼るやんでー、あらんりち我はとーる
ばーよー。いかなしん納得おあらんりちょーるばー。

とーあんしぇー見しらやーりやーいよー、すぐ家ん
かいうつち帰しぇーやー。節ふぎ穴から見れーりちょー
るばーてー。節ふぎから、「いやー妻ぬじやま見れー。
いやーがうらんないねーすぐ鬼るないんどー。いやー
がうがえーまるや、鬼んかい化きーさんない、隠ちえー
るや。面かんてい隠ちえーる、実え鬼るやんどー」り
ちやぐとうよー。「えーあんるやんなー」、今度お節穴
から見ちよーるばー、うまんかい青年うちよーてい。
戸ぬ穴から見ちやぐとう、な一角みーといすぐすま
しい鬼なとーるばー。

あんしさぐとう、びつくりし夫お、なーちやーしぇー
しむがかーしぇーしむが鬼る妻そーてーさーりち、じ
こー驚ちょー。あんやたんりしが、「とーあんしぇー

今度は、男を連れて行つて、ある青年が歩くところ
に連れて行つて、「おまえの妻は鬼だよ」と言うと、「ま
さか」と言つた。美人でもあるのでね。「おまえたちは、
私を離婚させようとして、私の妻が鬼だと言うのか」
と、實際は鬼だが、そうじやないと、意地をはつてい
たようだ。どうしても納得できないと。

それでは見せてあげようねと、すぐ家へひき帰した。
節穴から見なさいと言つた。節穴からね、「おまえの妻
の様子を見なさい。おまえがいなくなると、すぐ鬼に
なるんだよ。おまえがいる間は鬼に化けきれずに、面
をかぶつているんだよ。そこに青年をおいて、
と、今度は節穴から見ると、もう角もはえて、すさまじい鬼
になつていた。

それを見て、びつくりして、夫はもうどうしたらい
いか、鬼を妻にしていたとはと、とても驚いていた。
そして、「それではね、おまえは今だつたら助けられる

や、いやー今るばー助きらりーぐどうや、早く逃げてい
行き」りちよーるばー。「まーんかい逃ぎーが」りちや
ぐどうや、「お寺んかい逃ぎてい行き」り言らつとーる
ばーてー。まーぬまーんかいお寺ぬあぐどうや、お寺
ぬ、逃ぎてい行ぢやーいや。あまぬお寺んかいお願
いや、あぬ突ち鐘りしこーいねー、後お戻ていはいぐ
とうりちょーるばーよ。

あんすぐどう、男あなー逃ぎーしえーやー。うにー
にや逃ぎていはいし、妻が戸開きてい見ちよーるばー
よー、鬼が。うにから化きやーにかい鬼なやーなかい、
うぬ男ちやー追いちやー追い。いかなしん殺すんりち
なー、うにーからーなーそー鬼やるばーてーなー、
男あ追とーぐどう。

男あなー命切り走し逃ぎーぎーしが、後ぬぬずみ
ねーお寺んかいへーりんち行ぢよーるばーさい。男あ
「助きていくうり」しちやぐどうよー、なー坊さんぬ
んなー「内んかい入れー、内んかい入れー」りやーに
よ。「私ねー鬼んかい追とーんどー、鬼んかい追とー
んどー」しちやぐどう。妻るやしが、うぬ青年や突
ち鐘ん降るさーい、うりが中んかい入りやーに男あさ

ので、早く逃げなさい」と言つた。「どんに逃げるか」と言うと、「お寺へ逃げて行きなさい」と言われたようだ。どことどこにお寺があるのでと、お寺へ逃げて行って、あそこのお寺へお願いして、突き鐘があれば、あとは戻つて行くはずだからと。

そうして、男は逃げて行くでしよう。そのときに、逃げて行くのを妻は戸を開けて見ていた。そして鬼に化けてその男を追いかけて行つた。どんなにしても殺すといって、そのときからは本当の鬼になつて、男を追つかけていた。

男はもう息も切れんばかりに走つて、ようやくお寺の中へ入つて行つた。男は「助けてくれー」と叫ぶと、坊さんが「内に入りなさい、内に入りなさい」と言つた。「私は鬼に追われているよ、鬼に追われているよ」と言つた。妻であるが、突き鐘を降ろして、その男を中に入れれた。

ぐどう。

後あとおなーうぬ鬼うにえ包丁ぱうぢやーあ持あむつちよーぐとう、化ばきやーにどー。かんねーかんねーかんねーするばーてー。あんしあぐとう、うぬ坊ぼんさんがてー、菖蒲しょうぶぬ葉はあ持あむつちやーによー、うぬ男いきがあ菖蒲しょうぶぬ葉はちやんなぎそーるとうくまんかい男いきがあ隠かつくわちよ、うまうとーとい菖蒲しょうぶぬ葉はぬとうくまんかい隠かつくわさーに、うぬ菖蒲しょうぶぬ葉はあ鬼うにがーじこー恐うとるしむんやるばーよー。あんさーに今度こんどおよ、男いきがあ隠かつくわちえーしょー菖蒲しょうぶぬ中みんかい。あんさはんぐとう女いなおかんねーかんねーし来きしょーやー、うぬ坊ぼんさんさんが菖蒲しょうぶぬ葉はあ持あむつちやーに、鬼おにんかいかにーかにーさぐとうよ。うぬ鬼うにえ、後あとお自分どうくる死しぬるばーてー。「ぱりたさやー私わんねーなー生いのちからん」自分どうぐるたていやーに死しぬばーよー。

うぬばーにやうりが話はなしぬて、うぬ男いきがるどー、

菖蒲しょうぶぬ葉はたみに命いな救すくいあぎてい

いちやし菖蒲しょうぶぬ葉はに恩義うんじさびが、

五月ご五ご日ひなりば

菖蒲しょうぶぬ葉はあ飾かざていあまがしゆ作つくてい

祭まつりさびらウーターラー。

それからまた、鬼は包丁をもつてゐるので、包丁を振り回してゐた。そうすると、その坊さんは菖蒲の葉を持つて、その男を菖蒲が繁つてゐるところに隠したようだ。菖蒲の葉は鬼にとってはとても恐ろしいものだそうだ。男は菖蒲の中に隠したので、女は包丁をふり回しながら来るでしよう。その女に、坊さんが菖蒲の葉を持つてこんなふうに向かつて、鬼に向かつていつたので、しまいには自分から死んでしまつた。「ばれてしまつた、私はもう生きられない」と自分で(包丁)をたてて死んでしまつた。

そのときの話がね、その男が

菖蒲の葉のために命を救われ

どのようにして菖蒲の葉に恩を返そうか

五月五日になれば

菖蒲の葉を飾つて、あまがしを作つて

祭まつりをしよう

注 五月五日 旧暦五月五日に行われる行事で菖蒲の節句である。あまがしを作り菖蒲で箸を作つて仏壇に供えた。

11 五 月 五 日 由 来

話者 上 地 弘 治 (明治二十九年十月十五日生)

翻字 津波古 米 子

女ぬ鬼やたんりせー、中城若松が、なかぐしくわかまつ注中城若松や
安谷屋ぬ、安谷屋ぬ生まりやたんり。あんさーにかい
じこー美人ぬ、正直ぬ人やてーがはしが、うぬ若松や、
うぬ鬼やる女とうぐーなやーない。

あんさーなかいなー友達ぬちやーぬ、うりとうぐー^{どうし}
やんりさんち話はなしい聞ちやーない。うぬ友達んちやー^{どうし}
ぬかんし来ちやなかい、一人ぐりたんか一座たまいそーてい、なー^{はなし}
話はなしいさいさぎーんなたくとう。んちやかわらんやさやー
んち、一人ぬ者のーかんし戸はしるぬ穴あなふきからかんし見みち、
見みちさぐとう。あんさーんかい「そーやんでーとーいやー
ん見みちんり」り言いちやくとう。あんさーなかい一人ぬ

女の人めのひとが鬼きだつたといふ話はなしなんだがね。中城若松と
いう方は安谷屋の出身しゆじんであつた。そして大変美男子うつくしきじゆで
正直者まっちょであつたらしいが、若松は鬼きである女人おんなと仲なか睦むつまじくなつてしまつた。

そうして友達が二人の仲のよい事を聞きつけてやつ
て來たら、二人は向かい合つて話をしていた。その友
達は本当であつたんだねと、一人の友達は戸の節穴はしるあなか
ら覗いていた。「本当らしいよ、君も覗いてごらん」と
別の友人に言つた。するとその友達も戸の節穴から、
節穴あなは一ヵ所だけしかないので、そこから中を覗き込
んだとたん後の方へひつくり返つてしまつた。ひつく

者なん、また穴ふぎから、穴ふぎや一ちるあぐとう。
うまから見ちさぐとう。見じゅしどうまじよーん後う
んかいむつけーりてい。むつけーりやーなかい、「わんねー
死じるうるい、生ちちるうるい」り言たんり、うぬ友達え。
あんさーいちゅー驚るちさーなかい、むつけーりてい
さぐとう死じえーうらんぐとう。あんさーい、起くさー
なかいしちやくとう、とー、くれーなー是非くりとー
別さんねーならんくとうり言やーなかい。考やーな
かい、なーうぬ若松やなー正直な立派な人るやくとう。
しちやくとう、あんさーい友達ぬちやーしーていー、う
ぬ鬼ぬ所んかい攻みてい行ぢやーなかい、若松ん一緒に
い。いやーあんどうやんどー、うれー殺さんねーなら
んどーりちさーなかい、若松や傘持つちよーてーるぐ
とーん。傘持つちよーてい、さし傘持つちよーてーるぐ
べとーしが、うぬさし傘さーに、鬼ぬ包丁ねーてい
來し、うりさーにはんち、うりかんしねーやーに、自
分やくまんかいないし、あんさーに防じ。後おふ
しがらん菖蒲ぬ植とーる所んかい、ちんけーりてい
行ぢえーぎはん。

あんさーんかいうぬ鬼え菖蒲恐るさるあたるむんや

り返つて「私は死んでいるのか、それとも生きている
のか」と友達に聞いた。その友達はあまりにもびつく
りしたために、(後へ)ひっくり返つたのであり、死ん
ではいなかつた。そして起こしてやつて、(この二人は)
どうしても(若松と鬼は)引き離さなければいけない
と考えた。若松はもう立派な人で正直者であるのでね。

それで友達と若松も一緒に、その鬼の所へ攻めて行つ
た。そういうわけだから、あの鬼は殺さなければいけ
ないよと。その時に若松は傘を持っていたらしい。さ
し傘を持っていたようだが、そのさし傘で鬼が包丁を
つきつけてくるのをふり払つていた。さし傘をさし出
して、自分は身をかわしながら鬼から身を守つていた
が、しまいには防げなくなつてしまい、菖蒲の生えて
いる中へ逃げ込んだ。

そうしたらその鬼は菖蒲が恐かつたのか、それとも

ら、見らんしがあたらー分からんしが。うぬ菖蒲ぬ
中んかい逃げてい行ぢやーなかい助かたくとう、うり
から五月五日ね、菖蒲ウメーシさーい使いんりる話い
やるばー。

あんさーなかいうぬ若松や、だー上ぬ人ぬ侍えい
いるんしえーやぐどう。くれー王んないるあたいぬ人
やでーしが。あんさーなかいうりが死しちきぐどう。
今「若松通り」んち、安谷屋ぬ後んかいあさ、うまぬ
上んじ墓はかあ作ちゃくらつとーさ、若松はかまちい墓はかあ。

その後、若松は上位階級の侍の身分であり、王にも
つけるくらいの人格者だつたそうだが、若松が死んだ
後、今では「若松通り」という地名が安谷屋に残つて
いるよ。そこの上に若松の墓は作られているよ。

採集 S 52・2・27 読谷村民話調査団第四班（富村朝夫）

注 中城若松 組踊「執心鐘入」の主人公。現在、北中城村安谷屋の小高い丘に
若松の墓と称するがある。伝承上の人物とされるが地元では、父金丸（の
ちの尚田王）と安谷屋ノロとのあいだに生まれた子ともいわれている。



中城若松の墓

翻字 知花春美

妻え鬼るやしがや、なー自分ぬ、夫の一そ一人り
ち。やつぱし友達んちやーぬ、「いえーいやー妻えそー
人り思ひみ、あれー鬼るやんどー」りちしちやぐとう
や、「まさかあんねーあらんき」りち、「鬼えあらんさ」
りちそーたんりしが、「とーあんしえー いやーあん
思いらー、節ふぎみーから見ちんり」りち見したぐ
とう、んちやなー鬼やたんり。

あんされー「くれー取ていどうきらんねーならん」
りち、しちやぐとう、なーしちやれー。また、うぬ自
分なー一緒の一食事の一かまんや、くれー珍しいむ
んりち思ひたるむん、そーんちや鬼るやしえー」りち
あん言ちやぐとう。

なー鬼え頭んかいる口えあんりーるい、くまんかい
る…。食事あんきくうとう、くまから食事の一喰いた
んりち。これとうていどうきらんねーならんぐとうり
ちやぐとう。

妻は鬼であるが、その夫は正常な人と思っていた。
やつぱり、(夫の)友達が「おい、おまえの妻は本当の
人と思うが、あれは鬼なんだよ」と教えると、「まさか
そうではないでしよう。鬼ではないよ」と言った。「そ
うか、おまえがそう思うのなら、穴から見てがらん
と見せると、もう鬼だつたそうだ。」

そして、「これは退治しないといけない」と考えた。
また、(その鬼は)一緒に食事もしないのでこれは不思
議だと思つていたら、いうとおり鬼だつたんだねと
言つた。

もう鬼は頭に口はあるというでしょう。ここに…。
それでここから食事をしたようだ。これは退治しない
といけないと言つた。

うぬ鬼え、うぬ夫殺ち、夫喰いんりちしちやぐ
とう、あぬ菖蒲お鬼ぬうとうらしむんやんりしぇーや、
五月五日ぬ菖蒲よ。あんさーにかい、うぬ夫お菖蒲
ぬみーんかい隠くてい、ぬがーいあーちや。うぬ夫お
喰いんりちそーしが、ぬがいあーち、うぬ鬼えあんさー
にかいとうたんりる話るやんでー、あんいち話や
聞ちよーんばー。

この鬼は、その夫を殺して、夫を喰おうとした。あ
のう、菖蒲は鬼が恐がつてゐるでしょ、五月五日の
菖蒲よ、そうして、その夫は菖蒲の中に隠れて助かつ
た。その夫を喰おうとしたが助かり、鬼は退治したと
いう話である。そういう話を聞いたよ。

採集 S 52・8・16 読谷村民話調査団第四班（運天悦子・横田和子）

13 クスケ一由来

話者 当山トミ（明治四十一年三月二十日生）

翻字 棚原めぐみ

ハクションするでしょ。あの鼻ひーし、ひーんり言ーしぇーやー。あのハクションするのもね、あれも死んだ
人の魂が教えたもんだそうだ。

昔、お母さん、女の子一人いて、お父さんとお母さんといふけど、お母さんが先死んだからね。この女の子は、
「お母さんの所へ私もお母さんの所へ連れて来てちよだい、お母さんの所へ呼んで来て、呼んでちよだい」
言うて、もう毎夜、日が暮れたら墓に通つたそうだ。娘さんは、
墓に通つたら「あんたが寝る所にね、竿よ、物干し竿、その竿を天井に上げしておきなさいね」言うてよ。

「私はその竿から渡つて来て、あんたにハクションさせるから。鼻ひらせるから、クスケーとは言わないでよ、」
う言うたら、あんたの魂取られない、また私は戻つて行くから、そう言わないでよー」言うて聞かせたそ�だ。
あのう死んでいるお母さんの魂が、魂がそう言つたから。

もうお父さんもね、心配してからに、何で娘さんは夜、日が暮れたらいつも居なくなるが、どこに行つているか
ねーと言つて後をついていつたから、お母さんの前へ行つて、こんなして泣いでいる。『お母さんの所へ連れて
いって下さい』言うて泣いているそ�だが。それを聞いたお父さんはね、もう明日は、あんたの魂、取りに来る
から、ハクションしたら「クスケー」と言うでしよう。これ言うべきもんである。「クスケーヒヤー」と言うたらね、
返し言葉である。

その竿の上から来てからに、お母さんが娘さんに鼻をひらしたそ�で、そおーと。何で、隣の部屋にまた、お
父さんは寝ているから、その話聞いているでしよう、お母さんの所通つて、「クスケーヒヤーでい言ーんなよーやー、
あんしわどう、いやー魂ん取らりんどー」りち、聞いているからよ。その子供、娘さんが鼻ひつたから、もう
魂取りに来ているねーと言つて隣のお父さんがね、「クスケーヒヤー」と言うて大きく言うたらね。魂は取ら
れないで、もうお母さん戻つて行つて、その子供も死なないですました。

あんしうれー、昔言葉およー、あのう、迷信でない、本当にあつたそ�だからね。

鼻ひーる子供達が、自分の子供達が鼻ひつたら、「クスケーヒヤー」と言いなさいよ。それもう何回も、鼻ひーる
子供もいるさーね、「あんたがた、ククスー」と言うて、あのはねてやらんからこんなにするんだよ」と言うてよー、返
し言葉やるわけ。あんし返しーねーまた、のーいしえーうれー、鼻ひーしえー、と一うりやさ。

話者 當山ハツ(明治三十九年五月十日生)

翻字 伊波邦子

「クスケーひやー」りしぇーよー、自分ぬ、女ん子ぬ、
病氣そーる場合に鼻ひやーさぐとう、親ぬあんし鼻び
けーんひーねー病氣ぬ原因やしが、くれー、何やがやー
りち、考えとーんりしが話い聞かさーに。

うりからくれー何やんりやーにただ考えさーに、
りー今日ぬ夜、夜中人に人取いマジムンりせえ來ぐとう。
りー是非うぬ子助きらんねーならんむんりち、さーやー
りち考えやーに。とー、よー、いやーが「クスケーひやー」
り言の時ねー、うぬり言のんしぇー悪者のーいやー
取つて一^ト行かんぐとう。とー私ねーいやーがどうくか
ら鼻ひーねえ、夜中ぬすーかー、私にんまじよーいう
まんかい居ちょーぐとう、一人さーに、クスケーひやー
り、言やーやー母子し。「あんしーるんしぇー、なー
体あ健康にないぐとうり、あんさーやー」りち相談さー
に、夜中、親子相談さーに。昼中、や相談そーてい夜、
夜中なたくとう、うぬ話始みてーぐとう。「どうく鼻はな

「クスケーひやー」というのは、自分の娘が病氣を
している時に、あまりにもくしゃみばかりしたからね、
親が、あまりくしゃみが続くということは病氣の原因
になるが、これは何だろと考えた。

その時からこれは何かあると考えてね。今日の夜、
夜中の人を取る妖怪がやつてくるということで、ぜひ
この子供を助けないといけないということになつた。
そういうふうに考えて、あんたが「クスケーひやー」
と言つたらね、そういうふうにしたら悪者は、あんた
は取つて行かないからね。私はあんたのくしゃみがひ
どければ、夜中ずっと一緒にそこにいるから、二人で
「クスケーひやー」と言おうねと親子で相談した。「そ
うすれば、体は健康になるからね。そうしようね」と、
親子で相談した。昼中はその相談をして、夜中になつ
たのでその話を始めた。「あまりにもくしゃみがひどかつ
たら、そのように試してみようね」と。

ひーねーりーあんし試みちんらやー」りち。

なーいんねーすんねー夜、夜中鼻ひやーちゃれー。

「とー私が始まい『クスケーひやー』りぐとう、いやーんまじょうい『クスケーひやー』り、『言りよーやー』りち。親子し「クスケーひやー、クスケーひやー」りち、鼻はなひーるかーじしちゃれー、うぬ「とーくま一家庭や信じとーるむん、くまから取つてーならん」り言ひーるかーじ、うぬ鼻はなひつちょーん所交替しち、他ぬ家んじ、他ぬ家庭は信しているから、この家がら取つてはいけない」と、くしゃみをするたびに言つたからね。「もうこの家庭は信じていてるから、この家がら取つてはいけない」と言つた。そして他のくしゃみをしている所に行ってそこの人を取つたという話である。そういうことを分からぬ家庭に行つてね。年が同じであれば性分は一つであるからね。見舞いもできないそうだよ。

そうこうしているうちに夜中になり、案の定くしゃみをしました。「最初は私が『クスケーひやー』と言ふからね。あなたも一緒に『クスケーひやー』と言うんだよ」と。親子で「クスケーひやー、クスケーひやー」と、くしゃみをするたびに言つたからね。「もうこの家庭は信じていてるから、この家がら取つてはいけない」と言つた。そして他のくしゃみをしている所に行ってそこの人を取つたという話である。そういうことを分からぬ家庭に行つてね。年が同じであれば性分は一つであるからね。見舞いもできないそうだよ。

採集S63・3・17 読谷ゆうがおの会（知花春美・村山友江）

15 鬼餅由来

話者 比嘉テル（明治四十三年七月十八日生）

翻字 知花春美

シワーシムーチーや、ホーハイムーチー、ホーハイムーチーでい、あんりちあたるばーてー。

シワーシムーチーは、ホーハイムーチー、ホーハイムーチーと、そういうていたよ。

あんしなー、うぬイキーがやイキーが、ウナイイキー
育ちよーしが、イキーがんじはんりしちゃぐとう。

あぬ例えばなー、寂はんでいとうくまんかい、うとー
ていやー、むるなー人喰ていよー、人喰ていさぐとう

世間騒がちょーるばーてー。

あとうぬぬづみねー、世間ぬうわさや、「私あイキー
やあんいち話あしがそーやがやー」でいち。後お人
から告ぎらつとーるばーてー。「いやーイキーやまーぬ
まーとーていすくろーていや、人喰いんりんどー。いやー
イキーや鬼るやんりんどー」言ちやぐとうや、「あんし、
本當やがやー」りち。

あぬ試しにや、ウナイや餅や煮らんよーい、生む
んぬんかいや、生ぬむぬんかい瓦入ってい喰いねーそー
鬼やんりち、話や聞ちよーてーるばーてー。昔話ぬ
あたぐどう。なー餅や煮やさんよーい、餅や作やーい。
うりんかい瓦ぬ破片入ってい、瓦取らち、破片、入つ
たーに、うり喰いねー確かに鬼やんりちょーるちむえー
てー。

あんしさぐとう、ウナイやにぐり、シワーシムーチー
ぬ日に、ムーチー作やーい、煮らんよーい、うりん

そこで、兄さんが、兄と妹が住んでいるんだが、兄さんは、世間騒がせな人だつた。たとえば、寂しい場所にて、人を喰つて、人を喰つて世間を騒がせていた。

しばらくして、世間のうわさで、「私の兄さんはそういつて話があるが本当だらうか」と。あとになつて人から（妹に）告げられたようだ。「おまえの兄さんはどこそこにひそんでいて、人を喰うよ。おまえの兄さんは鬼だよ」と言われたので、「それは本当だらうか」と思つた。

試してみようと思い、妹は、餅は煮ないで、生に瓦を入れて作り、それを食べる人だつたら鬼であると、その話は聞いていた。昔、その話があつたから、それで餅は煮ないでその中に瓦の破片を入れて作つた。瓦の破片を入れた餅を食べるのなら確かに鬼であるといふことだ。

そうして、妹は考えて、シワーシムーチーの日に、餅を作つて、生に瓦の破片を割つて入れた。あとで、

かい瓦ぬ破片割てい入つてふさぐとう あんし後お
ま一ぬ洞窟んかいイキーや住まとーんりち、聞ちやぐ
とう探めーい探めーい。「ヤツチーよー、ヤツチーよー」
りち探めーてい歩ちやるばー。

あんし、「いやーや、うまにるうんなー、私ねーや、
いやーんかい食ますんり、シワーシムーチー煮ち来ん
どーやー、食めー食めー」しちやぐどうや、「いやー私
にんかい餅持ちち喰んりち連てい来んなーり言ちやぐ
どうや、「出じてい來、アッピー、アッピー」りちや
ぐどうや、あんし出じてい來ぐどう。

あとー、ムーチーや、「うりアッピー、兄さん食めー」
りち、取らちやぐどうや、ムチ、口んかい入りーるま
前んかい、自分や高椅子んかい座やーい、ハタぐどう
てー。なー、どうせ二人死ぬるうみーやてーんてー。
あんしきぐどう、なー、そームーチーや食むたんり、
うぬイキーや、すぐなー生むん食むたんり。「確かに私あ
イキーや人喰いさやーり思やーいよー、うれー生ちき
てーならん」りやーいよ包丁やかんし持つちやーにや、
うまーはたぐどうやー、今度おうぬイキーがてー、「えー
いやーむんのー下あ何やが」りたんり。「下あ何やが」

兄さんはどこかの洞窟に住んでいると聞いて、探して行つた。「兄さん、兄さん」と探して歩いた。

そして、「あんたはそこにいるのか、私はあんたにあげるために、シワーシムーチーを作つてきたよ、食べなさい。食べなさい」と言うと、「おまえは私に餅をあげるといつて持つてきたのか」と言つた。「出できて、兄さん、兄さん」と言つたので、出ってきた。

「どうぞ兄さん、兄さん食べて」と、あげると、兄さんが食べている前に、自分は高い椅子に座つて（前を）はだけた。もうどうせ二人で死ぬつもりだつたんでしょう。そして、ムーチーを食べたそうだ。その兄さんは、すぐ生の餅を食べたそうだ。「確かに私の兄さんは人を喰うんだね、それを生かしてはいけない」と思つて、包丁を持つたまま前をはだけた。今度は、兄さんが、「えつ、おまえの下は何か」と言つた。「下は何か」と言つたので、「下は鬼を喰う洞窟」と言つたそ
うだ。「おまえは鬼を喰う、鬼を喰うところを持つてい

りたんり。「下あ何やが」りちやぐとう、「下あ鬼喰
いる洞窟」り言いたんりがらー、あんし、「いやー鬼喰
い、鬼喰いる持つちょーんなー」うまー見じやーい
よ、あんさーにや、海んかい転りてい、しらざあーちや
んりる話い。

うにーからムーチーやとういむつち、ムーチー作^{ちゆく}やー
に、はんすんり。

それから、ムーチーをとり上げて、ムーチー作つて、
厄を払うということである。

採集 S52・2・27 読谷村民話調査団第十班 〈村山義隆〉

注 ムーチー 座喜味では旧暦十一月八日にはムーチーと称する行事があり、現在でも行なわれている。幅約五センチ、長さ十二センチぐらいの餅を作り、月桃の葉に包んで大鍋に蒸して作る。魔除けとして煮汁は庭にまき、餅を食べた後のサンニンの殻二枚をあげて十字型にし軒先に吊るす。子供のいる家庭では子供の分をひもで吊るしたり、男の子には力餅を作つてあげたりする。

16 鬼 餅 由 来

話者 波 平 常 安 (明治三十九年十月一日生)

翻字 知 花 春 美

兄妹てー、男とう女とう、兄妹やてーんてー。
男あてーげーなー鬼ふーじーやてーるばーるやさにや。

「ののか」とそこを見て、海に落ちてしまつて、退治したという話である。

兄妹、男と女、兄妹だつたんでしよう。男はそうと
うなヤツで鬼みたいだつたんでしよう。人を喰つたと

人喰ちゃんぐたんりちさぐとう、うれーまた、むる人に見ららんぐどうし、食事の一食かろーんてー。

妹いなぬ女めんぬ、「くれ一変へんやつさー」りち、節すじぬ穴あなから見ちやぐとうな一普通ふつうぬ人ひとぬ食事じき食むしと一變かわていさぐとう。なーうぬ女めんぬまたなー、考かんがえ出だじやち、餅もち作つくてい、男おとこんかい固かたいムーチー取とらち、自分自分や本ほん当とうぬムーチー取とつてい。

うぬ女めんお自分じぶんや本当ほんとうぬムーチーるやぐとう餅もちえうち食むりとうらちやぐとう。うぬ男おとこあ、兄えいあ固かたい鉄てつさーい作つくてーるムーチーるやぐとう食むみうさんてー。食むみうさんなたぐとう、「いやーうんぐとーる固かたいムーチーん食むみるするい」り言いちやぐとう。また、「私わたくしねー鬼おに喰くいる口くちぬあんどー」りち、はてい見みしたんりぬ話はなしやるばーてー。うにーから直一直たんりがらー話はなしやんばーて。

いうからね、これはまた、人に見られないように食事をしていだそだ。

妹が、「これは変だね」と、節穴から見ると、普通の人とは、ごはんの食べ方が変わっていた。それで、その女は考えて、餅を作つて、男には固いムーチーをあげて、自分は本当のムーチーを取つた。

その女は自分は本当のムーチーなので、餅を食べてしまつた。男は、兄は固い鉄で作ったムーチーなので食べることができなかつた。食べきれなかつたので、「おまえはこんなに固いムーチーも食べるのか」と言つた。すると、「私は鬼を喰う口くちがあるよ」と、開けて見せたという話だよ、そのときから直つたという話であるよ。



ムーチー

翻話 津波古 米子

キジムナーとう友達しちゃくとう、な一夜ないねー^は
タク取いがりち行ぢえーるふーじ。海かいてーなー魚^{うみ}
取りが。

あんやしがかんねーぬ者のーいちぐな人夜更^{ちゆゆ一き}しみてい、
海かい連いくとう。くぬひやーや「タコお取いなよー」
んり、言らつたんりがらーや。あんやたんりち、タク
ぬいーばーうんなたくとう、タク取つていぶつていか
ちやんりがらーや。うりんかいたつくわーちやくとう、
うにーからうぬ人とー友達^{どうし}切りしちゃんりち。

キジムナーと友達になつたので、夜になると海にタ
コを取りに行つたようだ。海に魚を取りにね。

しかしこいつはいつも人を夜遅くまで起こして、海
に連れて行くのでね。キジムナーに「タコは取るな」
と言われていたそうだ。それで都合のいい事にタコが
すぐそこにいたので、タコを取つてすかさず(キジム
ナーに)投げつけた。すると体にくつついたので、そ
れからはキジムナーと友達の縁が切れたということだ
よ。

うれーまたカマーウシぬウスメーが、ちけーちもー
ちやんり。あれーキジムナーと友達やたんりしが。

採集 S 52・2・27 読谷村民話調査團第四班(富村朝夫)

注 キジムナー 木の精、古木に宿るといわれ、人間と友達になつて魚取りを手伝つてあげる。タコや屁が嫌いだとされる。

翻字 村山友江

昔、いーるんしえーヤツクワナーがよ、いーるんしえー魚取いが行ぢえーるふーじ。行ぢやぐどうなー、潮おひらん潮ぬ引るえーがりち、洞窟ぬ下んかいかんしかつて寝んとーるえーがねー、キジムナーがヒーヒーヒーべぐわーしち来たんり。

あんさーにキジムナーやヤツクワンさーやーに「くれー何やが、くれー何やが」りち、さーいさーいしちやぐどう。うぬ人お「うれーいやーいれーひやー」りちやぐどう。しゃぐどうなー、キジムナーぬいーて一ぬちむてー。いーたぐとうヤツクワのー小くなくてよー。あんさーなかいちゃつぴなーぬヤツクワナーが、うぬ海ん人んかい「いやーやぬぐわあんしヤツクワナーやたるむんぬ、ちやーし治とーが」ぬーぬ言ちやぐどう。また大やしん「私にんうまんじ寝んとーきわるないる」りち、岩ぬ下んじ寝んてーるふーじ。寝んとーるえーまねー、またうぬキジムナーリしえー息へーへーしち

そうしてキジムナーがその男の性器を、「これは何か、これは何か」と、さわったようだ。この人は「これはおまえもらえ！」といつたらかね。そしてもう、そのキジムナーがもらつたようだ。（キジムナーが）もらつたらね。

そうしてとても大きなヤツクワナーが、この漁師に「おまえはあんなに性器が大きかつたのに、どういうふうにして治したのか」と言つたからね、またその人も（その話を聞いて）「私もここで寝ることにしよう」と、岩の下で寝ていてようだ。そういうして寝ている間には、このキジムナーは息を切らして來たそうだ。

来たんりよ。ゆくいーばーやつさーりちするうちねー、
またうぬヤツクワナーなかいきーたぐどうなー、「私ねえ
なーうぬヤツクワのー重さぬ、何ん入り用あらんぐとう
いーらんどー」りち、うぬヤツクワナーンかい、また
ん預きてーるふーじ。あんすぐとううぬヤツクワナ
りる人お、たつたい大いるやしがたつたい大きくなてい
よ、うんぐどうしちあたんりぬ話。人ぬ真似りしぇー
さーんしやんぬーりる話。

これはちようど都合がいいと思つてゐるうちに、この
人にさわつたのでね、「私はもうこの性器は重くて、何
も入り用ではないからいらぬよ」と、このヤツクワ
ナーに預けたようである。だからこのもうヤツクワナ
は、だんだん性器が大きくなつてね、そういうふうな
話があつた。人の真似はしないようにといふ話である。

採集 S 63・3・16 読谷ゆうがおの会（知花春美・村山友江）

注 ヤツクワナー 大ぎんたまの人

19 キジムナー

話者 上地 弘治（明治二十九年十月十五日生）

翻字 津波古 米子

キジムナーとう友達なたくとう、なー毎日海かい行
ぢざくとう。またおじいが言んねー、「私にんかいねー、
タコお取いんなよーや、一番うれー恐るさぐとう」り

キジムナーと友達になつたので、毎日海へ出かけて
行くようになつた。おじいさんが言うには（キジムナー
は）「タコは取らないでくれよ、私はタコが一番恐いか

言ちやくと。うれーうみしみとーてーぎはん。心ん
かい。

あんさーなかい屋やお山やまかいやぐとう、夜よるお海うみかいや
ぐとう。山やまんじ木きや倒たさーなかい、またくれー家やかい
持もつち行ゆかやー、二人し持もつち行ゆかやーりちしちやぐ
とう。とーくりとーてい、たたつとうばちとうらしわ
るないりりち。うぬキジムナーとう友達ともだる人ひとお、斧のこ、
持もつちよーてい、かんし斧のこしきじやー、キジムナーや
後あととーていかんし木きかちみやーやーるぐとーん。

やでーるぐとーしが、あんさーにくぬひやーや今日ちの
やぬがーらちえーならんりちそーぐとう。斧のこの一意地
いつち立てたいやーに、はんらするふーじーしち、うり
んかいかんしやらちやぐとう、キジムナーやうり取とつ
ていち。斧のこの一取とつていちさぐとう、「あーとーいやー
や、やがてわん私わたくつ切きてーさー」りちやくとう「しー
はんらつているうんれー」りちさぐとう。「とー立た派ぱしー
よーやー」り言いちやぐとう、「あんすき」り言いやーなか
い。またなー木きや家やかい担かたみてい来ら。

また夜よお、おじいが言いんねー海うみかい行ゆぢやくとう。
くれーあんしん殺ころさらんむん、くれータクた取とやーな

らね」と言つていたようだ。それで（このおじいさんはキジムナーが言つたことを）心掛けっていたようだ。

それから屋は山へ行き、夜になると海へ出かけていた。山で木を切り倒して、この木は一人で担いで家に持つて行こうね、ということだった。今日こそはたたき殺してやろうと考えていた。キジムナーの友人は斧を持って、木を切る役目であり、キジムナーは後の方で木を押える役目であつたようだ。

そういうふうにして、こいつは今日ちのこそ許してはならないと考えていたからね。斧を力強く振り下ろして（的をわざと）外すようにして、キジムナーのところへ斧をやつたので「ああ、おまえはやがて私を切りつけるところだつたよ」と言つたから、「(的)を外してしまつたんだよ」と言つた。「ゆつくり氣をつけてするんだよ、斧はしつかりつかまえなさいよ」と言つたので、「そうしよう」と言つた。そして切り倒した木は家に担いで來た。

また夜になると、おじいさんが言つた通りに海に行つたからね。これではもう殺せないと。これはタコを取つ

かい、たつくわーせーないさーりちさぐとう。うりからタク取やーなかい、うりが見らんまーるタクお取やーなかい、うりんかい「うね!」りちかんし見したくとう、たつくわーちやくとう、あんさーなかいうりがたつくわーさんまーる、足かちみやーなかい裂かつてい。うりからキジムナーとう友達やたしえーけー死じ、うりから切りたんり。

て、くつつけないと考へた。それからタコを取つて、キジムナーに見つかることにタコを取つて、キジムナーに向かつて「ほら!」と見せてくつつけようとしたら、(このおじいさんがタコを)くつつけないうちに、足をつかまえられて裂かれてしまった。それからキジムナーと友達であつた人は死んでしまつたということで、このようにして一人の仲は切れたという話。

採集 S 52・2・27 読谷村民話調査団第四班(富村朝夫)

20 豚化け美女

話者 比嘉利吉(明治四十一年十一月二十日生)

翻字 棚原めぐみ

あの、豚が女に化けたということで、それは国頭の話だな。

あの、毛遊びにする豚が出ていたと。豚が出ていた。女に見せかけて、男達は女だからそれに惚れるわけさ。それで一人も二人でもおさめきれずに、四、五人でやつてしまつて、明くる日行つたら、大きな豚が寝ていたということ。それからびっくりしたということだな。

翻字 知花春美

た中なかい、むするぬ間ぐわーんかい、尾ぐわー隠ち、
あんさーにかい、人おだますんりきりぬ話。むするぬ
間ぐわー隠ちやーいよ、化きてい人おだ
ますんりち話い聞ちゃん。

二つの間に、むしろの間に、尾を隠して、そして、
人をだましたという話。むしろの間に、尾を隠して、
化けて人をだますという話を聞いた。

採集 S52・2・27 読谷村民話調査団第十四班〈運天悦子〉

22 ハブよけ呪文

話者 山 内 カ ナ (明治三十三年三月十日生)

翻字 村山友江

山んかいぢやへーぬ赤木ぬあたんりしが、うぬ木い
切つち、あんさーながいうぬハブおうまんかい座ちよー
たんり。うぬ木ぬ根、内んかい座ちよーんなたくとう。
はたから火やちきて、なー山あ焼きたくとう。なー
くがりーしえー内え、なー熱はぬ「水かきていきりよー」

ある山に大変大きな赤木の木があつたそうだ。赤木
があつたんだが、木を切つたらその中にハブがいたそ
うだ。その木の根つこの方の中に居座つたからね。そ
の木の周辺で、山火事がおきてしまつた。木の中に入つ
ているんだから焦げて熱くなつたので「水をかけてく

しち呼びーたんり。

れ！」と叫んだようだ。

そういうふうにしていたんだが、その薪を取りに来た人はね、遠くにいるんだから、この赤木の根の中に入っているハブは見えないでしょう。この薪を取りに来た人は見えないからね。「水をかけてくれ！」と、叫び声が聞こえるんだが、どうしたことだろう」と、立ち止まって聞いていた。すると、しばらくしてまたも「水をかけてくれよー、助けてくれよー」と叫び声がしたので、この薪取りが、ウバシカーサというのに水を汲んで来てかけたので（その火は）消えた。

あんしうりが行ぢやーに、またよ「夜道歩ちーねー、
すぐ『アヤマラダアヤマラダ ワガイクサチヌ タチ
ナマラ ヤマヌアラシニカタユンドー』いやーくれー
私助きてーぐとうや、私助きてーぐとう、うりが呪文
し、うりいやーんかい教ちょーぐとう、うれ、忘りん
なよー。夜道歩ちーにんわんなんよー」りち、遺言やた
んり。

そしたらそのハブが「夜道を歩く時は『アヤマラダ
アヤマラダ ワガイクサチヌ タチナマラ ヤマヌア
ラシニカタユンドー』、おまえは私を助けてくれたので、
その呪文をおまえに教えるからね。それは忘れるんじや
ないよ。夜道を歩く時は忘れるなよ」と、遺言したそ
うだ。

「アヤマラダアヤマラダ ワガイクサチヌタチナマ
ラ ヤマヌアラシニカタユンドウ ワンネーシチ ワ
ンネーハチ ジャウジャウジャウ」りち、三回な一呼
びりり。

「アヤマラダアヤマラダ ワガイクサチヌタチナマ
ラ ヤマヌアラシニカタユンドー ワンネーシチ ワ
ンネーハチ ジャウジャウジャウ」と、三回唱えると
よいそうだ。

採集 S52・8・16 読谷村民話調査団第十四班（運天悦子）

23 アカマタ聟入

話者 當山ハツ（明治三十九年五月十日生）

翻字 伊波邦子

アカマタ佳ぬ化きたる話いやよー。うぬ美ら女ぬ、
昔親んちゃーとうまじょーん、芭蕉ぐわーかんし紡じ
すたんよー。

アカマターが化けるという話はね。昔、とても美しい娘さんがいて、いつも、お母さんと一緒に芭蕉の糸を紡いでいたそうだ。

昔、芭蕉りねー、島芭蕉し煮やーにありすしえーやー。
島芭蕉し煮やーなかいあんし、くんどうしちちびぐわー
や合ーち、あんし、芭蕉しづいたんよー。私達までい
親どうまじょーい、しづやーなかい、うれえ中芭蕉、
上芭蕉りちーちんかい皮や皮あ分かちゃーにかんし
紡むたんよう。ウーバー佳ラりち作くてーる、ウーバー
も作つてあつたからね。

ラぬあでーぐとう。

お母んまじょーい、かんし話ぐわーしえーさがちー、
さがちーぬ話ぬ、「昔よ、いやーん話聞かさやー」り
ち、言ちやぐどう。「何やいびーが」り言ちやぐどう女ぬ
親ぬ、いつかぬ芭蕉紡じやがちーやー。うぬ娘子あじ
こー、けーるくな者なやーによー、親んまんじょーい
芭蕉ぐわー紡らい、ぬーさい七ち八ないにから、すてー
るふーじ。すたしがよー。あんし、うぬ十七、八なてい
から、アカマターぬ男んかい迷てい、迷やーに、うり、
まやーち、うぬ芭蕉いづぱい、かんし、ちいんちえー
る芭蕉ぐわーすびいちくーていはちよー、アカマター
ぬ洞窟んかい。ある洞窟りるばーてー。

すびち行ぢやぐどう、何がやーぬーりちかんし手縕
りんち、手縕りんちゅんり昔え言いてーぐどう、手縕り
んちょーしが。うりが減ていはちょーしが、何やがー
やりち、うり仙てい行ぢやーに、仙てい見ぢやぐどう
男ああらんアカマターなつい、洞窟来、なやーに。う
り傀ぶるとうつぴに、いへーまやーさつてーるちむてー
女お。

あんしさーに、「アカマターん子生ちえーたんりぬ話ー

お母さんも一緒に話をしながらね。「昔の話だけどね、
あんたにも話して聞かそうね」と言つた。「何ですか」
と言つたらね、母親が芭蕉を紡ぎながらの話であった
んだがね。この娘は大麥利口者で、七つ八つの頃から
親と一緒に芭蕉を紡いだりしていたようだ。そのよう
にしていたんだが、十七、八になつた頃に、アカマタ
ーの男に迷わされてしまつた。この男は娘を騙して、こ
のウーバーラにいづぱい入つている芭蕉をくわえて行
てしまつた。このアカマターの洞窟にね。

引っ張つて行つたものだから、何だらうと思つてこ
のように手縕つて行つてみた。芭蕉が(引っ張られて)
減つてゐるんだが、どういうことだらうと仙つて行く
とその人は男ではなくてアカマターであつた。洞窟ま
でくるとアカマターになつていた。この女はこの男を
傀ぶようになつて騙されたようである。

やぐとう。女おゆーしいよーやー」りち聞かしんしえー
たんよーわつたー母親ぬ。「いび、何が、何りちまたア
カマターが男んかい迷たがやー、何がうれー迷いびん
なー」りち、私ねー珍さそーるばーてー。「迷いびんなー」
りちうりしちやぐとう。昔ぬ話るやぐとう、「女お夜
歩かわんゆーさんれーならんれーり」聞かしんしえー
たぐとう。「いび、あんやいびんなー」りちうりしちや
ぐとう。昔ぬ話るやぐとう、「女お夜歩かわんゆー
さんれーならんれーり」聞かしんしえーたぐとう。「い
び、あんやいびんなー」りち話いぐわーせーしちい。
「あんしうれーちやーないびたがやー」りちやぐとう、
私ねーまた物問らつくわきーなでいよー。意味聞かん
えーまー、とうくつとーねーん。あんきーにうぬ女お、
夫むつちえーうらんよーい腹ぶどうしち、うぬアカマ
ターン子一ぱーき出じやちえーたんり、生ちえーたん
りんろー。うにからぬはじまいアカマター やんりさり
ち、言ち聞かしんしえーたん。うれえ本当がやらーそー
がやらー分からんちむえーやさ。聞ちよーる話どうや
ぐとう。

だからね、女はよく氣をつけなさいよ」と、私達の母
親が話して聞かせたよ。「なぜ、どうしてアカマターが
男に化けるんですか。このアカマターは化けるんです
か」と、私は珍しかつた。「迷うんですか」と聞いたか
らね。昔の話だから、「女は夜歩く時でも、よく氣をつ
けないといけないよ」と聞かされたのでね。「ああ、そ
うですか」と話をしてね。私は納得のいくまで話は聞
かないと気がすまないので、「そうして、この話はどう
なったんですか」と聞いたらね。そうして、この女は
夫を持たないままにお腹が大きくなつてアカマターの
子をさるのいっぱい生んであつたそだよ。アカマタ
ーの話というのは、それからの始まりだよと聞かされた。
この話は本当の話かどうかは分からぬがね。そういう
うふうに聞かされている話だよ。

注① アカマタ — 琉球列島中央部の固有種で奄美大島、加計呂麻島、喜界島、徳之島、沖永良部島、与論島、久米島、渡名喜島、沖繩本島とその属島（浜比嘉島、伊計島、宮城島）に広く分布している無毒蛇で体長一三〇cm内外である。人家周辺から耕作地及び山地にかけて、広い範囲に生息している普通種で、主として夜間活動する。

注② ウーバーラ 糸芭蕉の纖維を入れる籠。「ウー」は芭蕉の纖維、「バーラ」は籠のこと、竹で編まれたもので、直径三五センチ、高さ一〇センチくらいの籠。

24 ア ハ マ タ 篠 入

話者 照屋カマド（明治三十一年七月十日生）

翻字 安里和子

娘ん子ぬ布織いがなー、時間ないねーいつペー眠い
すたんりやー、布織いがなー。あんし親ぬやー、「ぬが
あんし、何りちいやー、時間ないねーあんし眠いすが」
しちゃくとう。「うぬ時間ないねー、美ら男ぬ来なかい、
あんし私ねー眠いし布織らうん」りちゃくとう、うぬ
なー女ぬ親ぬ心配しちよ。あんしなー時間なでいうり
が来ねーよー、うぬお婆さんが、うぬ男ぬ寝んとーし
んかいりがらー頭に、あぬ芭蕉紡まがなー、芭蕉ぬか
んし紡まがなー芭蕉かい針抜ち、うりハブぬ頭んかい
芭蕉の先に針を通して頭に刺したようだね。

刺さるあらーやー。

あんしやらちやくとう、山んかい入つち行いたんりがらー。うぬ女のー男りる思い、うぬ芭蕉さとうてい行ぢ、アカマターぬ頭んかい針刺ちえーぐとう。うり芭蕉さーい、うりさとうてい行ぢ見ちやぐとう。芭蕉ぬ歩ちえーんとうくる、うりさとうてい行ぢやーに見ちやぐとう、岩ぬ下んかいりがらーやー、岩ぬ下行ぢよーてい、わんねえあぬ別ぬアカマターんかい、「シジヤんかい種落るちちゃん」り言ちやぐとう、またなーうぬ別ぬアカマターぬ、「シジヤあぬくいやーかーに物知り。三月三日ないねー浜下りしち、あまんじ浴みーるんしぇーすぐ墮るする。いやーかーに物知りどー」り言ち。

うり、うぬお婆さんが聞ちんそーやーにかいよー、三月三日なたくとう、うぬ娘ん子連てい行ぢ、海んじ浴びたから、アカマターん子産ちゃんりちぬ話い聞ちやるばー、それだけ三月三日の。

そうすると、それは山の中に入つて行つたそうだ。その女人が男だと思って、アカマターの頭に針を刺しておいて、その芭蕉を辿つて行つてみると、岩の下で別のアカマターに対し、「私は人間に種を落として来た」と言つた。するとその別のアカマターが「人間はおまえより物知りだよ。三月三日になつて浜下りをすれば、向こうで潮水を浴びればすぐに墮りてしまう。おまえより利巧なんだよ」と言つていた。

そのお婆さんがそれを聞いて、三月三日になつたので、その娘を連れて行つて海で浴びると、アカマターの子を産んだそうだ。三月三日の話というのはそれだけ聞いた。

翻字 棚原めぐみ

非常に上等木だつたわけさ。首里の御殿の柱にするといつて、沖縄中探しても、もうこんな木はないということ
で、そのチャーギを倒して切つて、首里の御殿に持つて行つたということ。

その時にそのチャーギの精というのは、女だつたということ。そのチャーギの精が木を倒したから、いつしょに
死んでしまつたということ。

その女には子供もいた。そして、何十名かかつて引っぱつても動かないといふこと、その木は。昔はもうトラッ
クもないから、引っぱつて行つたわけさ。そうだから、もう何十名かかつてもその木は動かない。その息子が引つ
ぱつたからゴンゴン歩いたということだなその木は。

採集 S 63・4・20 読谷ゆうがおの会（知花春美・村山友江）

26 子育て幽靈

話者 当山ウシ（明治四十三年四月五日生）

翻字 村山友江

と一うれよー紙し買いむんしーがちーちーし、親ぬ、魂ぬちやぐとう。あんされーなー、側んかいうぬ

この話はね、親が魂になつて、紙で買い物に来たり
したようだ。そうしたらもう側にいた人がね。隣の人

人ぬ、隣ぬ人ぬ「くりりしえーなー。あれーいちみやんり思とーんなー、いやーがー。いちみえーあらんどーあぬ世ぬ人るやんしえーんどー」りちゃれー。「うぬ金し試ししんりよー」りちやぐとう。あんし水んかいうぬ金のー入ていんちやれー、打ち紙などーたんりぬ話い

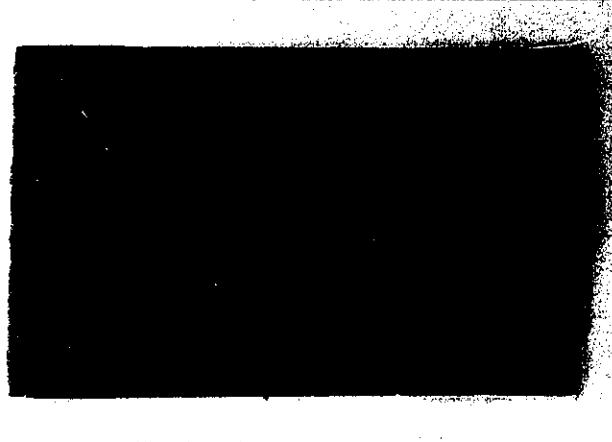
るやたる。うりる聞ちやる、ただ。

が「この人というのは、あなたがはこの世の人と思うか。この人はこの世の人ではなくて、あの世の人だよ」と言つたからね。「この金で試してごらん」と言つた。それで水の中にその金を入れてみると、打ち紙になつていたという話であつた。ただそれだけを聞いたよ。

採集 S 52・2・27 読谷村民話調査団第十三班（伊波百合子・兼村実）

注 打ち紙 紙銭のこと。以前は店から褐色のウチカビを買って、それに丸い

錢の型をしたウチカビウツチャ一と称するもので縦五個横七個に打つて使用したが、現在では、打たれたものが用意されている。焼香事や清明祭等に用いている。



ウチカビ

子 こ 育 そだ て ゆ 幽 ゆう 靈 れい

話者 比嘉利吉（明治四十一年十一月二十日生）

翻字 棚原めぐみ

昔、妊娠した人が死んだわけだな。死んで墓の中に行つて、子供が産まれたという話だな。

そういうから、その女は後生ん人だがもー、店に買い物に来た。で、買い物に来て、取る間はお金があつたということ。そしてその人が帰つたら、そのお金はどこにあつたか分からなくなつたということ。それをあの隣のおばあさんに話したところ、「あんすらーうぬ金の一取いるんさー、すぐ水んかい入ていんりよー」ということ。水につけてからウチカビになつていたつて。そうして、今も打ち紙というのあるさーや、後生の宝、後生のお金であるということ。

採集 S63・4・20 読谷ゆうがおの会（知花春美・村山友江）

28 塩吹き臼

話者 比嘉テル（明治四十三年七月十八日生）

翻字 知花春美

海んかい臼ぐわー沈ろーんりぬ原因るやらやー。

あるところにや、男兄弟二人うたんりー。二人うた

んりしが兄あいつペー金持しち、弟おいつペー貧乏

海に臼が沈んでいるという話でしょう。

あるところに、男の兄弟が二人いたそうだ。二人い

たが、兄さんはたいへん金持ちで、弟はたいへん貧乏

やでーるばーよー。

あんし、兄やや、なー正月なたぐとう、まる豚く
るちょーるばーよー。まる豚くるちやぐとう、弟お、
「どーりん兄さん、私にん、一、二斤の一分きてーどう
らしえー」りちやぐとうや、「いやーぐとーるユムジラー、
貧乏者ぬや、肉んれー喰わるやるい」りちやぐとうやー、
「どーか兄さん、年ぬ夜うやんむん、一斤やていんし
むぐとう、一斤やていん分きてーどうらしえー」りちよー
るばーてー。「あんすか言いみ」りち、肉二斤の一ぶつ
ていかちとうらすんり。「いやーや年ぬ夜うしえーわ」
りち取らちやんりちょーるばーてー。

うぬ後から、また今度お神様ふーじーがりがらー、
やなすがいぐわーしもーちょーるばーよー。豚あくる
する所んかいもーちやぐとう、「あぬ、私にんやいつ
ペー貧しい者やしがや」神様りちえー分からんばーよー。
「私ねー貧しい者やしがや正月んしーうさんしがいつ
たーうつびなーぬ豚あくるちえーるむん私にんかい肉
一斤のーきうらんなー」りちやぐとう、「いやーぐとー
るギンジャー^法や、ギンジャーべわーぬんじとーていや、
くまんかい来、じやまなどーていや、肉くうり、ぬー

だつたようだ。

そして、兄は、もう正月になつたので、豚一頭をつ
ぶしたようだね。豚一頭をつぶしたので弟が、「どうか
兄さん、私にも一、二斤分けて下さー」と言つと、「お
まえみたいな貧乏者が肉を喰うというのか」と言つた。
「どうか兄さん、年の晩だのに一斤でもいいので、一
斤でも分けて下さー」と言つたようだ。「それほど言つ
のか」と肉一斤をすぐ投げてあげたようだ。「おまえは、
年の晩をしなさい」とあげたようだ。

その後に、また今度は、神様のような人が、身なり
の汚い格好で來たようだ。豚をつぶす所に來たので「あ
のう、私もね、たいへん貧しいものだけど…」、神様と
は分からぬのだろう。「私は貧しい者だけね、正月
もできないが、あなた方はこんなに大きい豚をつぶし
て、私に肉一斤分けてくれないか」と言つと「おまえ
のようなギンジャー、ギンジャーがでておつて、ここ
に来て邪魔になるのに、肉をくれ、何をくれというの
か」と追い払つたようだ。豚をつぶしている金持ちが

くうりりち言んなー」りち、追とーるばーよー。豚く

るすぬ金持人ぬ。

ね。

あんさぐとう、今度およー、「あんやんなー」りち、なーうまからどうぢやるばーてー。どうちさぐとう歩
ちゅれー、なー弟ぬ肉一斤持つちよーし追とーるばーよー、追たぐとうや、「えー、まじ、待つてー」りちよー
るばーてー。「あんし、いやーや何う持つちよーが」り
ちやぐとうや、「私ね一貧乏な者なていや、家りちんねー
ん、洞窟んかい住まとーしがやー正月たるむん肉一斤ねー
んあれーないみりち、あぬ、兄ぬ家んかい行ぢやぐとう
や、大豚くるちそーしが、分きていくうりりぢやぐとう
や、「いやーぐとーぬ貧乏者いやーがん肉くえーわるや
んなー」りちやぐとうや、「どーりん兄さん、分きてい
とうらしきー」りちよーるばーてー。

あんさぐとう、肉二斤の一ぶんなぎてい取らちょー
るばーてー。弟んかい、取らちさぐとう「あーありが
とう、でいち取つて、なー家かい来びーしがや私ねー
くぬ二斤さーに正月すんりちるやいびんれー」りちさ
ぐとう、「私にん貧乏者なてい、家あ家庭ん、何んちん
ねーんしがや、肉二斤や、私にん一人し煮ち食り、正月さ

すると、今度は、「そうか」と、もうそこから出たよ
うだ。出て歩いていると、もう肉一斤を持つている弟
の後を追つたようだ。追つていると、「おーい、ちょつ
と待つてくれ、それに、おまえは何を持つているのか」
と言つた。「私は貧乏な者でね、家といつてもないし、
洞窟に住んでいるが、正月だのに、肉一斤さえもない
ので、兄の家に行つたら、大きい豚をつぶしているの
で、分けて下さいと言うと、『おまえみたいな貧乏者、
おまえも肉を喰うのか』と言われたが、どうか兄さん、
分けて下さい」とお願ひした。

すると、肉二斤を投げたようだ。弟にあげたので、
「あゝありがとうと言つて取つて、もう家に帰るんだが」
が、私は、この二斤で正月するつもりでいるんだが
と言つた。「私も貧乏者で、家、家庭もなく、何もなく、
肉一斤で私と二人で煮て食べて正月しようね」と言つ
た。

んな」りちやぐとうよ。

「あんしえーめんそーれー。私ね一家あ家庭んねーん、洞窟んかい住まとーる身ややいさびーしが、あんし私とう一緒ん正月しんしえーみりちよーるばーてー。うりが神様りち分からんどー、「二人さーい肉え煮やーい正月さびらやー」りち、食ろーるばーよー、二人さーに煮ちやぐとうや。

あんし、食り後おや、「私ねー実えやー本当ぬ人おあらんどー」りちよーるばーてー、あんさぐとうや、「何うやいびーが」りちやぐとうや、「いやーが一番欲さしえー何うやいびが」りちやぐとう、「私が欲さしえーや、あぬ、金やいびん。金ぬんやい、くえーむんやいびん、働ちん働からん、あんし仕事んねーんるあいびーぐどう」りちやぐとう、「なー兄あ金持そーしが、なー私ねー貧乏者なるまま暮らちや、かんしそーしがや、食事、なー金とうさえあればや兄んかいうしえーららんさーり思ひびん」り言ちやぐとうよ。

「とーあんしえー、あんやらーや、くぬ臼ぐわーいやーんかい譲ぐとうや、くぬ臼ぐわー幾回みんぐわしーねー金ぬ出じーんどー、幾回みんぐわしーねー塩ぬ出じー

「それではいらして下さい。私は家、家庭もなく洞窟に住まつてゐる身ではあるけれども、それでも私と一緒に正月しますか」と言つた。その人が神様とは知らないよ、「一人で肉を煮て正月をしようね」と食べたようだ。二人で煮た。

そして、食べた後、「私は実はね、本当の人ではないよ」と言つた。「何ですか」と聞くと、「おまえが一番欲しいのは何か」と聞いたので、「私が欲しいのはね、あのうお金です。お金でもあるし、食物でもあります。働くこともできず、仕事もないのですから、もう、兄は裕福だが、私はもう貧乏のまま暮らしてね、そのようにしてゐるが、食物とお金さえあれば兄さんにバカにされないと思います」と言つた。

「そうならば、この臼をおまえにあげるので、この臼を何回廻すと金が出るよ、何回廻すと塩が出るよ、何回廻すと、ご馳走が出るよ」と教えた。

んど一、幾回みんぐわし一ねー、また御馳走ぬ出じーんど一」りち習ちさーにやー。

「なー、くり、いやーあれーやーあんしちゃーしん兄んかい負きらん生活すぐどういやーや、じこーぬ愛情ぬ持つちよーいや、青年やぐとう、いちかー成功すぐどうや、成功しみーぐとう、田ぐわーいやーんかい譲らぐわーやー、あぬ、いやーが欲するむのー何回みぐいねー塩どー、何回みぐいねー金どー、あんさーに負きらんぐとうにいやー成功しょー」りち、なーうに一から帰ていうらんなどーるばーよー。

あんしさぐとう、うぬ人お神様るやでーしきーりちなーあんししーねーあとうぬぬずみねー何回出じやしーねー金ぬ出じーんりち、言んしぇーてーるむん、みんぐわちやぐとう、止まやーに金ぬ出じてい、塩出じたぐどう、今度お塩出じやちゃーい売てい歩ちやーに富そーるばーでー。

あんしさぐとう兄あみぐてい来に、「ぬぐわ、いやーや何んちあんし富そーるりちよーる」ばーでー、「ぬぐわ、何んあらんどー」りちよーるばーでー。「確かに何がらあんてー、いやーやあんてー」りちやぐとうや、なー

「もうこれががあれば、おまえは兄さんに劣らずに生活できるので、おまえはとても愛情を持つてゐる青年だからね、いつかは成功するのでね、成功させるので、曰をおまえに譲るので、おまえが欲しいもの何回廻ると塩だよ、何回廻ると金だよ、そうして負けないようになに成功してね」と、その後からは帰つていなかつた。

そうして、その人は神様だつたんだけどねと、それから、何回廻すと塩が出る、何回廻すとお金が出ると言つていたのでと、廻してみると、止まつてお金が出て、塩が出たので、今度は塩を出して、売り歩いて金持ちになつたそうだ。

それから兄さんが来て、「どうしておまえはそんなに金持ちになつたか」と言つたようだ、「なぜ、何でもないよ」と「確かに何があるね、おまえは」と、しつこく聞いたようだ。兄さんが、「確かにおまえは何かある、

じこーあなぐいたんりよ。兄が。「確かにいやーやむんぬあん、うつび富そーるびけーんや何がらやんよー、やんよー」さべとうや…。

なーうりだけ言ひるむん 兄るやるむん なー聞かしわるやつさー。「あんあんしいやーから年ぬ夜にや肉二斤取やーにかいうぬ肉やキンジャーブとーるすがいそーる人やしがや、一人さーに年ぬ夜うしちやぐとう、うぬ人が習しみそーちや、くぬ宝田ぐわーきうんそーちやぐとうや、うりさーにみんぐわち 塩じやつさん作ていや、塩卖てい生活そーんろー」りちやぐとうよ。

「あんし、あんやらーや、私んにんかいうぬ田ぐわーいへー借らさんなー」りちよーるばーてー。うり誠な者やしえー弟よ、借らさんなーりちやぐとうてー、貸らしぶこーねーんていん借らさんねーならんしえー。兄弟るやしえー、うれー愛情むちやぐとう、「あんし、いやーや長え貸らさんどー、ちやーき持ちくーよー」りちよーるばーてー、弟が。

あんしさぐとうや、持つちやーにかい舟んかい乗たるばーよー。盗りてー、舟ぐわー、ポンポン舟乗やーい行ぢよーるばー。

こんなに裕福になつてゐるのに何かある、何かある」と…。

もうそんなに言うのなら、兄さんだから話してあげよう。「こゝこうで、兄さんから年の晩に肉二斤をもらつて、その肉をキンジャーのような人だが、二人で年の晩を過ごしたら、その人が教えたんだ。この宝の田をくれて、これを廻すと塩をたくさん出して、塩を売つて生活しているよ」と。

「そうだつたら、私にこの田をちょっと借してくれないか」と言つた。弟は誠実な人だから借してちょうだいと言わたので、貸したくなくても貸さないといけないでしよう。兄弟なんだから、弟は情があるのでね、「そつか、あなたに長いことは貸さないよ、すぐ返してよ」と弟は言つた。

すると、田を持つて舟に乗つたそだ。舟を盗んでポンポン舟に乗つて行つたようだ。

あんさぐとう、みんぐわらちやぐとう止まらん。うぬ白えあんし止みーし分からんばーよ。止みーし分かれー止まいしが、なーちゃーみんぐわし、ちやーみんぐわし、舟からあんりとーるばー、うぬ塩おあんりやーい白ぬみー沈りや、人ん沈り亡しや、うぬ白ぐわーや、海ぬかーま奥んかい流れてい行ぢやーいちやーみんぐい、ちやーみんぐいさーいや、うぬ水りしえーや、ちやつさ雨降ていんせんせん甘くならんしえーうぬ白ぐわーぬ原因どーりる話やたん。

そして、廻してみると止まらない。その臼を止めのを知らない。止めるのが分かれば止まるが、もうずっと廻りぱなし、舟から溢れたようだ。その塩は、溢れて臼もろとも人も沈んで死んでしまった。その臼は海のずっと奥に流れて行つてずっと廻つて、その水はどんなに雨が降つても、ちつとも甘くならないのはその臼が原因だという話を聞いた。

採集 S 52・2・27 読谷村民話調査団第十班（村山議隆）

注 ギンジャーべわー 食のこと。

29 塩吹き臼

話者 島袋亀一郎（明治二十八年一月二十九日生）

翻字 知花春美

海ぬ潮ぬ、かんし雨ん降つい水え流りてい海んかい
はいしが、うぬ海ぬ潮ぬ何んち甘くんならん、ちやー

海の潮は、こんなに雨も降つて水は流れて海へ行く
が、この海の潮はどうして甘くもならず、いつも同じ

同じ調子に辛さがや一海ぬ潮お。うりが理由。

あるところに、兄さんと弟と、兄弟二人が貧しい生活をしておつた。そして、正月にちやーし食むがやーりるあたい、正月んなていん金もない、何もない、そのときにはいつしょに兄さんと弟といつしょに正月するつもりでおつたが、もう二人が正月に食べるのもないから、兄さんが弟追い出してしまつてね。

弟はまた泣く泣くに家から出でてい、そして正月で一むんといつて、まーどこかに行つて、必ず何か探しに行つたんでしょう。そして、この海渡り、海を渡つて行くんだから、舟べわーから天馬舟べわーから海をまー渡つて行く。

そして、行つたらあるところに、まあみすぼらしい老人が現われてきて、「ぬが青年、ちゅーや正月で一むん、正月なぎー、うんぐとう歩ちえーく」「なー正月食むしぇーむるていーちんねーらん、なーまーんじ、いへー歩ちやーま、黄金んでー金ぐわーんでーねーらんがやーりちるやいびんでー」と言つた。「あーそーか、うりがあんいちえーたれーま金のーねーらん」それのみすぼらしいおじいさんは。

調子に辛いのだろうか海の潮は、その理由。

あるところに、兄と弟、兄弟二人が貧しい生活をしていた。そして、正月にもどのように行つても金もない、何もない、そうぐらいに、正月になつても金もない、何もない、そこのときに、兄さんと弟といつしょに正月するつもりでいたがもう二人が正月に食べるのもないから、兄さんが弟追い出してしまつた。

弟はまた泣く泣くに家を出て、そして、正月だからといつて、まあどこかに行つて、何か探しに行つたんでしょう。そして、この海渡り、海を渡つて行くんだから、舟から、天馬舟から、海を渡つて行く。

そして、あるところに行つてみると、まあみすぼらしい老人が現われてきて、「どうした! 青年よ、きょうは正月だのに、このように歩いているのか」「もう正月に食べるのもひとつもない。もうどこか、すこしほ歩いて、黄金でも、お金でもないかなあとさがしていふんだがね」と言つた。「あゝそうか、そうだからと簡単にお金が見つかるわけがない」と、それのみすぼらしいおじいさんは言つた。

うぬおじいさんが、「とー私がいいむんぐわー教すぐとう、くぬ臼、石臼ぐわーわたしはあるから、これを持つていて、えー、『何出れ、お金出れ、お肉出れ、エンヤラゴロゴロ、またお肉出れ、エンヤラゴロゴロ』と言つたらこれが出てくるから、食べる分しか言いなさい。そして、またあとは食べきれないだけそこに出したらいがんからまた『それでよろしい ゴロゴロ』と言つてきりなさいよー」と言つた。またそのときは出ない、

「ちそうば。

これは、また正月まで家に行つてりつぱな正月したつて弟は。

兄さんがまた、この精神の、心の悪い兄さんがうり聞ちゃーに、「いやーひゃー、うれーまーから、ちゃーし探めーていぢやるむんやが」と言つてね。

あんしさぐどう、「なーこーこーで、みすぼらしいこじきみたいようなじいさんが、そのじいさんが、そういう臼で、うりくうやーに、臼ぐわーくれたからそーなつているんだよー」と言つた。

それからまた兄さんは、悪欲の兄さんは、それを聞いて、「そーか」と言つて、これ何でも呼んだら出ます

そのおじいさんは、「では、私がいいことを教えるから、この臼、石臼があるから、これを持つていて、『何か出れ、お金出れ、エンヤラゴロゴロ、お肉出れ、エンヤラゴロゴロ』と言つたらこれが出てくるから、食べる分出しなさい。食べきれないほどそこに出したらよくないので、『それでよろしい、エンヤラゴロゴロ』といつときりなさい」と言つた。そのときはじちそうばは出でこない。

そうして、弟は家に帰つてりつぱに正月を迎えた。

兄さんが、この精神の、心の悪い兄さんがこれを聞いて、「おまえは、これをどこからどのようにして探し始めたのか」と言つた。

弟は、「もうこーこうで、みすぼらしいこじきのようなおじいさんが、そのおじいさんが、その臼をくれて、臼をくれたからそうなつているんだよ」と言つた。

それからまた兄さんは、悪欲の兄さんは、それを聞いて、「そーか」と言つて、これ何でも呼んだら出ます

と言うておるもんだから、兄さんがまたこの臼ぐわーを盜んで持つていく、これが、いわゆる島渡りであるもんだから、舟ぐわーからまた持つていく。

そのときに舟から出ていくときに、また塩ぐわー、いへー塩ぐわーなみーぶさぬ、くれー塩ぐわー出じやしわるないさーと、海から舟ぐわーから歩きながらね、塩ぐわー請求した。うりんかい、「なに、お塩、塩出しなさいエンヤラゴロゴロ」と言つて、あんさぐとう、お塩がたくさん出た。

しかし兄さんは盜んできたもんだから止めるのは知らない。そうすると、塩ぐわーはちゃー出じーちゃー出じー、そーしてね、この舟ぐわーにいっぱいなつてね、もつと出るもつと出るから、舟ぐわーは、それだけ持つことはできんでしょう。そして沈んでしまった。舟ぐわーは、兄さんもろとも海の中に沈んで兄さんは死んだ。その臼ぐわーは止める人はいない。ちゃーみぐいしているかね、海の潮はちゃー辛、こうなつておるという話です。とーうれーうつる。

と言つておるもんだから、兄さんは、またこの臼を盜んで持つていく、これが、いわゆる島渡りであるものだから舟で持つていく。

そのときに舟で出て行くときに、塩を、すこし塩をなめてみたかつたので、まず、塩を出してみようと、海を舟で渡りながら塩を請求した。それに向かって、「お塩出なさい、エンヤラゴロゴロ」と言つて、うすると、塩がたくさん出た。

しかし、兄さんは盜んできたもんだから、止めるとは知らない、それで、塩はずつと出づばなし、しまいにはこの舟いっぱいになつてね。もつと出る、もつと出るから、舟はそれだけは入らないでしょう。あとは、兄さんもろとも舟で沈んでしまった。その臼を止める人はいない。ずっと回つてるので、海の潮はずつと辛い、そんな話です。これでおしまい。

翻字 村山友江

うりんまた嫡子とう次男とう生まりとーたんり。あんすぐとう、うぬ次男やもうごく簡単な人。嫡子やもうじこーに秀りやー、偉い者やんばーてー。うぬ子供時代から、またてーげー頭んちやとーしが、理屈もじこー大きいむんり。

あんすぐとうくぬ次男、いひえー社会ぬ面習するたみに、「いやーや金ばかーん儲きていんならんや。金ぬん儲きていいひえー自分ぬ体んかい楽しみりいるくとうんありわるやる。人間の一生まりたるびかーじえー」やつぱりなー、兄あじこー頭お秀とーぐとう。「あんやみ兄さん」「いやーまた、金ぐわーやてーげーわたくしぐわーん持つちょーるぐとーる」り。

今度お、昔ぬ今あ私達が若さる時分の一、またあぬ今ぬ中国りぬ名よ、あれー支那り言いたるばーてー。またうぬ前や唐りたんよ、唐。唐り、今ぬ中国お唐りちよ、沖縄ん人のー言たんよ、唐なさい。やつぱし昔え、

ある所に、長男、次男といた。次男はもうごく平凡な人であつた。嫡子はもう大変優秀で偉い人だつたそうだよ。（嫡子は）子供時代から頭も大変よくて、理屈も分かる人であつた。

そうであつたので、嫡子は次男に少しは社会勉強もさせたいと思い、「あなたはお金だけを儲けてもいけないよ。お金も儲けて、人間は生まれた以上は自分のために楽しみもしないといけないよ」と。やつぱり兄さんは、大変頭がよかつたのでね。「そうですか兄さん」と。「あなたはまた、へそくりもたくさん持つてゐるみたいだけど」と（兄さんは弟に）言つた。

私達が若い時代にはね、今の中国は支那と呼んでいたよ。またその以前は、唐と言つていた。唐ね、今の中国には沖縄の人は唐と言つていた。その頃は、沖縄と中国は政治も一つだつたらしい。沖縄の人は、唐に

今ぬ中國とう沖縄と一政治も一つやたんりがらー。やつぱり旅國やてーるばーてー、沖縄が一唐りぬとうくまー。「りか、私にんあまーなーだ行ぢえーんだんや、いやーん行ぢえーんだんしえーや、りか唐んれー視察しちくー」

「あんしえー行ぢんだな兄さん」り言ちよーるばー。

いよいよ何月ぬ何日行かやーりる場合に、出発ぬ日ん決みたれー、うまー一人一人唐んかい出発しーがはんよー。出発する前に、ただんなる一行き自分ぬ金ばかーんてーち、楽しみも何もしてならんさにり思やーに。兄あ、「いやーよ、また笠はい上手やぐどう」、クバ笠りちあしえーや、あり上手やたんりまた家うてい。「いやークバ笠ん、くまうてい賣ていん金ん儲きていそーぐどう。今度お、あまんじえー唐んじえーゆくいーべーするはじやぐどう。笠いいきこー作でいうり持ち行かやー」やん。あまんじ売りーぎさーるやいさに、さぐとう「いえーあんしえーなー上等ないさ兄さん、私だてーん作とーかやー」り言ぢえーき。

しーなたれー笠ん持つち、唐んかい出発なたんよー。

あんさぐとう唐行ぢやれー、唐んかい上陸しちやれー。さつそくだー品物の一持つちょーしえーや、くり売ら

よく旅をしていたそうだ。(それで兄は弟に)「私もまだそこへは行つたことがないし、あなたも行つたことはないから、唐へ視察しに行こう」「じゃあ行つてみますか兄さん」と話をしたわけだ。

いよいよ何月の何日に出発しようねと日も決まって、出発の間近になつてからね。出発する前に、ただ手ぶらで行つて自分のお金だけを使って、楽しんできてもしようがないと思つてね。弟の方は家でクバ笠を作つており、大変上手であつた。兄さんは弟がクバ笠を作るのが上手であるということで、「あなたはここでもクバ笠を売つてお金を儲けているんだからね。今度は、唐でよけいに繁盛するはずだからね。クバ笠をたくさん作つて持つて行こうね」と。あそこでは、売れそりだと考えたんでしようね。お互いに。売れそりだということになつたので「そうならばもう上等だよ兄さん、私がたくさん作つておくよ」と言つた。

準備もできたので笠も持つて、唐に出発することになつた。そして唐に着いた。品物は持つてゐるんだから、それを売らないことにはお金はつくれないわけだ。

んねー金の一ならんりちやぬちむやしえーやー。さつ
そく行商んかい始みやーに、あぬある地方巡やーに、
「笠貰んそーりー」しちゃんり。あんさぐとう笠てい
ちん買ていきうーる人おうらん。「とー持つちえー来ん
けーしむたるむん。兄さんくりちやーするむんやが、
またゆぬぐどう島んかい笠持つち返すぬくとうにんやつ
ぱりいかんあい」り言ち。

笠あ持つち担ぎやーに、あまーなまー有名な所、お
寺お寺ぬあぬ見物しーがなー笠ん担ぎてい行ぢよーた
ん。笠貰やーうらんむんぬ、また見物かい始みらやー
りち、見物。お寺、なーお寺りちしむがやー。

へやつぱり座喜味城やていんよー、くぬ工事ぬ始ま
らん昔事お、石灯籠りちまるむんなかい建物ぬあたん
よー

あんさーに上部んかい飾いたていてい。うりが笠二
十四りがらー持つちよーたんり。あんさぐとう石灯籠
二十四また立つちめーん、うれーまた神様りち信じじとー
るばーてー。ゆでいんちやれー自分ぬ笠、笠あ買ひる
人りちんうらんむんぬや、くまー神様ぬめんしえーぐ
とう、くれー神様る全部やんしえーぐとう、うぬ神様
神様にこの笠を全部被せて帰ろうねと。二十四の石灯

さつそく笠の行商を始めることになり、ある地方で「笠
を買って下さい」と歩いた。でも、ちつとも笠を買つ
てくれなかつた。「ああー持つて来なければよかつた。
兄さんこれはどうするんですか。また同じように島に
持ち返すわけにもいけませんよ」と言つた。

(それから、笠も売れないでの) お寺などの有名な
所を、笠も担いだまま見物に行つた。笠を買つてくれ
る人もいないので、見物を始めようねと。もう、お寺
と言つていいでしようね。

(この座喜味城にもね、工事が始まらない前は、石
灯籠というまるい建物があつたよ。上部に飾りもついてね)

それが(笠は)二十四持つていたようだ。また、そ
の石灯籠も二十四立つていたそうだよ、それは神様だ
と信じられていたわけだね。数えてみると、自分も笠
を二十四持つていた。この笠は買つてくれる人もいな
いんだから。この石灯籠は全部神様であるんだから、

んかい全部かんしんそーらさーに帰らやーりちよ。二
十四んかいたましうつちやれーなー、笠あ全部売りた
るちむり。金の一ねーんどー、ただ寄付るやる。

あんさぐとう「なーしむき、神様ぬ所るやぐとうし
むんどー」兄さんが言ちよーがはんよー、「しむんどー
兄さん」り言ち。なーうぬ場合に、うがまーにうまか
ら帰いぬ途中り、「いえー、いえーひやー、いえー、いえー」
りち三回りがら人ぬ声ぬ聞かりんり。ぬぐわ一人ぬん
もーらんあるむんぬ、人ぬ声ぬ聞かりるやーぬが
やーりち、振い返やーに立つちよーてい聞ちやぐどう。
「いつたーや、いつたー二人やありがとう。何年昔か
ら、雨ぬ降りわん風ぬ吹きわん外灯籠し、んー灯籠し
なまがえーまやたしが、いつたーが笠譲てい被てい、雨
にも不自由ねーらんほじやつきーありがとう」りぬ言葉ぬ
あんしえーたん神様から。「不思議なむんやつさー、う
がどーびら」りち、なーうりさーに。くぬうまー寺、
お富りちしむがやー、うまぬまーぬ方向んかいあぬ黃
金埋づみてーぐどうや。何尺あされーうまんかいあぐ
とういつたーうりあさていいーていはり。「いえー珍し
いむん本当やがやー」りち、うぬ現場うすていあさてい

籠に全部被せてしまつたので、もうこの笠は全部売れ
たということだ。お金はないよー、ただ寄付だよ。

そうしたら「もうこれでいいよ、神様であるんだか
らしいよ」と。兄さんが言つてゐるんではなくて、(弟
が)「いいよ兄さん」と言つた。もうその時にそこから
帰る途中に、「いえー、いえーひやー、いえー、いえー」
と三回ほど人の声が聞こえたそうだ。人、ひとりとし
ていないのに人の声が聞こえるけどどうしてかなと、
振り返つて立ち止まり聞いてみると。「あなたたち二人
は、ありがとう。何年も昔から、雨が降ろうと風が吹
こうと外灯籠で、今まで濡れてばかりいたけど、あな
た達が笠を譲つて被せて、(今からは)雨にも不自由が
ないはずだありがとう」という言葉が神様からあつた。

「不思議なことだなー、うかがつておきます」と、そ
か、ここに向方に黄金を埋めてあるからね。何尺掘れ
ばそこにあるから、あなたたちはそこを掘りなさい。
「あー珍しいことだ本当かなー」と、その現場を捜し
あてて掘つてみたら、黄金がたくさん出てきた。出て

見ちゃれー、黄金こがねぬだてーんじでいよー。んじやー

に、なー二人さーに見ちゃれーすぐ使つかりーる金のーあ

らん。くれー黄金こがねるやぐとうりちさーに。

とーうれー神様かみさまからぬお授さずけやぐとう、ぬー悪わさー

ねーらんぐどう。あんしぇー私わたくしうがりいかやーりち、

うがりいじやるしじ。兄あさんのー頭かぶお秀ひでとーしぇーやー。

あぬーまた地方ちほうんかい來き、まーがらぬ言いーねー旅りょ旅りょぬ、

うまんかいゆるりそーていぬ話はなしいやんりしが。「でーー

よー次男じなん、くれーあぎたー島しまんかい持もつち帰かたんてー

やー、くれー金かね、何なにがら買くらりんさぐとうくりえーす

ぐいや、金かねとう替かわていいかやーり。あんさーにうぬ

場合ばにくり替かわいに、黄金こがねとう金かねとう替かわいぬ所ところさとうやー

に行ゆぢやぐとう、相当どうじょうな金かねーうがどーたんり。

うがだぐとう、なー今度こんどお二人ふた人がふくやーに。兄あさ

んの一いつペー頭かぶお秀ひでているうぐとう金かねーなーうつ

さ持もつち次男じなんが持もつちるうさい。當時どうじなー今いまぬ料亭りょうていふー

じー飲み屋やりん言いんや、飲み屋やんじ一夜いちやあ飲のだい食くだ

い御馳走ごちそうだいしち帰からやーりち。うまんかい入いつちや

ぐとう、あまりぬうむさぬこうざぬ所ところなー夜よりちるやしが、

うまんかいなー食くみふりやーに飲のみふりやーに日ひぬな

きた黄金を二人で見ると、すぐに使えるような金ではなかつた。これは黄金であるんだからね。

さーこれは神様からの授かりであるから、何も悪い事ではない。だから私達が持つて行こうねと持つて行つた。兄さんは頭は秀れていたからね。ある所の旅館で、ゆつくりくつろいでいる時の話だがね。「あのね次男、これは私達の島へ持つて帰つてもね、この黄金ですぐに何か買うこともできないから、お金と替えて行こう」と。そうして、黄金をお金と替えてくれる所を捜しあてて行つた。すると相当なお金と替えることができたそうだ。

手にいれたもんだから、二人は大変喜んだ。兄さんはもう大変頭も秀れていたからね。お金はたくさん次男が持つていた。もう今までいう当時の料亭みたいな飲み屋みたいな所で、一夜泊まり飲んだり食べたりして帰ろうねと(いうことになつた)。そしてそこに入つてみると、あまりにも楽しい所なので一夜のつもりであつたが、そこで食べたり飲んだり楽しみをしすぎて日が

いしきー計算の一分からんなやーに。どうくいそはぬ所ほがらかな所なで、一時うまうてい長一滞在するたみに、今度おなうつさ全部金使ていねーらん、飲だいさぐとう。なー今度おまたんかじさぎたん、次男の一かじさぎーにや、うりん兄ぬ考へるやぐとう。なーうつペーぬまき金、ちゅらーくうちゅくわていねーらん。沖縄んかい帰いる旅費んねーり。

あんそーていまたなー相当金うまんかい儲きうちえーぐとう。かじさきて、くれーなーちゃーし帰らりがやーりち、二人心配やいぎはん。あんさーまうぬ女中達が「ぬが貴方なーや、かげんの一悪さーねーんそーらに、あんしとるばていめーる」り言ちやぐとう。「あーあきらかに言しがよー、私達やくまんかい来る日から今まで、相当何万、何十万、何億んやいるすてーさに、相當な金やしが全部くまんかい長遊びしちゅらーくねーらんないよー。沖縄んかい帰いし何し帰いがやーりち、なーくまから出じらん黙とーんどーやーり言ちやがや、うぬ女中んかい。「あんやんしえーんなーりやーに。今度おまた、「とーあんさーやいびんよー、貴方なーが持つちぢやる金の一持つちょー

過ぎていくのも分からなかつた。あまりにも楽しい所なので、滞在が長びいてしまつて、今度はもうこのたくさんのお金を全部使いはたしてしまつた。飲んだりしてね。もう今度もまた次男はもうがつかりしてしまつた。これも兄さんの考え方であつたからね。もうこんな大金を全部使いはたしてしまつた。沖縄へ帰る旅費さえもなかつた。

そうこうしてこの飲み屋をたくさんのお金を儲けさせてしまつた。がつかりして、もうどうしたら帰ることができるだろうと、二人で心配していた。その様子を見ていた女中達が「あなた達はどうなさつたんですか、こんなにしょんぼりなさつて」と言つた。「あーはつきり言うけどね、私達がここへ来てから今日まで、あまりにも長いこと遊んでしまつた。それでたくさんのお金を見事に使いはたしてしまつてね。沖縄へ帰るにはどうしたらしいか、ここからでる」ともできずにこうして黙つてゐるんだよ」と女中に言つた。女中はまた「ああ、そうなんですか」と。今度はまた、「そうでしたら、あなた達が持つていたお金を返すことはできないがね。

たる金のー返さびらんしが。じこーに新しい絵があいびーぐとう。偉い絵があいびーぐとう。貴方なーんかいくぬ絵くうーびーるんきーやー、うり持つち船んかい、沖繩んかい帰いる場合ねー持つち行ちるんしぇー、すぐ相当な貴方なーたみんないん。また金ぬん元うあたる金ぬ入つちちやーびーぐとうや。くり持つち船んかいなー乗てい帰いんそーりり言る人ぬうたんりー。「あんやいびんなー、あんやんなーにへーやさやー、私にんかい私達んかいいいらすんなー」りちやぐとう。「くうーびんどー」りちやぐとう。「ありがとう。」「金の一ねーらんていんしまびき。船んかい乗いぬ時ん、すぐ乗していきりりち乗やーに行ちるんしぇー、何ん貴方なーんかい沖繩帰いるまでい絶対に不自由ねーらん。また幸福ぬるみぐいびんどー」り言たんり。あんさぐとう「はいありがとう」りち。

うぬ絵びかーん持つち、船んかい二人ぐーりー乗いくどーんばーてー、沖繩んかい行ちゆる船んかい。乘いくだぐとう、うぬ途中うてい船旅途中うてい暴風がうくりたんり。うくりたぐとううれー暴風ぬ場合に風えいしーる絵やいびーぐとう。暴風でーぬある場合ねー

ここに大変新しくていい絵があります。偉い絵があります。この絵をあなた達にさしあげますので、沖繩に帰る時はこの絵を持つて船に乗りさえすれば、あなた達に大変ためになります。またお金も元あつたお金が入ってきます。ですからこの絵を持つて船に乗り、沖繩へ帰つて下さい」と言う人がいたそうだ。「そうですか、ありがとうございます。私達に(この絵を)あげますか」と言つたからね。「さしあげますよ」と言つた。

「ありがとう」と。「お金はなくともよろしいですよ。船に乗る時も、すぐ乗せて下さいと言つて乗りさえすれば、沖繩に帰るまでに何もあなた達が困るようなことは絶対にありません。かえつて幸福がまわつてきますよ」と言つたそうだ。それで(二人は)「ありがとう」と(受け取つた)。

そして、その絵だけを持つて、二人で船に乗りこんだようだ。沖繩へ帰る船にね。乗りこんだら、その船旅の途中で暴風がおこつてしまつた。暴風がおこつたので、またその絵は暴風の時に、風を静める絵であるからね。暴風がおこつた場合にはそれを広げて下さい。

くりうち広ぎんそれ一、すぐ波静かないびんどり
言たんり、うりいーらする場合に。「はーありがたいやつ
さーやー」りちさぐとう。今度おうり聞ちよーべとう。
暴風がうくりて、船長やなーすぐ遭難うくちワツサ
イワツサイさぎーんり。「絶対心配やすな、私達がうぬ
考えする道具持つちよーぐどうや。私、私達がうぬ絵
広ぎーねー、波ん静か平生ぬもう静かな海んないんどー」
り言いたぐとう。船長や「あんやんなー、ぬぐわいつ
たーがうんぐとーぬ道具持つちよーんなー」りちやぐ
とう。「持つちょーびん」「とーとーなーあんしえー広
ぎてひとうらし」りちやぐとう。うぬ座うてい、かん
し絵広ぎたぐとう、さつそく波んいち、風んいつちさー
に平生ぬすぐなめらかな海なていよー、無事に帰いる
くとうんなてい。

うぬ船長やまたあぬ、「くぬ道具お私達んかい譲らん
なー、いつたーが言るうつさに買いさ、うれー売てい
きらんnaー」りち願たぐとう。「なーくれーなかなか売
いぐりさいびんどー」り言ちやしが。「あらん、くれー
なー私がぬ一番なー何かーましやぬ道具やぐとう、譲じ
ていとうらし」りちしちゃぐとう。「あんしえーなー、

そうすればたちまち波も静かになりますよと、この絵
をあげる時に言つたそうだ。「ああ、ありがたいことで
す」と受け取つていた、という話は聞いていたからね。
暴風がおこつたので、遭難しそうになり船長はもうあ
わてふためいていた。「絶対に心配はするな、私達がそ
れに対抗する道具を持つてゐるからね、私達がこの絵
を広げると、すぐに波もいつもの静かな海になるよ」と
と言われたからね。船長は「そうか、でもどうしてお
まえ達がそのような道具を持つてゐるのか」と言つた。
すると「持つてますよ」「ああそうちら広げてくれ」と
いうことになつた。そしてその場で絵を広げたら、さつ
そく波も静かになり、風もおさまりいつもの静かな海
になり、無事に帰ることができた。

この船長は、「この道具を私に譲つてくれないか。あ
なたたちが言う通りの値段で買うから売つてくれない
か」と願つたからね。「もうこれはちょっと売りにくいい
ですよ」と言つたんだが。「いいえ、これはもう私が何
よりも一番に欲しい道具であるから、譲つてくれ」と
言つた。「もうそうでしたら、そのようにしましょう」

あんやいびーていからあんるないびさ」りち、船長ん
かい売いんりぢやれー。またあぬ唐うでい、飲だい食
だいしちやぬ相当な金ぬ、ゆぬぐとうとうらさつて
るうん。うぬ船長から、とうらさつてい。うぬ金の一
またうがり、持つちよーたる金ぬ格りるあたいし買てい
よー、うぬ船長が買やーに沖縄んかい帰てい来。なー
うぬうつたー二人や貧乏な者るやたんりしが、財産買
たい建物、家あ造たいしち、非常にやさしい農家なた
んり。ほがらかな生活にん困らんよーい、あぬいい生
活なたんり。

と、船長に賣ることになった。すると、唐で飲んだり
食べたりした。たくさんのお金と同じくらいの金額を
船長から渡された。そして渡されたので、もうそのお
金も受け取つてね。前と同じ金額で船長が絵を買ひ取
り、沖縄に帰つて來た。もうこの二人は貧乏であつた
んだが、(そのお金で)財産買つたり、家を造つたりし
て、大変豊かになつた。生活にも困らない明るいよ
い生活をするようになつたそつだ。

採集 S 52・2・27 読谷村民話調査団第十班 〔山城悦子〕

31 モーアイ親方

話者 比嘉利吉(明治四十一年十一月二十日生)

翻字 長堂 加代子

あれはもう昔、内地の公事からあの、命令があつた
わけさ。

あれはもう昔、内地の公事からあの、命令があつた
らしい。

そして、そのモーアイ親方の親が非常に悩んでいるも
のを見て、「ぬーりちあんしとうるばていめーが」と言う

そして、そのモーアイ親方の親が非常に悩んでいるの
を見て、「どうしてそんなに悩んでいるのか」と聞くと、

だから、「かんかんしなー、でーじなとーおー」と言つたことで話したから、「うぬあたいんぐわーや心配しんそーなけー」りち。

そしてその日になつたから、わざわざ親にかわつて、モーイ親方が行つたわけさ。そうしたからもう、「ぬが、親がなしーやもーらん。いやーが来る」と、「たれーまに産むゆーしなていやいびんよー」「男ぬん産むゆーしすみ」という言つたからね。「あんしーねー雄鷄ぬ卵りしきーぬーやいびーが」「そうしたからもうむこうは負けてしまつて。

そして、なーーちえーまた灰縄、灰縄御用、それをもう板にその縄をのせて、焼いてしまつた。もうそうしたから灰縄なたるばー、灰の縄ができる。これはりつばな灰縄やいびーん。全部負けてしまつたさあ。でもむこうはどうとう負けてしまつて。

「なー、いやーやいつペー頭ぬでいきて、なー私かーい上やぐとう、いやーがましやし褒美きーぐどう何がましやが」「言つたから、「なー何ん望みやねーびらん、ただ一時しまびーぐどう、王様なちきーんそーれ」と言つたからね。そして言つ通りにもう、あなたの言つたからね。そして言つ通りにもう、あなたの言つたんだから、王

「こんな」んなでもう、大変なことになつてゐる」と話したら、「こんな」とぐらいで心配しないで下さい」と言つた。

その日になつたのでわざわざ親の代理で、モーイ親方が行つたらしい。そうしたらもう「どうして親は来ないで、おまえが来たのか」と聞かれると、モーイ親方は「急に産気づいて来れなかつた」と答えた。すると「男が産気づくことがあるか」と言われたらね。「それでは雄鷄の卵とはどういうことか」と尋ねると、相手は負けてしまつた。

そして、もう一つは灰縄、灰縄御用といつたら、その縄を板にのせたまま焼いてしまつた。そうすると、灰縄になつてゐるでしよう。りつばな灰縄ができる。それで相手は、とうとう全部負けてしまつた。

「もう、あなたは利口で私より上だから、あなたが欲しいものを褒美にあげよう。何がいいか」と聞くと、「もう何も望みはない。ただ一時でいいから王様にして下さい」とモーイ親方は答えた。そうしたら、もうあなたの言つ通りにしてあげると言つたんだから、王

ようにしてあげると、言ちるうぐとう、王様はおりてしまつて、モーイ親方は王様になつたらしくから王様の言う通り、皆やらなければいけない。あんさぐとう、あの沖縄の悪い書類があつたわけさ。内地にね。そうしたから、その書類を全部焼かしてしまつて、それからもうそれ焼いたから、うつびししまびーんと言つて王の位をおりてしまつて、沖縄に帰つてまた褒められよつたということさ。

あれはね、あの、こつちに立ち小便する者は、何円の罰金といつて書いた札が立つていたそうだ。それに、「うりせー効き目ねーびらん」りちさぐとう、「あんせー何りち書ちゅが」、「くまんかい小便すしぇーなー、打ち首ぬ罪なすんと書ちーねーなー、効果あいびーさ」と言つたから。打ち首ぬ罪と言つたら、もう昔は非常に大変さ。打ち首ぬ罪すんと、その立て札をしたから、それからはもう立ち小便する人はいなくなつたということさ。

たばこはよく吸うたわけさ、何回も。親から注意されて、「いやーあんしたばこ吸ちえーならん。一日に一吸ちなー吸き」と言われたから「あんさびーみ」と言つ

様はおりてしまつて、モーイ親方は王様になつたらしくいよ。そうしたら王様の仕事をやらなければいけない。そうすると、あの沖縄の悪い書類を全部焼かしてしまつた。それからはもう、その書類を焼いていしまつたので、もう王の位はこれだけでいいと思ひおりてしまつて、沖縄に帰つてまた褒められたということさ。

あれはね、あの、こつちに立ち小便する者は、何円の罰金といつて書いた札が立つていたそうだ。そしたらそれで効果がないですよ」と言つたから、「じゃあどうして書いたらいいのか」「『ここに小便する人は打ち首の罪にする』と書いたら、効果があるはずだ」と言つたからね。打ち首といつたら昔は非常に大変さ。打ち首の罪にするということでその立て札をしたら、それからはもう立ち小便する人はいなくなつたということだ。

(モーイ親方は)たばこを何回もよく吸つたらしい。親から「おまえはたばこの吸い過ぎだから、一日に一吹きだけにしなさい」と注意された。そしたら「そう

て、大きなキセルを作つてきーや。キセルを一巻きぐらいい入るキセルを作つて、それでもういつぱい詰めてそうしたからなー、うふ煙まちやーち。うぬ親あなーまた、「火事るいじとーがやー」りち行つたから、モーイ親方がたばこ吸つていたそうだ。「うんぐとーたばこ吸ちよーんあみ」と言つて叱つたから、「一日に一吸ちなーる吸きり言んそーちゃぐとう、親ぬ言しえー守とーびん」ということで。

これもね、「あのお父さんは下駄履きなさい」と言つた。お母さんは「草履履きなさい」と言つたから、で二人の言うこと聞かなければ親孝行にはならんからということで、片足あ草履くらんという話だな。

「火事なのかな」と行つたら、モーイ親方がたばこ吸つていたそうだ。「こんなたばこの吸い方もあるか」と叱られたら、「一日に一吹きだけにしなさい」と言われたので、親の言うことを守つています」ということであつた。

この話もね、「あのお父さんは下駄を履きなさい」と言つた。お母さんは「草履を履きなさい」とモーイ親方に話したら、一人の言うことを聞かなければ親孝行にはならないと思って、片足は下駄、片足は草履を履いたという話だよ。

採集 S 63・4・9 読谷ゆうがおの会（知花春美・村山友江）

注 モーイ親方 本名は伊野波盛平で毛氏八世。親方の位にあり伊野波親方と呼ばれ三司官職につき、知行高三百二十石都合四百石を賜う、同十月美御殿大親職に任せられる。

翻字 長堂 加代子

これはね、友達同志あの飲みに行くわけさー。それでその前に約束、「あまんじ焼きーる話すしんかい、今日ぬ飲み代出[じやしみらやー」ということを相談して、そして「何時に向こうに集まいるーやー」と言って集まつた。

そしてわざわざ時間遅くなしてき一勝連バーマー^注が「ぬがうんなげーなー」と言うたから「あーるく珍らしむんぬあてい、うり見じゅんりうんなげーやんれー」と。そしたから「ぬがぬーやたが」と言うて、もう相手に言われたから「あぬ、キーハガマかい飯炊ちゅし見じゅんりよー。なー、るく珍らさぬあんしるうんなげーなーやんれー」り言ちやぐとう。「あんし、うり焼きらんていなー」と言うたから「おまえ出し番だよ」、飲み代出させたといふこと。

あれはね、ある工事現場に請負師として行くわけさ。そしてわざわざ遅くなしてしまつて、「まあ、なぜそん

これはね、友達同志で飲みに行く時にね。その前に「あそこで焼ける話をした人に、今日の飲み代は出させよう」と相談した。そして「何時に向こうに集まろうね」と言って集まつた。

そして勝連バーマーはわざわざ時間に遅れて行つたので、(他の人が)「どうしてこんなに遅いの」と聞いたら、「非常に珍しいことがあつて、それを見ようと思つて遅くなつたんだよ」と答えた。「何があつたのか」と相手に聞かれたら「あの、木のハガマに飯を炊いているのを見るつもりでね。もうあまりにも珍らしくて遅くなつたんだよ」と言つた。「そしてそれは焼けなかつたか」と言つたら、「おまえの出し番だよ」と飲み代を出させたといふこと。

あれはね、勝連バーマーがある工事現場の請負師として行つた。そしてわざと遅くから工事現場へ行つた。

な長らく「りち、監督に叱られた。」な一今日やうぬ日など一るい、な一今日や月ぬ上がいかじり一きび一ぐとう」と言つたから、その監督さんはもう月や夜しか上がらんと思つてゐるわけさ。月ぬ上がいね一夜などりちよーるちむえー、やっぱり勝連バーマーというのは頭がいいから。

ちょうど十二、三日の月じゃなかつたかな。あれは昼上がるさあね。そして月上がつたから、「上がとーんむー、家かい帰いびらひー」と言つて、また先に帰つたということね。いつも相手は負けているということだな。

あれもまた、あのわざわざ別の人夫より自分のグループは後に行つて、誰しも近いところを取つたがるわけさ。両方どつて真ん中残つてね。あんさぐとうなー、勝連バーマーはその真ん中の方を請負つたわけさ。あんさぐとうなー、わざわざ人夫かいわゆるオーダー持たち、漏るようにして、それあいている所に皆土を漏らしてしまつて、相手は後なつたという話だな。

監督に「なぜそんなに遅いのか」と叱られた。「今日はこの日になつてゐるのか、もう今日は月が上がるまで働きますから」と言つたら、その監督は月は夜しかがらないと思つたんでしようね。月が上がつたら夜になつてゐると思つてゐるわけさ。やっぱり勝連バーマーは頭がいいから。

十二、三日の月であつたんじゃないかな。その時分の月は昼で上がるからね。そして月が上がつたので、「もう（月も）上がつてゐるし、家に帰ろう」と言って先に帰つたそうだ。いつも相手は、勝連バーマーに負けているということ。

勝連バーマーの人夫は、わざと別の人夫より遅れて到着した。誰でも近いところを取りたがるので、真ん中だけが残つていた。それで、勝連バーマーはしかたなくその真ん中の方を請負つたそうだ。それで勝連バーマーは、わざわざ破れたもつこを人夫に使わせて、破れたところから土が漏るようにして運んで、相手は後になつたという話。

注 勝連バーマー 尚穆王時代の人。前浜三良、一七〇四年に勝連村平安名に生まれ、浜徒（浜の行政責任者）をしていたので、勝連

バーマーと呼ばれた。後に勝連間切地頭代となる。

33 床柱の逆立て

話者 照屋 寛良（明治四十一年五月十日生）

翻字 国吉トミ

首里ぬ御殿殿内ぬ家普請に使ひる主え、名護ぬ親方とい
りち話いあしが、名護ぬ親方ああらんはじどー。首里
ぬある御殿殿内りちさんあれーならんさ。

大工使ひ、家普請やるふーじ。あんし、今、三時
茶どうか、十時茶どうか出じーしゃー。うりがサー
ビスぬ悪きたんりよ。うぬ大工んちやーなかい、うぬ
主人のーすでに考へていどううんりぐとう。「くつたー
や、大工すしえー、庶民級や、普段の一裕福おあらん
ぐどう、最後ないねー褒美取らしわるやどう。うぬ代
わい普段のーサービスおさんていんしむん」りち。

あんきーに、家や造い終て、すでに家ぬ祝ねー大
工んちやーむる招びてい、祝えやるふーじやしがう

首里の御殿殿内の家普請の主人は、名護の親方とい
う話があるが、名護の親方ではないと思うよ。首里の
ある御殿殿内といふうにしないといけないでしよう。
大工を使って家普請であつたようだ。今でも三時と
十時のお茶が出るさあね。大工さんに対するそのお茶
のサービスが悪かつたそうだよ。しかし、この主人は
すでに考へていたようだ。「大工」という庶民の人達は日
頃は裕福ではないから、最後に褒美をあげよう。その
代わり普段はサービスしないでおこうと」とね。

そうして、すでに家は造り終つて、新築祝いに大工
さんたち全員を招待したようだ。しかし、その前に、

ぬ前うてい うぬ大工ぬ棟梁やゆん怒みちさーい「はー
くまーなー、サービスぬ悪さぐとう、くぬ家や嘉例ねー
んぐとうさーひー。床ぬ一本柱や逆なでいたて立て
るやどう」りち、あんし、逆なでいたて立てーんりぐ
とう、うぬ主人の一分かとーんりー、逆なちえーんり
る事お。あんしが、何りん言らんるあんりぐとう、「確
かに私あ考えぬ通い なでいいちゅるはじやぐとう、
まじ文句お言な」りち、立ていらちるあんりぐとう。

すでに祝ぬ夜、酒ぐわー飲めー始まつて、舞やーん
始まつてから、うぬ棟梁やなー良心ぬ呵責に責みら
りやーい。御吸物蓋あきたぐとう、黄金入つてーん
りぐとう、家んじ子ぬちゃー、妻ぬちゃー嬉さしみり
りち、金どうやんりぐとう、あきてい見じやーいびつ
くりし。

うぬ、棟梁ん知恵の一あるばー。「くれーなーくぬ
床柱、替らんねーならん」りち。主人、嫌がらさんぐ
とうにし、さーんれーならんりちるやんりぐとう、く
れーばつペーとーたんり言いねー、なー企どーんりち
分からりーぐとう、「私あ舞いや、棟梁とうし、是非ティー
ン持つち、^住ティーンりしえー木い削る大工道具^{くどうぐ}」ティー

棟梁は怒つて、「もうここの家はサービスも悪いので嘉
例がないようにしよう。床の一本柱を逆にして立てよ
う」と考へて、逆にして立ててしまった。その主人
は逆にしてあることを知つていたが、何も言わなかつ
た。「確かに私が考へている通りなるはずだから文句も
言わないでおこう」と、立てさせてあつた。

そうして、その夜、酒も飲み始まつて、踊りも始まつ
てから、その棟梁は良心の呵責に責められていた。御
吸物の蓋を開けると、黄金が入つており、家に帰つて
から子どもや妻を喜ばせるためにお金を入れてあつた
そうだ。あけて見て、びっくりしてしまつた。

その棟梁も知恵はあるんだからね。「これは、この床
柱は替えなければならぬ」と思つた。主人に嫌な思
いをさせないようにしなければならないので、これは
間違つていたといえれば企みだと分かつてしまうので、
「私は棟梁として、是非ティーンを持って踊らなけれ
ばならない」と（踊りをすることにした）^ヘティーン

ン舞いしわるやる」りち 「とーあんしえー気張れー」
りち、ティーン舞いしえーるふーじや。

あんさぐとうなー酔とーる真似し、過たるふーじー
さーなかい、ティーンさーにうぬ床柱、だてーん切つ
かじたんりよ。醉とーる真似し、あんさーい主人ぬん
かい、「くれー過あやま」とーびーさー。なー明日あちゃから立たてい替け
しうさぎーびーぐどう、くねーていきみそーり」りち、
「いいとー、良い氣張ちばいさんどー」りち、うれーあん
しゃたんり、とーうりんうつさ。

というのは木を削る大工道具だよ」「そうか、じゃあが
んばれよ」とティーンを持つて踊つたようだ。

それで、酔つたふりをして、過つたようにみせかけ
て、ティーンで床柱を大きく切りつけてしまつた。酔つ
たふりをしてね、そして、主人に、「これは過つてしま
いました。明日にでも立て直してあげますので、どう
か許して下さい」と言つた。「あゝよくがんばつたね」
と、こんなことだつたよ、はい!これも終わり。

採集 S 52・2・27 読谷村民話調査団第十六班 〈照屋寛吉・知花利枝子〉

注 ティーン 手斧の一種。柄の長さ五十センチぐらい、刃が鋸のように柄と交差する方向についているもの。

34 肝きも 試ため し

著者 山 城 盛 吉 (明治四十四年六月六日生)

翻字 村 山 友 江

たとうれーあぎたーくぬ人達しんかてー、たとうれー墓はかか
い、墓はか、たとうれーなー接司あじばか墓はかりしとーゆぬむん。す

たとうれーあぎたーくぬ人達しんかてー、たとうれー墓はかか
い、墓はか、たとうれーなー接司あじばか墓はかりしとーゆぬむん。す

たとえばそこに墓、接司墓と同じような墓があつた。
もう真暗で恐い所にその墓はあつた。その(墓のある

ぐ暗しんやん、なー恐らしい所、墓。うまんかいマジ
ムンぬ立つちゅん、何ぬ立つちゅんり言るとくるん
かい。いいるんしえーうまんかい行ぢやーなかい、う
まから何がら取つていちゅーんりがらーりる話い。

うりたとうれーなー墓かい、マジムンぬうまー立つ
ちゅん、立つちゅんり。やぐとういやーが行ぢーすみ
私がー行ぢーすみりやーにかいしちやぐとう。あんさー
にかいたとうれー、私が行ぢゅんり言ふーじーぐわー
しちやぐとう。あーくれー、うまーなーいつペー恐る
しい所やぐとう、必じうりがー行ぢゅんどーりいやー
なかい。

あんさーにかい夜中、うれー行かぢえーならんぐとう
り、ちやーがらさーなかい考えやーなかいしち。いつ
たーうつさー白着物また着やーなかい、墓ぬ上んじ立つ
ちよーるふーじ。立つちやぐとう、また本人や牛、白
牛すんちやーに、かんし行ぢえーるふーじ。

行ぢやぐとうなー上んかい、墓んかい、上んかい立つ
ちよーる人達や負きてーならんりちる立つちよーしが、
本当ぬ化き物ぬちやーぎんりち、牛ぬ白牛やしえーやー。
人お、かんしなー連ち歩ち歩ちし行ぢやぐとう。うま

場所には)、妖怪やら何やら出ると言われていた。いわ
ばそこに行つて、そこに飾られている石を取つてくる
とか、また他の何かを取つてくるとかといふ話である。
たとえばもうその墓には、妖怪が出るよといふこと
であつた。だからおまえはそこに行くことができるか、
私は行くことができるよといふ(賭であつた)。それで
は私は行けるよといふうな話になつた。するとそこ
は大変恐いところであるが、その人は必ず行くことが
できるということであつた。

そして夜中になつて、これは行かせてはいけないと、
どうにかしないといけないと考えた。(そうして)その
人は白い着物を着けて、墓の上に立つていたようだ。
そこに立つていたんだが、またこの人は白い牛を引き
連れて行つたようだ。

もう墓の上に立つてゐる人はね、負けてはいけない
と立つてゐるんだがね。その白い牛を見て、本当の化
け物が来るものと思つてゐた。その牛を連れてゐる人
は、だんだんその墓に行つたらね。もうそこに立つて

んかい近ゆてい墓ぬ庭あ行ぢやぐとう。なーうまんかい立つちよーる人お、すぐ、にーすりてい下んかい落ていてい死じやんり。

いる人達は、すぐにのびてしまつて下に落ちて死んだ
そうだ。

採集 S 52・8・16 読谷村民話調査団第七班 〈我如古幸蔵・山城悦子〉

35 肝 試 し

話者 波 平 蒲 助 (明治四十二年八月十六日生)

翻字 津波古 米 子

意地勝負ぬ、賭てーなー、あまんじ頭取ていちーす
み。いやーがー取いが行ちーさん、我ー取ていちー
すん、賭せーるばーてー。ならんりる人お、先なてい
墓んかい行ぢやーにかい。うまんかい座ちよーていや。

意地勝負で、あそこへ行つて頭を取つて来ることが
できるかという賭の話だよ。あそこで（死者の）頭を
取つて来る賭をやろう。貴方は取りに行けないだろう
私は取つて来れると、勝負をしたそうだ。できそうに
もないと思つた人は、一足先に出かけて行き、墓の所
で座つていたそだ。

また、ないんりる人お、牛持つちぢやーにかい、牛
とうまじょーん來なかい、ないんりる人おや。ならん
りる人おあまんかいうとーてい、牛持つちぢやぐとう、
ぶちくんし落ていていよー。あんしうれー勝ちよーた

また、できるという人は、牛を引っぱり出して来て、
牛と一緒に出かけた。できないという人は、座つて待つ
ていた。そこに牛を持って来たのでできないと言つた
人は氣絶してしまつた。それで、牛を持ってやつて来

んり、牛持つちちえーる人ちよかお勝つちょーたんり。

た人が勝つたそだ。

喜屋武ミーぐわー

話者 比嘉利吉(明治四十一年十二月二十日生)

翻字 島袋 喜美子

喜屋武ミーはねえ、もうあれが気合を入れたら非常に強ばーだつたわけだなあ。

馬ぐわーは、やな馬ぐわーだから、あぬ途中の坂で上いかんていーぐわーし後から馬車がきたから「片じきり」しよう、後からあびやーしちゃぐとう「あんしぇーあんすみ」と言つて、馬車の後を引つつかまえてそばにどけたそうだ。そうだから後の人あとひとはピックりして途中とちゆう、みんなでおして、その坂さかをあげたという話。それはね、座喜味に馬車持つちやーしておじいさんがいたが、その人がよく話していた。

米倉こめくらに行つて、ある馬車持つちやーがそこに馬車を止めてあつたわけ。そうしたから「うぬ馬車片ばしゃかたぢきてどうらさんなーヤツチ」と言つたから「片かたぢきていい積のめえ」言われたからさあ、その喜屋武ミーが米俵の上うえにのぼつて、杖いざなで米こめをかけて投げたからさあ、投げて自分の馬車に落おちとしたから、「ぬーぬみーにがうらんならーわからんなどーさ」という話は座喜味のおじいさんから聞いた話。

屋良の青年におわれた時ときもあると、それで女おんなは脇わきんかいくわーさーに石垣いし垣から石垣いし垣にとびこえてどうにもならんかつたと、とうとう屋良の青年せいねんはあきらめてそのまま逃はなげてきたという話。そのぐらいの力持ち。

注 喜屋武ミーぐわー 本名は、喜屋武朝徳。チャンミーぐわーとあだ名され、大正、昭和にかけて空手の名手として有名であった。

首里儀保町にある喜屋武殿内の三男で、三〇才の頃読谷村比謝江南橋通りにある本永家の養子となり、嘉手納にあつた沖縄県立農林学校で、空手の教官として六カ年務めた。昭和二〇年九月、七七歳で石川市石川にて死亡。妻は屋良の林堂家の娘カマド。

37 本部サールーと喜屋武ミーぐわー

話者 比嘉利吉（明治四十一年十二月二十日生）

翻字 長堂 加代子

本部御殿ぬサールーといふのは、あの、本部だから山國の人だな。それで、薪取りに行く人は、もうそれにみんな捕まれて、薪も道具も取られてしまつて。

そうしたからもう、「くれー喜屋武ミー連てい行かんねーならん」と言つて、喜屋武ミーを連れて行つてわざわざもう松の木に登つて、松の枝をパチパチ折つていたわけさ。「今、下りていくー」と言つて、やな本部ぬサールー^注や下で呼んでから。「もう少し待ちなさい。なーだ枝取らんむん」言つて、わざわざ企んでいるから、喜屋武ミーはね、それをもう頭を下なしてガラガラ猫のようになつて降りて來てさ。すぐ肩に飛び乗つてしまつてす

本部御殿のサールーといふのは、あの本部の人だね。そこに薪を取りに行く人は、みんな本部サールーに捕まえられて、薪も道具も取られてしまつたつて。

そうしたらもう、「これはもう喜屋武ミーを連れて行かなければいけない」と思い、喜屋武ミーをそこに連れて行つた。そこで喜屋武ミーはわざと松の木に登り、松の枝をパチパチ折つていたらしい。「今、降りてこい」と言つて、本部サールーは下で待つていた。「もう少し待ちなさい。まだ枝は取つてないんだよ」と言つてね。喜屋武ミーはわざわざ企んでいたんだからね。頭を下にしてガラガラと逆さまになつて降りて來た。そして

ぐ首切れて、それで、本部のサールーが滅んだという
はなし。
話。

すぐ肩に飛び乗つてしまつたので、(本部サールーの)
首は折れてしまい、そこで本部サールーは滅んでしまつ
たという話。

採集 S 63・4・9 読谷ゆうがおの会(知花春美・村山友江)

注 本部サールー 本名本部朝基(一八七一年～一九四四年)武人。本部御殿家の本部朝茂の三男として、首里赤平に生まれる。自己流の空手修行に専念し、その後、松茂良興作に師事した。京都で拳闘大会に飛び入り出場し巨漢の外人を倒した逸話がある。

38 佐久川三郎

話者 比嘉利吉(明治四十一年十一月二十日生)

翻字 島袋喜美子

あれは術をかけると聞いている。

昔は、あの大掃除があつたさー。大掃除。年に二回、
そして佐久川三郎、わざわざもう掃除をしなかつたわ
け。そこには巡査はつきものだつた、やー。「いつたー
掃除えしちえーねーらん。かんしぇーならん」と言つ
て巡査から叱られたから、「ひひぐわー待つちよーみそー
れー、今さびいぐどう」と言つて術ひつかけてしまつ
たといふ話。

あれは術をかけると聞いている。

昔は、あの大掃除があつたよ。大掃除。年二回、そ
して佐久川三郎は、わざわざもう掃除をしなかつたわ
け、そこには警察はつきものだつたよ。「あなたは掃除
はしていないが、これではいけない」と言つて巡査か
ら叱られたから「少し待つて下さい。今しますから」
と言つて術をかけてしまつてね。巡査に。そして一日

てさー巡査に。そして一日中そこに立っていたという

話。

中そこに立っていたという話。

採集 S 63・4・9 読谷ゆうがおの会（知花春美・村山友江）

注 佐久川三郎 読谷村比謝の出身で実在した人物。

39 田 場 大 工

話者 比嘉利吉（明治四十一年十二月二十日生）

翻字 島袋喜美子

田場大工といふものは、非常に細かい大工だつたわけだから、もう午前中道具ばかり研いでしまつて。

それで雇つた人が、くぬんで一頼みねーなー大変でいち、「なーいやーや頼まんぐとう家んかい帰り」と言われたから。クサビを作つて二つ合わせてそして縄でくびつて水の中に入れてあつた。それを田場大工が帰つたから、その家ぬ主が取つてみたから中がぬれなかつたといふ事なんだ。そのくらいの大工だつたといふ事だ。

田場大工といふ人は、非常に（手が）細かい大工だったので、道具を研ぐのに午前中かかつてしまつた。

それで、雇つた人が、この人を頼んだらもう大変と、「もうおまえはいいから家に帰りなさい」と言つた。その人は、（帰るときに）楔を作つて二つ合わせて水の中に入れてあつた。田場大工が帰つた後に、その家の主が取つてみると、中がぬれてなかつたそうだ。それほど細かい大工だつたといふことである。

注 田場大工 へたな大工、しろうと大工など、「田場」という名の昔の名工に由来する語で、へたな大工を皮肉にいう語。

40 恐いもの比べ

話者 山城盛吉（明治四十四年六月六日生）

翻字 村山友江

兄弟三人うとーてい、親達ぬ話いてー。言いるん
しえー、一番恐るしむの一何やがりち、話いしちやぐ
とう。

言いるんしえー、たどうちー兄あ、盜人さりーし恐る
しむん。盜人さりーねー、あるつさむる盜まつてい、
金ぬんむるねーらんないぐとう。

また一人がー、盜人やか私がー火いじーしる恐るし
むんり、火。

あんさーに親ん座ちよーていなたぐとう。親の一私
がーあんねーあらん。一番子供達ぬそー魂いらんし恐るしむ
んり。あんさぐとう、そー魂いらんり言ねー家んうち

兄弟三人がいるところで、親達の話である。みんな
が一番恐いものは何かという話をしたからね。

すると、兄は盜人に入られるとあるだけすべて盜ま
れて、お金もなくなるから、盜人が恐いと言った。

また一人は盜人よりも火事が恐いと言つた。

そして、そこには親もいたからね。親がは（一番恐
いのは、盜人や火事）ではない。子供達がしつかりし
ないことが恐いことだよ。（子供達が）しつかりしない

売^うい、また財産^{ざいさん}ぬんうち卖^うていむるねーらんないぐどう、一番^{いちばん}そー魂^{たま}第一^{だいいち}どーりる話^{はな}。

採集 S 52・8・16 読谷村民話調査団第七班 〈我如古幸藏・山城悦子〉

41 堀湯^{あかゆ}は腹^{はら}薬^{ぐすり}

話者 照屋 寛良 (明治四十一年五月十日生)

翻字 国吉トミ

ある人ぬよ、年寄ぬ、馬喰^{ばくろ}すんり田舎^{いなか}みぐとーるふーじや。あんさーに、家^やぬ後^{くし}んかいみぐたぐとう、木^きい切^ちらつとーたんりよ。

あんするうちねー、うまぬ家族^{やくぞく}ぬ腹^{わな}にじーしえーるふーじ、急に。うぬ人^{ひと}お知惠出^{じんぶん}じやさーい、「いつたー^ーや、家^やぬ後^{くし}から木^木い切^ちつちえーぐとう、くれー木^木ぬ精^{せい}ぬかかいyanどー。急^{いそ}じ豚^{うわ}あ^ん出^だじやち殺^{しえ}ー」りち、「あんしえー、豚^{うわ}ぬ頭^{かぶ}、飾^{かざ}りわどう治^いる」りち。うれー豚^{うわ}ぬ頭^{かぶ}、豚^{うわ}あ^ん出^だじやち、殺^{しえ}ー、頭^{かぶ}、飾^{かざ}てーしが治^いるわけーねーんしえーや。

あんさーい、うぬ人^{ひと}おなー、あたまに感^{かん}ぬあぐどう

ある年寄りが、馬喰のために田舎をまわっていたようだ。それで（途中、ある人の）家の後にまわってみたら、木が切られていた。

そうしているうちに、そこの家族の（一人が）急に腹痛を訴えた。その人は知恵を出して、「あなたたちは、家の後の木を切つたから、これは木の精のたたりだよ。急いで豚を出してつぶしなさい。豚の頭を飾らないと治らないよ」と言つた。豚の頭、豚を出して、つぶして、頭を飾つても治るわけがないさあね。

しかし、この人は感のいい人であつたのでね。昔の

や、あん言ちえーる人お。沖縄ん人おなー、昔え汚りかーがりし、汗えダクダクやぐとう、脇ぬ垢から股ばしぬ垢、むるひにてい取やーい、だてーん作ていよ。

「とーくり飲ましー治いくとう」りち、ぬる湯うかきてい、ぶとうないそーし飲まちやぐとう、すぐ全部あぎとーるふーじや。体ぬ毒や。あんさーい うりじり止までい、あんきーい、うににから沖縄んかいや、脇垢丸薬りぬ言葉ぬ出じとーぬばー。

脇薬、丸薬、くれーなー、はつきり今やていん効ちゅんり、てーげーぬ人お。うりとうマルチャぬ垢、古マルチャぬ垢、今あマルチャあなー、とうーちせつけんかきてい、洗剤し洗やーなかい、マルチャぬ垢おねーんしが、昔ぬマルチャあ包丁しかかじーねー、トーマーミーぬみーなー、すぐあつという間に出てーぐとう、とーあり、あれー脇薬、丸薬ぬさくまでー効かんしが、マルチャぬ垢おなー 完全にちゃんぐとうーぬニコリン飲どーしん 命えはつきり医者あかからんよーい止みーんりちやぐとう うぬ脇薬、丸薬ぬいわれやるばー、くれー、とーうりんうつか。

沖縄の人は、いつも汚れていて汗をかいていたので、脇や股の垢をこすって、ひねつて（丸めて）たくさん作つた。「さあ、これを飲ますと治るよ」と、その丸めた垢にぬるま湯をかけて、ブクブクしていのを飲ますと、全部吐き出してしまつた。体の毒はね。そして、すぐに腹痛は止まつて、そのときから、沖縄には脇薬、丸薬という言葉が出たそうだ。

脇薬、丸薬といるのは、今でもだいたいの人には効くそうだよ。それから、まな板の垢、古いまな板の垢、今はまな板は、いつもせつけんかけて、洗剤で洗つているので、まな板の垢はないが、昔のまな板は包丁でこすると、あつという間にそら豆の固まりほども垢が出てよ。あれは脇薬、丸薬ほどは効かないが、そのまな板の垢はニコリンを飲んでいても完全に命を取り止めることができよ。これが脇薬、丸薬のいわれである。さあ、これもそれだけ。

翻字 村山友江

今ひょうたんりーしがや、あれーチブルりんいんよー、チブル。たとれームヌアカシェー、たとれーうぬ人ぬチブル、言いるんしぇー、いやーが取ていちーうーすみ、私が一取ていちーうーすみり言ち、話いしちゃぐどう。

私が取ていちーうーさん、私が一取いんりぬふーじーしゃぐどう。うぬ人ぬ家ぬなとーぬチブル、あんし家んかい持つちちーしちやぐどう。「うれー人ぬチブルやあらん」「くれー私達家ぬむのーあらん、人ぬ家ぬむんから持つちちよーる、人ぬチブルるやるよー」り、ぬーり言やーに。

今ひょうたんね。あれはチブルともいうよ。たとえばある人のチブル（頭）を、おまえに取つてくることができるか、また私が取つくることができるかといふ話であつたらしい。

そうして一方がは取つてくことができない。また一方がは取つてくことができるということであつた。そこでこの人の家に実つてているチブルを持つて行つた。すると、「人の頭（チブル）と言つたんであつて、これは人のチブル（頭）ではない」「これは私の家のものではない。人の家から持つてきたので人のチブルだよ」というような話があつた。

著者 照屋寛良(明治四十一年五月十日生)

翻字 村山友江

あんちゅか知恵の優りとーんれー思ん人んかい、金ぬ
力さーい命令さーなかい「私にんかいなー、飽りるか
話い聞かちとうらしーねー、いやー褒美きーん」りち。
有名な人ぬ金持ちぬ、うりん有名、聞ちゆる人ん有名
やしが。私さくまでー知能秀りとーねーん、知能試す
んりち、話いしみてーるふーじやーさい。

あんさー「私にんかいなー、私が飽りーるえーか、
いやーが話い聞かすらーなー褒美ちやつさやていんきー
ん」りち、あんし始みーびらりち。
「いえーさいだんな、通堂んかいしたたか蟻ぬ集ま
とーびーしが。通堂ぬ桟橋とーてい、なー綱し蟻おーち
なーーちなー束てー、束てー船んかい積しーし、束てー
船んかい積しーしなー、うぬ蟻や束てー積ち、束てー
積ちなたぐどう、船んかい。なーうりびかー言返さー
やぬふーじ。後お飽りてい「なーしむさ」りち、褒美
いーうちやんり。

あんまり知恵のありそうでない人に、金の力で命令
をして「私にもう飽きるほど話を聞かせてくれたら、
おまえに褒美をあげよう」と。命令した人は有名な金
持ちであり、また聞いた人も有名であつたようだが、
(命令した人は) 私ほどは知能が秀れていないだろう
と、知能を試すために話をさせたようだね。

そうして「私が飽きるほど、おまえが話を聞かせる
んだつたら、もういくらの褒美をあたえよう」という
ことで始めたようだね。

「あのねだんな、埠頭にたくさんのが蟻が集まつてい
るんだが。埠頭の桟橋で、もう縄で蟻を一匹ずつ束ね
て、束ねて船に積んで、また束ねては船に積んで、そ
の蟻は束ねては積み、束ねては積みしたから、束ねて
は積みしたからね、船に」もうこのことをくり返し言
い続けていたようだ。後は飽きてしまつて「もういい
よ」と、褒美をあたえたそうだよ。

「なーいやーやなー、私にんかい話い飽りらち」り
ちえー、我ぬたたらんしえー。自分くるる始みたくとう。
私が飽りるやか話いしーるやぐとう、命令さつたしえー
別話いしーねー、「ありんしえー、くりんしえー」り言
やりーぐとう、なー同ぬ話い。「蟻お腹束ち上^あぎてい
降るち、上^あぎてい降るち」りち、かんるやたんりぐとう、
あんさーなかい、飽りてい負^まきたんり。

「もうおまえは、私に話を飽きさせて」と言つたら、
面目がないからね。自分で言い始めたことだから。私
が飽きるほど話をしてくれと言つたものの、その命令
された人は知能が秀れていた。もう別の話をすると「あ
れも話しなさい、これも話しなさい」と言われるから
もう同じ話だけ。「蟻の腹を束ねて上げて降ろして、上
げて降ろして」と、そういうふうに話したので（命令
した人は）飽きて負けてしまつたそうだよ。

採集 S 52・2・27 読谷村民話調査団第十六班 〈照屋寛信・知花利枝子〉

44 高名の鼻きき

話者 山城盛吉（明治四十四年六月六日生）

翻字 島袋智子

あぬ、金持人ぬ長男とうやー、また貧乏者ぬ長男
とうぬ話や。

金持ちの長男と、貧乏人の長男との話ね。

あんさーにかい、金持人ぬ長男とう貧乏者ぬ長男
とう、あんしいつペーいい友達ぐわーやたんり。やん
なたぐとう、なー、うぬ貧乏者りしん、錢の一無んしえー

この金持ちの長男と、貧乏人の長男とは、とても仲
の良い友人であつた。貧乏人の息子は、お金を持つ
ないでしよう。その金持ちの友人に、「ねえ、遊びに行

やー。あんさーにかい、うぬ金持人ぬんかい、「りか遊びーが、遊びーが、遊びー」りち言じやぐとう、まーんかにん「おー」りち行ぢえーるふーじよ。うぬ貧乏者ん。

あんさぐとう行ぢやぐとう、うぬ貧乏者ん、いんしえーねーらんあい、ちやーすがやーりちしちゃぐとう。うぬ金持人ぬ長男が、「私たーや黄金ぬ床んかい飾らつていあぐとう、うりまーぬまーんかいかんし隠みーんるんさー、いやーきーなかい當ていやーなかい、「まーんかいあいびんどー」りち、また、「私たー親から錢のーいーりよーやー」りち、うぬ金持人ぬ長男とう、貧乏者ぬ長男とう、話しえーるふーじ。

しちやぐとう、なーくぬ貧乏者のー、錢のーねーんなたぐとう、「あんさー、あんすんてー」りち、しちやなかい。うぬ金持人ぬ、床んかい飾らつとーる黄金、へなーうれーなー自分なーがー黄金りちやんてーん、ちやんぐとーる黄金やらー分かいやさんばーてーー黃金、いーぬんしえー庭ぬ、いーぬんしえー穴掘やーんかい隠みたぐとう。

なーうれー、「ねーらんどー、ねーらんどー」りち、

こう、遊んでこよう」と言ひ合ひ、どこにでも、「はい」と一緒に行つていだようだね。その貧乏人も。

そうして一緒に行つたら、その貧乏者はお金はないんだから、どうしようかと考えた。するとその金持ちの長男が、「私の家の床の間に、黄金が飾つてあるから、それをどこに隠しておくから、おまえがそれを当てて、『どーぞ』にあるよ」といつて、私の親からお金をもらうといいよ」と、金持ちの長男と、貧乏者の長男と話し合つたようだ。

そして、この貧乏者は、お金はないんだから、「それじゃあ、そうしよう」ということになつた。その金持ちの家の床の間に飾られている黄金（その黄金というのは、自分はどういうものかよく分からないが）その黄金を庭に穴を掘つて隠しておいた。

すると、「黄金が無いよ、無くなつているよ」と大騒

騒動しちやぐとう。なーうぬ金持ん人ぬ長男え、「私あ
友達んかいいつペーいい見通しーぬうぐとう、あんう
りあかするんさー、錢くいんそーりよー」りち話いし
ちやぐとう、「うりぬあかちするむんさー、錢くいーん」
りちしちやぐとう。

うぬ貧乏者、うまんかい来らちやーなかい、なー
話い聞ちるうぐとう。来ぐとう「いやーが明かすらー、
ちやつあちやつわ、錢いーらすんどー」りちさぐとう、
「おー」りち。あんさーにかい、うぬ貧乏者ぬ「まー
ぬまーんかい埋みらつとーびぐとう、いーんしえー、
くまぬ家庭ややー、いーんしえー、徳ぬ神ぬもーやー
なかい、うぬ黄金え外んかい出じやすんりしちやしが
いんしえー、徳ぬ神ぬ守んそーなかい出じやしーやしー
さん。なやーなかいうぬ、まーぬ庭ぬまーんかい、か
んし穴掘てい、埋すていいちかー出じやすんりし見ー
とーびーさー」りち、話いしちやぐとう。「ああ」りやー
なかい、あきていんちやぐとう、またうまんかいあた
んり。あんたぐとう、家んかい持ちぢやれー、持ち
ぢやれーまた、うぬ錢ぬんだてーんいーやーなかい、
また遊びーが行ぢえーるふーじーよー。なーたー人やぐー

ぎになつた。そこで金持の長男が、「私の友人に大そ
うな見通しがいるから、それを彼が当てるんであれば、
お金を与えて下さいね」と、話をしたら、「そいつが、
搜してくれたならお金をあげよう」ということになつ
た。

その貧乏者を、そこへ呼んだが、(その貧乏者は)す
でに話は聞いているんだからね。「おまえが捜し当てら
れるものなら、いくらいくらお金もあげよう」と言つ
たら、「はい」と答えた。その貧乏者は、「どこのそこに
埋められています。いうなれば、この家庭には徳の神
がいらっしゃって、その黄金を外に出そうとしていた
が、徳の神がお守りになつて、持ち出すことができな
かつた。それでこの庭のどこそこに穴を掘つて、埋め
てあり、いつかは持ち出そうとしていると、見えてい
ますよ」と話した。「ああ、そうか」と掘つてみると、
その通りそこにあつたそうだ。そして、家に持つて
行って、お金をたいそうもうらい、遊びに行つたそだ
よ。もういつも二人は一緒になつてね。

なでい。

遊び一が行き行きするうちなかねー、行ぢやぐとう、
あんに一かに一するえーかねー、なーあまからん、く
まからん「いつペー見み通とお」しぬうんりー、うんりー」し、
なー話はない評判ひょうばんぬ聞きかりてーるふーじーよ。

なー、うり出いだしやちやぐとう嘘うそぬみーるやしが、あ
んさぐとう、後あとおたとうれーなー、侍さむらいえ王様おうさまりち考かげー
ねー今いまなー、あがたー沖繩おきなわりーねー、首里しゆり城じゆうてーやー、
首里しゆりぬ王おうさま。王様おうさまぬ病氣びょうきしち寝ねんでいめーるふーじよ。
しちやぐとうなーあまから、使つかえやらさーなかい、う
ぬ貧乏者へんすしぬ所ところんかい。うんぐとううんぐとうーし、見み通とおしやんしえーんりち、いーえーぬちやれー、くまん
かい。いーぬんしえー「王様おうさまぬ寝ねんでいめーぐとう、
もーちとうらしんそーり」りしちやぐとう。なー分わか
らんるあいさいやー、分わからんしがなーうんとうし
ちやぐとう。

なー分わからんどうあぐとう、ちやーすがやーりち、
またうぬ金持きんぢ人ひとんかい聞きちーがちょーるばー、うまん
かい。来きくとう「あらん、ちやーんねーんさ、行いぢくわー」
りち、ただ話はないしきーるふーじ。しちやぐとうなー行い

(その二人が)遊びに行き通とおううちに、そうこうし
ているうちに、もうあちらからも、こちらからも「た
いそな見み通とおしがいるそだよ」といつて、その話が
評判ひょうばんになつていつた。

もう、嘘うそをついたわけだが黄金こがねを搜くし当てたからね。
また、侍さむらい、王様おうさま、と今で考えれば私たち沖繩の首里
城の王様おうさまが、病氣びょうきになり床に伏せていらしたそうだ。
そしてついには、首里城からその貧乏者へんすしの所ところに使いが
來た。評判ひょうばんになるほどの見み通とおしであつたので、「王様おうさまが
病氣びょうきで床に伏せていらつしやるので、見みに来て下さい」と、言いわれた。

でも何も分からぬんだから、そういうふうに(友
達同志で嘘うそをついてやつたことなので)分からぬん
だから、もうどうしたらいいのだろうと、またその金
持ちの友人の所ところへ聞きに行つたわけだ。そこに行くと、

かんねークビるない、また行ぢゃんて一分からんるあ
い、しちやぐとう。

「だいじょうぶだよ、まず行つてごらんなさい」と、
ただ励ますのみだつた。それでも、行かないと打ちク
ビにされてしまふし、行つたところで分かるはずがな
いしね。

よいよい、かんし行ぢやるえーかなかいや、なー首
里城ぬすばんかい行ぢやるえーかなかいや、くぬクム
イから、ハブぬ、クムイぬ側から化きて來たんり。
来んなたぐとう、うぬハブぬ化きて來なかい、「なー
や、何りぬ見通しるやみしぇーるい」りち言ぢえーる
ふーじ、「いー、あんやん」りち話いしちやぐとう。

きーんかいしちしちやれー、うぬ「あんしぇー私あ
話や、私ねーくぬ王様ぬ家ぬ上んかいすくまーなかい
や、すくまーなかい、何十カ年ねーかうまんかいすく
り、王様ぬ物ぬ鉢かり私ねー生ちちよーぐとう、私あ
話いしぇーとうらすなーり、うぬハブぬ言ぢえー
るふーじよ。化きやーなかい。言ぢやぐとう、「いー分か
とーん」りち、ただ通いで行ぢえーるふーじ。

そうしたら「それじゃあ私の話はね、私は王様の住
んでいる所の天井に住んでいて、何十カ年間そこに住
み、王様のおこぼれを食べて私は生きているものだが、
私のことは話さないで下さいよ」と、そのハブは化け
て、言つたようだ。そう言つたから、「はい分かつてい
る」とその貧乏人はただ通つて行つたようだ。

行ぢやぐとうなー、うぬ王様りしぇーなー、たとう
れーうぬ人ぬ來し待ちかんていーしなー、すぐ「痛ん
どー、痛んどー」しそうケーリンケーリンしんしぇー

行つてみると、その王様は、この人が来るのを待ち
かねていて、「痛い、痛い」と転がつていたそ�だよ。
そうしてこの人が行つてみたら、(その人はもうすでに)

るふーじーよ。そーしがうぬ人ぬ行ぢやぐとう、なーうぬなーうまから行ぢゆるえーかなかい、化きやーなかい、ハブぬ、鉢え取とーし分かてい聞ちよーしえーや。行ぢやぐとう、治やーなかいしちやぐとう、「うんぐとううんぐとうしやんしえーべとう、なーさーなかい治ちとうらしんそーり」り、「言ち話いしちやれー、「うん、うんぐとう、うんぐとうさーなかい、につたー家ぬ上んかい、いーしえーハブぬ化きやーなかい、化きやーなかい、なー王様ぬ食物ぬ鉢かりどううり王様あ病氣しちめーべとう、ぬーんうち病氣えねーらん」りち、話いしちやれー、うぬ人夫出じやさーなかい、家ぬ上かち壞さーなかい、うぬハブ、すくろーし取つたぐどう。なーうにーからー、うぬ王様あ病氣え治さーなかい。

あんさーなかいさぐとう、うりからーなー、また、うぬ王様ぬうぬ貧乏者かい錢の一だてーんくいーんそーなかい、いーぬんしえー、うぬ貧乏者ぬん金持人んかんし同ぬたきなやーなかい、まんじょーいまんじょーいかんし遊だんりる話い。

また、うぬユタリ注しえー、たとうれー、生まりか

途中でハブに会い、ハブが王様のおこぼれを食べていることは聞いて知っていたんだからね。行つてみると、「そんなことでいらつしやるから、あなた様で治して下さい」と話したら、「そういうことであなたたちの家の上で、ハブが化けて王様のおこぼれを食べているので、王様は病気になられているのだから、何も身体の内には、病気はかかるてない」と話した。そうして人夫を出して家の上を取り壊して、そのハブが巣くつているのを退治したので、もうそれからは王様の病気は治つた。

それからもう、また王様もその貧乏者に、お金をたくさん与えられ、その貧乏人も、金持ちもこうして同じようになり、いつもいつしょに遊んだという話だ。

らユタないむのーあらん、たとうれー自分ぬ理屈さー
なかいうまんかにん、くまんかにん入つち行ちるんしえー、
いーれーなんくるうまんかい入つち行ちる家庭ぬ習
慣さーなかい、ユタリしえーむつちゅんりぬ話はない。

なれるものではなくて、自分の理屈によつて、あれこれと、うまくいくんだよ。いえば自然に入つてくる、この家庭の習慣によつてユタというものはなれるのだそうだ。

採集 S 52・2・27 読谷村民話調査団第十班（山城悦子）

注 ユタ 沖縄本島におけるト占を專業とする坐女。ときたま、男性もいる。与那城村屋慶名はユタヒロとして知られている。新築の日取りや結婚式の日取り、その他家に不幸があつた場合、ユタの家に行く。手数料は、ンムジシレー（気持次第）とするが、相場は三、〇〇〇～一〇、〇〇〇円前後である。

45 聞き違いヘル

話者 山内 松（明治三十年五月十日生）

翻字 名嘉真 宜勝

昔え、むとうびれーやでーるばーてー、うぬ女お。
あんさーに、むとうびれーなやーなかい、行ぢえーる
ふーじ。

かつては恋人同志であつたようだ。それで、その女と、元は恋仲だつたので、男の人は訪ねて行つたそ
だ。

行ぢやくとう、茶ぐわー、ぬーん沸かち出わじやさー
に、飲ぬまさながちー、「ヒルんないみ」でい言いちやくとう、

訪ねたら、お茶を沸かして出し、飲みながら、「ヒル
でも出来るか」と言つたので、「出来るよ」と返事をし

「ないするよー」でい言わ。

女お裏座んかいヒル取んが行ぢやんでい。ヒル出じやしんがるやんどー。あんるやしが、「ヒルなんいみ」でい言ち、「ないするよー」でい言ち、男ぬあんし裏座んかい、ちやー追いし行ぢ、なー、むとうびれーるやたぐどう。ちやー追いし行ぢやくとう、うりから「ヒルんないん」でいる話やたん。

た。

女は裏座にニンニクを取りに行ったので、ニンニクを（壺から）出しにだよ。そうであるけれども、「ヒルでもできるか」と言うと、「できるよ」と答えて、男は裏座に女を追つて行った。もう、もとは恋仲であつたのだから。すぐ後を追つて行つたから、それ以来、「ヒルんないん」という話が伝わつてゐる。

採集 S 52・2・27 読谷村民話調査団第四班（富村朝夫）

46 牛泥棒の話

話者 照屋 寛良（明治四十一年五月十日生）

翻字 知花春美

知能ぬ秀りとーぬ盗人ぬよ、ある家庭ぬ牛、盗みわ
るやるりち。やしが、盗みーねーなー盗人ぬ名あたつ
ちゆぐとうりち、知恵んぢやち うまんかい、行ぢやー
なかい坊主ぬ姿いし行ぢよーるふーじや。

坊主ぬ衣着ち、「私ねー何処から来る坊主やしが、
貴方あ家庭んかい、大変な災難ぬあぐとう、うぬ災難

知能の秀れている盜人がね、ある家庭の牛を盗もう
と考えた。しかし、盗むとなると盜人という名がつく
ので、知恵を出して、そこの家へ、坊主の姿をして行つ
たようだ。

坊主の衣を着けて、「私は何処から来ている坊主だけ
ど、あなた方の家庭に、大変な災難がある。その災難

りしえー、貴方あ牛、私ねーちゃーる因果ぬ生まりが
そーたらー、貴方あ牛え、實際ぬとうくる、くれー私あ
兄弟やんどー」りちえーるふーじ。

「はあー私達あ牛ぬん貴方あ兄弟りちんあんなー」

「うれーやんどー。うぬ証拠ぬ、あんしえー表さびら
な」りち。

身体いつペー塩ぬてい行ぢよーんりーぐとう、うま
んかい行ぢーにとーてい 身体いつペー、頭から足先ま
でい。

「貴方あ牛、出じやちくうみそーれー、貴方あ牛ぬ
『あいえーやー、会ぢやたるやー兄弟』りち、私でー
なーじこーなみーるむんやれー、くれーなーはつきり
私あ兄弟やぐどう、くれー牛んかい姿あらわちょーし
が、くぬ牛、貴方に長え置つちょーちーねー、貴方あ
災難、私ねーくり連てい行きわるやぐどう」

裸なでい、いつペーなみーるふーじ。うぬ家族びつ
くりし、「とーなーくぬ牛えあんしえー連てい行ぢとう
らし、ありがとうやぐどう、にへーやぐどう、連てい
行ぢとうらし」りち、あんさーい盜でーるふーじ。
こんな話いしーぶさーねーんしがよ、盜人ぬ話やぐ

というのは、あなた方の牛、私はどういう因果の生ま
れか知らないが、あなた方の牛は、実は私の兄弟なん
だよ」と言つたようだ。

「はあー私たちの牛があなたの兄弟ということもあ
るんですか」「そうだよ、その証拠を、それでは見
せてあげよう」と。

体いっぱいに塩を塗りつけて行つたようだ。そこへ
行く時に、体全体、頭から足先までね。

「あなた方の牛を出して下さい。あなた方の牛が『よ
くも会うことができたね、兄弟』と、私をとてもなめ
るのであれば、これはもうはつきり私の兄弟だからね、
これは牛の姿をしているが、この牛をあなたの所に長
らく置いておくと、あなた方に災難があるので、私は
これを連れて行かねばならない」と。

裸になつてゐるのをとてもなめたようだ。その家族
はびっくりして、「さあ、もうこの牛は連れて行つて下
さい。ありがたいので、連れて行つて下さい」と、そ
のようにして盗んだようだ。

こんな話はやりたくないよ、盗人の話だからね。は

とう。とーうつさるやるむん。あんさーに牛え塩好き
やんりるくどうおうりからん表わりとーるばー、牛え
でーじな塩好きやんりよ。

い、それだけだよ。牛が塩を好きだということは、こ
れに表われているでしょう。牛はとても塩が好きだそ
うだ。

採集 S 52・2・27 読谷村民話調査団第十六班（照屋寛信・知花利枝子）

47 鳩 料 理

話者 玉 城 マ ツ（明治三十五年五月十五日生）

翻字 知 花 春 美

入つていちみそーらしえーりち、「うー」りち行ぢや
るむのー、「煮とーるんさー、なー入つていちみそーら
しえー」りちやぐとう。

なー自分ぬ味しーはていていねーらんなたぐとう。
「ぬぐわ、うんなげーん入つてーくーらんある。入つ
ていちみそーらさん」りちやぐとう、嫁え逃げていう
らんたんりち聞ちやんれー。

(鳩汁を)入れてきてあげなさいと言わされて、「はい」
と行つたものの、「煮えているのなら、もう入れてきて
さし上げなさい」と言われた。

もう、(嫁は)味をするために中味を全部食べてしまつ
た。「どうして、こんなに長いこと持つてこないのか、
入れてさし上げなさい」と言うと、もうなくなつたの
で、嫁は逃げていなくなつたという話である。

採集 S 52・2・27 読谷村民話調査団第五班（宮里洋子・小橋川清一）

翻字 知花春美

「娘さん、夫むちけーさーさーにしちゃれー、「私ねー家かい行りりいやぎーしぇー、屁ひりじゅーはぬるやいびーん」り、あん言ち。」「とーあんしぇー、いやーや、『アードウーよーマージュー^注、マージュー』りち、慎みよー」りち、あんさーに親ぬゆし言、言んそーち。

「あんし、二回、三回夫むちん戻ていい来ちーし。うぬ言葉慎り、またいちか、終わいぐわーに、夫むち行ぢやるばーに、なー言葉あ頭んかいすみらんねーならんさりち、うり我慢りしちゃれー病氣^{びょうき}なでい、病氣なたれー。」

「ぬぐわ、いやーや病氣^{びょうき}そーるむん、何やが」り、女ぬ親ぬ言んそーちゃれー「私ねー貴方が言んせーたる言葉覚てい、『あまんかい行ぢからん屁ひーなよー』り言やつたる『アードウーよーマージュー』りち守とーびーたしが、しれーしれーに食物の一食りん、よーがりているはいびんれー」りち、あんいちしちゃれー。

「とーあんしぇーよー、親ぬ家あ通てい屁やひれー。」

出戻りの娘が、「私が家に帰されるのは、屁をこぎますぎてなんですよ」と言つた。「それでは、おまえは、『アードウーよーマージュー、マージュー』といつて、慎みなさい」と、親が忠告した。

そして、二回、三回結婚しても、戻つて来たりしていた。それからこの言葉を心にそめて、最後に行つたときに、もう親の忠告を頭に入れておいて、屁を我慢していると病氣になつてしまつた。

「どうして、おまえは病氣しているか、何か」と、母親に言われたので、「私は、貴方が言われた言葉を覚えて、『あそこへ行つてからは屁をこくな』と言われた『アードウーよーマージュー』ということを守つていましたが、しだいしだいに食事はとつていても、やせていくんですよ」と言つたようだ。

「それではね、親の家に通つて屁はこきなさい。出

んじやしえー「りち言んそーちやぐとう、うれー出じや
しひちー、ひりとうばちやぐとう、人から家から壊り
てい、家なかい、むる。うぬ後からる「アードウーよー^{あどう}
マージュー」りぬ言葉使いんりんでーり言いたん。

しなさい」と言われたので、これは出すべきものであ
ると、へりとばしたので、人、家なども壊れて、すべ
て…。その後から「アードウーよーマージュー」とい
う言葉を使うそだよと言つていた。

採集 S 63・3・18 読谷ゆうがおの会 〔知花春美・棚原めぐみ〕

注 アードウーよーマージュ 「踵栓をして慎みなさいよ、マージュー」という意。

49 山原と団亀

話者 當山ハツ(明治三十九年五月十日生)

翻字 長堂 加代子

昔、うまから歩ち、那霸んかい歩ちめーたんり。那霸、
山原から那霸行ち、幾旅んせーる人ぬ話てー。

ある山んかい龜ぬうしえーや。龜ぬ上んかい、う
り出じやさーなかい、あんいち歌あしんしえーたんり
りたしえー。

昔、そこから歩いて、那霸に歩いて行つたそだ。
那霸、山原から那霸まで幾旅もした人の話だよ。

ある山に龜がいるさあね、龜の上に(便を)出して、
次のような歌を詠んだそだよ。

山原ぬ旅や 績旅んさしが

糞ぬ歩ちゅしや 今度初み

山原の旅は 績度もしたが
糞が歩くのは、今度が初めてである

りち言んしえーんりちよ、とうん返てい見ちめーが
ちーやたんり。

と詠んだそうだ。ふり返って見ながら詠つたとい
うことだよ。

採集 S 63・3・24 読谷ゆうがおの会（知花春美・松田千賀子）

50 黄金の瓜種

話者 上地 弘治（明治二十九年十月十五日生）

翻字 名嘉真 宜勝

くぬ、女ぬ屁いひらんでいせーよー、うりやるぐとー
ん。

一番ぬむくれー、首里城んかい、くぬユーベーやは
らんよーい、グシク女とうらつとーぎはん。とうらつ
とーてーぎはしが、うぬ女お、じこー正直者ぬんやい、
神ぬぐとう生まりとーる人なやーなかい。正直者とう、
容姿とう揃ていそーとーがはしが。

あんさーなかい、うぬ女お、御主加那志や、なー、
うりびかーるうすくみんみせーる、別ぬ者のーあんせー
見だんなたくとう、「くれー、行らさんれーならんさー」
でい言ち。女達や、うぬ集やーなかい、「くり行らし

この、女が屁をしてはいけないということは、こう
いう理由のようだ。

最初のきつかけは、首里城に、妻ではなくて、宮女
として仕えさせられていたようだ。仕えさせられてい
たが、この女は大変正直者でもあるし、神のように生
まれた人でもあった。正直者で、容姿まで美しかった
ようだ。

そういうことで、王様はもうその女だけをお遊びに
なられて、別の人達はそんなに見なくなつたので、「彼
女は追放しないといけない」と、女達は集つて相談し
た。「彼女は追放しないといけない。彼女一人だけを王

わるない。あり「一人の御主加那志や女でいち考てい
めーいるむん」でい言ち、ひちさぐとう。

「くれー、屁屁いひーんでいやーなかい、うぬ行行らわ
な」でいちせーぎはん。

あんしちゃくとう、御主加那志んかい、「んぐとーる
屁屁ひらー女女、くまんかい居居ちょーていないみせーみ。
うれー人人高島んかい、追追い出出いしましるやる」でい言
ちさーなかい。

あんさーにかい、行行らさつてーぎはん。久高島んか
い。行行らさつたくとう、くぬ、うりるやんでー。身籠身籠
てーぎはん。子子むつちそーてーぎはしが。

久高島んかい行行らさつていさくとう、あまんじ、なー
暮暮らせーしちさーなかい、そーてーしきさしが。あん
さーなかい、くぬ久高島とーてい、子子ん産産ちや、男男
子子産産さーなかい。

しちやくとう、んぬ男男ん子子、なーまた、「お父父さんのー
もーらんるあるい」り言言ちやくとう。「後後んかい話話や
聞聞かすさ。うれー、私私一人し産産ちえーさい」でい言ち。

久高島とーてい、お母母さんぬん二人ぐりー、ちやー

様は女だと考えておいでになる」と文句を言いあつた。

「彼女は屁へり者だと言つて追い出そう」と打ち合
わせたようだ。

そういうことで、王様に、「このような屁へり女をこ
の城に仕えさせてよろしいのでしょうか。彼女は久高
島へ追放した方がよい」と讒言した。

そういうことで、追放されたようだ。久高島に。追
放された時、こういう事情があつた。身籠つていたよ
うだ。子を宿していたんだね。

久高島に追放されたので、そこで細々と暮らしてい
たようだがね。そして、この久高島で男の子を産んだ。
そして年月がたつて、その男の子は物心がついて、
「お父さんはいないのか」と、尋ねられたので、「もう
少し大きくなつてから話してあげようね。親は私一人
しかいないよ」と答えた。

久高島では食べ物がほとんどないから、母子二人し

海んかい行ぢ、なんじゅ食物の一無んくとう。海かい
行ぢやーなかいしちやくとう、貝探つたい何さいそー
ていしーねー。

うまから、海から浮ち来てーるぐとーん。うぬ浮ち
来るぐとーーしが、うぬ浮ち来るむんのー、男ん子に
ん取らん。んま、なま来しが、うりにん取らん。
あんさーなかい、うぬ女ぬ親ぬ、「くれー」、変わつたく
とうやつさー」でい言やなかい、家んじ、衣装や替てい
来なかい、へ神るうりんやくとう。

替てい來なかい、白衣装お着きやーなかい、うり取つ
てーるぎさん。うんにーねー取らつてい、取らつてい
さくとう。うぬ耶子ぬ、かんしうまんかい浮ち来しえー、
ぬーんくいぬ種子物やたんでい。種子物ぬ入つちょー
たんでい。

あんし来れー、うぬ種子物取やーに、家かい来、あ
りくりんぬー作やーなかい。米んぬーん作やーに、豊に
なでい。

しちさぐどう、うぬ童え、なー、七歳なたんでいが
らし、八歳なたんでいがらー。さくとう、「私ねー、親、
なー歩かりーる所んかい歩ぢ行ぢやーに、親探ーうん

ていつも海へ行つて貝を採つたり、何かをしたりして
暮らしていた。

海から浮いて来たようだ。浮いて来たようであつた。
その浮いて来るものは、男の子にも取ることが出来なかつた。すぐそこまで来ているが、母親にも取れなかつた。そこでその母親は、「これは、ただごとではない」と言つて、家に帰つて(白)衣装に着替えて来た。へ神の仕業であるから。

替えてきて、白衣装を着けて来て、それを取つたよ
うだ。そうしたら取ることが出来て、取ることが出来たのであつた。その耶子がこのように、ここに浮いて来たのは、あらゆる種子類だつたようだ。種子類が入つていたんだね。

そこで寄つて來たので、その種子を取つて、家に持
ち帰つて、あれこれいろいろの作物を作つた。米などを作つて豊かになつた。

そうこうしている間に、この子供は七歳か、八歳になつたとか。そして「私は、行けるところはどこまで
も行つて、父親を探さないといけない」と言つた。そ

ねーならん」でいちさぐとう。うんにーねー現わりてい、
「いやーや、あまぬ子るやぐとう。あまんかい、あん
せー行ぢ拝りくー」でいちしちゃぐとう、行らちえー
るぐとーん。行らちさぐとう、男ん子あよーんなー、
よーんなー行ぢやーなかい。

しちから、「私ねー、男ぬ親あ会ちやていちーるない
る。また、くぬ瓜ぬ種え、あまんかい持つち、御主加
那志んかい奉すん」でい言やなかい持つち行ぢえーる
ぎさん。

行ぢやくとう、門番人ぬ、「いやーや、んぐとーる服
装そーてい御主加那志い会ちやいでいちしちえーなら
んさ」言ちえーぎはん、うぬ番人ぬ。あんしん聞かん、
うぬ童え、私ねー、じひ御主加那志い会ちやりわるな
いくとう、会ちやーちとうらし」でい言ちさくとう。
うぬ番人ん、てーげーやうりが姿見じやーなかい。く
れー、さつぱとうぬ童、くれー普通ぬ人とう違とーん。
違とーさー。くりがうぬ行方や。一人ぐりー話いしち、
後お許ち、御主加那志めーんかい行らちやくとう。

あんさーなかい、御主加那志や、「いやーやうぬ童ぬ
わんい私会ちやいが来せー、ちゃーる話ぬあが」でい言ちし

の時には母親もほんとのことを話した。「あなたは向こ
うの子であるから、そうだつたら向こうに行つて父親
に会つて来なさい」と言つて、行かしたそうだ。男の
子は、ゆつくりゆつくりと訪ねて行つた。

それから、「私は、父親に会つて来ないといけない。
また、この瓜の種子を向こうに持つて行つて、王様に
献上する」と言つて、持つて行つたようだ。

行つたので門番が、「お前はそのような服装をしてい
て、王様に会うことは出来ない。家に帰りなさい」。そ
れでも、その子供は聞かず、「私はぜひ王様に会わない
といけないので、会わせて下さい。」と言つたので、そ
の門番は、その子供の様子から、これは、しつかりし
た子供だ、これは普通の人とは違つてゐる。彼の態度
は異つてゐると思つた。二人はそこで話し会つて後は
許されて、王様の所へ連れて行かれた。

そうして、王様は、「お前は私に会いに来たのは、ど
ういう話があるのか」と、言つたので、「私は、話は別

ちやぐとう、「私ねー、話や何ん無んびらんしが、くぬ瓜ぬ種御主加那志んかいうさきて、人民ぬんかい作らすんでいちそーりりち持つち来びん。くぬ瓜ぬ種え、屁ひーる女かねー、どうらしみそうんなよ」でい言ちさぐとう。御主加那志や笑いそーやーに、「うん、あんやんなー」でい言やーに。「ぬが、屁ひーる女んかいねー作らさんある」でい言んそーちやくとう。

「女ん男んゆぬ人間るやいるさに。屁ひらん女ん居いびーがやー。屁ひらん人ん居いーびがやー」でい言ちやくとう、御主加那志や考てい感じちやーに、くれー私あ子供がやら一分からんさーでい考やーにかい。また、奥ぬ座敷んかい連ていもーやーなかい、いちいち話いしちやくとう。「いやーや私あ子供やん」でい言みそーちえーぎはん。

あんさくとう、「久高島とーてい私達や育ちよーびん。あんし、海から寄てい来くとう、うぬ瓜ぬ種持つち來さとうんが来るばーやいびん」。りち話やしちやくとううりから、「とー、あんせー、いやーや月数ん年数ん数えーねー、いやーや私あ子供やぐとう、お母さんぬん久高島から連けーち来、くまんかい一緒に來とうらし

に何もありませんが、この瓜の種を王様に差し上げて、人民に作らせるために持つて参りました。この瓜の種子は、屁をへる女にはあげないで下さい」と言つた。王様は笑つて、「うん、そうですか」と言つた。「なぜ、屁をへる女には作らさないのかね」と、尋ねられた。

「女も男も同じ人間である。屁をへらない女というのがいましようか。屁をへらない人というのがいますか」と言つたので、王様は感じとつて、これは私の子供かもしれない、と考えられて、それから奥座敷に連れて行つて、よくよく話をした。「お前は、私の子である」と、言つたようだ。

そうしたら、「久高島で私たち暮らしていいます。こういうわけで、海から寄つて來たのでこの瓜の種子を持参して、父親を探しに來たわけです。」「そうであつたのか、お前は年月を数えると、私の子に間違いないから、お母さんを久高島からお伴して來て、ここに一緒に連れていらつしゃい」と、おっしゃつたそだ。

でい言ち、しんそーちゃんむんやんでい。

あんさーに、うりから、「女ぬ屁ひーんでいしえー、嫁ゆみ
んいーほーらりんどー」でい言ち、話や残どーるばー
るやいぎはん。

それから、「女が屁をへると、娘であつても追い出され
れる」と、いう話が残つてゐるといふことだ。

採集 S52・2・27 読谷村民話調査団第四班（富村朝夫）

51 箱の鼠ねずみ

話者 山城盛吉（明治四十四年六月六日生）

翻字 島袋智子

頼まーなかいしちやぐとう、本当お分かいがやー分わ
からんがやー、りちしちやぐとう。うり、いんしえー
脈取やーなかい人ぬ病氣、いーしえー脈取いんりる専門
やんりしが、本当やがやーりちしちやぐとう。

ある人ぬ頼まーなかい、すんりしちやぐとう。ぬが、
うぬ脈取いんりしえー何やがりーしえー、鼠取てい
ちやーなかい箱ぐわーんかい。たとれーくりんかい、
くりんかい入りやーなかい、うりが脈取らちえーるふー
じーよー。

（ある人を）頼んで、本当に当てることができるか
どうか、試してみたんだが。いうなれば、脈を取つて、
人の病氣を当てたりしているので、脈取りの専門とい
われているが、本当かなあと調べてみた。

ある人が、頼んで試してみることにした。その脈を
取るということは何かといえばだね、鼠を取つてきて、
箱の中に入れた。たとえば、これくらいの箱に（鼠を）
入れて、その脈を取らせてみたわけだね。

いーしえー、くれー、脈取らちやぐとう。うぬ人の一
脈取つたれー、くぬ箱んかい入つちよーしえー取つた
ぐとう。うぬ人のー、たとうれー、「五ちうん」りち、
脈取つてーるふーじー。取つたぐとう、五ちえーあら
ん、一ちる入つてーぐとう、五ちりちうりが脈取たぐ
とう。うれー嘘ぬみーるやる、本当ぬいんしえー専門のー
あらんりち、なーうれー打ち首あていてい。たとうれー
なー殺しんがりち、連てい行ぢえーるふーじー。

あまんかい、「うれー嘘ぬみーやぐとう、うんとーしー
生ちきてーならん」りち、殺しんが連てい行ぢやれー。
なー海側んかいりち、なー殺すんりち連てい行ぢえー
ぐとう。また、うり本当やがやーりち、確かみてい開
きたぐとう、子ぐわー四五どう、アヒヤーとう五四入つ
ちよーてーるふーじー。「あはー、うれーんちや、本当ぬ
専門やさやー」りちしちゃーい。また後から馬かきやー
なかい、いんしえーなー殺しんがりち、行ぢよーぐとう、
「待つちょーきよー、待つちょーきよー」しち、する
えーかなかい、「早くなー殺し、早くなー殺し」りち、う
れー打ち首、殺さつたんりぬ話。

そこで、「こひつは、嘘つきだから、こんなやつを生
かしておくわけにはいかん」と、殺しに連れて行つた。
たとえば、海の方にだね。殺すつもりで連れて行つた
が、もう一度確かめて開けてみたら、鼠の子が四五と、
母親がいて、五四入つていたようだ。「なるほど、こい
つは本当の専門家だつたんだね」と分かつた。そして、
後から馬を走らせて知らせに行つた。言えば、殺しに
と行つてるので、「待つてくれ、待つてくれ」として
いる間にも、「早く殺せ、早く殺せ」と、その人はつい
には、打ち首、殺されたという話だ。

翻字 知花春美

女お人先むの一言なりしえーあぬような形やさ。あれよー、七ムーティー女、七ムーティー女りる女お、なー神人ふーじーやてーんてー。うりがる自分くる言やーに。くぬ真玉橋ぬ橋え架きていん、七回架きていんむどうまらんなどうとう。

昔、うぬ女ぬ、「貴方あいちやんだんし苦勞ひちめーる、七ムーティー女、そーる女、生き埋めさんむんぬ、くぬ橋ぬむとうまいんな」り、自分ぬ言ちやぐとう。政府おなー、ちやーどうつかちみーし、かちみやーにかい、赤ちゃん抱ちよーしるやたんりーどー、赤ちゃん連とーしるやるむんぬ、なー仕方なく夫ん政府ぬくとうでーむーりち、やらちえーるばーてー。

「あん言ちえーしえー、いやーやひやー神ぬぐとうんかい根い入つちょーる人やんむんぬ、あんし先ない前ないむの一言なよーり、言ちやるむん、何りちいやーや、うんぐとーる政府ぐとうんかい話しちやが、だー

女は人より先に口出しするなというのはあるようないことだよ。あれはね、七ムーティー女、七ムーティー女という人は神人だつたのでしょうか。その人が自分から言い出したことだつた。この真玉橋は架けても架けても、七回架けても完成しなかつた。

昔、その女が、「貴方たちはどうしてそんなに苦勞しているんですか。七ムーティー女を生き埋めにしない限りこの橋は完成しないよ」と言つた。政府はもう、その女をずつとつかまえていた。赤ちゃんもいるのに、赤ちゃんも連れているんだが、夫も、もう政府のことだからと仕方なく行かしたようだ。

「そう言つたのに、おまえはね、神のことに通じてそれをやつてている人だのに、そんなに、先に口走るんじゃないよと言つたのに、どうして、おまえは、こんなではないよ」と言つたのに、どうして、おまえは、こんな政府のことに出したか、もう、おまえの話を信じ

ないやー話い信じてい私ねーくぬ赤ちゃん連れていちゃーすが。むのー思りーやすみりち「じこー泣ちかかていそーしが仕方なく生き埋めしーが行ぢやるばーてー。

あんさーに、生き埋めしちゃぐとう、うぬ橋えむとうまでいなーうぬ男ぬ親あ赤ちゃん連れてい山原、屋我地すんとうぐるじ育ち暮らさんねーならんりち、家やうつちやんなぎてい行ちゅしえー心ぬしぬばらんしが、なーくぬ子ぬ立ちじゆくでーむん行かひー」りち、山原、屋我地んじ育ちこみきーにさんり。

年頃なたれー、顔容姿えあしが、むのー言やん、親ぬ遺言守たるたみなかい、むのー言やん、ちーがーなと一るばーてー。啞おしなでいしちやくとう。

あんしすしが親まさいぬ子なやーなかいうれー、首里親國から結婚申し込まつてい。明日どーりる場合に浜んかいアーサ取りが行ぢよーたんり。アーサ取りが行ぢやぐとう、男ぬ親あ「むぬん言やん人ぬアーサ取りが行ぢよーん、ちやーてーしむが」言ち、友達んちやーや家かいる来るむんぬ、ぬぐわ、家ぬあていんねーんやーりち搜めーいが行ぢやくとう。うぬお父さんが

て、私はこの赤ちゃんを、連れてどうしよう。考えてはいるか」と、とても途方にくれているが仕方なく生き埋めに行つたようだ。

そして、生き埋めされたので、その橋は完成した。その父親は赤ちゃんを連れて、山原、屋我地で暮らそうと、家を捨てた。橋に向かつて、「おまえをおいて行くのは心がいたいが、もうこの子のためだから行こうね」と山原、屋我地に行つた。

(その子は) 年頃になつて、容姿は美しいがものは言わない。親の遺言を守つたためにものは言わず啞になつていた。啞になつていた。

だけど、親よりも勝つていたので、首里親國から結婚を申し込まれていた。明日という日に浜へアーサ取りに行つっていたそうだ。アーサ取りに行つていたので、父親は「ものも言わない人がアーサ取りに行つている、どうしたらしいかな」と、友達は家へ帰つてきているが、帰る様子もないがと、探しに行つた。お父さんが、「おまえは、どこへ行つていたかと思つたら、ここで

「いやーひやー、まー行ぢよーがやーり思れー、うまうていアーサる取いぎんなー。うぬアーサーあ明日めーる里主んかいうさぎーんりちるやさや」り言ちん、ただ顔見ち笑てい。ちょーどう「うぬアーサうさぎーしやかん、家かい飼などーる鶏ぐわーたつぴらかちるうさぎーしる」ぬーぬーりーる話いすんよー。

あんさーいとうとうなー、鶏ぐわーんだつぴらかちうさぎーんりるちむえーてー、あんさーい、明日ぬ日んなどーい、えー女ん子んかい、まくとう後生はいりんさー、くりんかいむぬちゅくとうばあ聞かちとうらしえー、うりが立身ぬたみでーむんぬ」り言ち、ただ言葉し言やきーしが、「私が言葉守ていあんない行ぢえーうしが、後お喜びね花ん咲ちゅさ」り親ぬ言ちやぐどう、あんし、うり追つい、ちーがーが歌さぎーるばー。

「人まさい生まりているうしがむぬん言やんやー」りちょーてい言ちやぐとう、なーうぬ親ぬ、明日ぬ日やなたくとう、いやーあんし、立身ぬ、なー親りしえーさまたげるないがやー、むぬん言やんむー、りち思いやてーんてー、自分思い、一言葉言ちとうらしえーり

アーサを取つてゐるのか。そのアーサは明日みえる里主にさし上げるつもりなんだね」と言つても、顔を見て笑つてゐるだけだった。「そのアーサを上げるよりも、家で飼つてゐる鶏をつぶしてさし上げた方がいいのに」と、いうふうに話をするよ。

そうして、鶏もつぶしてあげるといふことだね。日も明日になつてゐるし、「ほんとうに後生があるのなら、娘に、これに一言でも言わせてくれ、この子の立身のためだのに」と言つた。「私の言葉を守つたためにそくなつたが、のちには喜びの花も咲くでしよう」と、母親の声がしたので、それを追つて啞が歌をした。

「人並以上に生まれてゐるが、ものも言わないね」と言つた。もう父親は、(娘が) 明日行くといふ日に、親というのは立身のさまたげになるのが、ものも言わすことと自分自身思つていた。一言でも言わせてと言つたので、ここで歌をした。

ちやぐとう、いやーうまんかい歌さぎーしが。

あんさぐとう、まくとう後生こうせいはあてーさやー、いやー
本当ほんお神かみぬ生なまりそーてーさやー、とーうりが立身りつじんのー
目めぬ前まへなてーいるうぐとう、りか急いそげー家やかいりちよ、
終うわいたん、真玉橋まだんばしぬ由來記ゆらいきえうりり。

そうして、ほんとうに後生はあつたんだねと、おま
えはほんとうに神の生まれだつたんだね。この子の立
身はもう日の前なので、急いで家へ帰ろうとこれで終つ
た。真玉橋の由來記はこれだよ。

採集 S 63・3・18 読谷ゆうがおの会（知花春美・棚原めぐみ）

注 真玉橋 国場川にかかる橋で、那霸市と豊見城を結ぶ橋。十六世紀の尚真王が三山の按司を首里城下に集めて、中央集権を

固めたころから代官の往来やらで、南山の豊見城間切と中山の那霸を結ぶ要路としての重要な橋であつた。

53 真玉橋の入柱

話者 比嘉テル（明治四十三年七月十八日生）

翻字 知花春美

真玉橋の入柱ゆれーち由來記。

ある大工だいくんちやーがてー、石大工いしたーが橋はしえ架かきて
ん架かきていん架かからん、ちやー壊こりーしちやぐとう、
なー仕事しつ、橋架はしあきていん壊こりー壊こりーしちやぐとう、
なー大工だいくんちやー集あらまとーてい、じこーなー悩などーる

真玉橋の入柱の由來記ね。

ある大工たちが、石大工たちが、橋を造つても造つ
てもできない、いつも壊れて、壊れて、もう仕事だけ
ど、橋を架けても壊れていたので、大工たちは悩んで
集まつて話し合いをしていた。もうとても悩んでいたよ

ばーてー。

うだ。

惱どーるばーに、うまんかいある女ぬ入つち来に「何んちいつた一惱どーが」りちやぐとうや、「あぬ、くぬ橋や、何回、何回架きていん、架きていやていんや、てい一ちんな一橋ぬまとうまらん、私達大工んちやー、じこ一うるきていや、失敗しち、ちやーてーしむがやーでいち、じこ一殘念そーんどーやー」りちやぐとうや、「うれ一心配しーぐれーやあらんや、あぬ一七色ムーティー七からくいそーる女や、うりる埋じゅみーねーやー、ちやんとうくぬ橋えまとうまいぐとうや、うぬ七色ムーティーそーる女やあぬ、まーやてーんさつペーかめーてい、うり搜めーてい埋じゅみらんかじれー、くぬ橋えまとうまらんどーやー」りちやるばー。

あんさぐとう、「えー、あんやみ」りち、大工んちやー仕事えうちゆるち、なーまーやーくうーやー歩ちょーるばーてー。まーやーくうーひやー歩ち。あぬ、女ぬ髪かちみてーあきてー見ちやんてーまん、誰ん、一人んな一ちやつさ搜てーんぐらんばーよー。七色ムーティー、七からくいそーる女おうらんばーてー。

あんさぐとう、なーまたん大工んちやー集まつい

悩んでいるところへ、ある女が来て、「どうして、貴方たちは悩んでいるのか」と問ひた。「あの、この橋は、何回架けても架けてもね、ちつとも橋が架からない、私達大工は、大損害をこうむつて、失敗して、どうし答えた。「これは心配する必要はありません、あのう七色ムーティー、七結いをしている女をそこに埋めると、ちやんとこの橋は完成するのね。その結いをしている女をどこからでも捜してきて、その人を埋めない限り、この橋は完成しないよ」と語った。

「えー、そうか」と、大工たちは仕事を止めて、あちらこちら捜し歩いたようだ。あちらこちら歩いた。女の髪をつかまえてあけて見ても、誰ひとりとして、いくら捜してもいなかつた。七色ムーティー、七結いしている女はいなかつた。

そこで、もうまたも大工たちは集まつてきて、「これ

来、「とーくれーやー、ちやつさ^さ女^めぬ髪^{がみ}あきていんや、ムーティーでいちゃるとうくまがや七色ムーティーそーる人^{おうらん}あるむんぬなーあん言^{こと}ちえーる人^{ひと}、一^い人がむん、なーだあきらんぐとうや、でいーうりが髪^{がみ}あきてい見^みちんだ」りちゃぐとう、なとーんばーてー。おそらくあらんのーあるはじやしが、あんしぇーなーうりがむん見^みじゅんでーりちよーるばーよー。

いんねーすんねーうりるやんりんでー。なーいんねーすんねーうりなたぐとうよ、「とーいやーやちやーすが、いやーやなー七色ムーティーからくとーる女^め、埋^うみらんかじれーたたんり、くぬ橋^{はし}えまとうまらんり、いやーがる言^{こと}ちよーるや、いやーるやるむん、なーちやーすがてー」りち言^{こと}ちやぐとうよ、うぬ^う女^めお驚^{おどろ}ち「あきさみよー、なー私^{わん}ねーちやーすがやー、私^{わん}ねーなー抱^だちん子^ぶん、乳^ちけー飲み^{のみ}子^こんうん。ちやーすがやー」くとうなどーんばーてー。

いうやいなや、その人なんだよ。もうその人だつたので、「さあ、おまえはどうするか、おまえは七色ムーティーをしている女を埋めない限りこの橋はまとまらないと、おまえが言つたんだよ。おまえだのに、もうどうするか」と言つた。その女は驚いて、「どうしよう、もう私はどうしよう、私には赤ちゃんが、乳飲み子がいる。どうしよう」と…。

後^{あと}お政府^{くじ}ぐとうなやーに、なーあん言^{こと}ちえーぬ女^めおくりるやんでー言^{こと}なたぐとう、なー仕方^{しほう}あならん、じこー貧^{まづ}しい者^{ひと}やたんでい。夫^うん家^やん、貧^{まづ}しい者^{ひと}やんりしが。

はね、いくら女の髪をあけて見てもね、ムーティーといつたところが、七結いしている人はいないとは、もうそう言つた人、一人のものはまだ見ていいないので、それ、その人の髪をあけて見てみよう」ということになつた。おそらく違うとは思うが、そうだつたら、その人のものを見てみようということになつた。

今度おなー仕方あならん、あぬ抱ち子、乳飲みん子、夫んかいはにーちきて。なーあんしさぐとう、「いやー言いしん聞かんや、夫ぬなんとう言わん聞かん、あぬ、人先むの一言なよーりち聞かんや、いやーうんぐとーぬくとうしち、うぬ親子ちやーし暮らちいちゅがやー」なー、まじ二人ぐりー泣ち別りしち。「私にんや、うり言いんりちやあらんしが、言ちるねーんむー。仕方んないみ。私ねーなー柱なでい行ちゅぐどうや、くぬ子りつぱ育ていていとうらしよー」泣ち別りそーんばーてー。別りがちー赤ちゃんぐわーんかい、「例い美らか」ぎーに生まりていやていんや、人先えむの一言なよーやー。アヤーやくぬたみなかい、くわーてい行ちゅぐとう、いかなしんむの一言なよーやー」りち、いぐまち行ぢやんばー。なー柱ないが行ぢよーるばーてー。

あんさぐとう、いんねーすんねーくりうまんかい立ていていから一橋えまとうまたぐとう。さぐとう真玉橋ぬ橋ぬ橋やんり。

あんさぐとう、子供えなー成長いて。じこー成長いて、じこー美らかーぎー生まりしち。あんしなーそーしが、美ら装いぐわーし橋ぬ下んかい入つち行ぢ。

今度はもう仕方なく、赤ちゃん、乳飲み子を、夫に預けて行くことになつた。「おまえは言うことも聞かず、夫がなんと言つても聞かん。人より先に口を出すなど言つても聞かないでね、おまえはこんなことをしてかして、(残された)親子はどのようにして暮らしていくか」と一人泣いた。「私もね、そういうつもりではなかつたが、言つてしまつたんだ。仕方がない、私はもう柱になるので、この子をりつぱに育てて下さい」と、泣いて別れたそうだ。別れながら赤ちゃんに、「たとえ、美しく成長しても、人より先に口を出してはいけないよ。お母さんはこのために、取られて行くので、どんなにしても言つてはならないよ」と、言い残して行つたようだ。もう柱になるために行つたようだ。

そうしたら、そのとおりに、女をそこに立てたあとは橋は完成した。それが真玉橋だそうだ。

それから、子どもは成長した。成長して、とても美しい、じこー美らかーぎー生まりしち。あんしなーそーしが、美ら装いぐわーし橋ぬ下んかい入つち行ぢ。

育むといとーるばーてー。何十年か経つち。じこーなー上ぬ
人んちやーが、うりが橋ぬ下んじ、シェーぐわーすべ
いし見ぢやーなかい、くぬ子供えなんとう合図しちん
いれーいんさんや、むぬん言らんしが、まーぬ子やが
やー」侍ふーじーがてー。

あんしやしがあとうぬぬじゅみねー、シラシェーす
くやーが、他ぬしんかぬ 「まーぬ、まーぬ女ん子る
やいびんどーやー。あんしや美らく生まりとーしが、
むぬん言らんやー」りちょーるばーてー。あんし、う
ぬ家庭んかい連てい行ちゆるくどうなどーるばー。なー
年頃などーるばーてー、子ぐわーや、あんしきぐどう、
むん一ちん言れー私が妻すしがやーりち、侍がてー上
ぬ人がてー、家かい連ていもーちゃぐどう。「なーくぬ
子供ぬや、容姿しがたんかい、私ねーぶりていやそー
しが、くぬ子供が、むぬ言いるんしえー、私が妻すし
がやー」りち言んそーちょーるばーてー。

あんしや、親ぬ遺言ぬや、あんあんし、あんなたぐ
とうや、「人先むぬ言なよーやー」りち遺言し行ちやぐ
とう、うれーぜんぜんむん言やんくどうなどーんどー
やー。「あんしや、くぬ際にや、むん一言言ちとうらしえー
も位の高い人が、橋の下で、川えびを取るのを見て、
「この子どもはどんなに合図しても、ものも言わない
が、どこの子だろう」と侍みたいな人が言つた。
あとから、他の川えびを取つてゐる人が「どんそこ
の娘ですよ、こんなに美しく生まれてゐるがものも言
わないね」と言つたようだ。そして、そこの家へ連れ
て行くことになつた。もうその子は、年頃になつてい
たので、一言でも言えば私の妻にするのだと、侍が、
上の位の人が家へ連れてきた。「その娘の容姿に私はほ
れてはいるが、一言でも言えば、私の妻にするがね」と
言われたようだ。

や、私が妻よつましゃ首里んかい連つれてい行ゆきちゅるむぬやー」

言いつたようだ。

りち侍さむしが言いちよーるばーでー。

うにーに、ハーベールーが飛といでいちゅーるばーよー、
子供わらわぬ前まへんかい、親おやぬ、ハーベールーが飛といでいちやぐ
とうよ、親おやぬ。「しばし待まていいハベル」うりんがい「言いちよー
るばー。うぬくとうばなかいよ、「ちゅ 蝶テバ言いふ 蝶テバ言いふ 蝶テバ言いふ
言いえー」りち、なーお父おとうがてー、「わゆ 蝶テバ言いふ 蝶テバ言いふ 蝶テバ言いふ
が言いいねーやー、立たつ身みし行ゆきちゅんんどーやー。行ゆきん
どーやー、いかなアンマーがあん言いちやんてーばんや、
なーむの言いちしむんどー、「言いちしむんどー」りーし
が、あとうぬぬずみねー、「言いやんるあしぇー、あとー
ハーベールーが飛といでいちやーに。ハーベールーが飛といで
いちやーによ、うにーハーベールーうーやーによ、かん
にーかんにーし追おやーによー。

あかり うちんかてい泣なちゅるハーベールー

明かりに向むかつて泣なく蝶テバよ

とうぶるアカハベル

飛とぶ蝶テバよ。

りちよ、うにーから言いい出だじやさーに、あとーうぬ子わらわ
供はびー。

「ほんくい、わつたーばー、くりが親おやあやー、あん
あんし口くちにくわーてい、真玉橋まだなばんかい埋うじゅみらひとー

そのときには、蝶テバが子どもの前に飛とんでいたようだ。
親が、蝶になつて…。「ちよつと待まつて、蝶テバよ」と言いつ
たようだ。「ひと言いふも聞きこなさい。言いふなさい」とお
父さんが、「ひと言いふなさい。聞きこなさい。おまえが
言いつたら立たつ身みし行ゆきよ、行ゆきよ。いくらお母おはなさんが
そう言いつたからだと、もう言いつていよいよ。言いつていよい
んだよ」と言いつた。それでも言いわないで、蝶テバが飛とん
できた。蝶テバが飛とんできて、そのときには蝶テバを追おつて、こ
んなふうに蝶テバを追おつた。

しがやー、うぬ子供えくぬ遺言守ている言やんどーやー
りちやぐとうよ、「くぬ子ぬたみすんりや、人柱なでい
行ぢゆるびけーんや、いつたー親子とうむどうむや首
里んかい連てい行ぢ、りつぱにこーじ方しみーんどー」
りちよ。

じこーくぬ子供えうに一からむの一言い始までいよー、
じこーりつぱに暮らち、親しーていー立身しちゃんり。
うりつぱに暮らして、親共に立身したということであ

の遺言を守つたために話さないんだよ」と言った。「人のためをするといって、人柱になつて行つたので、それ以上におまえたち親子共に首里に連れて行つてりつぱに孝行しようね」と、(侍は) 言つた。

そのときから、その娘はものを言い始めて、たいそ
うりつぱに暮らして、親共に立身したということである。

採集 S 52・2・27 読谷村民話調査団第十班(村山義隆)

54 願いごとは大きく

話者 照屋寛良(明治四十一年五月十日生)

翻字 村山友江

昔あてーるくとうぬ首里近さぬ田舎うてい、じこー
貧乏な二才達二人。二才達二人やしが、くれー毎日山ん
かい入つち薪取てい、首里那霸んかい行ぢうぬ薪売てい
生活、暮らしそーてーるふーじやしが。

ある日、薪の一取つてい山から戻やー、くぬもちろ

昔、首里の近くの田舎に、大変貧乏な青年が二人(住んでいた)。一人の青年は毎日山に行つて薪を取り、首里那霸に行つてその薪を売つて暮らしていくようである。

ある日、薪を取つて山から戻る途中で、もちろん山

ん山ぬ中やるふーじ。山ぬ中うて木ぬ陰ぐわーんか
い座ち、くつたー二人が話ぬ、一人ぬ者ぬ「いえー」、
いやーやちゃーし考とーが、自分なー二人とうーちか
んし薪ぐわー取やーし、ていーちんあかーぬばん。い
ちまでいんくぬ暮らしえーならんしが、私ねー私考や」
一人ぬ者ぬ。

「私ねー、必じ首里んかい上ぬて行ぢ、首里ぬ松山
御殿ぬ一人女ん子ぬ入り婿ゆなで、生涯いぢみとうとう一ま
うまぬ上うからはなしがささつてい暮らすんりちゃんれー、
私あ望めーり言いちえーるふーじ。また一人ぬ者いやー
やなー、天に端々はざはざぬ話はなしつし。自分なー百姓ひやくしやうぬ位くわいぬうつ
ペーぬ松山御殿ぬ一人女ん子ぬ入り婿ゆなで。生涯いぢみとう
とう一まうまぬ上うからはなしがささりーんりる話はなしや、
いひえー話はなしやまきさーねーに。うれー天に端々はざはざりーし
やさ」「あーあねーあらん、人間のー願えぬ精靈せうれいりぬ言
葉いふぬあぐどう。願ねがてい願ねがていんちならんくとーねーら
んり、私ねー考かげとーん」「えーあんやんなー」「とー私ねー
あんし考かげとーしが、あんしいやーまたちやーし考かげとー
が」りち。

また一人ぬ者のー「いやー聞きよーやー、いやーや

の中であつたようだ。山の中で木の陰に座つての、二
人の話であつた。一人の者が「おい、おまえはどのよ
うに考えているのか、自分達二人はもういつもこのよ
うにして薪取りだけをして、ちつともうだつがあがら
ない。いつまでもこの暮らしはできないよ、私の考え
としては……」と、一人の者が（言つた）。

「私は必ず首里に上つて行つて、首里の松山御殿の
一人娘の入り婿になつて、一生ここの人にはかわいがら
れて暮らすつもりだよ、私の望みといふのはね」と言つ
たようだ。（すると）一人の者が「あんたはもう、天に
かなわぬ話をして。自分達みたいな百姓の位で、あん
な大きな松山御殿の一人娘の入り婿になつて、一生こ
の人にかわいがられて暮らすといふ話は、少しおお
げさではないか。こういうことを叶わぬ願いといふ
だよ」「ああそうではないよ、人間は願いの精靈といふ
言葉があるからね。願つて願つてできないことはない
と、私は考えている」「ああそうか」「私はそういうふ
うに考えているんだが、あんたはどのようにして考え
ているか」と。

また一人の者は「よく聞きなさいよ、あんたは松山

松山御殿ぬ一人女ん子ぬ入り婿なでい、生涯とうとう一
まうまぬ上からはなしがささつてい暮らすんりちょー
しが。私ねーまたいやー以上に、今あ那覇うてい一番
うとうぬつちょーぬ泊美人、妻、妻つし、うぬーう
ぬ泊美人りぬ妻私がなーしーうーすんむんやれー、
私ねー三年生ちちよーけーしむん」り、あん言ちえー
るふーじ。あんすぐとううぬ初まいぬ二才が「いやー
ややな願やつさーやー。あんぐとーぬなー沖縄一ぬ世
間うつけーらすぬあたいぬ美人、泊美人りちゃんてー
かん妻さるとうくるが、ただ三年生ちちえーぬーんな
らんいやーな願やつさー」り。「あらんあんしん私ねー
あんししむん。あんぐとーる美人んれー妻すれー、三
年生ちちすむん」、「えーあんやみ」。

するうちねーうまからぬうとうんがなーし白髪タン
メーが出じていつち、「いえー一才達、いつたーあんし
私ねえうまうていむる聞ちやしが、いつたーやみつた
願え大きるむんなー、いつたーや。私ねーいつたー話い
聞ち、しぐ、しごー通てー行からん。いつたーんかい
良い物いーらすぐと。私がいーらすしえーなーしぐ
大切に持つていよーやー」りち。

御殿の一人娘の入り婿になつて、一生ここの人とかわ
いがられて暮らすと言つてはいるんだが。私はまだおま
え以上に、今那覇で一番評判の泊美人、その人を妻に
して、もうあの泊美人を私の妻にすることができるん
であれば、私は三年生きておればよい」と、そう言つ
たようだ。そうするとその最初の青年が「おまえのは
イヤな願いだね。もうあれほど世間を騒がす沖縄一の
美人、泊美人と言われている人を妻にしたところが、
ただ三年生きていては何もならない。おまえのはイヤ
な願いだよ」と。「いや、それでも私はよい。あれほど
の美人を妻にするんであれば、三年生きればよい」「あ
あそうか」と。

そうしてはいるうちにそこからひょいと白髪のおじい
さんが出てきて、「おい一才達、おまえ達の話をここで
全部聞いたんだが、おまえ達はほんとに願いが大きい
なあ。私はおまえ達の話を聞いて、すぐにはここから
通りすぎることはできない。おまえ達に何かをあげる
から、私があげるのは大切に持ちなさいよ」と。

あんし何いーらすがやーりちやぐとう。初み松山御殿
殿ぬ入り婿なれーやーりる二才んかいや、ブイぐわー、
いーらちえーるふーじ。ただぬブイぐわーるやんり見
ちえー、ブイぐわーりしえーなー木片ぬふーじーるや
さにや。あんしブイぐわーいーらち「くれー私が今いー
らすぬブイぐわーや、ただぬブイぐわーなでいいたー
がー見いしがあねーあらん。くれーいつたー望み叶わ
らすしやぐとう、大事に持てよーやー」り、いいち
きらつてい。あんしなー一人ぬ、泊美人あ妻しんりやー
りしんかいや、扇ぐわー、とうらちえーぬふーじ。扇ぐわー
とうらち、「とーくりんいやー望み叶わいぬ道具やぐとう、
大切に持てよー」りち。

あんしするうちにぬーとうんかなーしくぬ白髪タン
メーや、まーんかいがはみそーちゃら一分からんない。
あんぐとううつたー二人、「あい、珍ましいむんやつさー、
今んとうーうまんかいうぬ人おうたしが、たでーまう
らんない。くぬ人お神るやつさー。くぬ道具お、お
互い大切に持たやー」りち。

あんさーいくぬするうちねー、沖縄ぬ昔ぬ士族お、
山かいやてーげーなさりーる家庭ぬ人達あ馬持つち、

そうして何をあげたかといふと、最初に松山御殿の
入り婿になりたいと思つてゐる青年には、棒をあげた
ようだ。見かけはただの棒であつたらしいよ、棒とい
うのは木片みたいのものだよ。そして棒をあげて「私
が今あげる棒は、おまえ達にはただの棒に見えるはず
だがそうではない。これはおまえ達の望みを叶えてあ
げるものだから、大切に持ちなさいよ」と、言つた。
そうしてあと一人の泊美人を妻にしたいと思つてゐる
人には、扇をあげたようだ。扇をあげて「これもおま
えの望みを叶えてあげる道具だから、大切に持ちなさ
いよ」と。

そうしてゐるちよつとしたすきにこの白髪のじいさ
んは、どこにいらつしゃつたか分からなくなつた。そ
してその二人は「おや珍しいことだ、今までこつちに
いらつしゃつたんだがいつのまにいなくなつてしまつ
て、この人は神様だよ。この道具は、お互に大切に
持とうね」と。

それから、昔の沖縄の士族といふのは、良家の人は
は馬を持っていた。そして山に薪を取りに行くときは、

馬んかい荷い載しーがーなー馬持つち、薪取いが行ちゆぐとう。薪載さーなかい、うまから通てーぬふーじや。うつたー前から、歩ち、いひぐわー、越たぐとう、うまぬ馬持つちょーし越たぐとう。くぬブイぐわー持つちょーる「一才が「あいえー、あんしいい馬持つちょーるやー」りち、うぬブイぐわー馬ぬ尻んかいけーぬしてーるふーじ。馬ぬはい越ていからるやぐとう。尻んかいけーぬしたぐとう、なー馬の尻ぬ「サティ、サティ、サティー」し馬ぬ尻ぬ、ちやー叫びーやんり。あんぐとううぬ馬持つちやーん驚ち、馬ん驚ち、うりからうぬ見ちょーる「一才達二人驚ち。「あいえー、私がうぬブイぐわーけーねーたぐとう、馬ぬ尻うつぴなー『サティ、サティ、サティ』するやー」りち。

あんしむる止まらんるあんりぐとう。あんされーうぬ「一才達あ感じちやーい「ははー、うぬ神様ぬとうらちえーぬブイぐわーや、んちやただぬ物のーあらん。かんしちーねーたぐとう、馬ぬ尻ぬうつぴなー『サティ、サティ』叫びてーぐとう。ゆうさんくれー、またどうんけーてい反対んかいねーいねー、止まいがすらー分からんぐとう。んだまじ反対にかいねーていんり」り

そこから(この馬の尻の叫びは)全く止まらなかつたようだ。そうしているうちに、すぐこの二人は青年は「ははあ、この神様があたえた棒は、ただの物ではない。このようにして指したら、馬の尻がこんなに大きくなるとこの馬を持っている人も驚き、馬も驚き、それからだらね。尻を指したから、もうこの馬の尻が「サティ、サティ、サティー」と、ずっと叫び続けたようだ。すがこの棒で指したら、馬の尻がこんなに大きく『サティ、サティ、サティ』(と叫び続けてしまった)」と。

ちやぐとう。うぬブイぬ反対んかいねーたれー、けー
止まとーんりや。「とーんちやくれー大事な宝やるむん
なー」りち、あんし隠みてい。

あんしなー一人ぬ一オ、「いやーブイぐわーや、かん
し願ぬ通いぬ品物りちとうらさつとーるブイぐわーや
分かとーしが。くぬ私あ扇ぐわーる。くんぐとーぬ破
り扇ぐわー、くれー珍らささつやーくりが宝りーねー。
だーあんしん暑さぐとう、いひえー扇んれーしんだ
りち。自分ぬ顔扇えーるふーじ。

破り扇ぐわーし顔扇じやれー、鼻ぬねーらんない。
うぬ二才え鼻ぬねーらんない。あんさぐとう一人ぬ
二オ、「とーいやー大事なとーん、いや鼻あねーんなとー
しが」。「鼻ぬねーんないんりちあんなー」、さーていん
ちやぐとうなんるーなでいねーんりよ。「あん珍しい
むん。いやーブイぐわーぬ技さしとーゆぬむん 私あ
物ん技そーん。んだなー、あんしえー反対に扇んだひー
りち。反対に扇じやぐとう、またとうんじてい鼻ぬ。
とーなーくれー、大事な宝物りち。

あんさーい、うりから家かい帰つい、いんねーすん
ねー二人大きな望みん持つちるうぐとう。またうぬあ

そうしてこの棒を反対に指すと、止まってしまった。
「ああ、これは大事な宝物だなー」と、隠した。

そうしてもう一人の青年が「おまえの棒は、こうし
て願いが叶えられる棒であるということは分かつてい
るんだが、この私の扇は、こんな破れた扇、これが宝
だということは珍しいことだ。しかし暑いんだから、
少しは扇いでみよう」と。自分の顔を扇いだようだ。

破れた扇で顔を扇ぐと、鼻がなくなってしまった。
その青年の鼻がなくなってしまった。そうしたら一人
の青年が、「もう大変なことだ。おまえの鼻がなくなつ
ているよ」と。「鼻がなくなるということがあるか」と、
さわってみると（鼻はなくなつていてるんだから）すべ
すべしていた。「これは珍しい事だ。おまえの棒が技を
したように、私の物も技をした。もう今度は反対に扇
いでみようね」と、反対に扇いでみると、また鼻が出
てきたようだ。もうこれは大事な宝物だと。

そうしてから（この二人は）家に帰った。こうい
ふうにして、二人は大きな望みを持っているんだから

た二人生まりてゐるうぐとう、うぬたき生まりてゐるうぐとう、首里んかい行ぢえーるふーじ。

あんし、一人やなーうみちつとう叶わてい、松山御殿ぬくぬ下男子んかい、下男子とうしうまんかい使と一
るふーじ。松山御殿ぬくぬ女ん子ぬ入り婿なれーやーり思いしえー、やつぱり思い叶わてひうまんかい下男奉公入つち。

また一人ぬ者のー、うぬ泊美人りしえー、またゆぬ泊ぬ殿内ぬ侍え方ぬ長男ぬ、すでに妻るなとーたんりぐとう。またうりんうまんかいうりん思い叶わてい、下男子とうしうりん使とーぬふーじ。二人、なーはかぐちえー、なー開きとーるふーじ、あんしなーめーめー思いる所んかい。

あんにーかんにーするうちに、くぬ一人ぬブイぐわー持つちょーる二才、松山御殿ぬんかい行ぢ働ちょーる二才。くれーちゃーさらーくぬ自分ぬ望ん叶わいがやーり、毎日夜々うり考とーしがなー、ちゃーしん簡単ねー考ららん。相手えなー松山御殿ぬ一人女ん子、自分やなー使用者るやい。あんやしがくりんなーーちぬ運命ん

ね。またそのようにして二人は生まれていて、それにつり合うくらいに生まれててゐるんだから、(この二人は)首里に行つたようだ。

そうして、一人はもう願いも叶わつて、松山御殿の下男として、そこに使われたようだ。松山御殿の入り婿になりたいと思つてゐる青年は、やつぱり思いが叶わつて、そこに下男奉公として入つた。

また一人の青年は、この泊美人といふのは、すでに同じ泊のあの殿内の侍の長男の妻であつたというからね。またその青年も、思い通りに事が運び、下男としてそこに働くようになつた。二人の青年は、そういうふうにしてもう糸口は開けたようだね。もう各々の思う所に。

そうこうしてゐるうちに、この棒を持つてゐる青年は、松山御殿で働いてゐる青年ね。この青年はどうすれば自分の望みが叶わるだろうと、毎日夜々このことを考へてゐるんだが、どうしても簡単に考えることはできなかつた。相手は松山御殿の一人娘であるし、自分はもう使人だし、だがこれももう一つの運命とで

り言がやー、なー運命ぢきらつてゐるうんりぐとう。うまやあさていりがらー、うぬ下男子ぬ考、くれー技しわるなー、ちやーしん早く思ひとうぎらんねーならんしがりち。望み叶わらんあれーならんしが。

考まんげーそーに、あさていやうまや別から入り婿とうつてい結婚式りち、うぬ日がらなどーてーるふーじ。とーくれーなー日あさていなどーい、私ねーなーくぬ道具お持つちょーてい、くぬブイぐわー持つちょーていくりがんぬーがん入り用はんさりーぬ、くぬていーちん機会ぬねーらん。くりちやーされーましがやーりち考とーし、なー自分ぬ真心ぬなーとうがみーやすていん、くりただぐどうしえーならん。知恵いじやしわるやるりち。

考まんげーそーるうちに、うまやなー結婚式りちじこーうーぐなしつし。乳親が一人女ん子やなー、便所まりんちやー追いるあたいぬあたらさそーる、うぬあたいぬ身分ぬあぬ人やぐとう。まーまでいん追いるあたいし、くぬ自分ぬ望えとうきららんるあたんりぐとう、くぬブイぐわーしえー。あんしくぬ「才やなー、くれーふーじんねーらん心ぬどうがめーすていん、なーくぬ

もういうのが、もう運命づけられてゐるんだから、その下男はどうしてもあさつてという日には、どうにか技をして、ぜひとも早く思いを遂げないと(考えていた)。

考え／＼してゐるうちに、あさつては他から入り婿をとつて結婚式という日となつていていたようだ。ああ！もうこれは日はあさつてとなつていて、私はこの道具は持つてゐるのに、この棒は持つていてというのに、少しもこの棒を必要とする機会に恵まれない。これはいつたいどうすればいいんだろうと考えて、もう自分の真心がとがめはするんだが、これはただこのままにしてはいけない。知恵を出さないと云へないと。

そうこうして考へてゐるうちに、その家では結婚式ということで大変な騒ぎであつた。一人娘であつたので、乳親が便所までもずっと追う程にかわいがつていた。それ程の身分のある人であつた。もうどこまでも(乳親が)追つて歩くので、この棒でさえも望みをとげることができなかつたそうだ。もうこの青年は、みつともなくて心がとがめはするが、この娘が小便をする

「女ん子ぬ小便しみしぇーる便所ぬ下んじ隠くてい、どうにかしわるやるりち。」

「あんさーい悪さんれー思いじちる一便所んじ隠りてい。夜、夜中隠りやーい、うぬ人が小便しーがめんしぇーる場合になー、ちーぬしきてーるふーじーうぬブイぐわー。便所かいちーぬしきたぐとう、なーうぬ人ぬ尻ん穴ぬなーあびちらかち、なー御殿殿内うすましい大騒動やるふーじ。なーんちや人間ぬ尻んれーぬ、股ばしぬなー「サティ、サティ、サティ」し呼びたんどーれー大変やぐとう。」

便所の下に隠れていて、どうにかしないといけないと考えた。

そうして悪いとは思いながら、便所に隠れていた。夜中そこに隠れていて、その人が用を足しにきた時に、この棒で指したようだ。便所で指したら、その人の尻の穴がもう叫びまくつてしまつたので、御殿殿内は大変な大騒動となつてしまつた。もう人間の尻が、股ぐらが「サティ、サティ」と叫んでしまつたんだから、大変なことであつた。

「もう私の娘は、大変かわいがつて育ててきた一人娘

だが、私達のこんな大きな御先祖の前に恥をさらしてしまつて、世間に申し訳がたたない。もう大切な子供ではあるんだが、これは切つて捨てるよりほかならない」と、父親は思つていたようだ。しかし乳親は、「このようにして幼少の頃から私が育てたウミングワ、貴方の刀にかけるということは、もう私も生きている価値もない程に苦しいことです。このようなことはただ事ではない、確かに神事だと思います。股ぐらがこん

「あんさーい、うまなー御殿殿内えなー大騒動なてい。」「なー私あ女ん子るくれー、じこーあたらさしあんし育ていたる私あ一人女ん子やしが、なー私たーうつびなーぬ御元祖ぬ前んかい恥さらち、世間ぬんかいなー申し訳んたたんぐどう。あつたる子ややていん、くれー切ち捨ていーしかふかならん」りち、男ぬ親ややてーるふーじやしが。あんさーに乳親が、「かんしなー小さ幼少にから私が育ていあぎたるウミングワ、貴方ぬ刀にかきーんりしぇー、なー私にん生ちちよーていゆちらーねーんあたいくちさいびーぐどう。うりにかい確かに

くれ一神事るやるはじやいびーぐとう、ただ事おあい
びらん。股ばしぬあんし呼びーんりしえー、ただ事お
あいびらんぐとう。まじ待つちょーでいくみそーり」
りち、なだみてい。

そーるうちねー、くぬ下男の一なーうれ」聞きちるう
んりぐとう。どうーちなー隠かくりてい、様子ようするうかがとー
んりぐとう。あんし「サリサリー」し、出いしてい行いぢ、
うぬ主人ぬんかい願いがてーるふーじ。「実際じつざいぬとうくる貴
方じゆなーくぬ殿内とうんちうちんかい、大おほさる災難さいなんぬいちかや、
大きぬ災難さいなんぬあつい、貴方じゆぬ一人女ひとめのわん子こんかい大おほ変かへな
まさぬ災難さいなんぬはつちやかいぐとう。くぬ場合ばねーいやー
やうぬ殿内とうんちんかい行いぢ、うまぬ女めのわん子こ助すけきていうさぎ
りりち、私わねー神からぬ使つかえし、私わねー貴方じゆなーんか
い、かんし下男奉公げんぶくこうにあがとーびーしが。実際じつざいぬと
くる見みちえーなー私わにん百姓姿ひやくそ、百姓ひやくなでい見みんしえー
ぬはじやしが、実じつえ私わねーただぬ人ひとおあいびらん。生う
まりがなーぬ天てんからぬ授たまぎ、貴方じゆなー女めのわん子こ助すけいてい
くいりりち、私わねー神からぬ使つかとうし、なー私わねー
貴方じゆなーんかいかんし下男げんぶにあがとーぬばーやいびぐ
とう」「いやーあたいぬ者わぬ、下男子じなんくわぬうりんかいくち

なに叫び続けるということはただ事ではありません
で、まず待つて下さい」と、(父親を)なだめた。

そうしているうちに、この下男は(この話を)聞いていたんだからね。いつも隠れて様子をうかがつて、いたそうだ。それで「サリーサリー」と出て行って、ここに主人に願い出たようだ。「本当のところ、貴方がこの殿内に、いつか大きい災難がふりかかるから、貴方の一人娘が大変大きな災難に出会うからね。この場合に、おまえはこの殿内に行って、その一人娘を助けてあげなさい」ということで、私は神からの使いとして、私は貴方たちにこのようにして下男奉公としてあがつてているわけですが。本当のところ見かけは百姓姿、百姓に見えるはずですが、ただの人ではない。生まれながらに天からの授け、貴方たちの一人娘を助けてきなさいと、私は神からの使いとしても私は貴方たちに、このようにして下男としてあがつてているわけですから」「おまえみたいな者が(自分達の)この話にくちばしを入れるのか。おまえも切り捨ててやろう」

ばし入り一み。いやーん切り捨てていとうらさ」り
ちそーし、くりん乳親ぬなだみて。「くぬ下男ぬ言し
本当やるむんやれー、本当んれーやるむんやれー、く
りんかいまかしみていしむぐと。まじえーな一刀か
きーしきー待つちよーていくいみそーり」りち。願た
ぐとう、実際なー自分ぬ子ああたらさるあぐと。「とー
あんしえーまじ待つちよーちゅさ」んち。あんし主人
の一待つち。

さぐとうくぬ三良が、「くれーなー別事おあいびらん。
人に見してーならん、親にん見してーならんとうくる
やし、私達あ下男子ぬ見じゅんりしえー、あぬーよー
いならんくとうやいびーぐと。あんしえー乳親のー
まじちよーていしむぐと、クチャぬ暗しんまでー
う供さびら」りやーに、行ぢやーなかい。だーんちや
んまる開きらんあれーならんぐと。あんさーに自分
やブイぐわー隠ち持つちるうんでいぐと。反対にちー
ぬしきてーるふーじ、うぬブイぐわー。あんぐとう止
まてー、んちや止まいしえーあたいめーやぐと、あ
んし止まやーい。

あんしなーうにーからだーうれー、またうつぴなー

としているところを、これも乳親がなだめて。「この人
の言うことが、この下男の言うことが本当であるんで
あれば、本当であるんであればこの下男にまかせても
よい。まずは刀をかけるのは待つて下さい」と。願つ
たので、もう本音としては、自分の子供はかわいいの
で、「それではまず待つてみるとしよう」と、主人
は待つた。

そうしてこの三良が、「これはもう別事ではありませ
ん。人に見せてもいけないし、親にも見せてはいけな
いところなので、私達下男が見るということは、ただ
事ではありません。ですから乳親は一緒に来てよいで
すので、クチャまで（娘の）お供をしましよう」と、
ついて行つた。（そこへ行つたら）もうそこを開けない
といけないんだから。そして自分はブイを隠して持つ
ているんだからね。そうしたら止まつて、まあ止まる
のはあたりまえだから、そうして止まつてね。

そういうふうにしてもうこれは、こんなに大きな騒

ぬ騒動ぬうくりたゞと。相手ぬ入り婿なつていちゅ一
る人ん、なーいい戻さつてはいるうんりぐと。うんぐ
とーる迷惑ぐとおねーらん。なー縁談の一なー破談す
んり。いー戻さつてはいるうんりぐと。

あんし乳親が仲とうて、「くぬ人おくぬ下男男子やた
だぬ人おあらん、くまぬ後継ぎすんりちる生まりと
ぬはじやぐと。かんし生まりとーぬはじやぐと。
かんし生まりて、うんぐとーぬ難しい病えん治ちと
らちえーぐと。うりんかいなー入り婿とうつて、
くまぬ家庭え守らちとうらしりち、乳親からん願てい。
またうまぬ役人達がん「あんしゆたさん」りち、願え
ぬ通やーなかい。生涯とうとう一まうまぬいーからは
なしがさきてはい。うまぬ入り婿なつて、栄たんりぬ
話。願ぬ精靈りぬ話。

またなーーちえー残とーん。なーー人ぬ二才やちゃー
なたがやれ。くりんうみちつと叶わて、泊美人が
夫持つち行ぢよーる侍ぬ家んかい、下男奉公そーるばー
やしが。くりんなー心ぬうちんじえー、じこー急じょー
るばーやしが、「私あ願、私あ願」りち。あんやしが簡
單に時期ぬくーらん。あんにーかんにーするうちねー

動になつたんだからね。相手の入り婿となつてはいる人
も、もうそこからは戻されているんだから。こんな迷
惑なことはない。もう縁談は破談ということで、戻さ
れているんだからね。

そうして乳親が仲をもつて、「この下男はただの人で
はない。この後継ぎをするために生まれてきて、こんな
はずだからね。このようにして生まれてきて、こんな
難しい病気も治してあげたから。この下男を入り婿と
して、ここ家庭を守るようにしてくれ」と、乳親か
らも願つた。また役人達も「それでよい」と、願いが
叶わつたそうだ。一生かわいがられて、そこの入り婿
となつて栄えたという話。願いの精靈という話である。

またもう一つ残つてはいる。もう一人の青年はどうなつ
たかといふとね。この青年も願いが叶つて、泊美人が
嫁いで行つてはいる家に、下男として奉公してはいたよ
うだ。この青年も心中では、「私の願い、私の願い」と
大変あせつていたようである。しかしそう簡単にはチャ
ンスは訪ずれなかつた。そういうしてはいるうちに、こ

くぬ美ら人ぬ夫お、唐旅あたとーるふーじ。唐んかい、
今ぬ留学りしとーゆぬむん。あんし三年三カ月やるふー
じ。またくぬ人ぬ唐旅ぬ任期や家から出じてい三年三
カ月。あんしいんねーすんねー唐んかいくぬ人お渡つい、
夫お渡やーい。家ねー残とーしえーくぬ下男ぬ、扇ぐわー
持つちよーる「才とう、うりから別に女中どうか何どう
かうるはじやしが。

なーあんにーかんにーし今日ん暮らち、明日ん暮ら
ち、するうちにうぬ泊美らーりぬ人お、なーただかー
ぎびかーん美さる、本当ぬ中味やなー自分ぬ貞操守い
する女おあらんてーるふーじ。あんしくぬ下男三良が、
うぬちやー色みーていそうぐどう。うぬ女ん実際やなー
男欲さんそーしが、侍ぬ妻とうし、あんし簡単に夜ん
出じてい歩からんるあぐどう。あんするうちにうぬ時
期ぬちやーい、二人話とする時期ぬあてーぬふーじ。
くぬ下男とう美らさぬ人とう。

あんしうぬ美らさぬ人ぬ言い分ぬ「えー下男子、いやー
や心ぐり一生まりやつさーやー。なーばんじなとーてい
にんぐるりちんうらんふーじやい、妻りちんとうめー
いきんるあい。いやーや男生まりてい、男ああらんさー」

の美人の夫は、公事から唐旅の命令が出た。その唐旅
は今の留学と同じようなもので、三年三カ月の期間で
あつた。そういうしてこの人は唐に渡つた。それで家
に残つてているのは、扇を持っている下男と、他に女中
等がいた。

もうそういうふうにして今日も暮らして、明日も暮
らして、そうしているうちにこの泊美人という人はも
うただ美しいだけであつて、本当の中味はもう自分の
貞操を守れるような女ではなかつたようだ。そして、
この下男の三良が、いつも色目づかいをしていたから
ね。この女も本当は男を欲しがつてゐるんだが、侍の
妻としてそう簡単には夜出歩くことはできなかつた。
そうしてゐるうちに、二人で話をするチャンスがやつ
てきた。この下男と美人がね。

この美人の言い分は「おい下男、おまえはかわいそ
うな生まれだね。もう男ざかりだといふのに、仲のよ
い女というのもいないし、妻も見つけることができな
い。おまえは男に生まれながら男ではないよ」と。こ

りち。かんし遠さから感まーち、うぬ女ぬ色氣いじやー

い話いしえーるふーじ。

あんすべとうぬ下男のーまた、あはー私あ願ぬ通い
ぎきーぬみぐていぢよーるむんなー。とー私にん意地い
じりわるやさりやーなかい、「いえーさい、アヤーメー」
実際や貴方が言んねーし、私ねー心ぐりーむのーあら
んどーやー。私にん男やんどーやー。貴方があん言る
むんやれー、私なかいや貴方なー家庭かいあんし来しえー、
貴方ぬ夫ぬいちか唐旅ぬあてー、唐旅ぬあやーい貴方
寂さしみてーならんくとう、いやーやあぬ御殿ぬんか
い行ぢやーい、あまんじくぬアヤーメー慰みりりち、
私ねえ、天からぬ使るやいびんどーや。私ねえ本当ぬ
とうくろお、あぬただぬ人おあいびらん。ただぬ人ん
りち、また貴方がただぬ人り思いしえーらー、私にん
証拠貴方んかいうみかきていすむしが「りちやぐどう。
「ぬぐわいやーあん言る。いやーうぬ言しえーちやー
る意味やが」りちやぐどう。「実際やなー、私ねー女ん
なられーならりーん。また男んなられーならりーびん
どーやー」。あんし「えーあんやんなー、とーあんしえー
うり見みてーとうらさんなー」りち。うぬ人おなー、

のようにして遠くから感づかせるように、この女が
色気を出して話をしたようだ。

だからこの下男もまた、自分の願いが叶えられそう
な時期が巡ってきたなど。よし! 私も意地を出してや
ろうと、「アヤーメー、実際には貴方がおつしゃるよう
に、私はかわいそうな者ではないよ。私も男だよ。貴
方がそうおつしゃるのなら、私が貴方たちの家庭にそ
ういうふうに来ているのは、貴方の夫がいつか唐旅に
出かけた時に、貴方を寂しがらせてはいけないから、
おまえはあの御殿に行つて、あそこでアヤーメーを慰
めなさいと、私は天からの使いですよ。私は実はただ
の人ではありません。貴方が私をただの人間だと思つ
んでしたら、私も貴方に証拠をおめにかけてもよろし
いのですが」と言つたからね。「どうしておまえはそ
ういうふうに言うか。おまえが言うのはどういう意味か」
と言つたからね。「本当はもう、私は女になろうと思え
ばなれるし、また男にもなろうと思えばなれますよ」
と。そうして「ああそうか、それじゃあそれを見せて
くれないか」と。もうその人は、アヤーメーは大変色
氣があるというんだからね。

なーアヤーメーなーじこー色氣いろけぬあひるすんりぐとう。

あんさーい「とーあんしえー歩あつちみそーれ」りやー
なかい、裏うらぬ座じやなかい行いんぢやーい、くぬ扇おひさーなかい
自分ひとりぬ股またばしえ扇おひやぐとう。うまぬねーらんなどーん
りよ、男いきがぬ道具どうぐおねーらんなどーい。あんさーい「とー
見みじみそーれーくぬふーじーやいびき、私わんねー實際じつざいた
だぬ人ひとおあらん。天あまからぬ使つかるやいびんどーやー」。あ
んしうぬアヤーメーびつくりし、「とーいやーなー男いきが」と
しあぬ親うやからぬ譲ゆりぬうりがねーらんりねー、いやー
ゆちらーねーらんむんなー。いやーが私わあ寂しづかさ治さすん
りちゃんてーんちやーしないが」りちやーしないいが。あい
びらんどー、んだなーあんしえーまた元はじぬ姿しづかないびら
ひー」りち。反はん対たいに扇おひじやぐとううりがいじてい、あ
にーかにーしうぬ女めのんなー、あたいめー貞操守ていそうまむする
女めのおあらんるやんりぐとう。ぐーなでーぬふーじ、二ふた
人ひとぐー隠かくりてい、あにーかにーし三年さんぬん暮くらち。
いいるんしえー三年さん三カ月さんげつぬ日ひなたぐとう、夫おなー
めでたくあまから留学りゅうがくん終うわやーなかい、家いえかい帰かてい
ち。あんさーい自分ひとりぬ妻めのぬうんぐとう下男しやうめとうなとー
んりぬくとう分わかかやーい、うぬ下男子じなんくわや三年さん三さんカ月かげつぬ

そうして「それならどうぞ歩いて下さい」と言つて、
裏座うらざに行つて、この扇おひで自分の股またぐらを扇おひいだらね。
ここがなくなつてよ、もう男の道具どうぐがなくなつて。それで「はいごらんになつて下さい。このようなもので
すよ。私は実はただの人ではない。天からの使いです
よ」。それでこのアヤーメーはびつくりして、「じゃあ、
おまえはもう男として親からの譲りの（男の道具）が
ないとなると、おまえはしようがないよ、おまえが私
の寂しさを治すといつてもどうして治すか」と言つた
からね。「そうではないですよ、それじゃあもうまた元
の姿しづかになりましょううね」と。反対に扇おひいだらそれが出
て、そうこうしているうちに、この女めのももうもちろん
貞操ていそうを守りきれる女めのではないんだからね。二人隠れて
一緒いっしやうになつたようだ。そうこうして三年さんも暮らした。
いわば三年さん三カ月さんげつの日ひになつたからね。夫おなはもうめ
でたく唐から留学りゅうがくも終えて、家に帰つてきた。そうし
て自分の妻と下男と一緒いっしやうだということが分かつて、この下男は三年さん三カ月さんげつの日には切られたようだ。妻と一

日^ひねー切らつてーるふーじ、妻^{よし}していー。

あんし切らつていさぐとう、うにーから願^ねえらー大き
く願^ねり。また拍子^{ひょうし}はつちやかでい、やな言葉^{ごんぱ}使^{つか}いねー
口^{くち}うーいんりちあぐとう、世間^{しきん}ぬいい戒^{いまし}みなどーんり
ぬ話^{はな}いやんりー。口^{くち}うーてい切らつたんり。

緒に。

そうして切られたからね。この時から願うんであれ
ば大きく願いなさいと。また何かの拍子にいやな言
葉を使うとその通りになるということがあるから、世
間のよい戒めとなつたという話である。言つた通りに
なつて切られたそうだよ。

採集 S 52・8・16

読谷村民話調査団第十一班（知花利江子・富里洋子・名嘉真宣勝）

注 ①ウミングワ 主人の子、または目上の人の子に対する敬称。

②アヤーメー 奥様、既婚の士族の婦人に対して平民のいう語。

55 ち ぎ り の 話^{はなし}

話者 島袋 亀次郎（明治二十八年一月二十九日生）

翻字 知花 春美

んかしからその夫婦ぬ自然りしえー、親んぢやーや
いつペー二人ぐーなーいい友達なんそーちよー。ある
ところにあることさーね。いい友達なやーに、「いやー
が子なし、男ん子なさわん女ん子なさわん、私が男ん

むかしから、その夫婦の縁というものは、親同志は
二人たいへんいい友達であつた。あるところにあつた
話だがね。いい友達だったので、「おまえが、男の子産
んでも、女の子産んでも私が男の子産んでも、女の子

子なきわん、女ん子なきわんお互ぬ子んちやーや、互に夫婦なさやー」うりから始まるばー。

そう言つて、いんねーすんねー産まれた。一人や男ん子、一人やまた女ん子、かんし産ちやぐとう、その親んちやー二人が約束どうーい夫婦なしんそーちゃんり。

あんさーに二とくろー、またなー、おいおい年んとういしんれー、うぬ夫婦ぬぢやーや、また子産し繁盛、栄ひるがていさかんにくぬうち世う渡たんりる話ぬ聞かさつたんばーてー。うれーうつさる分かいる。

産んでも、お互いの子供たちを、夫婦にしてあげようね」と、そのことから始まつたそうだ。

そうこうして、産まれたひとりは男の子、ひとりは女の子、このように産んだので、その親たちはふたり約束どおり夫婦にしたそうだ。

そうして、ふたところの両親は年をとり、その子どもたち夫婦は子も産まれて繁盛、栄えて、この世を渡つたということである。そんな話を聞かされたよ。それはそれだけしか分からない。

採集 S52・8・16 読谷民話調査団第三班 伊波洋子・阿波根初美

56 子供の寿命

著者 照屋寛良(明治四十一年五月十日生)

翻字 知花春美

いつペー昔、沖縄にあたる事。くぬじこー裕福な金持ち人ぬ一人男ん子やんでいしが、うり一人るうんでい、子や。なーうりんれー、なー失いねー大事でいち一ちスンカン桂ぐわーんでー割いねー、まるねーんないぐとう

たいそう昔、沖縄にあつた事。とても裕福な金持ちの一人息子で、その子一人だそうだ。もうその子を失つたら大変だと一つだけあるスンカンを割つたらなくなるので同じことでね。それが、その一人息子が重い病

りち。あんし、くぬちゅー病かかてい、うぬ一人男ん
子ぬ、ちゅー病かかていさぐとう。くぬ物知りんかい
行ぢ、物知りりしえー今ぬユタリしてー。「貴方あ子や、
くれーなー今度おなーじこー危ねーやぐとう、私あ本
なかい、貴方あ子助きーる事ぬ書かつとーぐとう、私あ本
が言いし良う聞きよー」でい言やーい。

きなさい」と言つた。

（物知りになつてしまつたので物知りの所へ行つた。（物知りといつたら今ユタだね）「貴方たちの子は、今度はもうとても危ないので、私の本の中に貴方たちの子を助ける方法が書かれているので、私が言うことをよく聞

「何でしようか」と聞くと、「ここから、貴方たちのところから北の方角に向かつて行くと、北の方角の深い山の底に、木も生えてなく、草も生えてない枯れた所があるので、そこで北のお星様と、南のお星様が集まられて、碁を打たれていますので、そこへ行つて、お願いしなさい。子どもを救うお願ひをしなさい」と。

「何やいびーが」りち、「くまから、貴方から子ぬ方
んかい向かてい行ぢ、子ぬ方ぬ、深山ぬ底んかい、
山ぬ底んかい、木ん生て一無らん、草ん生て一無らん
枯りとる所ぬあぐとう、うまうてい子ぬ方ぬ御星とう
午ぬ方ぬ御星ぬ集みそーやーなかい、碁うつちみしえー
ぐとう、うまんかい行ぢやーにかい、御願し、子救い
る御願し」り。

あんさーい、子ぬ方んかいちやー通いし、深山んかい行ぢ、ちやー通いされー、うまんかい、やつぱり山底んかい、草ぬはぎとーる所んかい、木ん生てーうらん、草ぬはぎとーる所んかい神様ぬ二人碁うつちみせーたんりよー。あんさーにかい、碁んかい夢中なみしえーる所んかい、「あー寄しりやーびら、寄しりやーびら」りち、夫婦なでい行ぢやーい、あんさーい、「人ぬ神様

そして、北の方角へずっと行つて、深山へ行くと、そこに、山奥に、草がはげている所、木も生えてなく、草がはげている所に神様が一人碁を打つておられたそうだ。そして、碁に夢中になつた所に、「ごめん下さい」と、夫婦で行くと、一人の神様が、「ごめん下さい」と言つて、(生身にはシジヤと言うそうだ。昔のことばではね) そして、振

が、うまうていシジヤぬあびーんねーあん」りち、（生身んかいシジヤり言いんりぐとう、昔くとうばしえー）あんし、とうん返たぐとう、うぬ神様が、「ぬぐわ、いつたーや人ぬあんし夢中なで、碁うつちゆる所んかい、『寄しりやーびら、寄しりやーびら』りしが、何ぬ願むちぬあが」、「あ一本當ぬ話うんぬきーびら、私達あ家庭からんなさりーしやいびーしが、悪ん欲んしえーねーびらんしが、一人男ん子ぬなー、じこーちゅー病かかていーくりなー失いねー私達あなー何ん望えねーびらん」「あんし、貴方あ子幾ちないが」りちやぐとう、「十八やいびーん」り、「とーあんしえー、午ぬ方ぬ御星、帳簿あきれー」りち、帳簿あきらちえーるふーじ。あんきぐとう、某ぬ何番地ぬ一人男ん子や十八に死ぬんりち書かつとーんりよ。天ぬ引ち取いんりち書かつとーんり。

「とー貴方達あ子や十八になー、まじ、天ぬ帳簿にかんしあつさー」「あんしーねー、御願しーが来びーしえー、貴方なーたー御二一人方かからんあいびーねー助からんりち、物知りから教さつている寄しりやびーたん」「えーあんやんなー。とーあんしえー、午ぬ方ぬ御星、帳簿

り返つてみると、その神様が「何だ、おまえたちは、人がこんなに夢中になつて碁を打つていてるところへ『ごめん下さい、ごめん下さい』と言うが何の願い事があるのか」「もう本当の話を申し上げましよう。私たちの家庭のことですが、悪も欲もやつておりませんが、一
人息子が、とても重い病気にかかつて、この子を失なうと私たちには何の望みもありません」「それで、貴方の子は幾つか」と言つたので、「十八歳です」と。「さあそれでは南のお星様、帳簿をあけれ」と帳簿をあけさせたそうだ。すると、某の何番地の一人息子は十八歳に死ぬと書かれていたそうだ。天が引き取ると書かれていたそだ。

「はい！貴方たちの子は十八歳に、まず天の帳簿にこのようにあるなあ」「そうすると、お願いにあがつたのは、貴方方お二人に頼らなければ助からないといつて、物知りに教えられてここへ来たわけです。」「ああそうか。では南のお星様、またも帳簿をあけなさい、

またん開されー、くつたーや誠やみ、誠あらにりち、
うり調びりしらりち、「くつたーや誠、洗ていん落ていー
びらんさー。夫婦ふうふ、子ん誠くわいのぶ、いつペー」「えーあんや
み、とーあんしえーなー、せつかく誠な者むかわらぬちやーや
れー、なーなるべこ一命延びていどうらさやー。くぬ
浮世うきよ、自分なー二人が勝手かつてるやぐとう」でいち。

「この人たちは誠かそうでないか調べろ」「この人たちは誠、洗つても落ちません。夫婦、子も大変誠な者です」「あつそうか、では、せつかく誠実な者たちであるならば、なるべくは命を延ばさせてあげよう。この浮世は自分たち二人の勝手だからね」と。

あんさい「いえ、いつたー夫婦よ、いつたーが沖縄うてい、いちばんまーさしり思いしぇー、沖縄うていうり以上薬なていまーさしれー何やが」でいちやぐどう、「あんやいびーさやー、沖縄うてい薬なていまさしりーねー山羊煎じるやいびーさにやー」りちやるふーじ。「とーうりやさ。山羊煎じえ人間薬、あんし、また、なーーち、沖縄うとーいねーらんあねーならん品物、うり食みねー、人ぬ真心表りしぇー、なー飲み物ねー何やが、いつたーうり分かいみ」でいちやぐとう、また夫婦、考てい「あんやいびーさーや、沖縄うてい、飲りうむっさんすれー、またやんりーしん、本当ぬ真心表すしりーねー金城御酒るやいやさびらんがやー、首里金城御酒」「とーとーうりやさ。酒飲ましーねー人ぬ心お分かいぐとううりやさ。とーあんやらー、

そうして、「おまえたち夫婦よ、おまえたちが沖縄でいちばんおいしいと思うもの、沖縄でそれ以上の薬はないというほどのもので、おいしいのは何か」と聞いたので、「そうですね、沖縄で薬にもなつておいしいものといえば山羊汁ではないでしょうか」と言つたようだ。「そのとおりだ。山羊汁は人間薬、そしてまた、もうひとつ沖縄で無くてはならない品物、それを食べる、人の真心が表われるもの、もう飲み物では何か、おまえたちは分かるか」と言つたので、夫婦は考えた。「そうですね、沖縄で飲んでおもしろくもあれば、またくずれるのも、本当の真心表わすものといえば金城御酒ではないでしょうか。首里の金城御酒」「うんうん、これだ。酒を飲ますと、人の心が分かるのでこれだ。それでは、私の前に山羊汁、山羊薬を持つてきなさい。

私たち一前んかい山羊煎じ、山羊ぐすい持ちつち。私た一
が食まん。うれー、天ぬ神々んかい供しるやぐとう、
私たーが食まんどー」

私たちが食べるのではない。これは天の神々に供える
ものなので、私たちが食べるのではないよ」

あんさーに、供らわざーい、「貴方あ子や徳ちきらやー、
と一午ぬ方ぬ御星よ、いやーや帳簿神やぐとう私ねー
一番大将やしが、いやーがる帳簿お持つちよーぐとう、
と一上んかい八ぬ字いけー書けー。あんさぐとう、「とー、
いやー子や上んかい十八ぬ上んかい八付きてーんろー、
分かとーらやー、あんさーい、八月八日えうりになぞ
らえていまぎ注②祝しーよ」今からなー何十年先り、とー
うれートーカチ、八十八、トーカチぬ由來、あんやてー
るふーじ。

そうして、供えさせて、「おまえたちの子どもに徳を
つけようね、よし、南のお星様よ、あなたは帳簿神な
ので、私が一番大将だが、あなたが帳簿を持つている
ので、上に八の字を書きなさい。そして、「おまえの子
どもは、上に、十八の上に八をつけたよ、分かつたか、
それでは、八月八日になぞられて大きなお祝いをしな
さいよ。今からもう何十年先のことは、はい、これが
トーカチ、八十八、トーカチの由來はそうだつたらし
い。

注① スンカン 碗のこと。

明治以降は本土からの磁器が多く使われた。

注② トーカチ祝 八十八歳（かぞえ歳）の米寿祝をトーカチスージと称し、現

在でも親戚、隣近所、知人を招いて盛大に酒宴を催す。



トーカチ

脈とり名人

著者 当山三次郎(明治三十四年八月十日生)

翻字 村山友江

ある人の人間ぬ死相分かする人。やつぱり病氣しち、
うりん偉い人やんしえーたんり、病氣そーる人お。

あんさーにうまぬ奥さん、病氣しめんしえーる奥さん
がじこ一心配にあたてい。「あぬ識ぬある人お、いつ
べー物知つちょーる人やんりんむん、あぬ人いちやてい
行ぢ、あぬ私達主人ぬ病氣ぬ状況んでー明かするはじ。
頼り來」りちさぐとう、「あんやいびん」りち。なー偉い人
やんしえーる。まーいひえーじこーぬ上ぬ偉い人
やんしえーべとう。「貴方なー家庭んかい、私が行ぢゆ
る資格おなー、びつくりさびーぐとう許ちきみそーり」
り言ちやぐとう。「あらん主人のー、主人のーやーど
りん助きていとうらし。偉い低さんりる社会や私達言
らんぐどう」りぬ言葉あ、よくうぬ人んかい発表やし
ちめんしえーたんりしが、うぬ奥さんガ。あんしひつ
くりそーしが「あんし分かんしえーていから来びさ」
りち言ちえーがはん。「あんしえー来きりよー」りちさ

人間の死相を分かすことのできる人がいた。そして
ある偉い人が病気になつた。

そうしたら、そここの病氣をしている人の奥さんは、
大変心配した。それで「あの人は（人間の死相を分か
す人）大変な物知りであるらしいから、まずはその人
に会つてみたら、私の主人の病氣の具合も分かるかも
しれない。頼んでみよう」と行つてみると、（またその
人も）「ああ、そうですか」とね。（しかしその病氣を
している人は）、大変偉い人であつた。それで「私には
あなたの方の家庭に行く資格などありませんので、もう
(あなたの話を聞いて) びつくりしていきますのでどう
か許して下さい」と言つた。奥さんは「そんなことは
ないよ、どうか主人を助けて下さい。私達は身分が高
い低いというようなことは言わないから」ということ
を、この人に強く説明はしていたようだがね。それで
もその人はびつくりしていだが、「そういうふうに理解

ぐどう。

やつぱりある、偉い人のー、うぬ人おじこー低くて、
いひえーうしえーとーるちむえーぬ頼たのみるやたんり。
王様おうさまがーありが來んりちゃれー。あんさぐとう一番座
んかい休やすくていめんしえーぐとう、主人のー。また頼たのまつ
たる人お、ナカメーんかいのそのそぬしかかたれー、
「来わ、ありがとう來きとうらち」りち、うぬ奥おくさんがお
礼やりつぱやんりしが、いーねー汚よだれなく見ちよ、頼り
るうしがうぬ人お、汚よだれなく見ち。やつぱり脈な、脈取なつ
ていうぬ人おぬ病氣びょうきえ分かすんりぬ人おやたんり。

あんさぐとうなー、「うりんかい私わあ手てぬ首くびかちみら
すんなー」りち、見下くさぎとーてーぎはん。あんすぐとう
あぬ自分の家の猫の足紐あしゆしくんち、ナカメーから休やすてい
める所ところんじくんちよ。えーあまうてい猫ねこおうつちえー
んてー、休やすていめーる主人しゅじんぬ側わきんかい猫ねこお持ち行いぢ。
猫ねこ足ひじぬ首くびくんち、紐ひもからくりが溫度おんどみしてーぎはん
よ、うぬ人おんかい。

あんしさぐとう、さーてい見みちやれー「貴方あなたー主しゅ
人のーやー、うりだきぬ姿すがた、偉えらい人間にんげんやいやすし

していらっしゃるんでしたら、行きましょう」と言つ
たようだね。「じゃあ来て下さいよ」とね。
しかしこの偉い人がは、この人は身分が低いとい
ふことで、頼みはしたもののは少しは馬鹿にしていたよう
だ。そして主人は一番座に休んでいた。また頼まれた
人は、居間におそるおそる上あがつて来たら、「ありがと
う、よく来てくれたね」と、この奥さんはちゃんとお
礼いもしているんだがね。いわばこの人は頼んである
んだが、汚なく見ていた。そしてその人はやつぱり脈
を取つて病名を分かす人であつたそうだ。

そうしたからもう「こいつに私の手首てをつかまえさせ
せるか」と、見下くさげていたようだね。だから自分の家
の猫の足を紐でくびつてね。居間で猫の足はくびつて、
主人が休んでいる側に持つて行つた。そしてその猫を
くびつて、主人が休んでいる所へ持つて行つて、紐づ
たいてにその人に見せたようだね。

そういうふうにしてさわつてみたら、(その人は)「あ
なた方の主人はね、それだけ偉い人間ではあるが、人

が、内や人間ぬ作い形るやいびーさー。あんまりうちいらさーねーびらんさーり、「言やつたんり。「あつさみよー」りち、奥さぬんびつくり。

うぬ人おなー、うぬ病氣そーぬ人ぬ、偉い人ぬ手ぬ首ぬ紐やくんらん、猫ぬ前足りがらーしんじゃーい。うりから音線る通てい、うぬ線かちみらさつたぐとう、「貴方なー主人のー人間らしくぬ姿あまんりめーらさいびーさー上がーやいびーしが、猫ぬ内科る持つちめーびーさー」り言やつていよ。

「あつさみよー一大事なたん。くり見下ぎーんり、大きい迷惑そーさーやー、なー迷惑ぬ方々、うま明きらかに自分のうせーとーるくとお侘さーに本当ぬうぬ人ぬ、私あ脈取らさんねーあぎたー大事な迷惑しちやん」お断りさーに、前んかい寄て い来、「本当ぬ脈さーていきり」りち、なー非常にしきりに願て いとうらしりちょー。「あんやいびんなー、本当今、脈あんたんかい温度取らちゃしえー本当に分かて いとうらち、本当実は猫るやたんどー。非常に無礼なたん。なーあんたんかい対してじこー無礼ぬ事おそーしが、なー私達がしきりにお断りしーるんさねー、どーりん実ぬだん

間の形をして いるんですけど、内はそうではないです よ」と言われたそ うだ。そ したらもう「ああ！」と、 奥さんはびつくりしてしまつた。
その病氣をした偉い人は自分の手首はくびらずに、 猫の前足をくびつた。その紐を通して触れたので、「貴 方たちの主人は人間の姿ではあるんだが、中は猫です よ」と言われてしまつた。

「ああ！もう大変な事になつてしまつた。これを見 下げたために、大変な迷惑を被つてしまつた。(もう自 分達が悪かつた事を)はつきりと侘て、本人の脈を取 らさないといけないと。私達は大変な迷惑をかけてしまつた」と。もう侘びて前に寄つて行き、「本人の脈をさわつて下さい」と、もうしきりに願つた。「ああそ ですが、本当ですか」「今、おまえに脈を取らしたのは、 実は猫なんだよ。よく分かつたね。もうおまえに対し て大変無礼なことをしてしまつたが、私達が悪かつた から、どうか(今度は)本当のだんなの脈を取つて下さい」と言つてね。

なさんの脈、現代ぬ脈さーていとうらし」り言ちよ。

うりんくりんまじな一貧乏な者なやーい、身の低さ
る人やぐとう。何までいん眺みて、なーあんすかなー
ないびらんりち、あくがりてい帰ていんならんりち、
脈取つていみんそーらち。「脈から打つちゅしえー、ちや
ぬふーじちやぬふーじぬ病氣やぐとう、ちやーしちやー
し治しみそーり」りち、習ちやぐとう。うぬ後お、日々
健康なてい、やつぱりうま一人間ぬ脈取つて、病氣治
ちきーんりる人んうしえーらんりぬくとう。

もうこの人も貧乏者であり、身分の低い人であるか
ら、あつちこつちすべて眺めて、もうどうもできま
せんと、ただあこがれて帰るわけにもいかないと、(そ
のだんなの)脈を取つた。「脈からすると、どういうふ
うな病氣であるから、どういうふうにして治しなさい」
と教えたからね。その後はもう、日々健康になり、も
う人間の脈を取つて病氣を治す人を馬鹿にしてはいけ
ないということだよ。

採集 S 52・2・27 読谷村民話調査団第十班 〈山城悦子〉

話者 照屋 寛良 (明治四十一年五月十日生)

翻字 知花 春美

昔よー、昔うれー沖縄にあたるくどうやしが、何処
にあたるくどうりちえー聞かさつてーねーん、私たー
祖父から聞ちよーしが、祖父から。

じこー貧乏者生まりやなーかい、よそんかい売らつ

昔ね、これは沖縄にあつたことだが、何處にあつた
ことかは聞いてなくて、私たちの祖父から聞いている
んだがね。

とても貧乏な家に生まれて、よそに売られてね、昔

ていよ、昔え賣いぐとう子や、男てーもちろん。あん
さーい「年に一回ぬ年ぬ夜やぐとう、ちゅーいやーや、
家かい行ぢ、年ぬ夜しつくわー」り、主人ぬ暇いーら
ちさーい、あんさーい家かい帰いに、にわか雨降やー
い、崖ぬ下んかい入ちよーてーるふーじ。雨晴らすん
りち。

あんするうちねー、うぬ崖ぬ下んかい隠くとーるう
ぬ子供ぬ声ぬ聞かりーたんりよー、はるか遠くから。
へまじなーマチユーリねーマチュー、カマーりねーカ
マーリちく親ぬ魂ぬ呼びとーるふーじ。うぬ崖ぬ下か
ら早く出じやさんねー大変りち。にわか雨ぬどしやぶ
りぬ雨なでー、うぬ崖ぬ下んかい入ちよーるふーじ、
遠さから女ぬ親ぬ声ぬあたぐどう、あんさーい、私たー
アンマーが呼びーしがやー目ねー見らんしが、呼びー
しがやーりち出じたぐどう、うぬ崖ぬすぐさつたかち
落ていたんりよ。

あんさーい家んかい帰てい行ぢ、「あんかんやたんどー
やーアンマー」りちやぐとう「えーあんやていなー」
りち。あんさーい、けー隣ぬ物知り連てい来、マブヤー
クミ往さんりよ。

は子どもは売るからね、もちろん男だよ。それで、「年
に一度の大晦日なので、おまえは、きょうは家へ帰つ
て年の晩をやりなさい」と、主人が暇をくれた。そう
して、家へ帰るときに、にわか雨が降つて、崖の下に
入つたようだ。雨を晴らすために。

そうしているうちに、崖の下に隠れている子どもは
はるか遠くから（自分の名を呼ぶ）声が聞こえたそ
だ。へまざ、マチューといつたらマチュー、カマーだつ
たらカマーとね、親の魂が呼んでいるようだ。その崖
の下から早く出さないと大変といつてね。にわか雨の
どしやぶりの雨なので、その崖の下に入つているんだ
が、遠くから母親の声がしたので、私のお母さんが呼
んでいるようだが、目には見えないが、呼んでいると
出てみると、その崖がくずれ落ちたそうだ。

そして、家に帰つて行つて、「こうこうだつたよお母
さん」と言うと、「あつそつだつたか」と。それで、隣
の物知りを連れて来て、マブヤークミをしたそうだ。

あんきーい、アンマーりしぇー神るやさやー、女ぬ
親ぬ面かじぬ呼びらんあれー、私ねーなー死じよーてー
さーやーりち、あんしうりん一ちぬ親孝行ぬ話、祖父か
ら聞ちよーしが。

採集 S 52・2・27 読谷村民話調査団第十六班（照屋寛信・知花利枝子）

それで、お母さんというのは神なんだね、母親の面影が呼ばなければ、私はもう死んでいたんだねと、それも一つの親孝行の話。祖父から聞いたよ。

59 神の美作

話者 当山三次郎（明治三十四年八月十日生）

翻字 村山友江

まーうり百姓ぬ話、百姓りしぇー農業する人でー。
昔え百姓りしぇー農業する人でー。昔え、百姓りる
言いたさ農業すしんかい。あんすしがある畑うていてー、
あぬ昔えなー粟りるむん、いつたー粟りるむん知つちょ
み、ありじこー昔え作いたんよ。

それは百姓の話だよ。昔は農業する人には百姓といつ
ていた。あなた達は粟というのを知つてゐるかね。昔
は粟をたくさん作つていたよ。

あんすぐとう粟作いる人達二人、ある畑んかい行ちー
ねーうまにん農業さーまんどーしぇーやー。うぬ一人

あるところに粟を作つてゐる人が二人いた。畑に行
けば、こつちも農業をしている人がいるし、また遠く

人間りち、普通ぬ人間りちくぬ百姓達が考へとて一る
場合てー。あんさーにうぬ百姓が、なー粟ぬ手作でい
きらち、じこー青々とうしじこー勢い正しい粟やたん
り。

ある人ぬうれー天ぬ神、なまー神り言んしえーしが、
昔え神様んかい精靈り、精靈ぬ通いみしえーたんりぬ、
まじ評判話、昔話。まじくぬ地上ぬ人間の一あみそー
らんりちやぬちむぬ、うりやんしえーたんりぬまじ話い
てー。あんしから「はい」才、でいき粟ないさ」り言
んそーちやぐとう。「私達うり腕ぬさびーぬむんぬ、でい
きらんうちやびーみ」りち、いひえー権利話いぬあが
たぐとう。「でいきーんどー」才、「うぬ神様や、精靈
や言んそーち。

またはるばる歩ちんそーち、また次にん粟ぬ手作す
る男ぬ若い者ぬうたんり。うれーまた、なんじゅまた
稚草がゆからんよー、低ぐわーし葉ん赤ぐわーし、なー
かわいそうぎさぬ粟草てー。「なー草葉あ弱ささやー二
才」、「あーなー今あ草葉あ弱さいびーしが、う天から
ちゃーしんうたびみそーりわるやいびーしがりち、は
まてい手作さびーん」り言ちやぐとう。「でいきーんどー、

離れたところにも農業している人はたくさんいるでしょ
う。その中の一人であるが、みんながは普通の人間と
考えていたようだ。すると、その百姓の粟は豊作で、
大変青々と勢いの良い粟であつた。

その人は神様であつたらしい。昔は神様に精靈といつ
ており、精靈が出たという昔話である。たとえば、地
上の人にではなくて、(神様であつたという)話だよ。
そして「はい青年よ、豊作になるよ」とおっしゃつた。
すると「私達みたいな腕の人がやるのに、豊作になら
ないはずがない」と、少々自信過剰であつた。「豊作に
なるよ」と、その神様はおっしゃつた。

(その神様は) 次は、粟を作つてゐるもう一人の若い
男の人のところへわざわざ歩いて行つた。もうその人
が作つてゐる粟は、小さくて葉の色も赤っぽくしてお
り、かわいそうなほどの粟であつた。「もう(おまえの)
粟は弱いねー、青年よ」「もう今は私の粟は弱いんです
が、一生懸命頑張りますよ」と言つた。「豊作になるよ、
豊作にさせよ」とおっしゃつたそうだ。「あなたのも

でいきらすんどー」り言んしえーたんりよー。「いやー むのー、あぬずつとあまんかい粟作とーぬ人がうしえー やー。いやーありが草葉ん見ちよーくえーやー。あり いつペーでいきーぎんどー、今成長あがいびんどー」。 また「いやーむのー、なーすぐうぢやきてる。いやー 人間よりうちやきてるあの栗見じゅんりるあたいぬ、 あぬ程度ぬ低さぬ今あかわいそやしが、うぬ実なてい いじる分かいぐとう。手作いつペーでいきらしよー二 才」りち、はんそーちゃんりよー。

あんさぐとうなーうぬ実ないるえーまねー、木や高 さしが実やむる入らん。実ぬ、植物や実や入るんしえー、 かんしかじ、くぬ首ぐわーくーてんるあぐとうたみー せーやー。実や入らんぐとうだらんうちやきて。ま たくりがむの一実い入ぬ時分なたれー、すぐむつちゆ らゆら風んかい倒さらんがやーり思いぬあたい実い入つ ち、でいきたんりぬ話い。

うりからいーねーてー、神様りしえー本当に私たん 作やーやしがてー、自分一人やでいきらさん。その天 災、天ぬでいきものるやんどー。やつぱりあぬただ自 分ぬ自信さーに、あらゆる植物ん作らりるわけーねー

のは、あのずつと向こうに栗を作つてゐる人がいるで しょう。あなたはあの栗も見ておきなさいよ。あれは (今) 大変豊作だよ、今成長してゐるよ」と。また「お まえのものは今は低くてかわいそうな栗だけど、それ は実にならないと分からぬから、(今に)おまえの栗 は人間が見上げる程に(なるよ)、一生懸命頑張りなさ いよ、青年」と、行かれたそうだ。

そうしたらその実がつく頃になつても、木は高いん だが実は全くつかなかつた。植物は実がつけば、その 木の枝は細いんだから、折れ曲がるでしよう。(その人 の作つた栗は) 実がついてないんだから、折れ曲がら ずに上方を向いていた。またこの人のは、実がなる 頃になつたので、ゆらゆらと風にあたると今にも倒れ んばかりに実がついたという話。

私たちも実際に農作物を作つていたんだが、それは 自分一人でできるものではない。天災、天からの恵み の作物であるよ。自分だけの自信だけでは、あらゆる 植物も作られるわけがない。神様はうやまわないと

らんどー。神様やうやまーんねーならん。くれー神様ぬうつたーがうんれーうまーんむんりち、さぎらつたるばーてー。

けない。(その人達は)神様がいるとは知らずに、みはなされたわけだ。

採集 S52・2・27 読谷村民話調査団第十班(山城悦子)

60 東上地の粟上納

話者 照屋 カマド(明治三十一年七月十日生)

翻字 知花孝子

うれーなー大変偉い人、首里勤み、城勤みしんそー
ちやる、偉い人達ぬめんしえーてーんてー。うぬ人達が、
うぬ人ぬ飢餓ぬ世に、いつペーな餓死、生き死にぬ出
じーる世に、自分ぬ藏あきやーなかい、米ん粟ん出ぢや
ち国んかい寄附しんそーちゃぐとう。あんし十分盃いー
みそーちゃんり。

これはもう大変偉い人で、首里勤め、城勤めをなさつ
た偉い人達がいらっしゃたんでしようね。その人達が、
餓死する者が出了ほど飢餓の年に、自分の蔵をあけ
て、米、粟を国に寄付したそうだ。そして十分盃もい
ただいたそうだ。

あんし、くぬ世なていねーんなとーるばー。

それが、現在ではないんだつて。

翻字 名嘉真 宜勝

「一番ぬはじめー、鉄ぐわーとう、うぬナービナクー
が鉄ぐわーぬ出じーせーやー。鉄ぐわーぬ出じたくとう
うぬ鉄ぐわーや私が持つちよーでいるやるばーるやさ
に。ちむえーや。

あんさーに、ナービナクーが…。また、あれーたち
やんてーる鉄ぐわーやくとう。また、刀んかい使りく
とう。

うぬ鉄ぐわー、「私にんかい貰らしでい」ナービナクー
が言ちやくとう、「はー、くれー親からぬ譲りやくとう、
いかなしん貰らせーさん」でい『ちやくとう、「あんせー、
くぬ藁ぐわーとう、藁ぐわーちゅしぐ持つちちー、く
ぬ藁とう換てーとうらし』。換い一やれーしむんでいち、
うぬ藁うりが持つちやんでい。鉄ぐわーやナービナクー
んかい与らちしちやくとう。

あんさーに、うぬ藁、また、藁しんぶーや、ぬー結
じゆんでい言いたうー。

話のはじまりは、鉄くずだね。その鍋の修繕の際、
鉄くずが出るでしょう。その鉄くずが出たので、いう
なれば、その鉄くずを私が持つていたと仮定するわけ
だ。

そこで、鍋細工が…。それは溶かした鉄くずである
ので、また、刀の原料にも使えるので。

その鉄くずを、「私に下さい」と、鍋細工が言つたの
で、(その男は)、「いいえ、これは親からの譲り物です
から、どうしてもあげることは出来ない」と言つた。
(すると鍋細工は)、「そうであるなら、この藁と、(藁
を一握り持つて)、この藁と交換して下さい」。交換で
あるならばよろしいといふことで、その藁はその人が
持つたということである。鉄くずは鍋細工に与えた。
そうして、その藁は、その藁しべは、何かを結ぶと
いう話だつたが。

また、「うぬ藁ぐわー私にんかい貰らせー」でい言ちやくとう、「藁あいかなしん貰らさん。ぬーどうやていん、換いーるない」といへ。あと一、黄金どう換いーなとーたんでいよー。

あんしからる、黄金どう換いーしちやくとうよー、うぬ藁ぐわー一本さーに、親ぬ譲れー、黄金もーきてー。なし、うつをそーに、しまちゃんでいる言ひたんでー。

それで、黄金と交換したから、その藁一本で、親譲りの藁一本で黄金を手に入れた。もう、それだけで済ませたということだつた。

採集 S 52・2・27 読谷村民話調査団第四班（富村朝夫）

62 城間仲

話者 玉城五衛門（明治十四年十一月一日生）

翻字 村山友江

城間仲注やなー土地やねーんそーらんてーんて。ねーんなたぐとう、「ぬぐわいやーがましやぬとうくまーむるいやー土地しー」りちょ、うぬ人ぬ。あんさぐとう、うりからる金持ハヌキなたんり。

城間仲は（最初）は土地はなかつたようだ。なかつたからね「おまえが好きなだけおまえの土地にしなさい」と、ある人が言つた。それから城間仲は金持ちになつたということである。

また、「その藁を私に下さい」と、言われたので、「藁、どうしてもあげることは出来ない。何でもよいから交換は出来る」と答えた。後は黄金と交換したという。

注 城間仲 浦添市城間にある富豪の屋敷。

63 繼子の肝

話者 山内カナ(明治三十三年三月十日生)

翻字 知花春美

継アンマーや病氣りちしちやぐとう、「私ね一人ぬ
肝、食みわる治いる」りち、言んしえーんりち。あん
さーにかい、なー使用人ちやーんかい「あり殺ち来る
りちしちやぐとう、殺しえーしーうさん、うつたーや
うれー隠ちよーてい、犬ぬ肝、持つち行ぢきうたぐとう。
あんし、うぬ子あいつペー粗末おさつたれー、うぬ
子あ墓ぬ前んじ、自分ぬ、亡しちめーる親ぬ墓ぬ前ん
じ、「我や継アンマーエーひれーうさんむんぬ。私にん、我
親とう同道ならな」りち、墓んかい願いが來たんり。
あんる言いだんれーやー。

犬ぬ肝、持つち行ぢ、きうたんりしえー。あんされー、
なー治とーんりちやてーんてー、犬ぬ肝るやしが、人
ぬ肝り思てー。

継母は病氣だったので、「私は人の肝を食べないと治
らない」と言つた。そして、使用人に「あれを殺して
来い」と言いつけたが、殺すことはできず、この人た
ちは、(継子を)隠して、犬の肝を持つて行つてあげた。

そのように、その子はたいへん粗末にされたので、
墓の前に行つて、亡くなつている自分の親の墓の前で、
「私は継母になじめません。私も私の親と同じ道にな
りたい」と、墓に願いに来たそうだ。そう言つていた
よ。

犬の肝を持つて行つてあげたそだ。そして治つ
たんでしようね。犬の肝だが人の肝と思つて(食べた)。

「私にん親とう同道ないんり」うまんかい願いが泣
ち來たんり。あんしが、「いやーんちよーん産し出じや
ちやるむんや、茶ぬ八月、水ぬ八月ひきていきうり」
りち、またう願えすたんり、自分ぬ産し親ぬ。

「私も親と同じ道になりたい」と墓に願いに、泣き
ながら來たようだ。しかし、「おまえだけでも生んだの
に、お茶の八月、水の八月供えてちようだい」と、ま
た自分の親がお願ひしたようだ。

採集 S52・2・27 読谷村民話調査団第十四班（運天悦子）

64 繼子の弁当

話者 喜友名 ウシ（明治三十二年十月十日生）

翻字 知花春美

これーあんしーねー、繼子ぬターグサ刈ちーが行ぢや
ぐどうてー、ターグサ刈ちーが、うぬ弁当、繼アンマー
が作てい持たさつていてー。毒入つちょーんてー。

これはね、繼子が田んぼへ草取りに行つて、田草取
りに行つたので、繼母が弁当を作つて持たした。毒が
入つていたようだ。

持たちやぐどう「ぬぐわ私達親ぬ、アンマーがん持
たちえーるやー」りやーに、開きやーにガラサーんか
いきうたぐどう、ガラサーが死じやぐどう。

これは毒が入つてゐると、自分は食べずに家に持ち
帰つた。「どうして、これは死んでいるのかと思つたら、
こんなに残してあるのか」と、繼母が食べると、その

くれー毒るやさやーり思やーに、自分ん食まんよー
い、うり家かい帰てい来ぐどう。「ぬぐわ、くれー死じ
るちゅーがやーり思れーくれー、うつさなー残ちえー

る」りち、繼アンマーや食らぐとう、繼アンマーが死じゃんりる話るやたんれー。

継母は死んでしまつたといふ話。

採集 S 52・2・27 読谷村民話調査団第十班〈村山義隆〉

65 繼子の麦つき

話者 当山チヨ(明治四十四年十月一日生)

翻字 上原ヨシ

継子いじめやあらんがや、うぬしじるやがやーや。
麦搗かち、麦搗かしーねー水入つていて搗かしんしぇー
たしえーや、昔え。

あんさーに、水え入りらんよーいから搗ちしみてー
んへーるばーてー。あんしなー、うぬ継子んけねー習し
んさんよーい。あんさぐとう、うぬ継子あなーすぐど
んないどんない搗ちゃんてーんなー、手ぬ皮あはぎる
か搗ちん、なーはぎらん、うぬ皮やはぎらん。
涙あポロポロ、涙ぐわー落とうち、うぬ涙ぐわー落
ていーる所びけーんの一、なー皮ぐわーはぎたれー、
あはー、うれー水入つてい搗ちゅしるやさーやーりやー

継子いじめのつもりでしょうね。麦を搗くときは、
水をいれて搗させたんだがね、昔は。

そして、水はいれないでそのまま麦を搗させたよう
だね。もうこの継子にはそういうことも教えずに麦を
搗かせた。すると、その継子がどんなに麦を搗いても
手の皮がむけるほど麦を搗いても、その麦の皮はどれ
なかつた。

涙をポロポロ流したら、その涙が落ちた所だけ皮が
むけた。それでもう麦は水を入れて搗くものだと初め
て分かつた。それから水を入れて搗くと、すぐに皮は

に初めていい分かでい。水入つてい突ちやーだ、うり

しちやれーすぐはぎとーたんりさりる話はなしる聞きちやんでー

私達わたくしん。

むけたといふ話を聞いたよ、私達も。

採集 S 52・2・27 読谷村民話調査団第三班（阿波根初美）

66 繼子と杓子

話者 松元ウト（明治四十四年二月二十五日生）

翻字 上原ヨシ

田んかいりがらーサラゲー落おちとうさーに、なー親ぬ
「今いまうぬサラゲー取とつてい來くよー。取とつてい來くよー」
し、あぎまーささつたたぐとう、なーややつとうかかつとう行は
ぢぢえーえるばばーー。

田圃たんばだたか、杓子くわを落おちとしてしまい、繼親けいしんに、「今いま
その杓子くわを取とつて來くなさい。取とつて來くなさい」とせか
されたからね、もう仕方しほうなく行はつたたそうだ。

「なー、ちゅーぬ月つきや早はくなーへ上があがあででいたぱり」り
ち歌うたぐわー。なーうぬ歌うたぐわー覚おぼてーうらんしえー。
私わたくたーうぬ話はなしるち聞きちやる。

「もう、きょうのお月つきさまは早く上あがあつて下ささい」
と歌うた（をしたようだ） その歌うたは覚おぼえてないが、私わたくた
ちはその話を聞きいたよ。

田んかいサラゲー落おちとうさーによー、「サラゲー今いま
取とつていく來くよー。取とつていく來くよー」さーにあぎまー
ささつつてい、田んかいなーサラゲー探とめーいが行はぢぢえーー。

田んぼに杓子くわを落おちとしてしね、「杓子くわを今いま取とつていきなさい。
取とつてい來くなさい」とせかされて、田圃たんばに杓子くわを探としうに行はつたそうだ。もう月つきが上あがららないと田圃たんばも見え

るばーてー。だー月ぬ上りわる見さいや、田園ん。あんいち、ぬぐわ話る聞ちやる。まーんかいあてーるくとうがやたら一分からんさ。まーぬ村ぬんかいあてーるくとうるやら一分からん。

ないでしよう。そういう話は聞いた。どこにあつたことか、どこの村にあつたことが分からないよ。

採集 S 52・2・27 読谷村民話調査団第三班 〈阿波根初美〉

67 繼子の竹の子取り

話者 當山ハツ(明治三十九年五月十日生)

翻字 伊波邦子

とーうれーよー、昔じこー継子粗末にする継親ぬうたんり。うりん聞かしんしえーたしが、ぬが、何りち、自分ぬ生ちえーる子あらんしえー、ゆく立派しわるないしえーやー考えいねー。うりが手本なている、自分ん後生すさい。あんやるむんぬ、何やたがやーりち言いうやぐどう。

昔えよーいつちが始まいや、自分ぬ肺病なていめーたんりー母ぬ。病氣なたぐとう、いつちが始まいやうりからやさ竹の子。いつちが始まいや竹の子、冬ぬ寒

この話はねー、昔、継子をひどくいじめる継母がいたそうだ。この話も聞かされたんだがね。自分が生んだ子でないのは、よけいに立派に育てないといけないさあね。それが手本となつて、自分には子供もできるんだからね。どうしてそういうふうにしたんでしようねと、聞いてみた。

この話は継母が肺病になつたことから始まつた。病気になつたからね、冬の山に、雪の降る寒い日の話であるから内地でのことだつたんでしようね。雪も降る

さいに、山んかい雪ん降れー、内地やてーんてーやー。
雪ん降れー内地かい、あぬー「竹の子取つていち私ねー
食ましわる病氣え治いんろー。」また犬ぬ肝り、うり
んぐーないたんよー。「犬ぬ肝とう竹の子とうぐーなち
食みわる治いる」りち、母ぬ繼親ぬ言ちやぐとう。

今日や行ちゅみ明日や行ちゅみりち、棒持つちょー
ていたたちやーいさぐどう。後ぬうじゅみねー雪ん降
いしがやー、泣ちよーてい出じとーんりよ。泣ちよー
てい行ぢよーてい、冬やぐとう竹の子やねーんたんり。
ねーんたんりしが、ねーびらんさー。一日中歩ちゃん
り言いたしが、一日中がやらー一日がやらー。私ねー
なーとうめーいさびらん、なー許ちきんそーりりち、
御礼そうしが許さらん。

「いやーや、私ねーあたらさーねーん、私ねー死な
しるするいりち、くわ口しんそーち。とーあんしえー
翌日また、うぬ麦搗きりち。

へいつたーがん分かいみ、あぬかんしいな麦えあらん、
かんし包まつとーる麦があしえー大麦ありち、私達ん、
ゆー作やーなかい、ゆーうり、搗ち、ヒランメー、正;
月んでいーねー食むたんよ。」

というのに、「竹の子を取つてきて食べないと、私の病
気は治らないよ」と、また竹の子と犬の肝もいつしょ
であつたそうだ。「犬の肝と竹の子といつしょに食べな
いと（私の病気は）治らない」と、その繼母は言った。

今日は行くか明日は行くかと、棒を持ってたたいた
りしたからね。後は雪も降つているんだが、泣きなが
ら出て行つた。もう一日であつたか二日であつたか、
ずっと歩いて搜したんだが見つけることはできなかつ
た。私にはもう搜すことができせん。どうぞ許して
下さいと、頭を下げているんだが許してもらえないかつ
た。

「おまえはこの私が大切ではないのか。私を死なせ
るつもりか」と、怒つてしまつた。じゃあそれなら翌
日はまた麦を搗きなさいと。

へあんた達も分かるか、いな麦ではなくてね、この
ように包まれていてる麦があるさあ、大麦といつてね。
私達はこのようにしてよくつくつて、よくこれを搗い
た正月には麦飯をよく食べたよ。」

うり搗かしんそーちやぐとう、十まんぐらるないん
りぐとう、うぬ娘ぐわーや、繼子や十びけーんるない
ぐとう。アジン^{注1}りち、かんし分かいはに。アジンりち
ただ、人ぬてーげー三尺^{せんしゃく}ぐらいや、なかくぶんなさー
に、くりかんしかんにーし、ウーシンかい搗ちゅたん
よー、初まいや。だーべてーや無ーんしが、ガッパー^{注2}
やうつちーさん。ガッパーしぇーまたくりんかいかん
しやぐとう。うつちゅたん。なー、わちやくるそうぐ
とう繼親ぬ、水入つてい本当搗ちゅしやるばーてー。
水入つてー搗かさんよーい、ぐてー殺^{ころ}さりちるやぐとう、
いじめるやぐとう。あんさくとう、うぬなーちゃつさ
搗^{うち}ちゃんてーうぬ皮^かやはんりらん。

後^{あとも}ぬうんじゅみねー、繼母恨みとーてい泣^なちょーてい。
搗^{うち}ちょーるばーてー、涙落^{ななだ}とうちょーてい。後^お、うぬ
麦^{むぎ}ぬ皮^かはんりてい。昔^{むか}からうぬ麦^{むぎ}りしぇー、あゝ水入つ
てい搗^{うち}ちゅしやさやーり、言やーになー今^{なま}あ^{わい}水入つてい
搗^{うち}ちゅんどーり言^いたん。うぬ繼子^{むぎこ}ぬ涙^{ななだ}さーにうりしちや
ぐとう、あんさーにとーくりしんならんむんなーりち、
また翌日^{なつちや}ん竹^{たけ}の子取^なんがやらしんそーちゃんりんでー
りぬ伝^{つた}え話^{ばなし}やたん。

その十歳ぐらいになつた女の子にこの麦を搗かせた
からね。アジンというの分かるでしょ。中のあたり
がくほんでいるものね。こういうふうにして臼で搗き
よつたよ。もう力はなくてガッパーはうてなくてね。
ガッパーというのはまた、このようにしてうつたんだ
がね。もうわざと意地悪をしていじめている人だから
ね。繼母が、本当は水を入れて搗くんだが、水を入れ
ずに搗かしたようだ。力がなくなるくらいに搗かそ
うといういじめであるんだから。だから、もうどんなに
搗いても、この麦の皮はむくことができなかつた。

しまいにはもう、繼母を恨んで泣いてね。泣きなが
らこんこんと搗いていた。すると、この麦は皮がむけ
て、あゝ麦は水を入れて搗くもんだねと分かつた。そ
ういうふうにして、水を入れて搗くということが分かつ
た。この繼子の涙で、そういうことが分かつたんだが
ね。(繼母は)これでもいけないと、また翌日も竹の子
取りに行かせたという、伝え話があつた。

注1 アジン杵。太い一本の棒で、中央のつかむ所を細くしてある。

注2 ガッパー 大和式の杵。五〇センチ位の丸太に柄をつけたもの。

68 繼子の井戸掘り

話者 照屋 寛良(明治四十一年五月十日生)

翻字 具志堅 タケ

女ぬ、繼親ぬ自分ぬ子とう繼子とうあや分かち、繼子苦しみーるたみに井戸あ掘らち、なーうぬ子や感じとーぐどう、なー殺さりーさやーりち。確かに何がら落とうち死なすぬ考えりち分かとーぐどう。あんしがなー面と向かつて反抗やならんしえー親孝行な者るやぐどう、うぬ子や。

あんさーに井戸あ掘てい。「なーとうじゅまとーんどーアンマー」りち、呼びたくとう。いんねーすんねーアンマーやまぎ石落とうちえーぬふーじ。あんしうれーすでに横穴んかい入つちょーたんりくとう。ちゃー準

女の、繼母が自分の子供と繼子とは差別して繼子を苦しめるために井戸を掘らしたようだ。繼子は自分は殺されるかもしれないと感じていた。確かに何か落として殺すつもりだと分かつていて。でも親孝行者であるから反抗することはできなかつた。

そしてその子は井戸を掘つてね。「もう掘り終りましたよ、お母さん」と言つたらかね。その繼母は思つた通り大きな石を落としたようだ。しかしその繼子はそのつもりで心がまえはしていたので、横穴に入つて助

備し横穴んかい入つち、助かてい出じてはい、簡単ねー死なんたるやー」りち親や。

「とー今日や田あうつちくわー」りち、「田あ耕一ちくわー」りち、あんきーい弁当んかい毒入つてい。あんさーい毒入つていさくとう。なーうりん親孝行ぬたみに助かとーるばー。弁当開ち、「あんし、ぬー今日やあんし、まあさ物私達あアンマーやしこーてーるやー」りち。急にパツト鳥ぬちゃーい、うぬ弁当うちゅ喰てーるふーじ。あんしうまうてい死じえーるふーじや、パタナイ。あんぐどう、うぬ子やまたうりるやんりんれー、弁当喰りんじやーい、またカミムスルりる草ぬ田やじ一生ーとーぐどう。うれー誰にが習さつたら一分からんしが、カミムスルや毒返しやんどーりち。「鳥ぬ死じえー合点の一ならん、私にん食りんりわるやる」りち、食まーい、自分ん変なたぐとう、すぐカミムシル引つちり喰たぐとう、毒返しなやーに、助かたんり、とーうりんうつさ。

かつて出てきた。母親は「簡単には死はないな」と思つていた。

そしてまた「今日は田んぼを耕して來い」と言つて、弁当に毒を入れて持たした。しかしこれも親孝行であつたために助かつたそうだ。弁当を開いてみて、「母さんは今日はこんなにおいしい物をつくつてあるね」と(繼子は思つていた)パツト鳥が来て、その弁当を食べたようだ。そしてそこでパタパタして死んでしまつた。

その子もまた弁当を食べたんだがね。田んぼによく生えているカミムシルというのがあるんだが、それは毒返しであるということを誰かに教わつていたんでしようね。「鳥が死んだというのは合点がいかない。私も食べてみよう」と、食べて、自分も変だつたので、すぐにカミムシルをちぎつて食べた。そしたらそれが毒返しとなり、助かつたそうだ。この話もこれだけだよ。

翻字 知花春美

実子よし、自分ぬ連としが、繼子あなみつくわーはてーんてー。あんさーにかい、うれーなー、えーりん川んかいるやさに、川んかいなー落とうすんり抱ち行ぢょーしが、神様ぬ取い換ているあんせーさに。あんさーに、自分ぬ子る投ぎらつとーたんり。家あ着ちやぐどう取り換えてーたんり。

繼子どう自分ぬ子どうやうてーざさるむのー、繼子る捨ていーがちやしがやー、クムインかい溺くわーしーがちやしがや、やしが神ぬ取い換てーんせーてーうまんじ、繼子る足しかきりけーらち落とうちえーんりちやんりーしが、取い換やーに自分ぬ子落とうち、家あ着ちやぐどう、目はとーたんりぬ話。

実の子も自分が連れているが、繼子はもう憎らしく思っていた。それで、これはたぶん川に、川にもう落ちとしてやろうと抱いて行つたが、神様が取り換えたのでしようね。それで、自分の子を投げてあつたそうだ。家に着くと(実の子と繼子を)取り換えてあつたそうだ。

繼子と自分の子がいたようだが、繼子を捨てに行つたのだが、池に落とそうときたのだが、ここで神が取り換えたのでしよう。繼子を足で蹴り落としたつもりだつたんだが、取り換えられて自分の子を落として、家に帰つてからびっくりしたという話。

翻字 知花孝子

遠い所のたんぼに米え植が行ぢやーに、マツカイ道具や持つち来しが、ナビゲーぬ入つちえーうらん。その継子んかい「取つてい來」りち、家に連れて来てから取りにやらしたぐとう。歩いたから、もう遠いたんほどだから、もう二十日夜もあがつて、遅くなつてまでも来なかつたとの話。その継子は。

うぬ夜、心配さーに、あがと一遠さぬ所んかい取んがやうさつたぐとう、「今日ぬ二十日ぬ月お早くなー上がてい給り」してもう心配したから、その二十日ぬ月は早目に上がつたとの話。

遠い所にあるたんぼに稻を植えに行って、お碗道具は持つて帰つたが、杓子が入つていなかつた。家に帰つてからその継子に「取つてこい」と行かせた。継子は歩いて行くが、遠いたんぼであるからもう二十日夜もあがつてしまい、遅くまでも戻つてこなかつたという話。その継子は。

その夜、はるか遠い所まで取りに行かされた継子は心配して、「今日の二十日の月は早く上がって下さい」と願つたから、その日、二十日の月は早めに上がつたという話。

翻字 安里和子

ヤツチーや赤肉食まち、またうぬ繼子や骨食まちや
くとう。ヤツチーや、ちやー丸飲み、私ねーちゃーぱ
チヤパチャリ。ただそれだけ。

兄さん(実子)には赤肉を食べさせて、繼子には骨
を食べさせたからね。兄さんはいつも丸呑み、私はい
つもパチャパチャって。ただそれだけ(聞いたよ)。

採集 S52・2・27 読谷村民語調査団第十四班(伊芸弘子)

72 繼子の茶腹飯腹

話者 山内カナ(明治三十三年三月十日生)

翻字 村山友江

遠道、かーま遠道よー、いいるんしぇーなー那霸ん
かいやんてー、歩ち。昔え歩ちやてーぐとう。

昔事がやらーなー、遠道歩ちやたんりしが、自分ぬ
子あなーまーさ物食まちや。なー遠道歩ち行ちゆるむ
んクンチちきらんねーりち、御馳走食まちや、繼子あ
茶あ飲まちえーたんり。

遠い道程、ずっと遠い道程、たとえば那霸に歩いて
行つたんでしょうね。昔は歩いて行つたんだからね。
昔の事であつたので、もう遠い道程を歩いて行つた
ようだが。自分の子には、おいしいのを食べさせた。
もう遠い道程を歩いて行くんだから、栄養をつけない
といけないということで、御馳走を食べさせた。そし

て継子には、お茶を飲ませたそうだ。

あんすぐとう、なー自分ぬ子あ着きーうーさんよー、
あまんかい自分ぬ行ちゆる遠道え着きーうーさんよー。
うぬ継子あすぐ平氣に着ちょーたんり。くぬ茶あぬク
ンチ、あんすぐとう茶あやクンチやぐとうよ、クンチ
さーに継子あなーうりしちゃんり。

そうしたら、もう自分の子は田的で着くことができたそ
きなかつた。その継子は、平氣で着くことができたそ
うだ。このお茶の根氣というものは大変なものである。
このお茶の根氣で、継子は田的で着くことができた。

採集 S 52・8・16 読谷村民話調査団第四班 〈運天悦子・横田和子〉

73 嫁と姑 くうどんはミミズ

著者 上地 弘治 (明治二十九年十月五日生)

翻字 津波古 米子

物の一見んそーらんおばあがめーてーるぐとーしが。
うぬおばーやなー嫁とう二人のめーぐとう。うぬ嫁ぬ
ミミジ取つていちゃーなかいや、ミミジえりつぱにう
ぬ土あい出じゃち、あんさーなかいみそーらちえーるぐ
とーん。ちゃー、「うれーソーミンるやいびんどー」り
ち。「何やが」りちやぐとう。「ソーミンやいびき」り
ちやぐとう。あんさーなかいじーまーさーーぎはん、

田の見えないおばあさんがいたそうだ。そのおばあ
さんは嫁と二人暮らしであつた。その嫁はミミズを取つ
て来て、りつぱに土を取り除き、それを炊いていつも
(おばあさんに)食べさせていた。「それはソーメンで
すよ」と言ってね。たいそうおいしかつたらしい。そ
のミミズは薬用であつたからね。

うれーなーミミジヤーや、薬ややくとう。

あんさーい、自分ぬ産ちえーる女わらんちやーぬ、
家んかい親見舞しーがん來、物ぬん見んそーらんるあ
ぐとう。見舞しが来さぐとう、うぬ嫁んちやーぬ「ぬ
ぐわなーやあんし、近頃から太ていめーる。『何みそー
ちめーが』りちえーるぐとーん。あん言ちやぐとう、
うぬおばあやまた食むかーじ、ムスルぬ下、自分ぬ寝じゆ
る下んかい一ちなーや、かんし置ちえーしえーたんり、
ミミジヤー。「あんしまーかるむんくれー置ちよーてい、
うつたーが来ねー見しーるないる」りち。

あんさーなかいしえーんせーるぐとーしが。「あんし
何みせーが、あんし貴方や太ていめーる」りちや、「私
ねーソーソー食り、毎日一ちなーや食するかーじ、一ち
なーやうまんかい置ちえーんどーやー。うり見ちんり、
ソーミンるやるい何やが」りち、見ちんりんちやぐとう、
全部出じやしんほーちやくとう、ミミジヤーなたくとう。

そこへ実の娘達が（その親は）目も見えないので、
親を見舞いにやつて来た。訪ねて来た娘達が「お母さ
んは、近頃ではこんなに太つているけれど、何を食べ
ているのですか」と尋ねたらしい。そう言つたので、
そのおばあさんは食事を取るたびに、自分の寝るムシ
ロの下に、一つずつこのようにしてミミズを置いていた
らしい。「こんなにおいしい食べ物は置いていて、娘達が
来た時に見てもらおう」と思つていた。

そういうふうにしてあつたそしだが（娘達が）「お母
さんは何を食べて太つているんですか」と言つたらね。
「私はね、ソーメンを食べて太つてるんだよ。毎日食
べさせてもらうたびに、一つずつそこに取つて置いて
あるよ。ほら見てごらん、ソーメンであるかどうかま
た何なのが見てごらん」と、（ムシロの下から）全部取
り出したので、それを見てみるとミミズであつたらし
い。

うぬ女ん子あ驚ち、「アキサミヨー、貴方やくんぐ
とーる物るみそーちめーんなー、ミミジヤーるやいび

その娘はびっくりし、「アキサミヨー、お母さんはこ
のような物を食べさせられていたんですか。それはミ

んでー」んちやくとう、「んー」でいぢ、田ぶらしほー
ちゃんり。うりさーに分かたんり、ミミジヤー食ろー
ん。またミミジヤーや、人お太いる滋養物やさやーり
ち、女ん子ん考たんり。うり食べぐとうる太ていめーてー
さにんりる話やるぐとーん。

ミズなんですよ」と言つたら、「んー」と、目が開いた
そうだ。そこで自分がミミズを食べさせられていたこ
とを知つた。またミミズは栄養があり、太るんだなと
娘達も思うようになつたそうだ。ミミズを食べていた
のでおばあさんは太つていたという話だよ。

採集 S52・2・27 読谷村民話調査團第四班 〈富村朝夫〉

74 嫁と姑 へ肝焼木

話者 玉城マツ(明治三十五年五月十五日生)

翻字 知花春美

上から「クンスー入りれー」りち合図しちやぐとう、
自分やなー、シムとーいかまぎーしぇー、めーるえー
まねー、来しえー、実やがつていかちょーるばーてー。
めーるむんなーりち実やがつちかていなー、心やちょー
るばーてーや。

上方から「クンスー入れなさい」と合図したとき、
(嫁は) 台所で食べていた。(姑が) 来るので、(熱い
クンスーの) 中味を飲みこんだようだ。来るぞと思つ
て、すぐクンスーを飲みこんでしまつたので、肝をや
いたようだ。

「クンスー入りれー」りちもーちやぐとう、なー言
いやうーさん涙あちよんない落ていだぐとう上うちや
ぎてい見ちゃんりー。見ちゃんりー、「ぬぐわ、いやー

「クンスー入れなさい」と来たので、もう言いわけ
は出来ず涙をポロポロこぼして上を見た。見たので、
「どうして、おまえは天井を見るのか」と言われた

や天井見じゆる」り言んそーちゃぐとう
「あぬ木やまーから出じとーがやー、りちる見ぢやさー
びんれー」り言たんり、「あれーよー涙ぐるみー山から
出じとーるチムヤチ木やさ」り言んしぇーたんりうつ
ひ言んそーちゃんり。

ので、「あの(天井)の木はどこからのものかと見てい
るんです」と語ったそうだ。すると(姑は)「あれは涙
の山から出でいるチムヤチ木やさ」と言われたそうだ。
これだけ言つたそうだ。

採集 S 52・2・27 読谷村民話調査団第五班(宮里洋子・小橋川清一)

注 クンスー 豆腐を作るとき、煮て、豆腐をしぶる前の汁。にがりを入れて固める前のものをいう。

75 嫁と姑 〈芋にとげ〉

話者 波 平 ハ ツ(大正一年十一月五日生)

翻字 知花春美

いつペー憎ざるばーるやたるはじどー。あんさーに、
お昼ん晩ぬんうさぎーるかーじ、また、うぬ刺、芋ん
かい刺しえーしえー。

「またちゅーんうぬ芋、入つちょーさやー」り思やー
に、見やくらさるあんしえーぐとう、さーたぐとうま
たん刺が入つち、うぬ芋おぢやーにーじやーびかーん
かい刺しえーしえー。

(姑は)「また、きょうもその芋に入つてゐるね」と
思い、目が見えないので、さわつてみると、刺もある

し、その芋は、虫もくつていた。虫がはいつた芋ね。

やたん。虫に一じゃ一芋る。むるあんさーに ていー

ちんうぬ芋おひならんたんりぬ。

姑親んかいよ、うぬおばあさんのー感のーあつた。

ぬがなー、日やかないみそーらんぐとう、反抗しーう

さんばーてー。

それで、その芋にはせんぜん手をつけなかつた。

姑親に対してね、そのおばあさんは感はあつた。なんで、日は見えないので反抗はできなかつたようだ。

採集 S 52・2・27 読谷村民話調査団第五班（宮里洋子・小橋川清一）

76 嫁と姑

話者 當山ハツ（明治三十九年五月十日生）

翻字 知花春美

嫁とう姑の話や。

なりよなりナシビ 姑ぬ家ぬナシビ

ならなそーてい 我になくしちきてい

りち、うれー子なざんなくどう、ナスビえ水えかきー

がなーぬ歌やさ。

嫁と姑の話ね。

よく実りなさいよナス、姑の家のナスよ

実らなくて わたしのせいにして

と、その人は子どもができないので、ナスに水をやり

ながらの歌だよ。

明日や出じやさりる嫁る私ねーやしが

うる間ぬ勤み はまていさびら

りしぇーや。

私は明日は追い出される嫁であるが

その間の勤めをがんばろう

うれー、真心そーていやしが、ボージャーなしーさ
ん、姑に悪さりるばーてー、泣ちやーにナスビたとう
とーてい、歌ぐわーそーしやさ。

その人はまじめにやつてゐるが、子どもができない
ので、姑に意地悪されて、泣いてナスにたとえて、歌
をしているんだよ。

採集 S 63・3・18 読谷ゆうがおの会 へ知花春美・棚原めぐみ

77 嫁と姑 へ麦 搗きく

話者 玉城マツ(明治三十五年五月十五日生)

翻字 知花春美

姑ぬ強ばー姑あたやーい。「くぬ麦搗きよー」り言
んそーちゃぐとう、搗ちやんてーん、なー、なんとう
しん、穂やはんきらん、あぬ麦え水入つてい搗ちゅし
やぐとう、涙ぐわーぬ落ていーるうつび、ひつたいる
うつびえー、穂ぐわーはんりーたんり。

姑が(気性)強い姑だつた。「この麦を搗いてね」
と言われて、搗いたけど、もうどんなにしても皮はと
れず、ほんとは、麦は水を入れて搗くものなので、涙
が落ちたところ、濡れたところは皮がとれたそうだ。

くれー水ぐわーかちやーし、搗ちゅしやさやーりち、
自分で考えさーい搗ちやんり。
嫁え、姑ぬ強ばーなやーい、水ん入つてい搗きよー
れー言んそーらん 自分くるぐわー涙ぬ落ていーる
うつび 皮やんきたぐとう、くれー水入りやーい、搗ち

これは、水を入れて搗くものだねと、自分で考えて
搗いたそだ。

嫁は、姑が強かつたために、水を入れて搗きなさい
とも言わなかつたので、涙が落ちたところだけが皮が
とれたので、これは水を入れて搗くものだねと、自分で

ちゅしゃさりち、自分考えしちゃんり。うれー。

で考えて掲いたそだ。これは。

採集 S52・2・27 読谷村民話調査団第五班 〈宮里洋子・小橋川清一〉

78 嫁と姑 三十日月

話者 玉城マツ(明治三十五年五月十五日生)

翻字 知花春美

くぬ、稻植いんが行ぢやぐとう、サラゲー忘ていち、
家かい来ぐとう。なーサラゲーやーねーんなたぐとう、
ねーんなたれーなー、山んかいサラゲー忘てい来る
りち、話いしえーるばーてー。

(嫁が)田植えに行つて、杓子を忘れて、家へ帰つ
た。もう杓子はなかつたので、山に杓子を忘れて來た
と話をしたようだ。

「それでは、おまえは、その杓子を取つてこなけれ
ば、きょうの夕飯はあげないよ」と言われた。

「どーいやーや、あんしえー、うぬサラゲー搜めー
てい来んねー、ちゅー夕飯の一かまさんどー」り、言
んそーちやぐとう。

三十日ゆーやてーさ。あぬあん言んそーちやぐとう、
「ちゅーぬ月え、いちやかに早く上がいんそーり」り
ち、二十日ゆーによー、十九日ねーよーんなる上が
いしが、二十日ゆーねー早く上がたぐとう、月ぬ上が
て明かがたぐとう、うぬサラゲーや搜めーらりーた
て明かがたぐとう、うぬサラゲーや搜めーらりーた

二十日月だつたんだね。そう言われたので、「きょう
の月はいつよりも早く上がつて下さい」と、二十日月
にね、十九日にはおそく出るのだが、二十日には早く
出たので、月が上がつて、明るくなつたので、その杓
子は搜すことができたという話である。

んりる話やるばー。

採集S 52・2・27 読谷村民話調査団第五班 〈宮里洋子・小橋川清一〉

79 親捨て山

話者 当山チヨ(明治四十四年十月一日生)

翻字 上原ヨシ

六十一歳になると、山に連れて行つたようだね。その孝行息子がおばあさんをおんぶして連れて行つた。連れた行つたそなうだが。

六十一ないねー、あんし山んかい連でい行ちゅたんりしぇー。うぬ孝行息子がなー、うぬおばあやうふあしち連でい行ぢ。じこーなー連でい行きようやー」りち、豆、落でいとーる所むる頼でい行ぢやんりる言いたはにやー。

あんさーい、うぬおばあや、豆りるいたがやー、豆りがらーむる落とうちよ、おんぶさつとーでいうぬおばあが落とうしんそーちよ。あんさぐとう、「ぬぐわうんぐとうしんそーるおばあ」りちやぐとう、「いやーが、だーあがとー山奥んかい行ちゅぐとう、なー帰てい来ね一道え分からんむーくり頼でい行ぢやんりさりぬ話いやたるばー。

そうして、そのおばあさんは豆だつたかな、豆といつたか、それをおんぶされていながら落として行つてね。すると、(息子が)「どうしてそういうことをなさるんですか、おばあさん」と云うと、「おまえが、あんな山奥へ行くんで、帰るときに道が分からなくなつたらこれを頼つて行きなさいよ」と言つた。そして、豆が落ちている所を辿つて行つたという話である。

じこー親孝行なたぐとう、じこー寒さしちめんしえー

るはじどーやーりやーに、また連いが行ぢ山んかい。

うり連てい来に、床下んみーんかい穴掘やーに、うま

んかいムシル敷ちめんそーらちえーたんりがらーや。

食物ぬんかやーち、うまうでいうさぎーうさぎーしち、
人んかいや見しらんぐどうし、見しらんよーいぐわー。

うれー昔、かーら上から下てい来るうりがるあてー
はにや。何りたがやー、問題出じやちかんしうりしん
せーてーるばーやんり。あんし問題、向こうから灰で
縄縄てい來りちぬうりが下がてい來ぐどう、なーうれー
いつペー心配そーてーんてー、あんしうぬ男ん子あ心
配しちやぐとう、あんし、うぬおばあさんぬんかい問
いがりち行ぢえーるばーてー。

行ぢやぐとう、「うりん分からんなー うれーすぐか
んし縄縄やーに 火んかい焼ちーねー から灰ぐわー
ぬままぐわー、縄ぐわーぬままぐわー、うりやぐとう、
鉄板ぐわーんかい置ちきやーに焼きよーやー」りち教ちや
ぐとう。うぬまままた上んかい持つち行ぢやぐとう
んしうりんしち。

あんさーに、うんぐとうーひち あまから下ていちー

たいそう親孝行であつたので、とても寒がつている
だろうと、また山へ連れに行つた。おばあさんを連れ
戻して来て、床下に穴を掘り、そこに筵を敷いて、(お
ばあさん) をそこに隠していたそうだ。食事も運んで
そこで食べさせて、人には見せないようにして、ひつ
そりとね。

これは昔、ずっと上からの命令があつたのでしょうか。
何と言つたかねえ、問題を出したようだね。そして、
問題、向こうから灰で縄を縄つてきなさいという命令
がきたのでね、その息子はたいへん心配したようだ。
息子は心配して、おばあさんに聞きに行つた。

行つたら、「そのくらいも分からないか、これはね、
このようにして縄を縄つて、鉄板の上にそのまま置い
て焼きなさい。そして、灰のまま縄になつてゐるから
ね」と教えた。そのまま、上に持つて行くと、それで
よいということであった。

そして、そのようにして上から灰縄の問題がきたり

ちーしーにん 縄あ縄ていから灰し縄縄てい來り言ち
や またあまから何んかんしうりが来ねー うぬおば
あさんから習てーういしーしーしちえーんてー。

あんさぐとう「いやーやあんしうれーいやんくるる
者えてー」り言ちやぐとう「私親ぬいくちなみしぇー
るおばあがる考えてい習ちえーみせーんどーやー」り
言ちやぐとうからる。またおばあさん達や、なー山ん
かいねー連てい行かんよーい、なーめーめー家うてい
うりやんりきりぬ話どう、昔話る聞ちやんじやーべわー
そーる。

また他の問題がきたときも、そのおばあさんから習つ
て解いていたようだね。

「それで、おまえはこれは自分で考えたのか」と聞
いたので、「私の親は何歳なるが、そのおばあさんが考
えて教えて下さったんですよ」と答えた。そのときか
らおばあさんたちは、山へ連れて行くことはせずに各々
の家で暮らしたという話、昔話を聞いたよ。

採集 S52・2・27 読谷村民話調査団第三班（阿波根初美）

80 親捨すて山

話者 玉城五衛門（明治十四年十一月一日生）

翻字 村山友江

唐からよ、沖縄んかい灰綱御用りち御用ぬちえーぎ
さん。昔話やしが、あんし御用ぬちやぐとう、なーちやー
しうがかーしすがりち、いろいろ調びていむる吟味そー

唐からね、沖縄に灰縄御用ということで御用がきた
ようだ。その話は昔話だが、このようにして御用がき
たので、もうどのようにしたらよいかといろいろ調べ

ぬぐとーん。

灰縄御用りち、御用ぬちやぐとう唐から。あんし誰がん考えうーさんばー。ちやーしから灰し縄縄いすがりち。なーうりびかーん話いしえーしちやぐとう、とーあんしえー誰がん考えうーさんぐとう。後生んかい行ぢめーぬ人よ、ぐてーかないしがよー六十一ないねー担みてい行ちゆるばー。物ぬんかやーちみそーらち、亡するえーが、後生世りちんあんれー、あんし親あ粗末しちや、わんだいがーいかん。

担みてい行ぢやーいや、あんしあまんかいうりしあきてい見ちるめーたら一分からんしが、あんし御用ぬちよーるりち行ぢえーんてー。行ぢやぐどう、「あぎちやみよーうんぐとーるあたいぐわーん考えいさんばーい」とーあんしえー縄あ縄やーいや、藁縄さーいや灰縄縄やーに、一ちぐわーん傷ぐわーいじやさんよーい、うぬ縄ああんし火下かいなさーに黒などーるばー。くぬ灰縄、灰縄などーしえー灰縄。

とーあんしやさ、唐かい払いが行ぢよーん。あんしきり誰が考えとーがりちえーんてー唐ぬ、あん言ちやべとう六十一ないねー後生んかいあーしから習てい、

て吟味したようだ。

灰縄御用ということで、唐から御用がきたからね。どのようにして灰で縄を縄うことができるか、誰も考えることができなかつた。もうそれだけを話して（相談しているんだが）もう誰がも考えることができないからね。（昔は）力のある人が、六十一になると担いで後生に連れて行つた。亡くなるまで食事も運んで、親の面倒を見ることもなく粗末にしていた。

担いで行つて、そこにいたんだが、そこでその様子を見ていたかどうかは分からぬが、御用がきているということで行つたようだ。行つてみたら「ああ！」のくらいのことも考えることができないのか」と。はい、ではまず縄を縄つてね。藁で縄を縄つて、その灰縄は何一つ傷をつけずに、火を下にしたら黒くなつた。この灰縄、もう灰縄になつてゐるさあ。

このようにして唐に持つて行つた。そしたら、これは誰が考えたかと、唐が言つたようだ。そう言われたので、これは六十一になつて後生にいる人から習つた

ありが考え。いつた一うぬあたいねーんさやー、後生
んかい行ぢめーしから習てい。うりしなーいつたーちゅー
から行ぢやーい、早々後生ん担みていちわんだいがた
ん。うりから担みーが行ぢやんり。家んかいうんちけー
しちゃんり。

よ、その人の考へだよと。そしたら、(唐の人に)「お
まえ達は何も分からぬ、後生にいる方から習つて」
と言われた。今すぐそこに行つて、早々に後生から担
いできて、面倒もみなさいということで連れ戻してき
た。家まで連れてきたということだ。

採集 S 52・2・27 読谷村民話調査團第十二班 へ山入端孝子

81 仲順大主の話

著者 照屋カマド(明治三十一年七月十日生)

翻字 安里和子

仲順大主りしえーよー、男ん子三人産しんそーちや、
なーだ子供達ぬ心お分かいみそーらんり。分かいみそー
らんなどくとう、今日ぬゆかる日に、三人ぬ子供達出じや
さーなかい、子ぬ心見じゅんり。あんさーなかい、皆、
子一人なー産ちえーんよー。

仲順大主といふ人には息子が三人いたが、いまだに
息子達の心が分からなかつた。分からなかつたので、
今日の良い日に三人の息子達を呼び出し、心を試して
みよう。息子達にはみんなそれぞれ子供が一人ずつ
いたそうだよ。

最初に長男に対して、「私はもう、食べる物もないか
う、私は噛むことも出来ないので、お前の子供を殺し
て私にその乳を飲ませてくれ。お前の子供を捨てて私
子死なさーなかい、私にんかい乳い飲まし。いやー

が子捨ていやーに、私なかい乳い飲みまし」り言みせーんてー。あんぐとう、「仲順大主や寄たる年、あたらしが産し子ああいびらに。仲順大主死なば死に」りち、かんし押しけーらすんよ、長男ぬ。押しけーらち、やらち。

また次男ぬんうぬふーじ。「次男ぬ産し子や、乳きゆみ」りんしえーんてー。あんさぐとう次男ぬんまた「仲順大主やふりていさみ。あたらしが産し子やあいびらに。死なば死に」りち。

にその乳を飲ましなさい」とおっしゃつたそつだ。すると、「仲順大主は寄る年、どうして大事な子供じやないか。仲順大主は死ぬなら死になさい」と言つて押し倒したそつだ。長男は押し倒して追つぱらつた。

次男もまた（長男と）同じようにした。「次男は乳をあげるか」と言つたからね。次男もまた「仲順大主は頭がおかしいのか。大事な子供ではないか。死ぬなら死になさい」と言つた。

「仲順大主は寄る年ではないか、死ぬなら死になさい」と、二人で言つた。長男も次男も、親を押し倒した。それで、押し倒すたびに三男は出て行つて、親を行ぢ起くすんよ。あんし、起くさーなさい、「三男ぬ産し子、乳吳いーみ」りちやくとう。「再び我が親拌まらん。産し子や産しえーまた抱ちゅい。産し子捨ていやーに乳い上ざら」りちしちゃくとう、「さても産し子や果報しさや」りちなー。

うぬ親あなー子や本当に捨ていーがやーりちよー、んちやくとう。「いやーが子あ捨ていーるんさーや。東ぬ森、林、三尺穴掘てい、掘い埋づみやーなかいしーよー」

りちやくとう、うぬ男あよー三男の一夫婦、森ぬ様々、
國ぬ様々巡てい、林の様々巡てい巡たぐどう、三本小
松やうまにあんりち、うぬ三本小松ぬ下んかい三尺穴
掘てい、掘い埋ずみていしちやくとう。なーうまから
一鍬、二鍬落とうちい子埋すみーんりち、穴掘たくとう、
黄金ぬ花ぬ出じやーちょ。いつペー三男の一富豪しち。
黄金ぬ花んうりしち、子ん助かていいつペーなー偉く
なたくとう。

うぬ兄ん達ぬまた羨しくしち、「分きり、分きり」
しち来くとう、うぬ三男のーくまぬゆたさぐどう。
宝あむる分きやーなかい、平等にしち、うぬ三男のー
いつペー富豪しちやん。みんな仲良くなつたつて。

の三男夫婦は、方々の国、方々の森や林を巡った。そ
して三本小松を見つけて、その三本小松の下を三尺掘つ
て埋めようとした。一鍬、二鍬掘つていると、黄金の
花が咲き出たそうだよ。それで、その三男は大金持ち
になり、黄金の花が出てきて、子供も助かって、大そ
う偉くなつた。

それでその兄達はうらやましくなつて、「分けなさい、
分けなさい」と来たので、三男は宝物を全部分けて、
平等にした。それで三男は大そう大金持ちになつた。
そしてみんな仲良くなつたそだよ。

採集S52・2・27 読谷村民話調査団第十四班（伊芸弘子）

な貧乏人や、両親年ん取ていめーい。男ん子一人めーなちじこ一三人貧乏やんしえーてーるふーじ。家に今日食むる食事んねーんりるあたいる貧乏。

くぬ長男やいちぐ人ぬ家庭んじ儲きーが、儲きーが。今あなー作業じ団体仕事ぬまんり、仕事んまんどしえーや。昔りしえー、ある人ぬ儲きわじや、金持ん人ぬ家んかいあぬ畠日傭しーが、毎日、毎日、毎日、通てい。二人ぬ親、うぬ儲きていちゅーるお金ぐわーびかーんさーい、二人わんだていやぐとう。なー金ぬんちやつびる取いたらー、大昔るやぐとう、取つていち。うぬ長男や仕事しーが行ちーに、金持ん人んじ、まー食事やあまぬ食ましんしえーぐとう、三回食ましんしえーぐとう。私達親や私が行ぢちゅーるえーが、一日物おうさがてーうらんるあぐとう。私ね一二回物食り、親あ夕飯一回るやんしえーるむんり思やーに。くぬ夕飯の一食まんぐとう、お屋までい食まーに、夕飯のーうまから主人から願てーい、自分ぬ食むし家んじ持つち行ぢ、うさぎーうさぎーそーるあたいぬ貧乏人。

あんさぐとう、うりん神様が非常に恵みんそーち。

両親と男の子との三人で、もう大変貧乏な暮らしをしていたそうだ。家には今日食べる物もないほどの貧乏であつた。

この長男は、いつも他の家に儲けを行つていた。今はもういろいろな仕事がたくさんあるさあね。昔は、もう仕事といえば、金持ちの家に毎日く通つて畠の日傭をしていた。この儲けてくるお金だけで、二人の親の面倒をみていた。もう大昔のことなので、どのくらいのお金をもらつていたか分からないが、その金持ちの家で三度の食事は食べていただようだ。(そしたらこの息子は)、私の両親は私が仕事に行つて帰つてくる間、一日中食事もとつてない。親は夕飯一回だけの食事なのに、私は三回も食事を取つているとを考えた。そしてお昼まではそこで食べて、この夕飯はそこから主人にお願いして、自分の食べる分を家に持つていつて両親に食べさせているほどの貧乏人であつた。

くぬ子供や非常に眞面目な人、かわいそう、本当にかわいそうやつさり思やーに、天ぬ神様ぬ見じそーち。なーあるかんし仕事場から自分ぬ家んかい帰いくするうぬ道中うてい、なー天ぬ神様が逢んそーち。「ぬが青年、仕事帰いるやりー」り言ち、互にな一道連ぬ話やるばーてー。あんきぐとう仕事から帰いに、うぬま八十以上ないしきーる老人やんしきーしが、うりが子供おつほし背中んかい、まあ腰んたまでいうふあそーていめんしきーる人、かわいそうやつさーくぬ人お、「んだ貴方おまーんかい通いみしきーが」りち。「伊波んかい通いん」り言んしきーたんり。伊波んかい石川など」とうく今までいぬ近さまでー、うぬ子供は私うふあさびらりちやれー、「しむさ、しむんどー青年」り言つたぐどう。「若さる難儀えなー、うぬあたいや難儀えいびらん」り。「私あ腰んかい替いみそーり。同じ伊波んかいるやいびーていから私うふあしちうさざーびら。貴方がめーんとうくるぬ近さまでー」り。「あんしきーちばていとうらし」りち。背中えかんし並びていおつぽしちゃんり。うぬ子供あうふあさぐとう、おつぱす

眞面目な子供であるのに本当にかわいそうだなと思つた。もうこうして仕事から自分の家へと行き来しているうちに、この天の神様と道中で逢つてしまつた。「どうした青年、仕事帰りか」と言つて、もうお互に道中で知りあつての話だよ。そうして仕事からの帰りに、八十歳以上になられる老人だが、腰も曲がつてゐる人が背中に子供もおんぶしていた。(その青年は)かわいそうだねこの人はと、「貴方はどこにいらつしやるんですか」と聞いた。(すると老人は)「伊波にだよ」とおつしやつたそうだ。石川の伊波にね。「私も伊波の人だが、じゃ、貴方がいらっしゃるとこまでの近くまで、この子供は私がおんぶしましよう」と言つたら、「いいよ、いいよ青年」と言われたのでね。「若い時の難儀は、このくらいは難儀ではありません」と。「私の背中に替えて下さい。同じ伊波に行くんでしたら、貴方がいらっしゃるところまでの近くまでは、私が(その子供を)おんぶしてさしあげましよう」と、(二人で)背中を並べておんぶしたそうだ。その子供をおんぶしたら、おんぶするまでは元気な子供であつたんだが、背中におぶつたらその子供は死んで、手や足もだれてしまつた。

るえーまー熱ぬある子供るやたんりしが、背中んかい
替わたれー命がねーらん子供あなでいよー、手ん足ん
だていぬ姿みーたんり。

あんさぐとう、うぬ神様かみさまやもーらんるあんりれー、
後あらちちめーんりちるうむてい通とおたしがもーらんなやー
に。なー歩あちやがちーさーていんちやれー熱ぬるむる冷さ
ていねーん、手てんだてい、命めいぬねーらん子供わらばあおつぼ
し驚うごきちよ。どうせなーうれー預あかたるびかーじえー、
くれー道みちんかい投なげていないるむのーあらんむー。私わら
達たあ親おやぬたとうくるめーぐとう、親おやとう約束やくそくしち家や
かい連つてい行いぢやーに、どうにかいい方法ほう親おやから習ならぶ
ねーならんりち。

家やあ着あちやぐとう、雨あまだいぬうまんかいうるち、お
母かあさんお父とうさんぬんかい、「私わんねーなー今日きょうや、非常ひじょうぬ困こん
難なんぬんかいあーとーびーさー」り言いちやれー、「ぬが何なん
やが」り言いんそーちやぐとう。「私わんねーやいびんよー、
道中みちなかうていあぬー八十以上いじゅうじょうないる年方としだたやいびーたるむ
ん、子供わらばあおつぼし歩あるちーかんていーぐわーしめーた
れー、『んだ、私わんうふあしちうさぎーびら。私わんにん伊波いはん
近ちかさまでー私わんうふあしちうさぎーびら。私わんにん伊波いはん』

そうしたら、その神様は後あらをついてくるとばかり思つ
ていたんだが、いなくなつていたそうだ。もう歩あるきな
がらさわつてみたら、熱もなく手もだれた命のない子
供わらばをおんぶしてゐるのに驚いてしまつた。しかしどう
せもう預かつた以上は、道に投なげていくわけにもいか
ないしね。私には両親おやがいるから、家に連れて行つて
両親と相談して、どうにかいい方法を習ならぶないといけ
ないと(考えた)。

家に着くと、軒下えんげのところにおろして、お母さんと
お父さんに、「私はもう今日は、大変な目にあつていま
すよ」と言つたから、「なぜ、どういうことか」とおつ
しやつてね。「私はですね。道中で八十歳もすぎる老人
が、子供をおぶつて歩きにくそうにしていたものです
から、『ああ、私がおんぶします。貴方がいらつしやる
ところの近くまでは、私がおぶつてさしあげましょう。
私も伊波いはに行くんですよ』と言つたからね。『だつたら

かいやいびーんどー】りちやぐとう。『あんしえー、あんしちばていとうらし』りち、私なかいうぬ子供え替かわていうふあさびたるむのー、一時えめんしえーんり思いたるむん、まーんかい行ちもーらんがらーもーらんない。命んねーらん子供あ連ていちえーびーさー】り言ちえーぎさむのー、親達たとうくるんかい。「ぬがあんし、いやーうんぐとーるくとうんあたたるやー。誠な人なるやるむんぬ、いやー何りちうんぐとーる、今日やなーうんぐとーる因難ぬんかいあーたがやー】りち、雨だいんかい出じていもーやーに見ち。「とーあんさーなー、あぬ、家ぬクチャ、あまにうちょーけー】り言ち、クチヤんかいうちいじ寝んしたんりちやんり。

うぬ青年なー心配通しで、ちゃーるくとうさびーがりち心配通しで、またん行ぢえー見じ見じやてーがはしが。親達が行ぢ見じんしぇーるまんぐらから、まー今ぬ電氣ちかたしとーゆぬむん、すぐうー明がいぬ見ていよー、うり黄金やたんり。黄金るなたぐとう「いえー黄金るやんどー。いやー誠天ぬんかい上あがてい、天ぬ神様が黄金る譲てーみせーさに」「はー貴方うぶおあんねーあいびらはに」りちやぐとう、「行ぢ見ちんれー、拝り

もう、頑張つてくれよ』と、私にこの子供はおんぶさせたものの、一時はいらつしやると思つたんだが、どこに行かれたのかいなくなつてしまつた。(私はもう)亡くなつた子供を連れてきてありますよ」と、両親に話したようだね。「まだどうして、おまえはそんな田にあつてしまつたのかね。誠実な人なのに、おまえはどうして今日はこんな大変な田にあつたんだろうね」と、軒下の方に出て来て(その子供を見た。「それならもう、家の裏座においておきなさい」と言つて、裏座に連れて行つて寝かせたようだ。

その青年はずつと心配して、どうなつているかとずつと心配し通しで、そこへ行つて(子供の様子を)見たりしていたようだが。両親がそこへ行つてみたら、今の電気がついたように、そこは大変明るくなつて、(その子供は)黄金になつていた。黄金になつていたので「おいー黄金になつているんだよ。おまえの誠が天に通じて、天の神様が黄金を譲つて下さつたんでしよう、

見れー」りたんり、なー連てい来る男ん子ぬ見ちやぐ
とうなー、光やーいクチャいつペー雇とー同むん明が
いくだぐとう、「はあ、見事なむんやいびーさ」りやー
に。

あんさーになー「うれーなーあぎたー、神様が助きて
ーんしえーぐどう。これは黄金え現代ぬ金、金。金
とう替りわるあぎたー宝あないぐどう。うりがあんとう
くるとう替てい、金ぬんかい替らやー」りやーに。う
りん、また相当な金なていよ。貧乏やたる家庭ぬ財産
ぬん買てい、家ん建築ん大くなち、りつぱ農家んかい
作てい。

また妻かめーていしちしちやしが、うぬ妻が眞面目あ
らん。連ていぢやる妻が、うぬ自分ぬ夫お、りつぱに
仕事から帰ていちーねーまー立派に丁寧にわんだいで、
立派にひらてい。親達またやーさしんそーうちえーん。
まんどーていん、やーさしんほーらち。またある晩ぬ
夕飯ぬんでー作ていなーうにーから、飯んでー自分く
る食りやてーんばーるやに。なー生活ぬゆたしくなた
ぐとう。夕飯のー帰ていちーるんしえー、自分ぬ妻が
りつぱぬ夕飯作てい出じやすんり。あんし「お父さん

ら、「行つて見てらん、拝んでざらん」と言つたそう
だ。もう連れて来たその息子が見るともう、光つてそ
の裏座は雇と同じくらいに明るくなつていたので、「は
あ、見事なものですね」と。

そうして「これはもう、神様が私達を助けてくれた
んだからね。この黄金は現代の金と替えないことは、
私達にとつて宝ではないからね。それがあるところで、
金と替えようね」と。その黄金は相当な金になつたそ
うだ。貧乏であつた家庭は財産も買つて、家も大きく
つくり、りつぱな農家になつた。

また（その息子は）妻もめとつたんだが、その妻は
眞面目ではなかつた。その妻は自分の夫が仕事から帰つ
てくると、立派に丁寧にもてなしていた。しかし両親
にはひもじい思いをさせていた。たくさんあつてもひ
もじい思いをさせていた。たくさんあつてもひ
もじい思いをさせていた。もう夕飯も自分達でちゃんと
作つていた。生活が裕福になつたので、自分が帰つ
て来るまでには、妻が夕飯も作つて出してくれた。そ
して「お父さんやお母さんにも出したか」と言つたら、
「あげましたよ」と、「じゃあいい」ということになつ

たし、お母さんたーんうさきてーーり言んねー、「う

さぎたんどーさい」り言ちさーい、「あんしえーゆたさ

さ」りち、食みくくしち、生活ん日々暮らちよーでー

れさんよー。

うぬお父さん、お母さんたーなーどうく真面目なんそーちよ。自分ぬ長男ぬ妻やるむん、うりがみーくしん言ちんないんなー。自分がにじれー、辛抱そーけーゆーあいるするり、親達あなーちゃーるくとうそーていん辛抱しちめーたんり。あん自分のー親たとうくるのー隠ちめーしが、天ぬ神様んかいまたあがてい、親達あ報告んしもーらんしがあがてい。

今度おまたうぬ仕事途中に、また神様が代わてい、うれーまた女ぬ姿んかいもーやーに、またくぬ前ぬぐとういぢやたんり。途中いぢやていしちやぐとう。あぬうぬ人んまた風呂敷包みかみて、かわいそうぎさ逢ていよー道中うてい。逢ていうぬ人んまた助きて、貴方がウチユクイヂチンのー、私持つちやびら」りちやぐとう。ああなー人間ぬ義理りぬむの一赤ぬ他人るやぐとう。若さしやたんてん、ま、自分らやていんあかん子供達や、とーうり持つてーれー言らん。義理

て。そういうふうに食事をして、毎日暮らしていたようだ。

このお父さんとお母さんはあまりにも真面目になつてね。自分の長男の嫁であるのに、その嫁の悪口を言うことはできないとね。自分達が我慢すれば、辛抱すれば円満になるんだと。両親はどんなことがあつても辛抱していたそうだ。その二人の親は隠していたんだが、その両親は何の報告もしていないんだが、天の神様のところまで（その話は）届いていた。

今度はまた別の神様が女の姿になつて、仕事帰りに（その息子の前に）現れたようだ。途中で出逢つたからね。その女人の人もまた、風呂敷包みを頭にのせていたので、かわいそうに思いその人も助けてあげた。「貴方の風呂敷包みは、私が持ちましょう」と言つたからね。でももう人間には義理というものがあるので、たとえ若い者であるにせよ赤の他人に、（自分の荷物を）持たすわけにはいかない。義理といいうのがあるさあね。義理があるから「いいよ」と断つた。「どうしたんです

りぬくとうぬあしえーや、義理りち。義理ぬあぐとう、
「しむさ」り言ちしちやぐとう。「あい、ぬぐわうぬあ
たいぬ荷物え私ねー難儀えあいびらんぐとう。私にん
かい持たしんそーらんなー」りちやぐとう、「まーんか
い通いみしえーが」りちやれー、「伊波んかい」「私に
ん伊波ぬ人やいびんどー」り言ちやぐとう。「あんしゆ
ぬ家んかいるやいびーぐとう、貴方ぬ用事ぬ近さまで一
持つちうさぎーびーぐとう、私にんかい持たしんそー
りり、渡ちやれーてー」。

うぬ人お「いやーあんし、伊波ぬ屋号何り言ぬとう
くるかい私ねー用事やん」うぬおばあなでい見る神
様あ。「あいなー私達るやいびんれー、なーや私達るや
いびーぐー。ぬが何ぬ用事やいびーぐとう」りちやぐ
とう。「あい、いつたーるやんなー、これはくれー言ぐ
らさるくどうやんどー。今度お」りち。

「ぬが何やいびーが、何ぬ事やたんてーん私あ家庭
るやいびるむん、明らかに話ちきみそーらんなー」り
ちやぐとう。「とーあんしえー、いやーいーばーるやぐ
とう、いやーが行かんまーる逢たしえー、いやーが徳
ぬあてーるやぐとう。あー言ちんだやー」り言ちやぐ

そしてそのおばあさんに見える神様が、「私は伊波の
屋号何といふところに用事だよ」と言つた。すると「あ
あ！それは私達ですよ。なぜ何の用事ですか」と言つ
た。「あなた達であつたのか、これは今度はちょっと言
いにくいことだよ」と。

か、このくらいの荷物を持つことは、私は難儀ではあ
りませんよ。私に持たせて下さいませんか」と言つて、
「どこまで行くんですか」と聞いたら「伊波に」そし
て「私も伊波の人ですよ」と言つた。「だつたら同じと
ころに行くんですから、貴方が用事で行く近くまでは
私に持たせて下さい」と、(その荷物は)渡したそうだ。

とう。「あー言ちくいみそーり」「いやーやなーずつと前ぬ年に、神様から天から助きらつてい、助きんそーちやるくとおいやー覚とーうやー」「あーじこー覚とーやびん」「助きては、いやー今あ生活んゆたしくなちどうらちえーしが。いやー妻がよー眞面目あらん。天ぬ神様んかいあがとーぐどうや。いやーやなー、いつたー家庭やなー取つてい来りちやんどーやー」「取つてい来りしえー、ぬが何やが」り。「宝取つてい来りしえー、火り、火。火うくち、焼ち払つて來るよう」という命令がわん私ねーあんいちいつたんかい行ちゅんどー」りちやぐとう。

びつくりしちよ、「あつさみよーなー、あんやいびんなー。私がん分かうん、夫婦やいびーしが。私ぐとうるそーはにりちやいびーしが、あん見とーびんないんにつたーや」「見とーんどー、いやーうりとう離縁しーすみ、しーさんむんやれーいつたー家庭ねーらんないんどー、今度お」り言やつていよ。「あーとーとー、家庭やか上や宝あねーびらんぐとう。私にんお詫断わいびーるんさー、どーりんぬがーらちきみそーり」りちしちやぐとう。「とーあんさー、いやーが婚礼あきてーぬ女、離

ずつと以前に、天の神様に助けられたことは覚えているでしょ」「あーよく覚えてますよ」「おまえは助けられて、今はいい生活もしているんだがね。おまえの妻が眞面目ではない。天の神様にそういうふうに上がつているからね。もうおまえ達の家庭を取つて来い」ということだよ」「取つて来いといふのは、火、火ですか」と。「宝取つて来なさいといふのは、火、火だよ。火をおこして焼き払つて来るよう」という命令があつてね。私はそういうことでおまえの家に行くんだよ」と言った。

縁しーするむんりぬ意志があみ、決心あみ」りちやぐ
とう、「あいびん」り。「まーとーあんしえー私ねー帰
いぐとう、うぬ通いどー」りち、道中うてい帰いそー
ちてー、神様あ。

家あ着ちやれーなー残念、毎日のこと夫婦くどーる
女やしえーや。物言がたなーはぬ、なーこんなことり
ちえー目にん見らんたるむんりち、残念しち。さつそ
く奥さんのーまた、夕飯りつぱにすがていうさがみそー
りりち、うまんかい前んかい寄してい来しが、「ぬが貴
方おあんまさるあみせーるい。かげんぬる悪さみせー
り、早く夕飯のーうさがらん」りちやぐどう。「うん、
まーんかげんのー悪さーねーらん、普通ぬ健康るやし
が、今日や夕飯早々私ねー食まらんそー」「ぬが何やい
びーが」りちやれー、「なー是非じひいやーんかい言らんとー
ならんくどうぬあぐとうや、言ちんだやー」り。

「いやーやや、私あ前んかい来からぬ後う、ぬがあ
んし親わんかいぬ、飯でも何でもあるするむんぬ、
いやー私親ぬたとくろお、やーざるしんほーらちえー
んりいさやー」り言やつとーるばーて。「やみ、あらに、

もう家に着いたんだが、毎日のように夫婦生活して
いる女だけに、残念なことであつた。もう、こんなこ
とになつてているとは思つてもみなかつただけに、本当
に残念でたまらない。(夫が帰つて來たので)奥さんは
さつそく夕飯もちゃんと作つて、召しあがつて下さい
と前に持つてきて、「どうなさつたんですか、貴方は氣
分でも悪いんですか。どこかかげんでも悪いんですか。
早く夕飯も召しあがつて下さい」と言つたからね。「ど
こも悪くはないよ。いつもと同じように健康であるん
だが、今日は早々と夕飯を食べる気になれないよ」「な
ぜどうしたんですか」「もう是非おまえに言わないとい
けないことがあるから、話してみようね」と。

「おまえは私のところに来てから、どうして、飯で
も何でもあるのに、私の両親にはちゃんとともてなしも
しないで、いつもひもじい思いをさせているというの
ではないか」と(夫に)言われてしまつた。「そうか!

わんねー神様からぬお授けちゃんと聞ちちよーしが、ありぬまま言りよー。しかたあならんどー」「りちやぐとう。なー女ん殘念しちなー」「あんやいびーたん」「どーあんしえー、いやー今日限り親ぬ前んかい帰ていとうらし。あんあらんれーくぬ家庭ねーらんならすんり言んしえーぐどう。だーあんししか考ららんぐとう、つまらんくとうなどーしえー帰ていきらんなー」りちやぐとう。「なーしかたあならん、あんすん。帰いびん。私がる悪さいびる」りち。

その、うぬ後お何ぬ難事うんならんよーい。くぬうぬ話い私にんかいしんしえーる人およーめんそーらんしがよー。やつぱりうれーあぬ人がぬ話いや、現代うれー相像話いんあらん。伊波んかいあたんりぬ言葉やんりんれーり言ち聞ちやるばー。

違うのか!私は神様からのお授けをちゃんと聞いて来ているんだが、ありのまま言えよ。もうしかたのないことだから」と言つたらね。「そうでした」「じゃあ、おまえは今日限り実家に帰つてくれ。そうしないんだつたら、この家庭は(焼き払う)とおつしゃつてゐるからね。もうそれ以外に考えられないから、残念なことになつてゐるが帰つてくれ」と言つた。「もうしかたがないそうします。帰ります。私の方が悪いです」と。

その後はどんな難事もなかつたそうだ。この話を私に話した方はすでに亡くなつたんだがね。やつぱりこの話は、想像話ではない。伊波にあつたということだけよ。

城間仲 盜人

著者 比嘉勝一（明治四十五年十二月二十三日生）

翻字 知花春美

なー昔よ、城間仲りしえー金持ん人やみせーたんり。
金持ん人やぐとう、なー年ぬ夜りーねー必じ家族、
年ぬ夜ぬ夕飯のー必じ家族すりてている年ぬ夜、大晦
日ぬ夕飯のー取いしえーやー。

あんさぐとうなー家族、五人るうしが、五人すりて
なー夕飯のー、お膳のー五人分作らつとーしが、うぬ
うまぬおやじぬ、「うれーいつたーや、なー一人うぐとう
なー一人分のー作り」り言んそーちやんりよ。「珍しい
むん。あんし家族お五人るうる、五人分作てーるむん
『なー一人分のー作り』り」言んそーちやくとう「う
れーあらん、なー一人うんどー うんどー」りち あ
んさーい言んそーちやぐとう、「珍しいむん」りやーい
うぬ奥さんの一作いや作てい。

うぬ親父のー、盗入ぬ入ち天井んかい上とーしえー、
見ちめーてーるばーてー、あんさーい、うぬなーお膳
のー五人、六人分作やーい、あんしから、「あまんかい

もう昔ね、城間仲というのは金持ちだったそうだ。
金持ちなので、もう大晦日の夜は、その日の夕飯は必ず家族揃つて食べていた。

そうして、家族は五人で、五人揃つて夕飯を、お膳
は五人分作られているが、そこの主人が「それはおま
えたちよ、もう一人いるのであと一人分作りなさい」と
と言われたそうだ。「珍しいことだ。家族は五人いて、
五人分作つてあるが、『あと一人分は作りなさい』とは
と、「これは、あと一人いるよ」と言われたので、「珍
しいことだ」と、その奥さんは作ることは作つた。

そこの主人は、盗人が入つて天井に上がつてゐるの
を見ていたようだ。それで、お膳は五人、六人分作つてから、「あそこにいる人は降りて来なさい」と、言わ

うしえ一降りてい来うり言みそーちえーるふーじよー。
うぬ盜人お見ちめーてーるばーてー。あんきーなかい、
なーうぬ盜人おあん言ちやぐとう、「分かていめーらー
仕方あならん」

「皆どう夕飯まんじょーいしち。いやーや、ちゃねー
るうりさーなかい、私達あ家ぬ上んかい上とーが」り
主人ぬ問いみそーちやぐとう、年ぬ夜りいちらんく貧乏
乏ない、子んちやーんかい食むしんねーらん 年ぬ
夜やしが食ますしきーねーらん貴方なーがうさがてい
後ぬむん持つち行ぢやーい、うりさーなかい子んちやー
年えとうらしえーやーり思でいくまんかい、貴方なー
が休らんまーるまんかい上とーびんり」言ちえーる
ふーじ。

あんさぐとう、「ちゅーやなー私達あまんどーぐとう
御馳走ん食り、持たすぐとう」りち、うぬ親父の一言
んそーちやぐとう。うぬ御馳走ん食り、また子んちやー
たましまでいん持たしみそーちゃんり。

あんしうぬ盜人んあんさーなかい、うまぬ恩のー忘
らんぐとう働ちちきていなーうぬ盜人やたしんもうきて
てい、もうきたぐとう、あんしからうまんかい七月、

れたようだ。その盜人が入るのを見ていたのでしよう。
それで、その盜人はそう言わされたので、「分かつておら
れるのなら仕方がない」と。

「皆と夕飯もいつしょに食べなさい。おまえはどう
いうつもりで私達の家の上に上つているのか」と主人
が問われたので、「年の晩といつても、あまりにも貧乏
で、子どもたちにあげるものもなくて、年の晩だけど
食べさすのもなくて、それで子どもたちに年を越させ
ようと思つてここへ、貴方たちが休まないうちにここ
に上つています」と言つたようだ。

すると、「きょうはもう私達はたくさんあるので、御
馳走も食べなさい、(おみやげも)持たしてあげよう」
と、その主人は言われた。(盜人は)御馳走も食べて、
子どもたちの分も持つて帰つたようだ。

それで、その盜人はその恩は忘れることなく働いて、もうけて、そこに七月、正月と主人が生きている
間その恩を忘れなかつたということである。

正月、うぬ人々生ちちょーるえーまあうぬ御恩の一忘らんたんりる話。

注 城間仲 浦添市城間にある富豪の屋号。

採集 S52・2・27 読谷村民話調査団第十班（山城悦子）

84 宝物の話

話者 照屋 寛良（明治四十一年五月十日生）

翻字 具志堅 タケ

この話は貧乏者の子が他に奉公に売られて行つて、年晚に、「年に一度の年の晚なので、家へ帰つて年を越しなさい」と、主人に言われて帰された。

くりん貧しい者ぬ子ぬ、他んかい売らりやーい、くりん年ぬ夜んかいないん、「年に一回ぬ年ぬ夜やぐとう、年や家んじどうてい来う」りち主人ぬやらしさくとう。

ある浜辺通ていさぐどう、海岸辺うてい、海ぬ潮ぬ干つちょーる所うてい、くれ一 夜遲かなとーでーるふーじ、あんさーい、浜千鳥が多く集まつて、なーチューリ、チューアイ、チューアイし、真黒そーるふーじや。家かい急じえーうしが、まじ、うつさ浜千鳥がチューアイ、

ある浜辺を通つて、潮が干いでいる海岸辺で、夜も遅いけれど、浜千鳥が多く集まつて、チューアイ、チューアイと鳴いて、真黒くなるほどいたそうだ。家に急いでいるが、浜千鳥が黒山になるほど集まつていたので、海岸に下りてみると人が死んでいたそうだ。「あゝかわ

チユーリすい、黒山など一ぐとう、まじえー行ぢ、下りてい見ちんだりやーい海岸ぬんかい下りやーなかい見ちやぐどう、人ぬ死じよーるふーじ。「あいえーやー、年ぬ夜ぬ日、明日や元旦ぬんやるむんなかい、あんし氣の毒やつさーやー」りち、くれー赤ぬ他人やしが、うぬままぶつたきてーならんりやーい。根は正者やぐとう、大和がーきーし亡ちよーる人、家んかいちけーち来。

あんさーい、男ぬ親、一人やうたんりよー、うれー。「いえー、スー、私ねー何処ぬ海んかい亡ちよーる人かんし負つし来んどーやー」りちやぐどう、「とー、いやーや良いしばいしえーさ、じこー徳ちちゅさ。と一家ぬ内んかいちけーしえー」りやーい。

あんさーい、親子さーなかい、うぬ夜とーてい、床うくち、棺箱ぬ形、造やーい。棺箱んかい入つてい、線香ん立ていて、夕飯ぬんしきてい。なー何処ん人りちえー分からんぐどう、自分なーくる葬いんりちるやんりぐどう、夜ぬ明きねー。あんさーい、年んとうてい、なーもちろん線香ん立ていて、うぬ人んかい夕飯ぬんひきて。自分なーん眠てい、あんさーい、

いそうに、大晦日に、明日は元旦だというのに、とても気の毒だなあ」と、赤の他人ではあるけれどこのまま放つておくわけにはいかなかつた。根は正直者だから、死んでいる人の顔をタオルでおおつて、家まで連れて來た。

そうして、その人には父親が一人いたそつだ。「ねえ、お父さん、私はどことこの海で死んでいた人を、こうして背負つて來たよ」と言つて、「そうか、おまえは良い事をした。とても徳がつくよ。さあ家中に入れなさい」と言つた。

それから、親子で、その夜のうちに床をはずして棺箱を造つた。棺箱の中に入れて、線香を立てて、夕飯も供えた。もうどこの人か分からないので、夜が明けたら自分たちで葬つてあげるつもりだつた。そうして年もとつて、もちろん線香も立てて、その人には夕飯も供えた。その親子は眼つて、朝起きて、「きょうは茶毘もしようね」ということであつた。

朝起きて、「ちゅーや茶屋さーやー親子し」りち。

あんさい、うぬ人おなー、ちけーち来ぐとう 頭ん
分からんてーぐとう、「まじ顔んちよーん見ちんだやー」
りやーい開きたぐとう、ピカツみかち光いたんりよー。
あんされー、びつくりし、「あいえー うれー黄金るや
んでー。人おあらんでー、黄金るやんでー」りち、親も子
ん子ん正直ぬ賜物どうし、黄金儲きたんりち。

とー、うりうつさ話や。やぐとう、人間正直あらん
でーならんりる「ちぬ物知らしぬ言葉り。あんさいに
棺箱んかいや、クワンチエーでー言らんしぇー、沖
縄中や共通語で宝物り、ありんかいや。

そこで、その人を連れては來たが、顔も知らないの
で、「まず顔でも見てみようか」と、開けてみると、ピ
カツと光つたようだ。そうしたらびつくりして、「さあ、
これは黄金だ！ 人ではなくて黄金だ」とね。親も子
も正直の賜物として、黄金を儲けたという話であった。

はいっ、これも話はそれだけ。だから、人間正直で
なければいけないというひとつのお訓だよ。それで、
棺箱には、クワンチエーとは言わないで、宝物という
そうだ。

採集 S 52・2・27 読谷村民話調査團第十六班（照屋寛信・知花利枝子）

85 炭燒き長者

話者 波平ハツ（大正一年十一月五日生）

翻字 知花春美

さち夫お悪い人るやてーさに。あんさいに、追い出
じやさつたぐとう、な一年ぬ夜げーなー追い出じやさつ

最初の夫は悪い人だったのでしよう。それで追い出
されてしまつて、もう大晦日というのに追いだされた

とーるばーよーやー、女ぬ。

あんさーい、あまんかい行ぢやぐとう。友達とう一
緒い行ぢやーい。「うまんかい「夜あ泊まらし」りやー
い、泊またぐとうてー。泊またぐとう、なーたつたい、
うまぬ炭焼ちやーおじさんぬん悪儀えあらんぐとう、
「とーあんしえー泊まれー」りやーい泊まらちやーに。
またうにーから、互に愛せーるばーるやさに。うぬ女のー
炭の一分かいてーるばーよー、黄金りち。うにーから、
うまうてい夫婦なやーに成功そーたんりさー。

うまんじ生活そーるばーに、また、さち夫おけー亡し
さぐとう。また友達ぬ「いつたーあれーけー」さんどー
やー」りちやぐとう、あんしんなー、愛さーあてーる
ぱーるやさに。今ぬ夫ぬ「いつたー初めー見合いやそー
てーるむー行ぢくーわ「りやーに、お葬式んかい行ぢや
んりさりぬ話やたん。

んだね、女は。

そこで、あそこへ友達といつしょに行つた。「そこに
一夜は泊めて下さい」と言つて、泊まつた。その炭
焼きの男も悪い人ではないので、「それでは泊まりなさ
い」と泊めてあげた。それからしだいに、互に愛し
たのでしよう。その女は、炭が黄金であると分かつて
いたわけだ。ふたりは夫婦になつて成功したそうだ。

そこで生活しているときに、最初の夫は亡くなつた
ようだ。友達が「あなたの、あの人は亡くなつたよ」
と言つたので、すこしは愛も残つていたんだろう。今
の夫が「おまえたちはいつしょに住んでいたのだから
行つてきなさい」と、葬式に行つたという話である。

翻字 知花孝子

大体、中国りぬ本当あたるはじやしが、沖縄人や沖縄ぬ物ちしえーせやー。

じこー、下男子ん多く使とーる金持人とう、じこーまた、年ぬ晩んない、夕飯ぬん食みーさんあたいぬ貧乏者とうぬ話やしがよ。

うれー神様どうやしが、人間ぬ姿なやーなさい、年ぬ晩ぬ夜、うぬ金持人ぬ家んかい、「泊まらちきいらんなー」ち行ぢやぐとう。夕飯うちかまでい、家ん貸らしわるやぐとう、損ないんりち貸らさんてーるふーじ。追ほーてーるふーじや。

あんさーい、貧乏者ぬ夫婦ぬ、じこーなー年ぬ晩ぬ夕飯ぬん喰みーさんあたいぬ家庭んかい行ぢ、「泊まらちとうらさんなー」りちやぐとう。「実際なー今日やうつペーる大晦日やしが、私達ん夕飯ぬん準備さんあたいるやいびんでー。夫婦暮らし、貧乏やいびーん」「とにかく、寝んだちどうらしえーしむぐとう、泊み

大体、中国に本当にあつたはずだが、沖縄の人は沖縄にしているでしょう。

下男を大勢使つてゐる金持ちと、また年の晩の夕飯も食べることのできないほどの貧乏者がいた。その(二家庭の)話だけどね。

この人は神様なのだが、人間の姿になつて、大晦日の晩、その金持ちの家に、「泊めてくれませんか」と行つたようだ。(その主人は)夕飯をもてなして、家を貸さなければならぬから、損になるといつて貸さなかつたようだ。そして、追い払つたようだね。

それで、年の晩の夕飯も食べることのできないような大変貧乏者の夫婦の家庭に行き、「泊めてくれませんか」と言つた。(その夫婦は)「実はもう今日は、大晦日であるけれども、私達は夕飯も準備できないほどですよ。夫婦暮らしの貧乏者です」(と答えて)「とにかく、寝かせて下されば良いから、泊めて下さい」(と

て い と う ら し みそ 一 り 「 と ー あん し えー 泊 ま い みそー
れ 」 り ち。 あん さー に なー 火 御 驚 走り ぬ 話 ぬ あ し えー
やー 。 「 火 さー な か い 年 」 と う つ て いく みそー り よー 。 旅 ぬ
人 、 私 達 ん なー 火 しる 年 え と う い び ー ぐ と う 、 食 む し
ん ねー び ら ん ぐ と う 」 ん ち。

あん さー い 、 火 ぐ わー 燃 ち ぬく で い そ ー に 、 ん ま ぬ
う ぬ 神 様 が 、 人 ん か い 化 き と ー る 神 様 が 、「 えー 、 い つ
た ー 台 所 か ら 鍋 取 つ て い ち ゃー に か い 、 う ぬ 火 ぬ 上 ン
か い か き ら ん なー 。 あ ン さー な か い 、 水 入 つ て いく
わ 、 う ぬ 鍋 ぬ か い 」 り やー な か い 、 う ぬ 人 が 神 ど う や
み し えー ぐ と う 、 何 が ら 、 か ん し 垂 し ねー び ぐ わー
さ ぐ と う 、 す ぐ 、 米 ぬ 烹 て い よー 、 御 飯 ぬ 烹 て い 」 と ー 、
と ー う れー 移 さー な か い 、 う り ん か い ま た ン 水 入 つ て い
急 じ う ま ん か い か き れー 」 り ち。 あ ン さー ま う ぬ 神 様
が 、 ま た 何 が ら 入 り ねー び ー さ ぐ と う 、 ま た 、 肉 ぬ グ ワ
タ ナイ 煮 て い 出 じ て い よー 、 あ ン さー い 、 夕 飯 食 て い
あ ン さー に 、 翌 朝 、「 夕 飯 に へー や た ん どー 、 い
た ー お か じ に 、 一 緒 御 驚 走 し 年 」 と う て い 、 私 ねー
旅 ん か い 出 じ ー ぐ と う 、 い つ た ー が 、 私 が い つ た ー か
ら 出 じ ら ん ま ー る 、 何 が ら 願 え ぬ ねー に 」 り ち えー る

願 う の で) 「 そ れ で は お 泊 ま い 下 さ い 」 と (言 つ て 内 に
入 れ た) 。 そ れ で 火 御 驚 走 と い う 話 が あ 有 で し ょ う 。 「 火
に あ た つ て 年 を 越 し て く だ さ い よ 、 旅 の 人 、 私 達 も も
う 食 べ る 物 も な い の で 、 火 に あ た つ て 年 を 越 す の で す 」
と 。

そ う し て 、 火 を 燃 や し て 暖 ま つ て い る と 、 そ の 神 様
が 、 人 に 姿 を か え て いる 神 様 が 「 ねえ 、 お ま え た ち 、
台 所 か ら 鍋 を 取 つ て き て 、 そ の 火 の 上 に かけ な さ い 。
そ し て 、 そ の 鍋 に 水 を 入 れ な さ い 」 と 言 つ て (そ の 通
り に す る と) そ の 人 は 、 神 で あ る から 、 何 か こ う し
垂 し た よ う だ が 、 そ れ か ら す ぐ 、 米 が 烹 け て ね 、 御
飯 が 烹 け て ね 、「 は い 、 は い 、 こ の 御 飯 を 移 し て 、 こ
の 鍋 に も う 一 度 水 を 入 れ て 、 急 い で こ こ の 火 に かけ な
さ い 」 と (神 様 が) 言 つ た 、 そ う し て そ の 神 様 が 、 ま た
何 か を 入 れ た よ う だ 、 今 度 は 、 肉 が グ ツ グ ツ 煮 え て 出
て き て ね 、 そ し て 夕 飯 も 食 べ た よ う だ 。

そ う し て 、 翌 朝 、「 昨 夜 は あ り が と う 、 あ な た 達 の お
か げ で 一 緒 に 御 驚 走 を 食 べ る こ と が で き て 、 年 を 越 す
こ と が で き た 、 私 は こ れ か ら 旅 に 出 る け ど 、 私 が 出 な
い う ち に 、 お ま え た ち の 家 か ら 、 あ な た 達 は 何 か 願 い

ふーじ。「いつたーや願えぬあらー、私にんかい話さんなー」りちゃぐとう。「私達やなー、錢賭きれーやーりぬ願やなんじゅねーやびらん。ただ、夫婦あ若くなれーやー、じこー働ち、今から働ち、家庭え持ち上ぎてい、金持んしんれーやーり思やびーん」「えーあんやみ。とーあんしぇー、大鍋んかい湯あちらしえー」湯あちらしみやーなかい、うぬ人がまたん何がら入つたぐどう。「とーうりんかい、いつたーや一人ちがーる浴みれー」浴みたぐとう、元ぬ姿、十七、八ぬ姿なてい。あんきーい、おじい、おばあん、「あいえー自分なーや珍らさんやー」んち、なー抱き合つていそーきそーるふーじ。あんしすんりしーねー、くぬ「いつたー若くなとーぐとう、一生懸命働ち、金持しーよーやー。私ねー行ちゅぐとう」りち、うりから出じてい行ぢえーるふーじや。

あんきーい、「私達あ若くなてい、あんしいそーさるやー」りやーなかい、隣近所んかい年頭しーが行ぢえーるふーじ。欲張りぬおじいさん達かい。んまー下男子ん多く使とーんりぐとう。あんし、うつたーがちょーし見ち、「何がいつたーや、今から何十年前ぬ姿などー

事がないか」と言つたそうだ。「あなた達は願いがあるんだつたら、私に話さないか」と言つた。「私達は、もう金賭けをしようという願いはありません。ただ、夫婦が若くなれたら、もつと働いて、今からでも家をもうあげて、繁盛してみたいなあと思つています」と答えると「ああ、そうか、それでは、大鍋に湯を沸かし何かを入れた。「これで、あなた達は交代で浴びなさい」と言つて、(夫婦が)浴びたところ、元の十七、八の姿にもどつた。それでおじいさんやおばあさんは、「あー珍しいことだね」と言つて喜んだそうだ。そうしているうちに、「あなた達はもう若くなつていいから、一生懸命働いて、裕福になりなさいよ。私はもう行くからと」、それから出て行つたようだ。

それで「私達は若くなつて、ほんとに嬉しいねえ」と言つて、隣近所に年始まわりをしに行つたようだね。欲張りのおじいさんの家にも。そこは下男も多く使つていた。若くなつた夫婦がきたので、(驚いた主人は)「どうした、おまえ達は何十年前かの姿になつている

しが、何やが」りちゃぐとう。「実え夕べ、あんかんし旅ぬ人ぬめんそーち泊までい。私達や夕飯ぬん美味く食でい、かんし湯んかい浴みたぐとう、夫婦元ぬ姿なとーん」りちゃぐとう。「あんし、うぬ人おまーんかい行いたが」りち、「まーぬ、まんぐらーかい行ちゅたんろー」りちゃぐとう。

なーくーんぱーすぬ人無理にやつぱていちょー、「私達んなー、錢金余るかまんりそーしが、な一年えんじよーぐとう、あまぬ夫婦ぬ若くなたんねーし、私達ん若くなちきり」りち、無理に願て。」「どうとう、あんしぇー湯ふかち、一人人ちがーる全員浴みれー」りち。浴みたぐとう、全員猿なたんりよー、下男子までい。あんし猿なたーさーい、なーキイーないキイーない山んかいやるふーじ。猿なたいるうぐとう、あんさーい山んかい行ち。
うぬまた神様やまた、戻ていめんそーやなかい、「とーあまーなー猿皆なやーなかい、あぬ家あ守いさんぐとう。財産守いさんぐとう、なー天ぬ授きりやぐとう、あまぬ家庭さーなかい守りよー。あまんかい越れー」りち。「あんし、しまびーがやー」「いー、うれー、天ぬ授か

が、どうしたのが」と聞いたところ、「実はゆうべ、旅の人がいらつしゃつて、泊めると、夕飯もおいしく食べて湯で浴びると、私達夫婦は元の若い姿になつているんだよ。と言つた。「それでその人は、どこへ行つたか」と（金持ちの欲張りじいさんがきいたので）「どこに行つたよ」と教えた。

するとそこへ追つていつて、もう来たがらないのを無理に引つぱつて連れてきて、「私達はお金は余るほどあります、年をとりすぎているので、あそこの夫婦が若くなつたように私達も若くしてくれ」と、願つた。

（神様であるその人は）「それでは、湯を沸かして、交代に全員浴びなさい」と言つた。そして浴びると、全員、下男達までも猿になつた。そして、猿になつて、キイーキイーと泣きながら山に行つたようだ。猿になつているのだから、山に入つて行つた。

その神様は（貧乏人の所に）また戻つていらつしゃつて、「あの家は皆、猿になつて家を守ることができないんだからね。財産を管理することができないからもう天の授けものだから、あの家は君達でみなさい。あの家に越しなさい」と言つた。「それでいいのでしょうか」

いんどうやんどー」りち。

と夫婦が聞くと、「それは、天の授けものだから」と神様が言つてくれた。

あんし越こたぐとう、毎日ちゅーるふーじ。うぬ猿さるぬ、時分じぶんないねー。キイーないキイーない、「私達わづなあ財産ざいさん横取りよことりしえーん」言葉ごんばのー言やんしが、なーキイないキイないちやー来るふーじ。

あんぐとううぬ夫婦ふうふや、「うぬ神様かみさまが出てでいめんそーれーやしが、なー私達わづなあかんし人ひとぬ財産ざいさんぬんかいー やーなかい、あまちょーしが」りしーねー、神かみどうや みしぇーぐとう、また戻もどていめんそーやーい「とーあ んすかなー、うつたーが動物どうぶつなてないん、未練みれんくぬ世よん かい残のこてい、あんし、ちーちーしーねー、なーくれー ただー許ゆるちえーならんぐとう。庭にわぬマーイシむる焼やち 置おきけー」りやーなかい。マーイシ焼やちーい、庭にわんか い置おきちゃぐとう。うりんかい来くわちやーい、座おたんりー ぐとう、うぬ猿さるぬちやーや。あんぎーい、うりんかい 座おちえーるふーじや。あんし尻あえけー焼やきて、猿さるぬ 尻あや赤あかなたんり。とー、うつさるやんでー。話はなや。

泣いて毎日のようになら来たようだ。

それで、その夫婦は「あの神様が出てでいらつしゃつ たらいいのに。もう私達は、他人の財産に居座すわつてし まつたといわれ、手を焼やいている」と思つてているところに、神である方は、戻もどつていらつしやつて「そんな 未練みれんを残して、こちらに來たりするのなら許ゆるせないな。 この庭のマーブル石を全部焼やいて、庭の石を全部焼やいてお きなさい」と言つた。そうして、マーブル石を焼やいて庭に 置いた。猿達はいつもそこにきて、座おつていたといふ からね。そうして猿達は、そこに座おつたようだね。そ れで猿の尻は焼やけて、赤くなつたということだ。とー これだけだよ。話はなは。

翻字 知花春美

タンヤチブラーでいしゃー、炭焼ちやー名前やるばーてー。

んかし、うぬ炭焼ちやーや、いつペー貧乏な者、くーしー者なやーに一人で山んじ一生けんめい炭焼ちやーに業ぐわーやそーるばー。これもまた妻なやーりちんうらん、なー私あ妻ないしんうらんよーと言つて、あきらめて一生けんめい、くれー誠実な者やぐとう、炭焼ちうりしなー生活んそーるばー。

なー、ある日、金持ちぬ女ん子やしが、うぬタンヤチブラーぬ精神認みて、「世の中にこんなにりつぱな精神を持つている人んうさやー、はーくぬ人、ぜひ夫しわるない」そう言つて、「一生けんめい互いに働いて成功しわるないさー」と言つて、その美人女ん子あいうて。自分の親んかい、「うぬ炭焼ちやー、私あ夫しみいできうんそーり、お父さん、お母さん」ち、願いん。だが、お父さん、お母さんは聞かない。「いやーやひやー、

タンヤチブラーといるのは、炭焼きの名前なんだがね。

むかし、その炭焼きは、たいそう貧乏者で、貧乏者だつたので一人山で、一生けんめい炭を焼いて仕事をしていたそうだ。その人もまた、嫁に来る人もなく、もう私の妻になる人もいなくてねと言つて、あきらめて一生けん命、この人は誠実な人なので、炭を焼いてそれで生活していたそうだ。

そして、ある日、金持ちの娘が、このタンヤチブラーの精神を認めて、世の中にこんなにりつぱな精神を持つている人もいるね。もうこの人をぜひ夫に迎えないといけない」と言つて、「一生けんめい互いに働いて成功しないといけないと言つて、その美人の娘はそう思つていた。自分の親に、「その炭焼きの人を私の夫にして下さい。お父さん、お母さん」とお願ひした。

しかし、お父さん、お母さんは聞かない。「おまえは、

そんな炭焼ちゃーあたいとう、夫婦する、いかない、で
きない」と言つて、お母さんぬん、お父さんぬん断わつた
しが、なー本人の一しいてい望みやいるすぐとう、と
うとうやむをえず二人夫婦なつたらしい。

もう、その一人がその後からやなー一生けん命炭焼ち
るんしえー、またその美人も、心が満足さーに、心ぬ
落とす着ちさぐとう一人とも。また、長男の子どもが
できた。その長男の子どもは、親ぬ炭焼ちゃーだから、
なんだから、ひじょうにまじめで、また頭ぐわーん、
頭ぐわーん秀りてい、親んちゃー言いちきん、ゆー聞
ち。

これがいわゆる、後々はひじょうに成功してその炭
焼ちゃーブラートーは、それからお二人の遺跡えかー
ま後までいん残やーにこのお二人に学べりち、うりが
残やーに、こういうふうに炭焼ちブラーぬ話や言いた
ん、やんりる話い、とーうつき。

そうして、炭焼きブラーはひじょうに成功して、二
人がやつたことはずつと後々まで残つて、この二人に
学べと模範になつた。炭焼きブラーの話はこれで、お
しまい。

そんな炭焼きぐらいの人と結婚するのか、ダメだ、で
きない」と言つて、お母さんも、お父さんも断わつた
が、もう本人の望みなので、やむをえず（許して）夫婦
になつたらしい。

もうその二人はその後から、いつしょうけんめい炭
焼きをして、また、その美人も心から満足して二人と
も心が落ち着いた。長男もできて、親は炭焼きである
が、その子どもはひじょうにまじめで、頭も秀れて親
の言うこともよく聞いた。

話者 比嘉利吉（明治四十一年十二月二十日生）

翻字 棚原めぐみ

山田にこんな話があるわけさ、牛をながく飼つてさー、その牛が物を言うたと。そしてその牛は、もう売ろうとしても買ひ手がない。それだから、主も困つてしまつて、山にもつていつてつないだわけ。

つないだから、そこにはまた草刈やーが行つたわけだな。行つたからその牛が物を言うたわけ、「こつち来なさい」と言つて。「私を家まで連れて行つてくれ」ということで、びつくりしてその人は、その山田の牛主に話したわけ。主はもうとうとう困つて、またその牛取りに行つたわけ。それからその牛が言うに、「もう私は長く生きているから、この私を殺してカンカーして、そして骨をあつちこつち、こんな部落の入り口にかけておきなさい」ということ。そうすればもー、悪い神、入つてこないという話だな。それがカンカーの始まりさ。カンカー牛といつてあるよね。その牛を殺してカンカーしたから、カンカーの始まりは、山田から始まつたという話だな。カンカーは旧の十一月、シムチチカンカーといつて、こつちでも今は、字の役目でやつてあるよ。拝所拝所でね。部落でカンカーということ。昔は子供全部集まつてさ、肉これだけつくつて食べよつた。今はそんなことない。昔はもうこのぐらいの肉ぐわーでも珍しいから。今はぜいたくだからそんな物食べには行かんさ。小さい時、よくカンカーに行つたよ。それから摩除けといふことだな。

それから昔から、動物は、長らく飼つてはいけないという話があるわけ。長らく飼つている牛はね、これやがて、物言いんどーといつて話があつたわけだな。

注 カンカ一 坐喜味では旧暦十一月にミミガ一料理を作る。部落で豚を殺し、部落の入口で子供達に少量づつ分け与える。

89 塩が一番おいしい

話者 山内カナ(明治三十三年三月十日生)

翻字 村山友江

「何ぬ一番まーはが」りちゃぐとう。なー「肉、豆腐」りたんり。あんさぐとう、うぬ肉、豆腐、あふあむん食まちやぐとう、まーはーねーんたんり。

あんされー「私がーなー、一番まーさしえー塩」りちゃんり。「うりびかーの一食まらんむー、うりがんまーさんなー。塩おまーさむの一あらん」りちゃぐとう。うりんかい、塩んかいがちゃーちゃれー、入つたれー、豆腐おまーさしえー。塩おまーさあんやんり。あんしるまーあん、塩り言ん。

「何が一番おいしいか」と言つたからね。もう「肉、豆腐」と答えたそうだ。そうしたら、その肉や豆腐を味をつけずに食べさせたら、おいしくなかつたそうだ。

そうしたら「私がもう、一番おいしいのは塩だよ」と言つた。「それだけを食べることはできないのに、それはおいしい物ではないよ」と言つたからね。豆腐に塩を入れたらおいしいさあ。だから塩は一番おいしいということだよ。一番おいしいのは塩だそうだ。

翻字 村山友江

あのね、この沖縄に非常にお餅の好きな親父がいらっしゃつたそうです。そしてこの親父は頑固者で子や孫に、「私ね亡しから一餅や減ならしさんぐとう、ウサンデーやいつたーがる食むぐとう。私が生ちちょーるうちうてい、私にんかい餅ちゅはーら食まちとうらさんなー」りち、約束。うぬ親父とう子、孫達とう相談やてーるふーじー。

あんさぐとう、うぬ親父え「あんしんないびんなー」りち、一応、子、孫達ややてーるふーじやしが。「いつたーや私ちむひがさんなー。ぬぐわ私が言ぬ通りあらんnaー。いつたー私が亡しちから、私にんかいかな餅ひきたんてー私にん減ならしえーさんどーやー、いつたーがる食むる」りち。「あんしえー本当にいいやんしえーらやー」りち。「ぬぐわあんしえー、あんさびーしが」りち。

あんしえーうぬ親父え「いつたーが私が生ちちょー

あのね、この沖縄に大変お餅の好きな親父がいたそだ。この親父は頑固者で子や孫に、「私は亡くなつてからは、餅は食べることはできない。供え物のおさがりは、あなた方が食べるんだからね。私が生きているうちに、私に餅をおなかいっぱい食べさせてくれないか」と、この親父と子や孫たちと相談したようだ。

そうしたら、子や孫達は、「そういうふうにしてもできますか」と思つていたようだが。「あなた達は私を満足させてくれないか。私の言う通りではないか、私が亡くなつてからあなた達が餅を供えても、私は食べることができないよ」と。「じゃ本当にこれでよいですね」と。「なぜ、そう思うんでしたらそうしましょう」と(子供たちは)言つた。

するどこの親父は「あなた達が私が生きているあい

るえーかに、私にんかい私が心ひじゆるえーか餅食ま
すぬむんやれー、スーコーンヒーコーンむるさんてい
んしむさ」、「こういうふうな約束があつたそうです。で、
子や孫たちはまあ親父がそう言うから、そんならその
約束決めようというて、いうてまあかわるがわる子や
孫が通わして、その親父に餅をあたえたそうです。

そしてまーこれは毎年毎年続けてやつたそうですが。
この親父は、とうとうこの世を去つてしまつたそうで
すが。そのしまつてあげく、そしてもう三十三年忌も
スーコーも終わつて。そして、それでしばらくなつて
からそのおじいさんは、その親父はあの世に行つたら
自分の思うようにはできない。まー非常に後生、後生の
人に罪されたそうです。「いやーやぬぐわうんぐとう一
しんないんなー。スーコーヒーコーりしえー、ま、是
非人間ぬやるべきむんやるむんぬあんしえー通らん、
いやーやあんしえーならん」、毎日〜もう怒れたそ
うです。

それまでまたそのおじいは心配して、「これからはどう
して取り返すかねー」という。また死んで幽靈に化
けて、ある人にこういうことを子や孫に知らせて断わ

だに、私に心おきなく餅をあげるんだつたら、法事などといふものはすべてやらなくていいよ」と、こうい
うふうな約束をした。それで、子や孫たちは親父がそ
う言うんだから、その約束通りかわるがわる子や孫が
通つて、その親父に餅をあたえたそうだ。

そして、そういうことを毎年〜続けてやつている
うちに、この親父はとうとうこの世を去つてしまつた。
もう三十三年忌も終わつてしばらくしてから、この親
父はあの世に行つたら自分の思うようにはできなかつ
た。後生では、その人から重い罪をうけたそうだ。
「おまえは、どうしてそんなふうにしてもできるのか。
スーコーなどといふものは、是非人間がやるべきもの
であるのにそれでは通用しないよ。おまえはそういう
ふうにしてはいけない」と、毎日〜もう怒られたそ
うだ。

それでそのおじいさんは、これはどうしたらよいも
のかと大変心配した。そして幽靈に化けて、このこと
を子や孫に知らせて欲しいと、ある人に（頼まないと

らんといかん。親父はこれを考へて、どうしたら自分おやじの子や孫こまごにこういうふうに連絡れんらくして、あのスーコーやつてくれといふことができるかねーと言いうて、まあ幽靈ゆうれいに現あらわれて。そしてあの、その立たつておるところ、その幽靈ゆうれいの立たつっているところは場所ばしょは決めたわけ。まー毎まい日決めたところにいたそうだ。現あらわれて。現あらわれて、そしてまーこの道から行ゆつたら幽靈ゆうれいがいるから、まーどうにもできないと言いうて。その道はもう夜歩よあるく人はなかつたそうです。

そしてまあ、あるジユリ呼よばーがさ、ジユリ呼よばーが朝あさ寝ねして、そのジユリ呼よばーはこの自分の義務ぎむが、非常に大きい義務ぎむを務めがあつたそうです。そしてクンチリー道から行ゆこうとしたら、化け物ほけものがいるどうするかねー。また遠とおまわりしたら時間が遅おそれる。こういうふうなあべこべに、そのジユリ呼よばーはなつて。そしてもう自分の義務ぎむを果すはたすがためにはどうなつてもいいと、もいい。もういわば踏ふみて近道ちかみちから行ゆこうと言いうて、行ゆつたところよいよ化け物ほけものが現あらわれたそうです。「本当に化け物ほけものうさやー、いやー私わんねーなー急いそんうしが」、いやーや今日きのう、化け物ほけものに話はなしたそうですよ。「いやー

いけないと考かんえた)。どうしたら子や孫こまごにこのことを連絡れんらくして、法事もやつてくれと頼むことができるかと考かんえて、幽靈ゆうれいになつて現あらわれた。そして、幽靈ゆうれいになつて立たつつ場所ばしょも決めた。どこと決めて、そこに現あらわれた。そしたら、この道を行ゆくと幽靈ゆうれいがいるからと、その道はもう夜歩よあるく人はいなかつた。

そしてあるジユリ呼よばーが、大変大きな義務ぎむ、務めがあるにもかかわらず朝寝あさねをしてしまつた。それで近道から行ゆこうとしたら、化け物ほけものがいるといふけどどうしようか。また遠とおまわりしたら時間が遅おそれる。もうどうしたらよいかと、ジユリ呼よばーは(困こまつってしまった)。

もう自分の義務ぎむを果すはたすためにはどうなつてもいいと、近道から行ゆつたところ、化け物ほけものが現あらわれたそうです。「おまえは本当に化け物ほけものだな、私は今日は急いでいるんだが」と、化け物ほけものに話はなしたそうですよ。「おまえは今日、私わんに見みられているから、殺殺してやろう」と、その化け

「今日は、私にんかい見らつとーぐとう、いやーけー殺ちとう
うさやー」りち、またその化け物が止めたそうです。
「まじ待てー、なーくまんかいうぬふーじーな物頼み
すんりち、私が現りーしえーなーむる人おなーー目ん
見らん、すぐぶーないぶーない頼みんならん。いやー
やまあ度胸ぬあてい、物頼みんないぐとう、どうか私
思や聞ちとうらし」「なー私ねーなー、化け物ぬなーう
まんかいなーならん」り、使むの一ならんりちさぐとう。
あらんどーりんせつかく頼まれて、それとも仕方な
くそのジュリ呼ばーは「あんしえー何やが」りち、問
たぐとう、「じちえー私ねーかんかんし、私が生ちちょー
るえーがムツチージョーグーなやーなかい、子孫んか
い約束しち。かんしやたしが、くれー後生行ぢやぐとう
思うようにもいかん。まあ私ねー罪あたてい、是非とう
む子、孫達んかい、私がしえーしえー悪さぐとう元ぬ
人並通いスーコーしちきらんなーりち、いやーさーに
言ーえーしとううさんnaー」、「ういうふうな頼みであつ
たそうです。あんさぐとう、うぬジュリ呼ばーは「えー
あんやみ」と畠うて、あんしこの幽靈が屋号どき、ど
この字のどきどきと言うて聞かせたそうです。

物が（ジュリ呼ばーを）止めたそうだ。「まず待てーも
うこのようにして物頼みをするつもりなんだが、私が
現れるともうみんなすぐさま逃げて行き、頼もうと思つ
ても頼むこともできない。おまえは度胸もあるし、物
頼みもできるから、どうか私の思いを聞いてくれ」「あ
あ、私は化け物の頼みを聞くことはできない」と、（化
け物の）使いはできないと。

それでもどうか頼まれてくれということで、仕方な
くそのジュリ呼ばーは「じゃ、どういうことか」と聞
いたら、「実は私が生きているあいだは大変餅が好きで、
子や孫との約束でこういうふうにしたんだが、後生に
行つたら思うようにはできない。私は罪があたつて、
是非子や孫達に私がしたことは悪かつたから、人並に
法事もしてくれないか」というふうな頼みであつた。
そのジュリ呼ばーは「あつそうか」と言って、この幽
靈は自分はどうそこの字のどの屋号であると聞かせた
そうだ。

そしてそのジュリ呼ばーは、朝だからまーその家に、
こういう親父の思いを話そうとしたら、「いつたーやう
ぬふーじー親祖父ぬめーんりさやー」りち、「ムツチー
ジヨーグーぬおじいぬめーたんりさやー」り、こうい
うふうに話したら、そこには召使い、女中、女中が
朝起きしていたそうです。その女中は、「フリムンぬ
ちょーんどー、朝なりーフリムンぬちょーんどー」し
な一手たち、あつさみよーうんぐとうぬフリムンぬ
んうる、うんぐとーぬ話いんする、フリムンぬんうる
りち、な一手をたたいて笑つて、早く行きなさい、早
く帰りなさいと言うてやつたそうですね。

そのジュリ呼ばーは「いつたー家庭ぬたみ、私ねー
いつたー親祖父母かい頼まつてゐるちょーしが、フリ
ムンぬうくねーるすりー、しむきひやー」と言うて、
もうひき返したそうです。そしたらそこにまた一番若
い奥さんが出て、「ある人お何り言やきーたが」りちや
ぐどう、女中んかい問うたわけさー。「うぬ人おうぬ
ふーじーし、「くぬくまぬ親祖父母かいムツチージョー
グーぬめーたんりち、うぬ話いるすんりさきーたんでー」
りちやぐどう。「あーうれー意味深いやつさー。とーとー

そしてそのジュリ呼ばーは、その家に行つて「あな
たたちの祖先には、そういうふうな人がいらつしゃた
そうだね。大麥餅が好きなおじいさんがいらつしゃつ
たそうだね」と話をしたら、そこには女中が朝起きし
ていたそうだ。その女中は「きちがいがきてるよ、
朝つぱらからきちがいがきてるよ」ともう手をたた
いて、こんな(変な)きちがいもいるんだね、こんな
(変な)話をするきちがいもいるんだねと、もう手を
たたいて笑つて、早く行きなさい、早く行きなさいと
(そのジュリ呼ばーに)言つたそうだ。

そのジュリ呼ばーは「あなた達の家庭のために、私
はあなた達の祖先の人に頼まれてきたんだが、バカな
扱いをするのが!もういいよ」と言うと、ひき返して
しまつた。そしたらそこに一番若い奥さんがでてきて
「あの人は何と言つていたか」と、女中に聞いたわけ
だ。すると(女中は)「あの人はこここの祖先に餅の好き
な人がいたというような話をしていたよ」と言つたか
らね。(奥さんは)「あーこれは何か深い意味があるよ。
あーこれは何か意味があるから(その人を)呼び返し

くれ一意味深いやぐどうひち返ちくわ一、ひち戻ちくわ一

りち言ちやぐどう。

てきなさい」と言いつけた。

あんさーにかいうぬ女中あまた「あー私が悪さいびー
てーぐどう、もーちとうらしんそーれー」りち。「えー、
あんやみ」りち。またうぬ奥さんぬんかい「いつたー
やうぬふーじーさーなかい、いつたー親祖父や後生極
楽ん通らん、今あ幽靈なてい非常に心配しちめーん。
あんさーにかいうり私ねー、なー断わていん断わら
ん、につたー親祖父ぬ願え持つちちよーしが、かんし
フリムンぬうくねーさらりーねー合点さん。なー聞ち
んしえーみ」「あーうれーなーいやーが言いしえー、い
ひえー私達あ家庭んかいいひえーあてはまとーぐどう
聞かちとうらし」。

かんなたぐどう、そのムツチージョーグーぬ理由や
むる話ち。「につたーやかんやたんりさやー」りちやぐ
とう、「あんやたん。うれー親父とう約束さーなかい、
あんさーなかいあんやたんどー」「あんしえーにつたー
や、うりあんやるしじるんれーやれー、是非うれー初
まいぬなー七日からうくち、まー残ぬ道くまち終いズー
コーまでい、くぬふーじーさんねーにつたー親祖父や

そうしてその女中は、「あー私が悪かつた。(家まで)
来てください」と、「あーそうか」と。それでまたその
奥さんに「あなた達の祖先の人が、後生極楽を通るこ
ともできずに、今は幽靈になつて大変心配していらっ
しゃる。それで私は(この人に頼まれて)もう断つて
も断つても断ることができずに、あなた達の祖先の人
の願いをもつてきただが、そのようにしてバカな扱
いをされでは合点がいかない。あなたは(その話を)
は私達の家庭にあてはまつてあるから聞かせてくれ」
と。

そういうふうなことになつたので、そのムツチージョー
グーの理由を全部話した。「あなた達は、そういうこと
だつたらしいですね」と言つたら、「そうだつた。それ
は親父との約束で、そういうふうにしたよ」と。「そ
であるんだつたらあなた達は、是非そのことは初七日
から始まつて残りの三十三年忌までちゃんと終らない
と、あなた達の祖先は極楽を通ることができない。罪

極樂や通らん。罪あたていめーぐとう。うれーなーあんしんそーりよー」り言たん。「あーうれーなー、道で一びるむんあんすき」やたんりしが。

あんしえー、につたー親祖父ぬい言葉んかい。いやー印ていーちえーみしていいかんねー、うつたーん合点さんぐとう。うりていーちえーいやー覚とーきよー、私ねー庭ぬまーぬまーんかい金埋みてーぐとう。まーはんでいーるんさーうまぬティーヒサンチャーんかい、使むぬんかいあさらち、まじ私がういにうていうりそーくとうやみあらにりるくとう、うぬ證明やまじあさらちんり、りちやぐとう。くぬ庭ぬクルチの下んかい、くぬお金があつたそうです。

そして初まいから終いズーコーまでの、そのお金が埋められていたそうですね。そしてその昔の例から言わいたら、本当これはスーコーヒーコーというものは、どうしてもやらなければならんねーという昔言葉がこの理由から流れているらしい。

があたつていらつしゃるから、それはもうそういうふうにしてくださいよ」と言つた。「あーこれはもうやるべきことですかそうするよ」と言つたそうだ。

(お互に合点したので)それなら、あなた達の祖先の人の話にね。何か一つ証拠がないとその人達も合点しなさいということでね。これだけは覚えておきなさいよということであつた。それは(そのムツチージョーグーがは)庭のどこどこにお金を埋めてあるから、その家の使用人に掘らして、私がいるうちに埋めていられるからね。ほんとうにあるかどうかということを證明するために、まず掘らしてみてくれと言つた。するとこの庭のクルチの下に、お金があつたそうだ。

そして初まりの法事から終りの法事をするまでのお金が埋められていたそうですね。そしてその昔の例から言わいたら、本当これはスーコーヒーコーというものは、どうしてもやらなければならんねーという昔言葉がこの理由から流れているらしい。

女郎屋の入口をたたいて女郎を呼び出すので「呼ぶ」という。

91 ニーブイ虫ジラー

著者 当山三次郎（明治三十四年八月十日生）

翻字 知花春美

まじめに働く、一生けん命働くんしえー神様から
助けーんしえーさやーりるふーじーぬ話するばー。

ある所んかいでー、若さる青年がじこーぬ働くぶり
んまんり、農家やたんりしが一名者、ただ一名、家庭
んかい自分一人、貧乏や貧乏やしが、心も精神も非
常に誠な人、働きぶりんまあまあ偉いねえというぐら
いぬ青年やたんりしが。やつぱりまあ慣例りるむの一
んるはに遠慮、妻かめーいんりしえー今あ遠慮。「私
家庭んかい、今、私あ妻ならんなーり言らりーる家庭ん
あらんむー。もつともつと働いて家庭もゆたしくない
るばーにる妻えかめーいする資格お私ねーある」と思
きつて。非常に働きぶりえーあたんりー。

あんさぐとうなー、やつぱりまじめに真心に働く
ゆ

まじめに働いて、一生けんめい働くと神様がお助け
になられるというような話をするわけだが。

あるところに、若い青年がいて、働きぶりも良くて、
農家だつたそだが、一人者、ただ一人、家庭に自分
一人、貧乏なことは貧乏だが、心も精神も非常に誠実
で、働きぶりも良くて、まあまあ偉い青年だつたそ
うだ。しかし、やつぱり慣例には鈍くて、妻をめとるこ
とに遠慮していた。「私の家庭に、今、私の妻になつ
てくれないかと言われるような家庭ではない。もつと
もつと働いて、家庭も豊になつたときに私に妻をめと
る資格はある」と思つていた。非常に働き者だつたそ
うだが。

そうして、やつぱりまじめに心から働く人は神様で

る人ちよお神様かみさまが助たすきんしえーにる意味やるばーてー。神かみ
様さまやんしえーてーぎはん。うぬ人ちよ、やつぱり社会しゃかいぬ人ひと
るやんしえーんりちる見みしがうぬ人ひとお神かみ様さまやんしえー
てーぎはん。あらゆるうぬ若い者わがわい者ひとぬ家いえかい來き、「ごめん
なさい」りち來きに、もーやーに、「ぬが、いやーやや、
やつぱしそれ以上いじょうの誠まことの人間ひとるやるむんぬ、いやー不足ふそくお
妻め一人ひとりの不足ふそくおやしが、いやー、妻めえかめーぶさーねー
んるあるい」んり言いちやれー。「あつさみよー、私わたくしたー
家いえ庭ちやうでいし�ー 今いまあなー女めのんかいお願ねがいしち婚こん礼れいあざ
ててい夫婦ふうふ生活せいかつする程度ていどぬ家庭いえやあいびらんよー、やつ
ぱり遠慮えんりょ、今いまあしちよーるばーるやんどー」

もうやつぱり若い少年ではなく、青年時代も過ぎる
ぐらいの人だつたんでしようね。青少年せいじようねいといえは、二
十二、三、五歳ごさいまでは誰も、どうしてこの人は結婚けつこんし
ないのかと言われることはないと云いふべき。神様まで上あつ
て、これはもう妻めもいないといけないがね、働きぶり
も良いし、誠まことでもあるし、この人には何も不足ふそくがなく
神様も認めている人間ひとだそうだ。それで、神様が助け
にいらしたそつだ。

なーやつぱりえーりん若い少年の一あらん、青年せいねいす
ぎーる時分じぶんぬ人ひとなどーてーるばーるやさに。やつぱり
青少年せいじようねいりねー二十二、三歳、二十五歳二十五さいまでや 誰だがん
ぬぐわうれー妻めんかめーらんりるくとー今までーねー
んしえーや。ねーんぐとう 神かみ様さまんかい上あがていこれ
はもう妻めうらんねーならんしが、あんし働はたらくぶりんあ
い、誠まことんやいくりんかい不足ふそくじやつぴやていん神かみ様さまが
んどうらうん人間ひとやるり。神かみ様さまが助たすきーがもーちゃん
りよ。

「いやーや、あぬ、女一人のお迎えしーるんしぇー

まだまだ成功すぐとうや、妻から早くかめーいる考し】

【私その者お何処んじ女んでーお願ひする資格おあん

れー思びらん】りち、ちゃーお断わり、お断わり、神様

様んかいしちやれー。「私が助けーんどー。いやーや私が

が助けーんどー」「あんやいびーん、あんしえーちやー

し助けーんしえーが」りちやれー。

隣んかいよー、やつぱりまた独身そーる女ぬうたん
りー。金持ん人やんりどー。じこー金持ん人。「うまん
でーんかい、うぬ女んでー私、内んかいお願ひすんり
るくとうお絶対天と一同むんりる家庭りるあたいる資
格、お、うんぐとーる所んかい私にんでーが話んでー
うゆばりーんさびらん。ただ家うてい話いしちん無礼
るやいびーる】言いたんりよー。

「えーあん思ひみ、とーあんしえー私がいやーんか
いむる教すぐとう。あぬ家庭ちやつべーる太いまぎ木ぬ
あたんりー。金持ん人ぬ家や、あんすぐとう、うまん
かい、夜中あ静かないしえーや時間外やぐとう静かな
いぐとう、うぬ場に、私が、サージャーりる白い鳥が
うしえー。ありいやーに譲ぐとうよ うり持つちうぬ

「おまえは、女一人をお迎えすれば、まだまだ成功
するので、妻を早くめとるように考えなさい」「私自身
は何処で女人をお願いする資格があるとは思いませ
ん」と、ずっとお断り、神様にお断りした。「私が助け
るよ。おまえは私が助けてあげるよ」「そうですか、そ
れではどのように助けられますか」と言つた。

隣にね、やつぱり独身の女がいたそうだ。とても金
持ちだそうだ。「そこには、その女には私は、お願ひす
るということは天にも値するほどの家庭なので、その
ような所には、私には話にもなりません。ただ家で話
をするだけでも無礼になります」と言つたようだ。

「あゝそう思うのか、それでは私がおまえにすべて
教えてあげよう。あの家にはとても大きい太い木があつ
たそうだ。金持ちの家にはね。それで、そこは、夜中
は静かになるでしょう。時間外で静かになるので、そ
の時に、私が、鷺という白い鳥がいるでしょう。あれ
をおまえに譲るので、それを持つて高い木に登つて、

高い木んかい上あがでい、またあぬ一畑から作つくるい作物むつぐるもの ミーバーラー、ミージョーキヨーキーりへいつた一分いちふかいみ 丸い低いむんよよ あり持もつち、夜中よなかか一いま上あんかい上あがやーに鳥抱とりだち座すわちよーてい、私が言いるくとうば言いり」り。木んかい上あがでい行いぢやーま、なー神様かみさまぬるさぎてているあんしぇーんりぐとう。

「あんしぇーなーうまんじあんしんじやびら」りち、サージャー、真白ましろい鳥抱とりだ ミーバーラん持もつち行いぢなー前まぬうまんかい置おきちよーてい、「ハイ、くまー何なりる家庭かていやんやー。いつたー二ふたカ所ところぬ中なかんかい女めん子こ育いくていてーさやー。うぬ女めん子こやいつたー隣となりぬジラーンかい、あぬジラートうう夫め婦うふなさんねー命めいんかいかかい運うんぬ巡めぐいねー心配しわすんどー。なさんなー」り、じゃつぴん木きい上あとーてい呼びよぶてーるぎはん。

あんさーまうまぬ主人しゆじんの一聞いちきんかりんしぇーたんり。「くれー不思議ふしきやつさー。なーくれーいつペー孝こうちくさんねー大お変か、くぬ子わらび供あらび」りやーに 朝あさ起あがきたれーお母かあさんぬんかいにん問たずやーに 「いえーあぎたー子わら供あらび東あぬジラートうう夫め婦うふなしりち天てんぬ神かみさま様さまがうさじきやみしぇーたさー、ちやーすがやー」りちやれー。「く

あのう畑の作物を入れるミーバーラー、ミージョーキヨーキーへおまえたち分わけかるか、丸くて低いものよよ それを持もつて、夜中、ずっと上あに登のつて鳥を抱いて座すわつて、私が言いことばを言いいなさい」と言いつた。木に登のつて、もう神様が言い付けたのでね。

「それではもうやつてみましようね」と鷺、真白い鳥を抱いて、ミーバーラも持もつて行き、前に置いて「ハイ、ここは某家庭かていだね。おまえたち二ふたカ所ところの中なかで娘むすめを育いくてあるね。その娘むすめをおまえたちの隣となりのジラーに、あのジラーと夫婦うふにしないと命めいにかかる運うんが巡めぐつてきたら心配しわするよ。させなさい」と、木に登のつて大きな声で叫さけんだようだ。

そうして、その主人は聞きこえたんでしょう。「これは不思議なことだ。もうこれはとても考かんえないと大お変か、この子どもは」と言いつて、朝起あがきると、お母かあさんにも聞いて、「おい、わたしたちの子どもは東側ひがのジラーと夫婦うふにしなさいと、天てんの神様からお告こぼげがあつたけどどうしようか」と言いつた。「この子わらの体からにも影響えいきょうすると

りが体

んかいちがかいんり言んしえーさー、ちやーし

ちやらーましやが」りち夫婦語らつてーるぎさんよー。

「あんし健康あていしわるあぬー 子ん生ちゃんてー
親ぬくとうするむぬ、いかな貧乏うじてーならんのー

あらに」「あんしえーなーあんるないさに」りち。

さつそく翌日ぬ夜お、うぬジラーりし私たー家んか
い来きうらんなーりち。うりがる言ちょーんどー。夜、
言ちょーしが、秘密てー、秘密的に知らんふりし、「貴
方なーんかい来る事お夢にんふくまびらんしが、断わ
らちきうみそーらんなー」あん言ぢやれー、「あらん私
達あ二カ所ぬ、親二カ所ぬ是非きりぬ願やぐとう、私
達あ家んかい來きうり」「あーうんぐとーぬ金持ん
人んかい何りち言んしえーが、やむをえない、あんしえー
來びさ」りちやぐとう。

「いやーやよー 私達あ女とう妻ひちきうらんなー
どーりん」言やつたぐとう びつくりふーじーさーな
かい、「私ふーじーな者どうくまぬ女ん子でー妻する資
格おねーびらんぐとう、なー断わらちきうみそーり」
口えあんざぐとう 「あらんこれーなー神様からぬお
授け、私達んかい言い付けぬあんしえーてーぐとう、

いうが、どうしたらいいものか」と夫婦で話合つたそ
うだ。「健康であればこそ、子を生んでも親孝行はする
し、どんなにしても貧乏を気にしたらダメじゃないか」
「それではそうしかできない」と。

さつそく翌日の夜、そのジラートやら私たちの家に
来てくれないかと、ジラーハが言つてゐるんだよ。夜、
言つてゐるんだが、秘密さ、秘密にして知らんふりし
て、「貴方の家に来なさいということは夢にも思つてい
ませんが、断らせて下さいませんか」と、そう言つた
ので、「いえいえ、わたしたち二人の、親一人が是非と
もという願いなので、私たちの家に来てくれ」「あゝそ
のような金持ちが何と言われますか、やむをえない、
それでは行きます」と言つた。

「おまえはね、わたしたちの娘をどうか妻にしてく
れないか」と言われたので、びつくりしたようなぶり
をして、「私みたいな者が、ここ」の娘を妻にするという
資格はありませんので、もう断らせて下さい」と口で
はそう言つた。「いやいや、これは神様からのお告げが、
私たちに言い付けがあられたので、おまえは私たちよ

いやーや私達あさーー貧乏んやい、いやー働ちょーる
えーま一生涯ぬ、一人前ぬ人間やぐどういちかあ成功す
ぐどう、互に婚礼あきて、私達あ娘どう生活しちきう
りりち向こーから願だつていよー。それほどぬ結婚
ねーんさりち、私ねー神様ぬおかげるやるりち。

「あんしえーなー私にんまじめに悪心ん持つちえーう
いびらん。貧乏くしやいびる。親ぬ孝ん何んりつば
にしちうさぎーびぐとう あんしえーなー あんしきう
みそーりよー」りち、婚礼あきて、いくぬ娘ん子ん來
がさんよー。来ぐどう、なーまたうまがらんありあま
てい金持ん人るやんしえーぐとう自分ぬ子ぬ家るやしえー
や。くまからん宝ぬ出じてい 働ちぶりんいつそーや
か良う働くよ、じこーぬい生活んかいなたんり。
誠そーちるんしえーやつぱり神様がんお恵みえあん
しえーさやーり思ひる感じやんばーてー。

りも貧乏だし、おまえが働く間一生涯、一人前の人間
でもあるし、いつかは成功するので、お互に婚礼を
あげて、私たちの娘と生活してくれないか」と、向こ
うからお願ひされてね。それほどの結婚はないだろう、
私は神様のおかげだと。

「それでは、私もまじめにやつているし、悪い心も
持つていません。貧乏なだけです。親孝行もりつばに
やつてさしあげますので、それではそのようにして下
さい」と、婚礼をあげてこの娘も来たようだ。来たの
でもうそこもあり余つて、金持ちなので、自分の娘の
家でしよう。ここからも宝が出て、働きぶりもいつも
より良く働いて、とてもいい生活をやつたそうだ。

誠実にやつておけば、やつぱり神様からのお恵みも
あるんだねと思うわけだ。

翻字 名嘉真 宣勝

うぬガジャンシーでいしどう、ぬーでいちが名前や
忘ていねーんしが、うぬ人とう、なー二人ぐりー良い
友達なつて、なー海かにん、山かにん、ちやー一緒に
歩ちさくとう。

あんさーなかい、うぬ一人ぬ者ぬ、考えんじやさー
なかい、くれー殺さーなかい、私あ妻、女おしーるな
いりでいち考ーやーなかい。海かい行ぢやーなかい、
海んじ、けー落とうさーなかい、うれーけー死なち。
あんさーなかい、家んかい帰てい来ーなかい、「今日
や舟ぐわー転らさーなかい、いやー夫おうれーなー出
じて一來らん、まーんかいが行ぢやら分からんさー」
でい言ちさくとう。女お、くれー、りくちぬ話やん。
くれー嘘むにーやん。くりが殺ちるうーるでいち考やー
なかい。

あんさーなかい、くり考え出じやさんれーならんでい
ち、そーてーるぐとーしが、うぬばーなかい、うぬ人お、

そのガジャンシーという者と、もう一人、何といつ
たか名前は忘れてしまつたが、その人と、もう二人は
大変仲の良い友達で、海に行く時も、山に行く時もい
つも一緒であつた。

そうして、その一人の者が悪企みをして、友人を殺
して、その友人の妻を自分の妻にしようと考えた。海
に連れて行つて、海の中に友人を落として死なせてし
まつた。

そうして、家に帰つて来て、「今日は舟を転腹させて
しまい、あなたの夫は、出て来なかつた。どこに行つ
たか分からぬ」と伝えた。女は、これは合点のいか
ない話である。これは嘘をついている。彼が殺したと
考えた。

そうして、女は夫の恨みをはらす方法を考え出さな
いといけない、思案していたようだ。そういう折、女

女お、美ら人おやくどう、うりが妻すんでいやーない。

「なー、いやー夫おあんるなとーるむん、私あ妻な
ていとうらさんなー。あんきーんかい立派に暮らちとう
らさんなー」でいちさくとう。ようやく話やくりが言
んねーそーてい。私ねー、くれー殺ちうちきらんねー
ならん。私あ夫ぬ報いやくとう」でい言やーなかい。

あんさーなかい、「私がなー思いくとう、いやー家
ん立派に造ていとうらち、ちゃんとぐとーる木さーに造り
でい言ち。私が好ちゆぬ木ん取ていちゃーなかい、家
ん立派に造ていしわる、私ねーいやー妻えないと
うぬえーだー家あ造いるえーまあ、私つたーんかいねー
来ならんどー」でい言ち、話やさーなかい。

あんさーなかい、山んかい行ちやーなかい、あぬ木
ん、くぬ木ん抱ち廻ちんじやーなかい、身体や釘さー
に止みー考えそーぐとう抱ちまーちんぢやーなかい、
とーくりがーないはじやぐとう、うぬ女ぬ抱ちんじやー
なかい、くりえーないさやーでいち、考やーなかい、
「とー、くり抱ちんちでい、くぬあたいぬむんしえー、
なー立派ぬ家あ造らりーさ」でい言やーに。

「もうあなたの夫はそのようになつてしまつたので、
私の妻になつてくれないか。そして、立派に暮らして
いこう」と言つた。どうにか話は彼のいいなりにして
おいた。「私は、彼を殺してしまわないといけない。私
の夫の復讐だから」と考えた。

そうして、「私が望むように、家も立派に造つてくれ
て、しかもどういう種類の木を使って造ること。私が
好きな木を選ばせて、家を立派に造つてくれないと、
私はあなたの妻にはならない。家を造るまでは、その
間は、私の家に来てはいけないよ」と言つて約束をし

た。

そうして、山へ行つて、あの木もこの木も抱いてみ
て、身体を釘で止める考えなので、この人ができるは
ずなので、その女が木を抱いてみて、うん、これは大
丈夫、使えるなと思って、「はい、これを抱きしめて見
て、この位の大きさのものでしたら、もう立派な家が
造れます」と、言つた。

は美人であつたから、彼が自分の妻にしようとした。

あんきーなかい、抱かちさくとう。また、「女ぬ考」と一
ねー。てーげーやあたいなくとう、「しかとう、強く抱
ちまーちんちんでい」でいち、かんし抱かさーなかい。
立派に、かんし抱かち見ちやくとう。「くりとーてー、
止みらりーん」でいち考やーなかい。「とー、なー」
回、私があまんじ、うぬあじとーし見じゆるえーま、
立派に、いやー抱ちよーれー、私がんま交とーし計てい
んじゅくとうでい言やーなかい。うぬ場合に釘、りつ
ぱにそーんなたくとう、うにーに釘え止みやーなかい
しちゃんでいる話。

きーなかい、あとお、なうりがえーりん腐りてーは
にりち、考やーなかい。ちやーなとーがやーでいち、
行ぢ見ちやくとう、腐りてい無らん。蚊ぬる、「ワー」
みかち、うぬ女んかい来たんでい。

うりから、「ガジヤンシー」でいちちやしえー。う
ぬ夫殺ちやる人「ガジヤンシー」やてーさやでい思
るばー。

そうして、抱かせた。女の考えたとおり、大体寸法
が当たつていたので、「しつかりと、強く抱きしめて下
さい」と、言つてこういうふうに抱かせた。立派に、
こうして抱かさせた状態を見てみた。「これだつたら、
釘でとめることが出来る」と考えた。「はい、もう一度、
私が向こう側からよく見てみるから、立派に抱きしめ
て下さい。私がその手の交えているのを計つてみます
から」、その時に釘で手を木に打ちつけてしまつたとい
う話である。そういうことで、彼の妻にはならないで、
そのまま夫の復讐をした。

そうして、しばらくしてその男の死体は腐つただろ
うかと考えてどうなつているのかなと見に行つたら、
腐れて無くなつていた。蚊が「ワー」と音を立てて、
その女にたかつて來たそうだ。

それで、「ガジヤンシー」とついた。夫を殺した人が、
「ガジヤンシー」であつただろうと思う。

翻字 村山友江

昔、首里方ぬ待ぬ人ぬよ。首里ぬあぬ當時ぬ王府ん
かい勤みとーる、くり神ん入りしやか易ぬ係るやたん
りぐとう、沖縄し言る書物ぬ係る。

うぬ人が、千里見通すぬあたいぬ能力とう徳ぬある
人なーかい。私ねー現在、私あ世やかんし首里勤みし、
楽んゆくん暮らさりーしが。私から何代目、かーま先
ぬ子、孫、私から何代目ぬ後ぬ子、孫んじ確かに私あ
後、私がそーぬ仕事んけー取らつて、王府から確かに
にけー取らつてい。うぬ理由とうしきー、くぬ子、孫、
何代目ぬ子、孫や酒んかい身持ち崩ち。王府から「いやー
がーくぬ役目えしーうーさん」りち、かんしけー取ら
りる時期ぬいじていちゅーし、自分ぬ感さーにかいう
ぬ人お分かやーい。

くれー子、孫ぬ私ねーかんししつかり自分ぬ職ん先祖
だいだいから守てい、人並ぬくとーしちやしが。子、孫ん
じくぬふーじーがなーいじーんりしえー、くんぐとー

昔、ある首里の侍がね。首里のあの当時の王府に勤めさせて、この人は神人というより易の係であつたらしいんだが、沖縄で言う書物の係であつた。

この人は、千里までも見通せるぐらいの能力と徳のある人であつた。私は現在、私の時代はこのようにして首里で勤めして、楽に良い生活をしているんだが。私から何代目かの、ずっと先の子や孫の時代に、確かに私の子や孫の時代に、私が今している仕事を王府に奪い取られてしまうだろう。その理由というのは、この何代目かの子や孫が酒に身を持ち崩して、(それで)王府から「おまえがはこの役目は果たせない」と、このように奪い取られる時期がくるのを、この人は自分の感で分かつてしまつた。

私はこのようにして自分の仕事は先祖代々からしつかり守つて、人並のことはしたんだが。子や孫の時代でこのようなことができるということは、これほどの

ぬ心配ぐとーねーん。くりどうにかして防じる考え方
んあれーならんしが、ちやーし防じやらーましがやー
りち考えたるぐとうに。私達先祖代々から伝わとーる
黄金枕んかい、私あ遺言書ち入つて、子、孫んかい
譲りとうらさんあれーならんりやーなかい。

あんさーい、代々うぬ黄金枕や子、孫んかい譲てい
さしや。うぬ何代目ぬ子、孫りちえー分からんしが、
うぬ時期ぬちやぬ場合に、うぬ黄金枕、親ぬ譲りと
し持つちそーるくぬ子、孫ぬ言んねーすんねー酒んか
い身持ち崩ち、首里ぬ王府から追てーるふーじさい。
あんさーいくぬ黄金枕んかい、何りち遺言の一書ち
入つてーがやれー。今から何百年後んじ、必ず首里城
ぬ唐破風ぬ弱てい落ていーぬ場合ぬいじーべとう。私あ
感ぬんかいあんし見てい、また私あ書物ぬ方からんあ
んし見ぐとう。くぬ場合に一応追たぬ子、孫、首里王府
んかいくぬ枕ぬ中んかい入つてーぬ書ち物持たち、首
里王府ぬ御主加那志とか、按司、ウナザラ注とうか救
らんねーならんりち、あんさーいやてーぬふーじーや
しがさい。

いんねーすんねーくぬ何代目後ぬ、酒んかい身持ち

心配ごとはない。これをどうにか防がねばいけないと
考えて、どうすれば防ぐことができるだろうと考えて
いると。私達に先祖代々から伝わつてくる黄金枕に私
達の遺言を書き入れて、子や孫に譲らないといけない
と考えた。

そういうふうにして、この黄金枕は代々子や孫に譲つ
た。そうしてこの何代目の子や孫ということは分から
ないが、この時期がきた時にこの黄金枕を親の譲りと
して持つている子孫が、まさにその通りに酒に身を持
ち崩して、首里の王府から追われたようである。それ
でこの黄金に、どういうふうに遺言は書いて入れてあ
るかというとね。今から何百年後に、必ず首里城の唐
破風が朽て落ちる時がくるからね。私の感にそういう
ふうに見えて、また私の書物の方からもそういうふう
に見えるからね。その場合にこの子孫に、黄金枕に入つ
ている(遺言)を首里王府に持たせて、首里王府の御
主加那志とか、按司、ウナザラなどを救わないといけ
ないということであつたらしいが。

その通りにこの何代目か後に酒に身を持ち崩した人

崩ちやる人お、な一首里城お追つい仕事うんねーん、
妻子ん養いさん。今から言いねールンペんふーじーし
暮らちよーてーるふーじーやしが。あんさーにある日、
うぬ橋え分からんしが、何橋りちえ一分からんしが、
橋ぬ下うてい宿し寝んとーに、だてーぬ岩ぬ壊りてい
ちうちうすらりーぬ夢見ちえーぬふーじさい。あんさー
い飛び起きて「あーくれー夢るやてーしえー」りち、
また寝んじゅしがまたん岩ぬ崩りていちうさーりーぬ
夢見ちやぐどう。ぬーとうんがなーしうぬ黄金枕取やー
に、うぬ橋ぬ石垣んかい投きてーぬふーじさい。

あんさぐとう、黄金枕ぬ碎きて、碎きやーいうり
から見ちやれー中から紙ぬいじてい、書物ぬ出じたく
とう取ていんちやぐとう、あんし書かつとーんりさい。
何う年ぬ何月何日ぬ何時何分ねー必なーじ唐破風ぬ
崩りーぐとう。うまぬ下うてい、城ぬ王からウナザラ
ぬちやー、重役ぬちやーが集まつて、じこーかんゆう
な吟味ぐとうさぎぬ場合やぐとう。いやーや、親祖父
ぬくぬ遺言書ち物持つち急じ首里城んかい通つて
んかい告ぎり、あんさーにかい首里城ぬ王様はじみ、ウ
ナザラぬちやー急じ行ぢ救り。

は、もう首里城を追われて仕事もなく、妻子も養うこ
とができなかつた。いわばルンペんみたいにして暮ら
していたようだ。そうしてある日、この橋の名は何と
いう橋だつたのか分からぬが、ある橋の下で宿をとつ
て寝ていると、大きな岩が壊れてきて押しつぶされる
夢を見たようだ。そして飛び起きて「あーこれは夢だつ
たんだね」と、寝るんだがまたも岩が崩れてきて押し
つぶされる夢を見たからね。何かのひょうしにその黄
金枕を取つて、その橋の石垣に投げたようだ。

そうすると（その）黄金枕が砕けて、砕けた中から
紙が出てきて、書き物が出てきた。それを取り読んで
みると、何という年の何月何日の何時何分に、必ず首
里城の唐破風が崩れるからね。その下で、城の王や
ウナザラ、重役などが集まり、大変重要な事を吟味し
てゐるからね。あんたは、この親祖父の遺言を急いで
持つて行き首里城に行つてあそこに連絡しなさい。急
いで首里城の王やウナザラ、重役などの人達を救いな
さい。

あんしるんしえー、いやーうぬひらきーるするこーあらんぐと。はい、今から何代先ぬ親祖父、子、孫ぬくとう考ていいやー心配し、いやーうぬひらかすぬたみにかんしやぐと。くれー嘘えあらんぐと、急じ首里城んかい通てい救りんち。あんさーいうぬ書物の見ちゃぐと、なー今日ぬ日やんりさい、うぬ日。

とーくれー一大事な事などーんりやーにかい、すぐ

ぶーないちらかさーい行ぢさぐと。んちやうまー会議やるふーじさい。唐破風ぬ下うとーてい。あんさーい「サリサリー」し行ぢ、くぬ書ち物必じ御見かきて、
「急じうぬ唐破風がら行ぢていくみそーり」りち。あんし初めえ馬鹿にし、「いやーぐとーる者、くまから職人取い上らつてい追たる酒くえーあらーが、じやじやぐとうびけー言ち」りち、言い返すんりしが。必じ、なー必じりち、じーあぎまーちやぐと。「んだ、一応見ちんだ」りち。門番ぬ見ちやーに、とーくれー一大事なくとやんりち、すぐ急じ告げてーるふーじさい。

あんさーい王やうり聞ちみそーやーい、「はい臣下達、急じ出じり」「うち。あんさーい出じーしとーまじょー

いわばあんたは、これから立身するということはないから。(このことは)親祖父や子孫のことを考えて心配して、あんたを立身させるためのことだからね。これは嘘ではないんだから、急いで首里城に行つて(みんなを)救いなさいと。そういうことでこの書物を見たら、もう今日の日であつた。

もうこれは一大事な事だということで、すぐ一日散に(首里城に)行つた。するとそこではもう唐破風の下で、会議をしていた。そうして「サリサリー」と入つて行き、この書いた物を見せて、「急いでこの唐破風から出て下さい」と。それで最初は馬鹿にして、「おまえみたいなやつは!ここから職も取り上げられて追われた酒飲みの馬鹿者が、たわごとばかり言つて」と、言い返そそうとするが。必ず、もう必ず(御覽になつて下さい)と)大変せかした。それで「じや、一応見てみよ」と。門番が見ると、もうこれは一大事なことだと、急いで伝えたようだ。

そうして王はそれを聞いて、「はいー臣下達よ、急いで」を出なさい」と、すると(そこを)出ると同時に

ん、すぐグワーッとから壊りて一るふーじさい。うぬ
唐破風や落いて一るふーじ。

あんさーいうりから書物ぬ方りしえー、うすらん
さやー昔から、書物ぬ方やうすらんりぬ言葉ぬあし
が、書物ぬ方やうすらん。いつたー親祖父ぬたみに、
私達ん命ん助かてい、またうつさぬ重役ん無事に助か
ていそーぐどう。いやーやいつたんのーくまがらいやー
職ん取い上てい離任きぬくとうやしが、親祖父ぬ勲功
ににじやーい、今後またあぬ職んかいちきーぐとう、
帰ていち沖縄ぬたみに尽くしりち。あんさーにうにー
からうぬ人お心入りけーやーなかい、琉球王国のたみ
に尽くち。ますますにーから書物りしえーでーじな
なー重要なもんやんりち、沖縄とーてーくぬ易りしえー
じこー尊ばつてーぬふーじやんりさい。

あんさーいくれー、ーちぬ運命りしえー巡り巡り必ジ
あんりち、うりから出じとーるふーじぬくとうやんり
さい。運命りぬくとうやしがさい。

に、ゴーッという大きな音を立てて（唐破風は）壊れ
たようである。その唐破風は落ちたようだ。

そういうことで書物というものは昔から、無視する
ことはできないということである。書物というものは
無視できないという言葉がある。あなたの親祖父のた
めに、私達の命や重役の命も無事に助かつたからね。

いつたんはここから職も取り上げられて離任されたこ
とだが、あなたの親祖父の勲功に目をつぶり、今後は
また元の職に戻すから、帰ってきて沖縄のために全く
しなさいと、（いうことであつた）。それからこの人は
心を入れかえて、琉球王国のために尽くした。その時
からますます書物というものは重要な物であるといふこ
とで、沖縄ではこの易といふのは大変尊ばれたそうだ。

それでこの一つの運命といふのは巡り巡り必ずある

ということで、このことから出ているそうだ。

マジムンと友達になつた人

著者 当山三次郎（明治三十四年八月十日生）

翻字 村山友江

マジムンと自分らの同じ人間が友達になつておつたと言ひますね。それはまあ昼遊ぶ暇はないから、夜、マジムン（妖怪）も自分らよい人の前にマジムンもきて、もう友達して、あらゆる話いやつてですね。非常におもしろそうに、マジムンと友達しておつたという人がおつたと言ひます。

だから「友達なるから、自分の物はみんなもう、みんなの方に隠しはしないで、あんたが知つておることも教えてくれよ、同じ友達だから」と言つて。人間はもう作戦だつたそうですよ。「あんたが知つておるのはみんな私に教えてよ。じゃあ友達でないよ」と、明らかでない意味よ、そのマジムンに話してですね。「はいそうするよ、私の知つている物はあなたにみんな教えてよ」明らかであつたそうですよ。

このマジムンというのも馬鹿にする人は悪くするそうですがね、あれは仲良くするとあまり馬鹿にはしないという話です。だがマジムンであるから、やつぱし人間であるからと云うて、自分らの方を助けるために習つておつたそうですよ。だからあまり長遊び、夜してもう今日やつぱり遅くまで遊んでね。帰ろうかと言つて話したら、あれこれの話をしてもう帰ろうか、また明日合おうかと言つて、あつさり帰つて行つて、また明日の夜も毎日のこと来ておつたそうですよ。

だからもう非常に新しい話聞かされておるから、このその人の部落の方に重い病気しておる人がおつたそうですよ。自分の家ではないがもう悩んで、病気あまりにもよくならないと、重い病気して親父達は心配しておる家があつたそうですが。それから教えられておるからですね。あのそこにもう明日という日であつたんですがね。明日あつちの方にどこの方に、私は人間を取りに行くよと言つて話しておつたそうです。このマジムンというものが。ああ

そうか、もう期間、その夜会つている場合にはよろしく、自分ももう何でもかまわないという話。いい加減に聞いておいてですね。「じゃあ、あんたにあつちに何時頃来るか」と言うて聞いて話したら、何時頃に来るよ、もう明日あつちの方に人間取りに行へよと言うて。「ああ、そうか」と言うて聞いて聞いておつて。

「よし！聞いた」と言つて、明日は早く起きて行つてですね。あの「あなたの家はどうですか、病気もよくなつてありますか」と言つたら、「あまりにもよくならないよ、今日も明日も同じ加減ですよ」と言つたら、「じゃあ、今日の夜は特別に緊張して下さい。私も来ますから、今日悪い者が来るという日になつていませんから、あんたのうちは。私も来るから応援しに来るから、今日の夜は眠つてはいかんですよ。健健康体も、お茶もつくつて飲んで、元気よく今日の夜は非常に緊張して家庭の何守つて下さいよ。私は応援に来るから。私知っていますよ、今日の何事頃来るといつて分かつてますから、あの注意して下さいよ。私も来ますから」と言つて。

どうしてその人を取ることが出来ないといふことも習つておるそうですよ。このマジモンとの友達が習つておるから、もう安全と言つて。私が人間を取りに行く場合には、あのやつぱり家の非常にりつぱに完全に造つて、指先も入れないぐらい開かない所は全然できないよ、と言うて教えてあつたそうですよ。友達のマジモンがこの人にそう言つておるから、あのあつちの家の周囲もみんな調べて、もう指先も入れないぐらいいつぱな家造らないといかんからと言うて。検査に、そうしないといかんと言うて、その家人にも教えて。もう何時頃にはあんたの家に来ますから、非常に注意して下さいと書いてしておるから。「そうかありがとう」「私も応援に来ますから」と言つて来て。

ちよつとだけした所、指の竹みたいのが入るだけは開けて、やつぱりそこはあのマジモンがその家、目で見るともうだめというですね。その中見るともうその人は亡くなるという。私の目に見えると、もう亡くなるといふ決まりがあると教えておいたそうですよ。ちよつとの所を開けて、鋭い竹やりのように作つてですね、そこにこうして審判しておつて。

もう時間じかんだがと言つてそれほど動うきかし動うきかししておつて、この家庭かていを回まわつてみてもどこも見えない。中見なかみない家いえだね。もうしようできないねと言つて。もうそれまたわざわざ見える所ところおいておつて、そこはまた番ばんしておつたといふんです。友達ともだちが。そのマジモンの友達ともだちが、だからそこから見渡すといつてももうそこにあるから。目のこう眺ながめないと見えないから、そこに武器ぶきがあるからしょうならない。そこに覚おぼえておるものがあるから、まあしようがないんで帰かえつたとということですがね。

で明日あしたからは健康けんこうになつて、その病人びょうにんも健康けんこうになつて、ちょいちょい健康けんこうになつて、またも同じ友達ともだちだから、またそこその家庭かていに病人びょうにんを取りに行いつた明日あしたも会あうですがね。夜よるは「ああ、あんたあつちに行いつたか」知しらんふりにそう言いつたそうですよ。「ああ、行いつたよ。あの家庭かていは本当に偉伟かつた。どこからも見えない。戸一所とじゆうしょくは見えるが、そこはもうちゃんととしておるからしょうないで帰かえつて來きたよ。もう駄目だめだつた私わたしも」と言いうて、明日あしたまた話はなしておつたんですよ。自分の胸内むねうちで笑わらつて「ああそうだつたんですか」「あなたが言うようにだね、家うちが完全かんぜんに造つくるられた家うちは、また家族かぞくの勢いきがある所ところではできないとか、あんた話はなしておつたでしようね。あつちも家族かぞくは非常に熱ねつがある家庭かていで」「だからねえ」と言いつて、ただいい加減かげんに言いうて「ああそうであつた。とてもできなかつた」と言いつて話はなしておつたという話はなです。

國頭大宣味のカナチク

話者 当山 三次郎（明治三十四年八月十日生）

翻字 村山友江

國頭といふのは國頭でしようね。今國頭。國頭の部落はもう、どこの人であつたか分からぬですがね。話には國頭、部落は大宣味だつたんでしようね。大宣味。部落は大宣味といつてあるでしようね。大宣味の方だつたそうですね。

だがその人はだいたい偉い人ですからね。よそに用事に行つたそうです。まあ南の方に行つたんでしょうね。方角は南は那覇か、那覇だつたんでしようね。そこからあの場合は乗り物もない、足で歩く通しからですね。あの道の方でもう歩き友達といふてですね。二人になつて歩いてきたそうですよ。

だから「あんたどこに通りますか」と言つたら、「私は國頭の方の人ですよ」と言つたら、「ああ私も國頭の方に行きますから、じやあ一緒に連れておもしろく通つてみましょう」と言つて、二人になつて歩いてですね。来る中で、まあこれ今の北谷村の付近でしようね。そこ来たら「ちよつと疲れてお茶でも飲んで行つたらどうですか」と言つたら、「それがいいね」と言つて、お茶飲み屋でしょうね。そこに一時休いしていこうと言つて休んだそうですよ。

そしてそこ給仕はもうお茶なんか出したりなんかしたら、この大宣味カナチクといふ人はこの世の人間、やつぱりその人はマジムン、一人はマジムンであつたそうです。マジムンになりますよ、あと。だからお茶出した給仕の女の人お茶出したら、だーマジムンであるからこれ取らないそうです。またカナチクといふ人はあつさりこの世人だから「ありがとう」と言つて、飲んでおるそなが。この人は見ておれば、湯呑絶対さわらないただ座り通しと言つて。

疑わしい者がその座から、ちょっと抜いていったそうですよ。その人間の真似をするでしょうね。この座敷から
ちょっと見えない、いなくなつたら、このお茶出した給仕の女の人ひとが、そのカナチクに「あんた様は、あの人ひと
の世の人間と決めていますか」と言つたら、「ああそうでしよう。そう思いますね。人間でしよう」と言つたら、「い
え違います。あの人はこの世の人ひとではないんですよ」「どうしたらあんた分かりますか」と言つたら、「あんたが分
からないはずが、私わたしずっと離れていて座つておけば、あんたのお茶出してあるでしようね。このお茶せんぜん湯呑
取りませんよ」と言つたら、そのカナチクという人はびっくりしてね。「ああそうですか。今まで同じこの世の人だ
と思つておりますよ。どうもありがとうございます」「だから人間でないから、あんた注意して下さい」ということで
すよ。悪い事がないか、ないか注意して下さい。これから」と言うたら、「ああどうもご苦労さん。注意してゆきま
す」と言つて。またその終つたら秘密的ひみつきでしようね。一人に話すもんだから、また来たら同じ物言われたら聞かな
かつたぶりしておつて。またしばらくは休んで「まあ歩あいてみましようか」と言つたら、「はいもう歩いてみましょ
う」とお互はなはないに話し合つて、出發始じまつたといふ。

そこから家庭から出て出發始じまつて、国頭村に入つたでしようね、歩いて、「あんた、国頭の方に何の用事
に行きますか」言つて、カナチクが質問したそうです。その場にそのマジムンまじむんであるが、あのそれはまあ本当ほんとうに分
からんが浦添村の、浦添ユードウリうらそえ ゆうどりといつて、あつちは自分で社会のことなら、県知事がいらつしやる所の現場と
いうんでしよう。後生の浦添ユードウリと言つて、あつちからの使いの者ものであつたそうですがね。

あきらかにこの道歩くちいて友達ともだちしておるから、私は明らかに言つておつたといふ。国頭の村に入つてゐる時代でしょ
うね。まだ着かないうちに、「これは明らかに言つてくれよ」と言つて。「私はね、今まであなたのこの世の人ひとと思わ
させてここまで来ましたが、もう私はこの世の人間ではないんですよ」と言つて。そのままの教えた女おんなのように言つ
ておつたそうですよ、自分の事こと。なぜそういうかと言つと、あつちの方から遠とおく寂さびしくもさせないで一緒に連
れてくれた友達ともだちだから、無事にカナチクというのは。

だからこれに悪い事してはいかんという。何、信用したそうですよ。だからなぜ「私はこの世の人ではない。後生の人であるから、私の仕事は浦添村のユードウリという所の使い者であつてね。この世の人ではないですよ」言うて、明らかに言うてあつたそうですよ。だがじやあ「今日は何の御用事ですか」と言つたから、「私の用事は国がみの大宣味カナチクという人は、偉い武士であるから、この世にも新しい人であるから後生に行つてもこのカナチク、後生に行つて指導させたいと言つたらいいかね。後生世はあんたがこないと道々くまないという計画で、カナチクという人取りに、引き取りにであるよ」と言うたら。

あれだー自分であれさあね。なぜそうき聞いたら「そうであるよ」と言つたら「なぜそういう人は私ですが、こんなひどいことがありますか」と言うたら、「あああなたかすまないね。あなたが、じやああなたの家にだからね」と言つたら、「私はまあ子供は、子供は不徳しないで、子供だから私がこの世にいないと自分の子供にどうするにもならないと、子供達に教えること、自分で成長できないから、私はあどうぞ大目に見て下さらんか」と言うたら、あまり遠慮はしないでですね。「はいあなたはね、この付近まで心よく私と友達してくれて、その恩義として私が大目にするから」と言うて教えてですね。「どうもありがとうございます」と言つて。

「だがその日があるがね。あんた取る日があるがね後生に取る日があるから、その場合はあんたの家は御馳走たくさん作つて、門の方にすぐ飾つておいておきなさい。あなたの家に来るようにして私達は出かけてくるから、私だけ大目にみてくれているから、あちらも後生のもうあれより上の人はおるでしよう。自分の勝手にしてはいかんといふこともあるが、私が大目にみてこつちにといて向かつてくるから、御馳走は炊いて入り口に飾つておきなさい。私が考えるから。あの場合私一名ではない、私の付き添いも来るから二、三名来るから。それらが分からないから危ないから、私が指揮するから御馳走たくさん飾つておきなさい」と言つて。そう話したらじやあそう言われておつたから、御馳走おもわしく炊いて飾つておこうと。その日は何時頃に来るからとつて、御馳走飾つてあつたそですが。

いよいよ來たそうです。供もついてきて、三名か四名という話だつたかねと思ひますがね。その着いた二、三名が分かりませんでしようね。もうこつちというて決まりしておるから。邪魔なものがあるね。どこから入ろうかと言つたら、「いやいやこれは邪魔な物ではない。御馳走炊いて飾つておいてあるから、あんた方はね早く御馳走食べてね。食べてこの屋敷に入らないように」と教たそうです。「ああそうですか、御馳走食べていですか」「はい、この御馳走炊いて、そんなに新しく飾つてある門にそれから越えたら止まらんよ。あんた方御馳走食べるようになさい」と言つたら、「ああそうしていいか、じゃあ御馳走やつてみよう」と言ひて食べて、そのカナチクという人に話しておつたそうですよ。「あなたは大目にみて、また北谷村にあなたと同じ資格おなじしきがいらつしやるから、あれ取つて行く」と言つておつたといふんですよ。「ああそうですか」と言つて。

もうこんなこと本当かねと言つて。「あんたが嘘うそと思うなら、後について警戒けいかいもしていいよ」と言ひておつたそうですよ。「じゃあ警戒けいかいしてみよう」と、自分の門から帰つて行つたと言うたら。自分の家の馬もおるから馬にのつて、北谷村の桑江ぬメーと言つてね。あの桑江ぬメー、トンネルがあつた所ところ、あの辺へんだつたでしよう。あの辺へんの人だつたでしよう。すぐ馬に乗つてかけて行つたら、もう話のよう桑江ぬメーに北谷村に偉い人がおるから、もうあれ取つて、帰りはあれ取つて行くからと話しておつたといふ、カナチクに。だから本当にかねと馬に乗つてかけて行つたら、もう亡なくなつていたといふ話。

採集 S 52・8・16 読谷村民話調査団第十二班 〈田中文雅・大浜洋子・金城清美〉

注

浦添ゆうどうり 浦添ようどりは英祖王（一二六〇～一二九九）と尚寧王（一五八九～一六一〇）の墳墓で浦添城跡の北がわの崖の中腹にある。自然の洞穴をさらに削りとつて造られており、向かつて右が英祖王陵、左が尚寧王陵である。（英祖王のころ僧禪鑑ご来流し初めて浦添に寺を建て、墓を建てたと伝えられる。第二尚氏の歴代王は尚円王以来、首里の王陵に葬られることになつていてが尚寧王に到つて慶長の役の敗戦の責任を感じて浦添の墓に葬られた。）一六一〇年八月の建立である。「ドゥリ」は無風の原義で転

じて風の静かな事にも使れる。また、「ようドゥリ」は極楽のオモロ名かと思われる。

96 夫 振 岩

話者 當山ハツ(明治三十九年五月十日生)

翻字 島袋フジエ

うれーよー、山原ぬまーりちん分からんしが、夫振
岩りぬ岩ぬ浮かろーんよーや。女のちゅらかあぎーな
やーい夫お嫌んそーてーるばーてー。(親ぬなすんりち
やてーんてー)なー嫌んそーてーがはしが、「とーいやー
や、あれー働ちやーんやい、じひありが妻どうないん
どーやりち親のーみくみてーしが。なー考え出じやさ
んねーならんりち、親ぬ、夫婦のー、「あぎたーが思
るぐどうならんふーじでーむんりー考えていんらやー」
り言やーに。

ある、じこー寒さる場合に夫お綿入りー着してい、
妻やかんたんにすぐ寒さする親ぬ作戦やてーんてー。
着しやーにかい、「今日や、なーりか家族、出じやーに
魚とうてい来やー」りち、沖んかい岩みがきてい家

これはね、山原ぬどこといつては分からないが、夫
振岩という岩が浮かんでいるよ。女は美人で夫を嫌つ
ていた。親は二人を一緒にしたいと思つていた。しか
し嫌つていたようだ。「おまえはもう、あの人は働き者
だし、ぜひその人の妻になるんだよ」と親は(その若
者)を見込んでいた。よい考えはないものかと、両親
は「私たちの思うようにはいかないようだ。さあ、考
えてみよう」と言つた。

ある大変寒い日に、男は暖い綿入れの着物を着せ、
娘はかんたんな薄い着物を着せ、親の作戦だつたよう
だ。「今日は家族で出かけ、魚取りに行こう」と、沖の
岩めがけて家族で出かけた。両親との二人でね。

族も一來るばーてー、夫婦とう、うつた一人とう。

あんさーに、うにーから寒くなたぐとう。なーたつ
たいたつたい、海ぬ風えソーロナイソーロナイ寒くな
てい、たつたい自然にたつちかていちやぐとう、たつ
ちかてい座ち。あとお岩んかい、うつたあ渡ち、親ん
ちやーうぬ船ぬ上んかいうとーてい、知恵なーやでー
んや、「どーいつたーや今あ、あまんじ休くとーけー、
一時え」りち、「私たーや魚とうらいー」りち魚とうい
なじきーそーてい、うつたー姿ぐわー見ちよーてい、
心ぬ中とーてー寒くなてい確かにあんすんりちる計画お
たてていふ婦そうてい行ぢめーぐとう。

あんさーに、あとうぬぬじゅみねー、なーうぬ女お
ガタガターし「いやーや寒さんなー、んだ、くぬ綿入
り二人し着らやー」りち袖、二人しぬち、あんさーに
暖まつてい縁ぬ結ぱりやーなかい。

うまあ「夫振岩」岩りちちきらつたしえー、あんや
んりるわけやんり、みじらはぬやー。

そのうちに、だんだん寒くなつてきた。しだいしだ
いに海風がヒューヒュー吹き始め、寒くなつたので、
そのうちに二人は、しだいしだいに自然に接近し、くつ
ついて座つていた。そこで、岩へ（その一人を）渡し
両親は船の上に残つた。知恵をつかつてね。「あなたが
たはそこで休んでいなさい。私たちは魚を取るからね」
と言い、魚を取るふりをしながら、一人を見て、心の
中では確かにこうなるであろうと両親は計画を立てて
おいでであつた。

そこで、そのうちに娘はガタガタふるえ、「あなたは
寒いのかね、ほら、この綿入りを一人で着けよう」と
袖を一人でぬき、そこで温まり縁が結ばれたそだよ。

そこは「夫振岩」の岩と名付けられたのはそのこと
だよ。めずらしい話ね。

い　一　日　橋　の　由　來

著者 当山トミ(明治四十一年三月二十日生)

翻字 島袋フジエ

南山城の按司加那志が首里城で勤めていらつしゃつたそだ。首里城で勤みていめんしぇーに、なー病氣し。あつちの下の方にガマがあるわけ、石をちゃんと割つて墓をつくるいうて、その墓をつくる途中に按司加那志は死んだから、これもうこつちの墓には入れられないねというてよ。

「一日橋」という橋があるでしよう。(あつちは与那原に那覇から行くところ)沖縄中の石大工うむるゆしやーに、首里城ぬ按司加那志が亡しちめんしぇーぐとう、今日一日とーていくぬ橋えかきやーに、うぬ橋から渡ちめんそーらさんねー又、南山城で葬式はするいうて。一日に造つた橋やんでい。「一日橋」といって、あんさーに、いぎたー親祖先ぬ首里城うてい亡しみそーちゃーにからすぐ一日うていうぬ橋やかき終わやーに、沖縄中の石大工ゆいあちみやーに、「日うてい、造たんりちる」一日橋り言んりんどーりちよ、うまから拝んで歩

南山城の按司が、首里城でお勤めであつたがその按司が、病氣であつた。首里城の下の方にガマがあつて、石を割つて墓をつくつている場所があるが、墓をつくつてある途中、按司はお亡くなりになつたので、この墓には入れられないということであつた。

一日橋というのがあるでしよう。(与那原に那覇から行くところ)(そこへ)首里城の按司様がおなくなりになつたので、沖縄中の石大工を総集めし、今日といふ一日で橋をつくり、渡しておあげしなければならない。それは、南山城で葬式をするという事であつた。

一日で造つた橋だそだ。一日橋といつてそれで、私たちの親、祖先が首里城で亡くなられたので、一日でその橋を架けたそだ。沖縄中の石大工をみんな集めて一日で仕上げたという話、一日橋と言うよど、その辺から拝みのために通つたときに話を聞いた。門中

きながら話はない聞きかす、門中のおじいさんが話はない聞きか
しよつた。子どもたちにも言いうてながらしなさいと言いつ
た。

おじいさんが話はなしていたよ。この話を、子ども
たちにも伝えてあげなさいと言いわれたよ。

採集 S63・3・22 読谷ゆうがおの会（村山友江・松田千賀子）

注 南山城 十四世紀から十五世紀にかけて、沖縄本島は北山・中山・南山の三つに分かれて統治された。南山は、沖縄本島の南部地方を統治し高嶺大里城が居城であった。

98 名護親方と具志頭親方

話者 比嘉利吉（明治四十一年十二月二十日生）

翻字 村山友江

名護の親方は非常におとなしい人、具志頭親方とい
う人はまた狡い人だな、狡い人。

名護の親方は非常におとなしい人で、具志頭親方と
いう人はまた悪がしこい人であった。

で、ある時に「カンナンぬ子買りーし」カンナンぬ
子買りーし呼んだから、名護の親方は出て行つた。
具志頭親方は「カンナンぬ子りちうらん」ということ
で、あれは出て行かなかつたということ。またカミナ
リぬ子りちうらんさ。

ある時に、「カミナリの子を買わないかねー」と呼ん
だから、名護の親方は出て行つたそうだ。具志頭親方
は「カミナリの子というのはいない」ということで、
あれは出て行かなかつた。またカミナリの子供とい
うのはいないさ。

で、その次にまた「虎ぬ子買りー」し呼びたぐとう、具志頭親方は真つ先に出て行つたわけ。で、名護の親方はまた「なーくねーだん笑ーてーんむん、またん笑ーりーねー」りち行かんたん。

名護ぬ親方は非常におとなしい人。褒みらりーしん好かん、叱らりーしん好かんという人だつたそうだ。どうでもいいということ。

またその次に、「虎の子を買わないかねー」と呼んだから、具志頭親方は真つ先に出て行つたそうだ。名護親方はまた「もうこの前も笑われたのに、今度も笑われるから」と出て行かなかつた。

名護の親方は非常におとなしい人。褒められるのも嫌であつたそうだ。どうでもいいということだね。

採集 S 63・4・12 読谷ゆうがおの会（村山友江）

注① 名護親方 名護龍文、程順則のこと。一六六三—一七三四。久米村出身。一六八三年中国に渡り四年間陳元師の門で学んだ。帰国して久米村の講解師となる。一七〇六年再び中国へ行き、一七〇八年に六諭衍義（清大帝諭解説）を刊行して帰る。一七八年、琉球における学校の始めである明倫堂を順則の建議によつて建立。一七二八年名護間切総地頭職となる。徳教道德の鼓吹につとめ、実践道德として人々の尊敬を受け、名護聖人と呼ばれた。

注② 具志堅親方 具志頭文若、唐名。蔡温（一六八二—一七六一）佐留通事として中国へ行き、帰国後世子尚敏の師伝となる。四七歳～七二歳、三司官を務める。御教条を編んで国民読本となる。「中山世譜」（父蔡鑑編）を訂正増補した。

話者 比嘉利吉（明治四十一年十二月二十日生）

翻字 村山友江

あれは母親が妊娠した時に、子堕すんりち、流産するということで、鉄煎てい飲み飲みきーに、体全体あの鉄になつて生まれたということ。そしてこつちばかりあいていたそらだよ、喉だけ。

ある敵の人がその髪を剃る途中にカミソリで殺したという話だな。そしてもう「なーありが死じえーぐどう、沖縄んかい戦寄しかきら」と言つて、船から戦は寄せ來たわけさ。

その港の入り口に棒で支えて、その人を立ててあつたわけさ。それを見たらもう「とーうり生ちちょーていハチャグミる食いぎる。なーありんかい殺さしやかに」りち、みんな海に、海に飛び込んで自殺してしまったさ。だから「生ちち千人、死じん千人」と言われていた。

あれは母親が妊娠した時に、子供を墮胎するといつて、流産するということで、鉄を煎じて飲んでいるうちに、体全体が鉄になつて生まれたということだよ。そしてこつちだけ、喉だけがあいていたそらだ。

ある敵の人が髪剃りに化けてしまつて、髪を剃る途中にカミソリで殺してしまつた。そしてもう「あれが死んだから、沖縄に戦争を寄せよう」と言つて、船から戦を寄せて來た。

その港の入り口に棒で支えて、その人を立ててあつたわけさ。それを見たらもう「ああ！もうあれは生きていてハチャグミを食つてゐる。もうあれに殺されることは」と、みんな海に飛び込んで自殺してしまつた。だから「生きて千人、死んで千人」と言われていた。

注 チョーフグン親方 尚真王代の人で盧建極（京阿波根家基）ではないかともわれる。『球陽』に「盧建極、二次京に赴き、以て剣

を磨き並びに討還を為す。」とある。チョーフグン親方の母親は彼を宿しているときに、鉄を煎じて飲んだため鉄人として生まれ武勇に秀れていた。

100
仲 泊 親 方

話者 当 山 三次郎（明治三十四年八月十日生）

翻字 村 山 友 江

あの話はまず実際のことが、話は聞いて／＼流れてきていますね。はつきり私が聞いたのもそうであるかでないか、それほどまあ分かりませんが。

あの方が考えたことは、沖縄としてはこのまあ土地が狭いから。あの時代から土地は狭いし人間はまあ繁盛するのを願うから、沖縄の狭い所に生まれる。出生する人が生活できないとどうするかと言つて、心配してですね。あの方が考えたことがあるという話がありますが。

この沖縄の離々の島は、あの時代はただ陸置いただけで、人間がいなかつたそうです。あつちの陸は、こつちの陸は狭いからあつちの方に兼任を送つて、あつちに行つて農業も発展させてやれば、沖縄も繁盛がたくさん繁盛しても不自由ないといふぐらい。

今の時代にボリビア付近に行つたんでしようね。それと似ています。今、あつちは沖縄ですよね。八重山、宮古とか慶良間島とか、あの島ももう沖縄であるから、その同じ沖縄であるが、近い旅でもあつて、その時代はもう船というのもなかつたそうですよ。だがくうにくう作つて、山に行つて松を取つて、大きい松を倒して、みんな涙で

も木を切るのを石で作つて。石で作つて、もつこも石で作つて、斧も石で作つて。それ、その道具で倒して船造り始めて、ちょいちょい、ちょいちょい道具は不自由であるが。石の刃物を作つて、船を造つてあつちにも送つたといふ、送ることになつたという話は聞きましたが。

採集 S 52・8・16 読谷村民話調査団第十二班 〈田中文雅・大浜洋子・金城清美〉

101 支那の張良の話

話者 照屋 寛良 (明治四十一年五月十一日生)

翻字 国吉トミ

張良が中年時代、支那全島に跨いで、良い師匠を求めて歩ちよーるばーによ。あんきーい、絶壁ぬ、くぬ吊橋ぬ側んかい自分や座ちよーてーるふーじや、あまからよぼよぼそーる年寄ぬ出じていぢやーい、うぬ年寄やうぬ一才え見じやーい、張良見じやーなかい「くぬ人間の一目の色お変わつているなー。これ将来ものになるなー」りち、認みとーるふーじ。

あんきーい、支那ぬ、あぬ馬ぬアブミぬ入つちよーる靴ぐわー、絶壁から川んかい、きり投ぎーたんりよ。うぬ老人のー、「おい、いやーやあり取ていくわー」り

張良が中年時代に、支那全島に跨つて良い師匠を求めて歩いているうちにね。張良が絶壁の吊橋の側に座つていたようだ。向こうから、よぼよぼしている老人が出て来て、その老人は青年を見て、その張良を見て、「この人間は目の色が変わつているなあ。将来ものになるなあ」と見込んだようだ。

そして、その老人は、支那の馬のアブミが入つてゐる靴を絶壁の上から川に投げつけてしまつた。「おい！おまえはあの靴を取つてこい」と言つたようだ。そこ

言ちえーるふーじ。くま一半天日かかていどう下りてい
行いちゅんりんどー。「長えかかていん取つていちゃーい、
私あ足んかい履かしえー」りだんりよ。

あんさーい、履かぢやぐとう、また次んきり投げー
たんりよ。またうりん「取つていくわー」りち、また
ん取つていぢやーい履かぢさぐとう、「いやーや何ぬた
みにうまんかい座ぢよーが」り言ぢやぐとう、「私ねー」
今んとうー学問ぬんそーびーしが、なーひん学問せー
やーり思てい 師匠どう搜めーてい歩ぢやびーる」り、
「あんしえー、私、追でいくわー」りち、連らつてい
行ぢやーい。

あんさーい、学問みつちり習さりやーなかい、支那
んかい名あ上さとーるばー。張良りる人 支那ぬ二
十四孝ぬ一人とし、支那ねー、二十四名、親孝行しえー
どう人ぬうていどう、支那ぬ二十四孝りちあんりぐとう
うりが一人やるふーじ。とーとーうつさ。

は半天もかかつて下りて行くような所だよ。「長らくか
かつても取つてきて、私の足に履かせろ」と言つた。

そうして、取つて来て履かせたらまた次も投げつけ
たそりだよ。また、「取つて来い」と、また取つて来て
履かせたので、「おまえは何のためにそこに座つている
のか」と言われたので、「私は今まで学問を習つていま
したが、もつと勉強がしたくて、先生を捜して旅をし
ているんです」と答えて、その老人に連れて行かれた。

そうして、学問をみつちり教わつて、支那でも有名
になつた。支那には親孝行をした二十四人の偉人がい
たが、張良は二十四孝の一人であつたそうだ。はい、
それまで。

翻字 村山友江

あれは非常に徳持ちといふこと、徳持ち。そうだから西ヌ
ら西ヌ松金ぬたんぼは、いつも水はゆつたりしている
ところ。そしてその住民は「くれ一晩出でい、水盗り
る自分ぬ田や水えある」ということで、問題になつた
ということ。

それである王様の跡継ぎの選挙さあ、今ね。その
場合にあの安里ぬ比屋といふ人がそこにいた。それか
らくぬ後の王様や誰にするかねといふこと、決める最
中にもう誰も発言する人はいない。で、安里ぬ比屋が
後から来て「サリ、ユーワタイさびら、牛ぬ子や牛に
る似やびる。馬ぬ子や馬に似やびる。悪ぬ子や悪に
る似やびる。くぬ後の王様や内間ウジャシにうくばい
しきみせーびり」ということを言つた。そういふことを
からみんな賛成してしまつて。昔の賛成はね「オーサー
レー」と言つたそつだが、そういうことを聞いた。

その人は非常に徳持ちであつたそつだ。だから西ヌ
松金のたんぼは、いつも水が豊富であつた。そうした
らこここの住民は「これは夜出て行つて、水を盗んでい
るから（松金の）たんぼはいつも水があるんだ」とい
うことであつた。

それからまたある王様の跡継ぎの、今で言うならば
選挙さあね。その場合に安里の比屋といふ人がそこに
いた。で、この後の王様は誰にするかと決める時に、
もう誰も発言する人がいなかつた。安里比屋は後から
来て、「サリ、申し上げましょ。牛の子は牛に似ます。
馬の子は馬に似ます。悪の子は悪に似ます。この後の
王様は内間ウジャシに決めて下さい」ということ（を
言つた）。そういうことを言つたからみんな賛成した。
昔の賛成は「オーサーレー」と言つたそつだ。そういう
ことを聞いた。

翻字棚原めぐみ

護佐丸^(注①)といふのは、初めは座喜味城址築いたといふこと。

それからあのう勝連の接司^(注③)が、百姓からあれになつたといふ話だな。勝連の接司は、あまり狡いから、これはあとは、首里城^(注④)が危ないということで、首里城を守るために中城に移つたといふことね。

その阿麻和利^(注②)といふのは、非常に頭は良かつたわけさ。で、護佐丸は城内の建築していだそうだ。そしてこの勝連の接司ぬ、それを見込でしまつて。くぬ時に首里城んかい上げてい。いるいるにいーまーち、譏言やさぬばー、悪い事。譏言をしたと言われてゐる。譏言。「追手使わすし、疑えやねーらん」、追手。その言葉の城を下見しに行くわけさー、本当かなーといつてさ。

（護佐丸の）城を下見に行くわけだね。本当かねと確かめにね。阿麻和利がそういうことを企んで、西原ぬ比屋という追手をわざわざ夜中から首里城に使わしここで、その追手が、西原ぬ比屋という人、うれーあのう、ちょうど阿麻和利が、そういうことをもう、意気込んでしまつて、首里城にわざわざ夜から行つてゐる。

護佐丸は、最初は座喜味城址築いたといふことだね。それから勝連の接司があまりにも悪がしこいので、首里城が危ないということで、首里城を守るために（護佐丸は）中城に移つたということだよ。

その阿麻和利といふのは、非常に頭は良かつた。で護佐丸は城を建築していだそうだ。そして勝連の接司は、この時とばかりに首里城に上つて行つた。そこでいろいろな言い掛けをつけて、譏言をしたそうだ。

夜中ね。そして中山の接司が、「なぜ、そんなに夜中から来たか」と言うと、「一大事な事ぬあてい、御披露さんとうむてい、寄しでいやい来びたん」「何事が、急じ聞かし」「中城護佐丸や、謀反事企り、首里戦寄る模様で一びる」そう言うたから、中山の接司は「中城護佐丸や、忠実の深さ我ぬ奉公うみはまていうるいーに元祖から継ち、中山ぬ御恩、んりあまるまりんこうぶやいうとーてい、ぬんり、悪企り謀反企たちくん。くぬ事や、護佐丸よ憎りうる人ぬ、我身ぬ手にかかるて殺ささんとうむてい偽いやあらに、口実やあらに」ということ言うわけさ。中山の接司が。阿麻和利は、「くふいな事うかとううんぬきるないびん」り、うんぬきやびみといふこと。「城うていぬ様子やしくうかがている、一大事ゆとうむてい急でいやい来びたん、もしか我事は疑げえやびしえーら、護佐丸ぬちる使一かわさい、くまぐまぬ様様探ていうんぬかりとう」こう言うたからもー、中山も本当かなーと思つてさ、すぐに使いをよこすわけ護佐丸の城に。

西原ぬ比屋といふ人も、もし戦でも仕組んでいたらば、向こう行つたら殺されるからということ、遠い所

と言うと、「一大事な事があつて、御披露したくて参りました」「何事が、急いで聞かせてくれ」「中城護佐丸は謀反事を企んで、首里に戦を寄せる様子です」と言つた。すると中山の接司は「中城護佐丸は忠実深くて、大変恩があるといふのに、どうして謀反を企むのか。この事は護佐丸を憎んでいる人が、私の手にかけて殺そうとしているんではないか。偽りではないか、口実ではないか」と言つた。阿麻和利は、「このような事、うつかりとは申し上げられません」と返した。「城での（護佐丸）の様子を見て、一大事な事だと思って、急いで来ました。もし私のことを疑うんでしたら、護佐丸の所に使いをよこして、詳しい様子を探つてきます」と言つたからもう、中山の接司も本当かなーと思つてね、すぐに護佐丸の城に使いをよこした。

西原ぬ比屋も、もし本当に戦でも仕組んでいるとしたら、向こうの近くまで行つたら殺されるからといふ

で聞いてしまつた。護佐丸は建築中だから、「鍛冶大工ゆ集みやい、杭打ち音」りち、そうだから建築の音だが、武器を作つているということ感違ひしてしまつた。その通り中山に報告するわけ。それからも一中山に報告したから、も一中山も合点してしまつて。

そしてこの勝連の按司を先頭にして、中山の旗を持たせるわけ。左小紋と言つて、旗を持つてゐるからも、中山の命令といふこと、間違ひないわけさ。ちょうどその時に翌日その時に護佐丸は、明ける十三日、うぬ物見一で月眺みしてゐるわけ、親子諸共に物見一で座ちよてい、その最中に勝連の按司が、寄しかきてゐるばー。そうしたからも一家来の人は、「早く出て、打ち殺してしまいましよう」という。護佐丸に言うけど、護佐丸はあの旗を見て、これはもう首里城の命令だから、命令に背むいて、私が戦をしたならばいつまでも、いつも私のタクメイが残つてしまふということ。そして親子諸共に、皆切つてしまつて、一門は切腹、その時にちようど、小さい赤子がいたわけさ、カミジューというものが、それを乳親が抱いて逃げてしまつてそれが大きくなつて、それから勝連の按司と戦うわけ鬼大

ことで、遠い所でその様子を聞いてしまつた。護佐丸は建築中だら、「鍛冶大工を集めて、杭を打つ音よ」と、建築の音だが武器を作つてると勘違ひしてしまつた。そしてそのまま中山に報告したそだ。中山に報告したから、もう中山も合点してしまつた。

そして勝連の按司を先頭にして、中山の旗を持たせた。左小紋の旗を持つてゐるから、もう中山の命令とすることに間違ひないわけさ。ちょうどその時に翌日は十三日といふことで、護佐丸は物見台で、親子諸共に座つて月眺めていた。その最中に、勝連の按司が攻めてきた。そうしたらもう家来は、「早く出て打ち殺してしまいましよう」と護佐丸に言つた。しかし護佐丸はあの旗を見て、これはもう首里城の命令だから、命令に背いて私が戦をしたならば、いつまでも私のタクメイが残つてしまふということね。親子諸共に、一門は皆、切腹してしまつた。その時にちようど、カミジューという赤子がいた。それを乳親が抱いて逃げて、その子が大きくなつて、鬼大城となり勝連の按司と戦うわけだよ。

城は、やー。

注① 護佐丸 一四二〇年代の英雄、護佐丸はもと大北（読谷山、恩納）地方を領し、最初山田城にいたが、後に座喜味に城を築いて移った。ここで北山地方をおさえ、長浜港を利用して南蛮貿易を行つたといわれる。更に、その娘尚巴志の妃（夏氏大宗由来記には尚泰久の妃）となり、北山も一四一六年に滅亡したので、一四五〇年に中城城を築造して移った。

注② 座喜味城跡 読谷村座喜味の城原にある古城跡で、十五世紀の初期に護佐丸によつて築造されたものである。しかし、座喜味城での護佐丸の動向は明らかではないが、そこに二十年程居城し、一四五〇年後に中城へ移つたといわれる。座喜味城跡は、国指定史跡で環境整備もすすみ、松林の奥深くたたずみ、風光明媚なところで訪れる人も多い。

注③ 勝連城 与勝半島の中央部勝連町南風原に在つて、中城湾をまたいで南の方には中城城跡が望見される。首里城第一尚氏尚泰久（一四五四一一四六〇）時代、勝連按司阿麻和利の居城であつた。

注④ 首里城 那覇市首里にある、中山城の居城であつた。城の創建年代は不明であるが、尚田志三山統一の築城ではないかといわれる。今次大戦で壊滅され、僅かに城壁の一部を残すのみとなつた。

注⑤ 中城城 中城村伊舍堂にある。尚泰久時代（一四五四一一四六〇）護佐丸が読谷山座喜味城から移り、一四五八年、勝連城の阿麻和利に亡ぼされるまでの居城で、城も亦彼の計画に係るものという。内外城壁は今なお巖然としてほとんど完全に近いほど残つている。

注⑥ 阿麻和利 北谷屋良村に十五世紀初頭に生を受けた英雄である。十歳の頃まで体が弱く、山に捨児されていたが、山中で蜘蛛が巣をはるのを見て網をつくりだしたといふ。成長の後、勝連按司につかえたが、勝連按司茂知附を亡ぼし勝連城主となる。また、海外貿易も盛んにしたとされるが、護佐丸や第一尚氏と対立抗争し、一四五八年に越來按司（鬼大城）にひきいられた軍勢に亡ぼされてしまった。阿麻和利の墓と称されるものが大木のエンミ原にある。

翻字 村山友江

名護ぬ親方りしえー、いつペーおとなしい人やいや
すたんりどー。うぬ人ぬ、たとうれー家あ造くいしえー
たんり。大工頼まーにかい家あ造らちやぐとう。い
るんしえー、うぬ人のー茶あ水ぬーりち、今あ沸
かちやい茶わきいじやちやい、アシー茶わき、十時茶
ん茶わきぬーぬーりちいじーしえーや。うんなむんぬ
う茶わきりちえーねーらん、ただ茶あびけーん。

いじやちやーいしんそーちやぐとう。ひーじーやく
まー何ん金のーまんどーといん、何ん払んりるくしさー
にかい。材料盜だい、またやらちやぐとう木うまぬ家
や木や、床柱や逆立ちし、さーなかい立ていらやーり
ちうぬ大工達ぬ相談さーまかい、逆立いしちやぐとう。
しちゃんりちしちやぐとう、うぬ名護ぬ親方りしん
分かとーてい。うまんかいクラムドウヤーぐわーぬ、
いいるんしえー外んかいかんし歩ちゆるしちやーにか
い「あつたーや何り言やぎんり分かいみ」り、「言んそー

(お茶だけを)出したからね。常日頃はこの家はお
金もたくさんあるのに、金も払わないと氣を悪くして
しまった。それで材料を盗んだり、また床柱を逆さに
して立てようと大工どうしで相談して、逆さに立てて
しまった。

そういうふうに(逆柱を立ててあることは)名護の
親方は分かつていた。そしたら、そこに外から雀が歩
いていた。「あの雀は何と言つてゐるが分かるか」と
おっしゃつた。すると「分かりませんよ」と言つた。

ちやぐとう。「分かいびらんさー」りちやぐとう。いいるんしえー、昔りしえーなー米りしえー馬んかいる乗
しーしえーやー。乗していちゅーし、たとうれーなー北谷、くりから考えいねー北谷てー、「北谷辺ぬんかい
米ぬいつけーりとーぐどう、りかうり喰ていくーやー」り言やきんどー」り話いしんそーちやぐとう。「うんぐ
とーる 嘘りちんあんなー」ぬーぬーりち話いしちや
ぐとう、さーなかい「いつたーがあん思^{うむ}いるんさー、
んだくぬクラムドウヤーぐわーとうやーにかい、うり
んかい足んかい字い書ちやーまかい飛^とでいやらすんさー、
本当やみあらにりーしえー、一いつたーさーにかい確かみ
らんなー」りち。あんさーにから、うまからけーやら
しんさーにかいぢやぐとう、本当米ぬからほーりやー
にかいうり喰てい、喰いぎーたんりやーに。

うりから後しえーうぬ家ぬシースビー、うぬ後しな
家ぬシースビーんなたぐとう。うぬ大工達んかい、い
いるんしえー、今ぬえーが茶あびけーんいじやち、御
馳走ん茶請きん何んいじやさんしえー、いつたーが家
庭ぬ立場ぬ関係さーなかい、家ぬ家族んちやーんかい
きりよーりちるやぐとう。いいるんしえー手間うわー

いわば昔は、米というのは馬に乗せて運んでいた。そして北谷で馬が米を乗せていたらしい。「北谷で米がこぼれているから、その米を食べに行こうと言つているよ」と話したからね。「そんな嘘がどこにあるか」などと話していた。すると「あんたたちがそう思うんだつたら、この雀をつかまえてね、それの足に字を書いてはなしてみるからね。本当かどうかはあんたたちで確かめなさい」と。そういうふうにして、そこから雀は逃がしてやつた。すると、本当に米が散らばつており、それを食べていた。

その後、家も完成して、新築祝いとなつた。(名護親方)今まで大工に、御馳走や茶請けを出さずにお茶ばかり出していたのは、大工の家庭のことを考えて、その家族にあげるつもりであつた。いわば(御馳走や茶請けの代わりに)手間賃をよけいにあげるつもりで、一人一人にお金を渡した。

ばに、金一人な——人なーんかい渡しんそーちしちやぐどう。

うにーからなーしでーに、はーとーくぬ人ちやーやり思いぬちーさーにかい、なーうぬ床柱ん逆立ていーしえーしん。うぬ大工ぬ私にんかい、いるんしえー、ティーンリしえー分かいみくれーくんぐとうさーに削るティーンぬあたんよ。うりさーにティーンモーイみしていどうらしんそーりりち、祝ぬ日にしちやぐとう。あぬティーンさーなかいモーイしちやぐとう。醉ふくなーきーに、うぬ床ぬ柱んかい逆立ちし、ティーン立てていの踊にかい。うぬ柱んかい傷いつちやぐとう、うぬ柱替らんれーならんなたぐとう。うにーから柱ん立てい替いしんそーちゃんりる話い。またうぬ材料ん少一うまから盜でーしんちやーん、集みていちやぐとうなーうつさ造いしんあたんりる話。

注 ティーン 手斧の一種。柄の長さ五〇センチくらい。刃が鉤のように柄と交差する方向についているもの。

105 白銀堂由来

話者 比嘉テル(明治四十三年七月十八日生)

翻字 知花春美

白銀堂(はくぎんどう)りちよ、糸満人(いとまんちよ)がてー、旅人(たびにん)とう友達(ともだち)やてー
ぎさにやー、旅人(たびにん)から友達(ともだち)やぐとう、じこー金(じん)ぬ必
要なやーに借てーるばーてー。旅人(たびにん)から金(じん)借たぐとう、
なーやーがはじやしが、いーんしえー、うぬ糸満人(いとまんちよ)
旅人(たびにん)ふーじーやてーぬはじ、一緒相手(きじょあひて)なやーに、あん
しやてーぎさしが。

うぬなー糸満人(いとまんちよ)が借てーぬ金(じん)返すんり、じこー働(はたら)
ぎはしが。なー後(あと)お友達(ともだち)ぬてー、旅人(たびにん)が「私金(わんじん)払てい
とうらさんなー」り言ちやぐとう、うれーなー「しば
らく待つちょーき。儲(はら)いてい払いぐとう」りちやてー
るばーてー。

ちやつさ儲(はら)きていんうぬ借てーぬ金(じん)のーたまらんばー
よー。糸満人(いとまんちよ)おてーあんされーなー、今度(こんど)およー、糸
満人(いとまんちよ)およー「旅んかい行ぢやーにやー、儲(はら)けていくー
らん限(かじ)れー、くぬ友達(ともだち)ぬ負債(ふさい)払いさんむー、私ねー旅
んじ儲(はら)きてい來ひー」り言ちよーるばーてー妻(めぐみ)んかい。

白銀堂といつてね、糸満の人と旅人が友達だったそ
うだ。友達なので(糸満の人は)お金が必要になつて、
旅人からお金を借りたようだ。旅人からお金を借りた
ようだ。いわば、その糸満の人も旅人のようなもので、
一緒に(お金を)借しあつた。

そうして、糸満の人は借りたお金を返そうといつしよ
うけんめい働いたようだ。後から友達の旅人が「私の
お金を払ってくれないか」と言つたので、この人は「し
ばらく待つて下さい。儲けてから払います」というこ
とだつた。

しかし、いくら働いてもその借りたお金はたまらな
かつた。今度は、糸満の人は「旅へ出て働くしかない限り、
友達への負債は返せないので、私は旅に出て儲けてこ
ようね」と妻に言つた。「そのようにしても負債は払わ
ないといけないので、旅へでも行つて儲けて払わない

といけないので儲けてきて下さい」と(妻は)言つた。

「あんし、人ぬ負債^{うつかは}払^{はら}わるないぐとうや、旅^{なび}んかいやていん行^{いん}ぢてい儲^{はづ}きてい払^{はら}わるないぐとう儲^{はづ}きていもれー」りちえーるばーてー。

あんしさぐとうなー、また姑^{じゅう}とう嫁^{よめ}とううてーぎはしが、あんしねー二人暮^くらすんり、一人暮^くらすんりねー、女^{めの}びけーんどうやつしえーや。あんされー、男^{おとこ}あ儲^{はづ}きーが行^はぢちえーんりち話^{はなし}い聞^きかりーぐとう、男^{おとこ}ぬ乱暴^{らんぱう}しが来^くんがやーりおそれがあしえーや。あんしさぐとう、なー姑^{じゅう}お男装^{おとこあわせ}い、男仕度^{おとこしど}し寝^ねんじんそーち、女^{めの}お女^{めの}らーしく、毎晚^{まいばん}なー姿^{しぐま}変わらち寝^ねんじんしえーんよー。

あんしさぐとう、なーたとうい来^きんれー思^{おも}んばーてー。

夫^{おとこ}ぬ来^きんれー思^{おも}んばーてー、二人寝^ねんとーるばーに夫^{おとこ}お旅^{たび}から来るばーよー。夜^よ來^きぐとう男^{おとこ}あ寝^ねんとーといさぐとうや。なー二人ぬ者^{じゆ}、姑^{じゅう}、自分ぬ妻^{めの}ん「うんぐとーる事^じそーるい」りち、親^{おや}ぬ男^{おとこ}ぬ仕度^{しど}し寝^ねんていいめーしが「いやー私^わがうらんねー、くぬじやまるそーるい」りち、「人ぐーりーすびちぢゃーに、刀^{かたな}持^{つか}つちよーるばーよー。

「私^わねー負債^{うつかは}払いんりちや、いやーうつぢゃんなんぎてい儲^{はづ}きーんり、悪^わざーあしが、くぬじやまるそーる

そうすると、姑がいたようだ。家には姑と嫁がいた。そうだが、二人暮らすには、女だけでしよう。主人は儲けに行つていると話を聞いているはずなので、男が乱暴しに来ないかというおそれがあるでしょう。それで、姑は男装して、男のふりをして寝て、妻はそのままで、毎晩そのように寝ていたようだ。

そうしていたが、夫は帰つて来ると思わなかつたようだ。夫が帰るとは思わなかつたようだね。二人で寝ているときに、夫は旅から來たようだ。夜來たので、男が寝ていた。もう二人の者、姑と妻が寝ているんだが、「こんなことをしているのか」と、親が男のふりをして寝ているんだが、「おまえは、私がいない間にこんなことをしているのか」と、二人とも引っぱり出して、刀を向けたようだ。

「私はね、負債を払おうとね、おまえをおいて儲けに行つたことは悪いが、こんなことをしているのか」

い」りち、くぬ手や出じやちゃぐとう、夫ぬどう、妻ん
かい。さぐとう、女ぬ親ぬはんちもーち、「手ぬ出じらー
意地引き、意地ぬ出じらー手引き、昔くとうばぬあん
どー」り言ちから顔おはんちめーんばー。「私にんや嫁え
守いんりや、くぬ形そーるや。絶対男ぐとうんでーしみ
てーうらん」りちよ。

うにーに、男あはつとうしち、そーいやーぎたん。
「絶対私ねーうんぐとうーさびらん」りち、「私がいつ
ペー悪さいびん」りち、「貴方があん言いそーらんねー、
きつさくぬ女お殺ちえーたん」り。

やしが、見ちやぐとう。今度おとーあんやぐとうや
「いかなしん、いやーが旅かい出じてい儲きーが出じ
ていんや、くぬ嫁え、私がー何処んかい離さん、かく
ぐそーぐとう、うみなーくし儲きてい来わ」りちやら
ちょーるばー。ちゃーしん負債払わるやつしえーや、
友達ぬ負債あ。

今度お儲きてい來、家かい来る頃に、儲きてい来る
頃、いーふあ足らんてーんてー。なー金のー儲きて
ちやしが、うりんかい払いるうつさーねーんてーばー
よー。あんさぐとう、なーいーふあー儲きれーあたん

と手を出した。夫が妻にね。すると、母親が出てきて、
「『手ぬ出じらー意地引き、意地ぬ出じらー手引き』と
いう昔のことばがあるよ」と語つてから、変装を解いたようだ。「私もね嫁を守るためにこのようにしてい
んだよ、絶対男遊びはしていないよ」と語つた。

その時に、男はハットして正気になつた。「絶対私は
そうしません、私が大変悪うございました。貴方がそ
う言わなければとつぐに妻を殺していただしそう」と。

だけど、見ると(ちょっとお金は足りなかつた)

今度はそうだつた。「おまえが旅に出て、儲けにでても
この嫁はどんなにしても、どこにも行かせず、守つて
いるので、安心して儲けて来なさい」と、行かせたわ
けだ。どんなにしても負債を払わないといけないでしょ
う。友達の負債を。

今度、儲けて来て、家に帰ってきたが少しは足りな
かつたようだ。もうお金は儲けてきたが、友達に払う
金額はなかつたそうだ。あとすこし儲ければあつたそ
うだが。

りー負債や。

あんし、うぬ場にんなー旅人や來に、「ハイ、いやー
金のーしきーてーみ」りちょーるばー。借てーる金、
貸らちえーる友達んかいてー、「金のー準備そーらやー、
ひがらどーいひこーてーみ」りちゃぐとうや、「なー
くーてんやいやさびーしがしばらくお待つちきうみそー
り。うつさーあいびーしが」りちゃぐとうよー「いえー
いやーや、うんなげー待つちとうらちんやうんなげー
しこーらんばーるやるい。いやー殺ちとうらさやー」
り旅人が言ちやるばー。

「まじ待つていりち、親ぬりがらー「まじ待つてい」
りち。親ぬりがらー「まじ待つてい」り、「手ぬ出じらー
意地ひき、意地ぬ出じらー手引き」、言葉ぬあぐとう、
あぬ、しばし待つちきうり、当分ぬ間待つちきうり。
なーくーてんどうやぐとうや、うつさーあしが足らん
分の一待つちきうり」りち、とうらしりち、ゆつかい
しこーてーしがよー。あんすぐとうなー殺すんりちそー
んりー、うぬ友達、うぬ場にとうん出ちいちゃるむのー、
親が言ちやぐとうや、「くりんくんな事あたんどー。絶
対あどう先や儲きてい払いぐとう、なーいひるやぐとう」

そのときに、旅人は来て、「ハイ、おまえはお金は準備したか」と言った。貸した友達に、「お金は準備したか、約束どおりに準備したか」と言うと、「あと少しではあります、しばらくは待つて下さい。これだけはあります」と言った。「おまえは、こんなに長いこと待つてあげても準備していないのか。おまえは殺してあげよう」と旅人は言つた。

「ちよつと待つて」、親が「ちよつと待つて、『手ぬ出じらー意地引き、意地ぬ出じらー手引き』という言葉があるので、あのうちよつと待つて下さい。当分の間待つて下さい。あと少しなので、これだけはあるが足りない分は待つて下さい」と頼んだ。相当準備はしてあるんだがね。その友達をもう殺そうとしていたが、親が出てきてそう言つた。「この人もこんなことがあつたよ。必ず儲けて払うので、あと少しなので（待つて下さい）」と語つたので、旅人も「あつそつか」と考えたようだ。「手ぬ出じらー意地引き、意地ぬ出じらー手

うりんやー、「えーあんやみ」りちよ、あんさーに考たるばーてー。「手ぬ出じら一意地引き、意地の出じら一

手引き」りぬ言葉ぬあぐとうり言ちやぐとうよ、うぬ男あ手引ちやーに命え救てい。

「うつお金の一しきーてーびんどー。なーくーてんどうやいびーぐとー、しばらくお待つちきうみそーり」りちやぐとうよ、「くぬ金のーや取いんさんどー、私ねーや、いつたー親ぬお陰にや、いやー殺ちや、私ねーかんないしやたしが、いつたー親ぬい言葉なかいや、私ねーじこー反省しちや、じこーそーいつち、いやー殺ちんねーんや、くぬ金、私が取らんぐとう、あぬいやー使ていとうらし、負債ん、せんぜんいやーさんどー」いやー成功しりちよーるばーてー、借りーぬ人んかい。

「私にん取らん、私にん取らん、かんにーかんにーなとーるばーよ。私にん取らん私にん取らん、かんにーかんにーしちやくとうや、あんやらーや、うぬ金ぬくまんかい埋じゅみやーにや。糸満ぬあまんかいあしえーやー。あまんかい、うぬ金のーちゃー埋じゅみさーにてー、うぬ金のー昔ぬ金のーミースチャージンるやしえーや、うまんかい埋じゅみてー誰にんうりさんよー、なー

引き」という言葉があるからと書ったので、その男は手を引いて命は助かつた。

「これだけお金は準備してありますよ。もう少しなので、しばらく待つて下さる」と言つた。「このお金はもらわないよ。私はね、おまえの親のお陰で、おまえを殺そと大変なことをやろうとしていたが、おまえの親の言葉で、私はとても反省してね、考えを直して、おまえを殺さなかつた。このお金は私はもらわないので、おまえが使つてくれ、負債もしてはいけないよ」とあなたは成功しなさいと言つたようだ。借りた人にね。

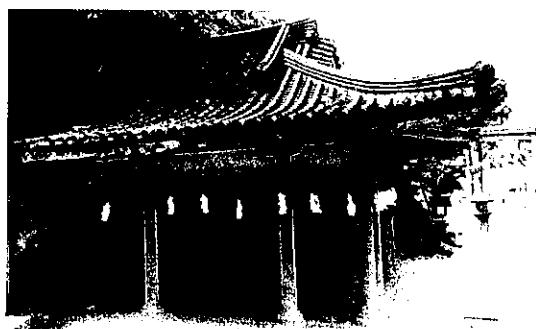
私も取らない、私も取らないと譲りあつたようだ。

私も取らない、私も取らないと、互いに譲り合つたので、それでは、このお金はここに埋めようね。糸満にあるでしよう、あそこにこのお金はずつと埋めて、そのお金は、昔のお金はミースチャーデしよう。そこに埋めて、誰にもあげず奉つて、きょうに至つてゐる。

まつりかきやーいよ、あんさーに今までい。

注① 白銀堂 国道三三一号線から報得川を渡ったところ、糸満の人口にある。古くから糸満の人々は、出漁や旅立ちの時に、この白銀堂に無事を祈った。ハーリー競争も、この氏神への奉納行事のひとつ、又、空手の守護神でもあり、空手を志す人々の参詣も多い。

注② ミースチャージン 戦前使われていた穴のあいた硬貨のこと。



白銀堂

106
普天間権現

話者 山内カナ(明治三十三年三月十日生)

翻字 知花春美

いつペー美ら女ぬうたんりしが、うぬ女おぜつたい
人間んかい見らんたり。見らんたんりしが。

たいそうち美しい女がいたそなだが、その女は絶対人
間に見られなかつたそなだ。見られなかつたそなだが。

あんさーにかい、何時いつかあ見りわるないりち、ある
人ひとぬ見みちえーるふーじ。見みちやぐとう、あんし見みちや
れー「今いまねー見みちゃん、見みちゃん」しちやぐとうや、
すぐウーバーラ前まへなちょーてーしが、逃はなぎーにかい、
一巻まきまちぶやーいよ、ウー やよ、ウーすんちやーにか
い、普天間權現ふてんまごんげん、あまぬ洞窟うつんかいよ追おつい行はぢやー
い、入いち行はぢうらんたんり。

あんさぐとう、うれー神かみどうやでーさりちよ。あん
さーにかいまた、うぬ昔むかね侍さむれがやたらー旅たびんかい行はぢゅ
んり、うまんかい手てうさぎーがもーちや、うり抜ぬじう
ちやーにかい、手てうさぎでーしちやぐとう忘わてい。
刃なえ忘わたぐとう、なーとーりちから、思うひ
船乘ふねていから思うひじやちやぐとう、「普天間ふてんまぬ權現ごんげんまささ
あみせーらーくぬ刀なえ行はぢ來る間まあ預まかかていもーりよー」
りち、願ねがてい行はぢやぐとう、うぬ刀なえ人ひとぬ取ういんりしー
ねー長ながむんないんねーしちよ取うらうらんたんり。

あんさーい行はぢ來るが間まああたんりる話はな。

それで、いつかは見ないといけないと、ある
人が見たそうだ。見たので、「今、見た見た」と叫んだ
ので、すぐウーバーラを前にして座っていたが、逃げ
ようと、芭蕉糸が巻きついて、芭蕉糸をひきずつて、
普天間權現に、あそこの洞窟に入つて行つたそうだ。

それで、その人は神だつたんだねといわれた。それ
からまた昔、侍だつたのか、旅に行くといつて、そこ
に祈願にきて、刀を抜いて、手を合わせて、その後に
刀をそのまま忘れてしまつた。刀を忘れたので、しば
らくしてから思い出して、船に乗つてから思い出して、
「普天間權現は靈驗高いのなら、この刀を行つてくる
間預かつて下さい」と願つたので、この刀は人が取う
うとしたら、蛇になるような感じがして、取れなかつ
たそうである。

そうして、行つて来る間はあつたという話である。

翻字 村山友江

うれー、必ずうりやいびーたんり。水ぬありわるなー。
 世界、言るんしえーなーうつきぬ人達やいびーしえー
 やー。人達ぬたみないんりちなー、一人やうらんなてい
 んしむんりち、うまんかい入りしんみちしーねー。なー
 すべ調びやーに辰ぬ人ぬ、辰年ぬ、辰年ぬ生まれの
 しが何歳ないんりがらー。辰ぬ人ぬうりがまた年数あ
 たとーるはじどー。

あんさーにうり沖縄中から調びたぐとう、天ぬ下
 調びたぐとう、金持人ぬ金とう替いるさびんねれー。
 金の貧乏者ぬんかい。親や病どーしえ、金おねーらん。
 女ぬ親ぬ命んなー金まかしうらんぐとう、うり助ぎ
 てい親ぬ命買いるたみ、うぬ女ん子ぬ自分くる申し込
 みるさぎんれー。「私が行ちやびん」りち。あんしうれー
 救い上ぎらりやーに、うりん助かてい、親ぬ目までい
 ふらちゃん。

これはもう水があつてこそ、世界の大勢の人達が(生
 活できるさあねー)、人々のためだということで、一人
 ぐらいいなくなつてもいいということで、そこに入れ
 ることになつた。そして調べてみると、辰年生まれの
 何歳であつたかは分からぬが、その辰年の人という
 ことであつた。

そうしてそれを沖縄中から調べてみたら、金持ちの
 人がお金を替えたのであつた。親も病氣である貧乏者
 に、そのお金は与えた。自分の親を助けて命を救うた
 めに、その娘は自ら進んで申し込みをした。「私が行き
 ます」と、そうしてその娘は救われて助かり、親の目
 までもみえるようになつた。

注 屋良ムルチ 嘉手納町屋良にある。俗にムルチグムイと称し、比謝川の支流である茂呂木川上流の知花へぬける県道十六号線沿いの森の中にある。この湖は、昔は約千坪の広さがあつたといわれるが、米軍基地拡張で半分埋め立てられた。

108 屋 良 ム ル チ

話者 比嘉利吉（明治四十一年十一月二十日生）

翻字 知花春美

ある大きな蛇がいて、農作物を荒らして、非常に悩んでいるといふこと、困っているといふこと、そしてその蛇に子供ひとりあげないと治まらんということだな。それで公事ぐとうなやーに、ぬー相ぬ子供、それをその蛇の餌食にせんといけないとということで、公事ぐとうだから、あんさーにあつちこつち調べたところ、一人の候補があがつたわけだな。一人は金持ちの人が、一人は貧乏者の娘に、そこは繼親であつたといふこと。
そこにもう、「お金たくさんあげるから、あんたの娘を蛇の餌食にしてくれないか」ということで、そして、その繼親は怒つてしまつて、そして、その娘が、「私がもう蛇の餌食になるから」ということで、そして、その繼親にお願いしても親は聞かない。もう逃げて行つてしまつて、その子供を裏おうとしたわけさ。雷が落ちてしまつて、その蛇は死んでしまつた。そして、その子供も助かつて、大きな褒美を下つてしまつて、その家庭は金持ちになつたという話。それが親孝行の娘だな。

翻字 長堂 加代子

國頭の一所は瀬良垣と覚えているな、瀬良垣。で、悪い服装をしてさー物乞やーみたいに、そして船出準備している所に、「水飲まちきり」と言うたから、「うんぐとーる物乞やーに水え飲まちえーならん」と言うたからそこからはもう、泣くく帰つてしまつて。

また谷茶かなー、そこにも船出があつたわけさー。そこに来て「水飲まちきり」そう言うたから、「たくさん飲んでいいよ」と。そこで水を飲んで、その谷茶の舟は非常に上等になつて。で、瀬良垣の舟は浸水ばかりして、そういうことを聞かされた。

それからもう瀬良垣ぬ人達ぬ、くぬひやーやうち殺るちとうらさんれーならんと言つて、楚辺まで来たからその赤犬子はもう神様であつたつてさ。伝われているな。

赤毛犬子ぬ ハベルなでい飛ばは
いやし訪にゆが わみぬゆくひ

一ヵ所は国頭の瀬良垣だつたと覚えているが、みすぼらしい格好をした乞食みたいな人が、船出の準備をしている所に行つて、「水を飲ませて下さい」とお願ひしたら、「こんな乞食に水を飲ましてはいけない」と言つたから、泣くく帰つてしまつた。

また谷茶であつたと思うが、そこにも船出があつたらしい。またそこに来て、「水を飲ませて下さい」とお願いしたら、「たくさん飲んでもいいよ」ということでそこで水を飲んだ。それでその谷茶の船は非常に上等になり、瀬良垣の船は浸水ばかりしていたそうだ。

それからもう瀬良垣の人々は、この乞食は殺されなければいけないと思い、楚辺まで来たらその赤犬子はもう神様であつたんでしようね。そう伝えられているよ。

赤毛犬の子が ハベルなつて飛びたてば
いつになつたら訪ねることができるだろうか

私のゆくえ

と言つて、もう飛びたつてしまつたそうだ。これは楚辺のあるおじいさんが伝えてあつた。で、その赤犬子は持つていたぐーさん、杖にそういうことが書かれていたということ。

と言つて、もう飛びたつてしまつたそうだ。これは楚辺のあるおじいさんが伝えた話である。その赤犬子が持つていた杖にそういうふうに書かれていたということである。

採集 S 63・4・9 読谷ゆうがおの会（知花春美・村山友江）

注 赤犬子 伝説上の人物、赤犬子の字を当てる。母は読谷村楚辺部落の屋嘉（屋号）のチルーで、恋人の子を身ごもつたので、部落民からは愛犬との子供であると言われ、村に居たたまれず津堅島で、赤犬子を出産したと言われている。赤犬子に関する伝説が多い。楚辺部落では、中国に使者としておもむき五穀を持ち帰った恩人としてあがめている。

110 墓 の 始まり

話者 又 吉 矢之助（明治四十一年六月二十日生）

翻字 村山友江

墓ぬ始まいやちやぬふーじーしやたがやー、りぬく
とうやいびーしが。なー人ぬけー亡ーしーねー、ハンタ
んかい落とうすか、崖下んかい落とうすかしち、山底
んかい捨てて一るふーじーやいびーしが。

墓の始まりはどういうふうであつたかということです
がね。もう人が亡くなると、崖ぶちに落とすか、崖
下に落とすかして、山底に捨てていたようである。

なー親孝行者ぬ、なーかんしえーならんさーりち。
くぬ崖下、岩んかい捨ていねー、なー飛鳥、犬から何から猫から、鼠から何から来てにすぐき一下やーにさぎーし見ちやぐとう。あーくれー自分ぬ親ぬけー「しんしえーねー、かんしえーならんさーり、常平生から思つていてーるふーじーやいびーしが。

あんさーにくぬ親孝行者のー、なー親ぬ四、五年終やーに、けー亡しんそーちゃやぐとう。なー私あ親あけー亡しんしえーねー、洞穴搜めーやーに、うまんかい何ん邪魔ならんぐとうししわるないりち、葬てい。うりからしでーしでーに、なーくれーまたうぬ洞穴ん、いいるんしえー近さるとうくまんかいねーびらん、かーま山奥かーま遠さ遠さんかいるあいびーぐとう。あんさーに家から遠さんかい担みて。今やていん昔ぬ墓あかーま遠さんかいあいびーしが、うぬ関係さーに遠さんかい、あてーぬふーじーやいびーしが。

あんさーにくぬ文化ぬ発展さーになーしでーしでーに、墓んりつぱになていちょーびーしが。くりん世ぬ変わるりち、家ぬ側んかい墓ん何んあいびーしが、くれー一つぬ衛生、また昔え火葬さびらん、火葬しちゃぐ

もう親孝行者が、こうしてはいけないと。この崖下や岩下に捨てるに、鳥や犬猫、鼠などいろいろな（動物が）来て、（死体に）食い下がるのを見たからね。あーこれは自分の親が亡くなると、こういうふうにしてはいけないと、常平生から思つていたようだね。

そうして、この親孝行者の親が四、五年たつてから、亡くなられた。もう以前から私の親が亡くなると、洞穴を搜して、そこに邪魔にならないように葬ろうと思つていた。そして親が亡くなるとそのように葬つた。その洞穴というのは近くにあるではなくて、山奥のずっと遠くにあるんだからね。そして家から遠くまで担いで運んでいた。今でも昔の墓は、ずっと遠くにあるんだが、その関係で遠くにあるようだ。

そういうふうにして文化が発展して、もうしだいしだいに墓もりつぱになつてきているようですが、これは世が変わり、家の側にも墓もつくるようになつた。これは一つは衛生上の問題で、昔は火葬ではなかつた

とう衛生でいきやーに、家ぬ側んかいまーんかいん造
ていさつとーる場合やいびーしが、私にん昔ぬ墓ぬ始ま
いやくぬふーじーしやてーるふーじーやいびん。

のが今は火葬になり、衛生もよくなつたので家の側に
も墓を造るようになつた。私はそういうふうにして、
昔の墓の始まりを聞いています。

採集 S52・8・16 読谷村民話調査團第五班（渡慶次熟・崎浜博子・上田香代子）

111 盆踊りの由來

話者 山内カナ（明治三十三年三月十日生）

翻字 村山友江

七月えや、七月えあぬーある男ん子ぬ親ぬ、悪事し
んそーちやぐとう。悪事しんそーちやぐとう、地獄ん
かい落とうさりんそーち。落とうさりんそーちやぐとう、
なー物のーうさぎりわんていーちんみそーらん。

七月はね、ある男の子の親が、悪い事をしたからね。
悪い事をしたので、地獄に落とされたようだ。落とさ
れたようだ。落とされたので、もう食事を与えても、
ちつとも食べなかつた。

あんさーにかい、よーがりていめーんて。うぬ自分
ぬ親、よーがりとーし見ちゃーまかい、救いんりすし
が、自分一人しえー救いさん。なー坊さんむる頼りち、
あんさーにかい揃ていすぐ祈りしち。

それでやせていたようだね。この自分の親が、やせ
ているのを見て助けようとすると、自分が、自分一人では
助ける事はできなかつた。もうたくさんの坊さんを頼
んできて、みんなで揃つてお祈りをした。

うりがなー地獄から出でていもーちやる祝りち、盆
踊りえーやんり。盆踊りえー、うりからなとーんりる

（その親が）地獄から出てきた祝いということで、盆
踊りをするようになつたそうだ。盆踊りというものは、

話 やるばーてー。

そういうことから始まつたということだよ。

採集 S 52・8・16 読谷村民話調査団第四班（運天悦子・横田和子）

112 位牌の始まり

話者 又吉 矢之助（明治四十一年六月二十日生）

翻字 村山友江

あるとうくるんかい、女ぬ親とう若夫婦ぬ三人暮し
ぬ、いつペー仲ぬゆたさぬ子供達嫁んいつペー孝行
者やん、また自分ぬ男ん子んじこーぬ孝行者なやーに、
いつペー幸福に暮らちよーる家庭やてーるふーじやい
びーしが。

くぬ親ぬけ一亡しそーちやぐとう、なー親ぬ身代わ
りとうし、板切ぐわー飾やーに。うりんかいなー朝晩
なーちゃーう茶ん物ん供きてい。あんさーに畠から帰
ちくーらわん、また用事かい行かわん、なー毎日続
てい。なーすぐ手うさーち、あんさーにそーてーるふー
じーやいびーしが。
なー妻え、なーるく珍きぬ。なーくんぐとうーし、

あることに、母親と若夫婦の三人が大変仲よく暮
らしていた。娘も大変親孝行で、また自分の息子も大
変な孝行者であり、幸福に暮らしている家庭であった
ようだが。

もうこの親が亡くなつたので、親の代わりとして板
切れを飾つた。その（板切れ）を飾つた。その（板切
れ）に、朝も晩もかかさずいつもお茶や食べ物も供え
ていた。そのようにして、畠から帰つてきても、また
用事に行つても、毎日続けていた。もうすぐに手を合
わせてやつていたようである。

（そのことを）妻は、あまり珍しく思つていた。も

朝夕くんぐとうし、また夜から来ん。何時来ん手い供ぎてい、しーしーしちやぐと。なー夫お親ぬ亡しちから、なーいひきーちがーとーうらんがやーりぬ心ん持つち、そーてーるふーじーやいびーしが。

ある日洋裁、裁縫やいびんてー、洋裁する場合に、うぬ針ぬ位牌んかい飛ぬじえーぬふーじーやいびーしが。うぬ位牌から、血ぬどんないすぐなー出じてい。じやつき手い供ぎたんてーん、なーくまぬ。あんしするうちねー、くぬ親孝行者ぬ子あ、帰てい来ぐと。なーびつくりさーに驚ち、「ぬぐわ、くれーちゃーなとーが」りち、話いしちやぐと。なーかんかんるやんどーやーりち。うびじ針ぬ飛んじちゃーに、うまんじだつちやるむー、かんなとーんれーりちやぐと。 「えーあんるやりー」りやーに、手うさぎたぐとすべ止まつい。

うにーから位牌りーしえー、なー信じていしちやぐと。位牌ん飾てい、立派手んうさぎてい、ニングワソーていするふーじーぬ話いやいびーしが。

うこのようにして、朝夕、また夜、何時に帰ってきても手を合わせてやつていた。もう夫は親が亡くなつてから、少しは頭がおかしくなつてはいなかと、心の中では思つていたようだが。

ある日、裁縫をしていると、その針が位牌の方に飛んでいつたようだ。すると、この位牌から血がどんどん出た。もう（この妻が）どんなに手を合わせても、（この血は止まらなかつた）。そうしているうちに、この親孝行者の子は帰つてきた。もう（これを見て）大変驚き、「れはどうしたことか！」と、話をした。もうこうこうだよと。急に針が飛んでいつて、（位牌に）たつたので、このようになつたんだよと話した。「ああ、そうか」と。（息子が）手を合わせたので、すぐに（血は）止まつた。

その時から位牌というのは、もう信じるようになつた。位牌も飾り、手も合わせて押むようになつたといふ話である。

著者 山内カナ(明治三十三年三月十日生)

翻字 知花春美

いつペー愛さる亡^まそーんりち、葬^ほむいが行ぢやぐどう、
 あぬーナーチヤミー^(注①)しーが行ぢやれー、ガラガラすた
 んりち、あんさーにかい、あんしからるナーチヤーミー^(注②)
 すしやんりさりちナーチヤミーしちやぐどう。

なーフカマグチ^(注③)でいるいんせーる人りるいいたさに
 やー。あんさーにかい、なー亡^ましちやれーウチカビ^(注④)さー
 に、水、うにーに買てい飲むんりち、うぬウチカビあ
 たんりさりーたんろー。

とても愛しい人が亡くなつて葬むり、ナーチヤミー^(注⑤)
 行つた。(墓の中で)ガラガラ音がしたので、そのと
 きからナーチヤミーをするようになつた。

フカマグチという人だつたのだろう、亡くなると、
 ウチカビで、水を買って飲むということで、そのウチ
 カビをあぶつたということである。

注① ナーチヤミー 葬式の翌日に親族などが行なう墓参。朝と夕方の二回、花と水等を持って墓参りする。その後、四十九日まで墓
 参りする地方がある。死者がもしや蘇生することはないと翌日見に行つた。

注② フカマグチ テーラシカマグチのこと、母親が身^ごもつたまま死んだので墓の中で「後生半分、現世半分」といわれ、あの
 世との世を往来できたといいう。

注③ 折ち紙 紙錢のこと、以前は店から褐色のウチカビを買って、それに丸い錢の型をしたウチカビウツチャードと称するもので縦
 五個横七個に打つて使用したが、現在では、打たれたものが用意されている。

採集 S52・2・27 読谷村民話調査団第十四班(運天悦子)

著者 山内カナ(明治三十三年三月十日生)

翻字 知花春美

楚辺そべぬクラガ一でいち、うまから犬いんぬ、アカイヌクー
でいち犬いんぬうまんかい行はいし人ひとぬ見みじやーなかい。漏もん
りていちや來らぐとう、うまんかい井戸いのへぬあさやーりち、う
ぬ犬いんぬ探とうめーいぢやちえーるクラガーやんり。あまー。

楚辺のクラガーといつて、そこから犬いんが、アカイヌ
コといつて、犬いんがそこに行くのを人が見た。(犬いん)濡もん
れて來たので、そこに泉があるんだねと、その犬いんが見
つけたというクラガーだそうだ。あそこは。

採集 S 52・2・27 読谷村民話調査団第十四班(運天悦子)

注 クラガー 旧楚辺部落にあり、鐘乳洞を流れる地下水源で、戦前は飲料水用として利用されていた。洞穴で暗いので、クラガー(暗
井戸)の名前がついている。現在は米軍基地になつている。

115

友人の茶毘には行くな

著者 照屋寛良(明治四十一年五月十日生)

翻字 村山友江

昔むかし、首里勤いざなみそーる有名な金武ぬ松金まちがいりぬ人ひとぬ。う
ぬ人ひとおなーうてーる話はなしやるはじどー。はつきり金武きんぶ

昔、首里勤めをしている、金武の松金という有名な
方がいた。この方は確かにいたと思うよ。はつきりと

松金りち有名やぐどう。芝居にんあいるすぐとう。

金武の松金ということで有名だからね。芝居にもあるんだから。

くぬ人が首里勤みぬ場合に、首里から金武ぬ本宅んかい帰てい行ちゆる場合に、昔え首里から金武までいやていん泊まいたんりぐとう。道中うてい。あんさーに首里からよいよい家かい向かてい来に、浦添うとーて道連ぬ行ぢとーるふーじや。

「貴方おまーかいやみせーが」りちやぐとう、「私ねー金武かい」やんり。「貴方おまーかいやみせーが」「私にん金武かい」やんり。「とーあんしえーゆぬ金武かいやらー一緒行ちやびらやー」りち。あんし金武ぬ松金有名な代武士んやれー、学者いじやい、なー美人んやいそーんりぐとう。あんし皆かい親わつているうりぐとう。くぬ旅人ん「貴方とう道連し、私ねーすじようやいびーさー」りちやぐとう。「私にんなー、金武までい來、寂さあたんむー、とーいーばーやさ」りち。

あんさーいくぬ読谷、伊良皆や泊宿やたんりぐとう、あぬ当時。なかゆくいすぬ所、伊良皆來泊てーぬあーじ。泊たぐとうなー、くぬ松金が一分からんふーじや。

この人が首里に勤めている場合に、首里から金武の本宅に帰つて行く場合に、昔は首里から金武まで行くにも泊つたというからね。道中でね。そうして首里からゆつくりと家に向かつて来る時に、浦添で道連れができるようである。

「貴方はどこにですか」と言つたからね、「私は金武に」と答えた。そうして(反対に)「貴方はどこにですか」と「私も金武にです」ということであつた。「よし、それなら同じ金武なら一緒に行きましょうね」と。金武の松金という方は、有名な代々の武士でもあれば、学者でもあるし、もう美男子でもあつたようだ。そしてみんなにも親われていてるんだからね。この旅人も「貴方と道連れになつて光榮です」と言つたからね。「私ももう金武まで来て、(一人で)寂しかつたけどちょうどよかつたよ」と。

そうしてこの読谷の伊良皆には、あの当時宿屋があつた。伊良皆で休憩して、泊つたようだ。そこに泊つたんだが、もうこの松金がは分からなかつたようだ。こ

くぬ一緒連りとーる人お、くれー幽靈マジムンるやる
りぬ事お、分からんふーじ。

實際くぬ幽靈マジムンのー天からぬ使え、金武ぬ松
金やくぬさばじこーいい人お必要やしが、天ぬんじこー
い人お必要やんりよー。あんさーい金武ぬ松金やなー、
くぬさばうていん宝あやしが、くれー是非後生ぬ取やー
い、後生うてい使りわるやぐとうりち。あまからぬ命
令し、くぬ幽靈マジムンの一使えるやてーるふーじや
しが。

あん伊良皆来、一緒泊てい。あんし金武ぬ松金やてい
れーてい夕飯ぬんうさぎてひ、またいるいるななー待
偶ん宿屋ぬ人んかい言ちきていしみてひ。「私あ一緒
旅ぬ連りぬ人やしが、くぬ人ん食事んまーしくうさぎ
ていどうらし。また夜んかんじ物ぬんりつぱにサービ
スしとうらし」りち。いるいるサービスそーるふーじー。

あんさー翌日あ朝起きし、うぬ伊良皆ぬ宿う立ちゆ
んりしーに主ぬるやんりれー、宿屋ぬ主ぬ「松金ウンメー
メー、貴方ぬ連りぬ人、うれー私達が見ちえーくぬ普
通ぬ人おあいびらんどーやー。貴方おちゃー見ちょー

の一緒に道連れにしている人が、幽靈マジムンである
という事は分からなかつたようである。

本当のところ、この幽靈マジムンは天からの使いで
あつた。金武の松金みたいな人は、この世でも必
要であるが、天にとつてもいい人は必要であつた。だ
からもう金武の松金は、この世でも宝であるが、これ
は是非後生に取つて、後生で使わないといけないと
うことであつた。天からの命令で、この幽靈マジムン
は使いであつたようだが。

そうして伊良皆まで来て、一緒に泊つて。そこでは
金武の松金は（この道連れの人を）もてなして、夕飯
も御馳走して、またいろいろと待遇をよくするよう
に、宿屋の人に言いつけた。「私の旅の道連れであるが、
この人には食事もおいしいのを食べさせてくれ。また
夜のかぶる物もちやんとサービスしてくれ」と。いろ
いろともてなしたようだ。

そうして翌日は朝起きして、この伊良皆の宿屋を出
発しようとする時に、その宿屋の主が「松金ウンメー
メー、貴方の連れは私達が見たら普通の人ではないです
よ。貴方はどのように見てているんですか」「どうしてあ

みせーが」「あん、ぬぐわくつたーやる、私ね一人りち
昨日の友達なで、金武まで一緒行ちゆんりちるや
んどーやー」「あらんどーさい、くぬ人おただぬ人おあ
らん。くぬ人がうさがてーるマカネーや、うぬ人ぬ前ま
から下さぎーねーねーんねーそーしが、台所しやんんかい持つ
ち行いぢ見みじーねーうぬままさーらつてーねーん」り。
「えーあんやんなー、ぬーやていんしむき」りち。

あんさーいうりから朝起あさうきさーなかい、金武きんかい向むかん
かてい金武きんぬ入り口ぐち來らぐとう。金武きんぬ村むらんかい來らぐとう
ありやるふーじ、くぬマジムンはくじゅんぬ白状はくじょうそーんりよ。「いえー
さい松金まちがにりーねー、じちえー私わんねーただぬ人おあらん。
浦添うらじユードウリから出だじていちゃーい、貴方あなたぬ命め取とてい、
貴方あなた天うとーてい使つかいんりち。貴方あなたんくぬさばうてい
じこーあがみらつとーんりちやれー、天うぬんかいちけー
ち行いぢやーなかい、天うぬ連ぞーなかいあまうてい貴方あなた
入り用ゆうやんりち。貴方あなたぬ命め、取とてい來くわりちるやんどー」
「えーあんやんなー」りち。むる驚おどろかんりんよ。うぬ
松金まちがにりる人お徳とくぬまんどーる人ひとなで。【えーあんやる
ばーいさい。なーうれー私わあうみーなで、天うからぬ使つかや
てていから、なーうれーちやーさびーが、私わんねーあきら

なた達はそう言いうのか、私は(ちゃんとした)人間で
あるということできのう友達になつて、金武まで一緒に
行くつもりだよ」「違いますよ、この人はただの人で
はない。この人が召めしあがつた食事は、この人の前か
ら下さげる時は空からであるんだが、台所しやんに持つて見
るとそのまま手をつけてないよ」と。「ああそうか、何
でもいいよ」と。

そうしてから朝早く起きて、金武に向かつて金武の
入り口に来たからね。金武の村に着いたからね。この
マジムンは白状したようだ。「ハイサイ松金、実は私は
ただの人ではない。(私は)浦添ユードウリから出てき
て、貴方を天で使うために貴方の命を取りに来たので
す。貴方の命を取りに來たのです。貴方はこの世でも
大変あがめられているということですが、天でも貴方
が必要ですので、天に案内して連れて行くつもりです。
貴方の命を取つて来なさいということで、私は天から
の使いとして來ているんです」「ああ、そうか」と。こ
の松金という人は徳のある人なので、ちつとも驚かな
かつたようだ。「ああそうですか。これは私を望んで天
からの使いであるなら、もうこれはどうしましようか。

みーるさびーる」「あらんしがまじ待ちよーちみそーり
よ。私にん今日貴方んかい、貴方ぬ情こうむてい。私
にん天からぬ使えやぐとうりち、貴方取いんりぬくとお
ならん。くれーなー是非別ぬ人とう、気の毒おやしが
貴方ぬ同年とう。私ねー金武ぬ村んかい貴方やか先なでい
行ぢやーい、貴方ぬ同年生とうなー是非選びわるやる
りち。

あんさーい今まで歩ちゆる人ぬ、たでーまーちょー
るふーじ。幽靈マジムンぬ、いーねー命取とーるばー¹
やんや。あんさーいうぬ日、荼毘やてーるーふーじ。
あんさーにうにーにからぬ沖繩とーてー、同年生が
亡しーねー、なるびこー荼毘かいや行くなり。うぬい
わりからいじとーんりちやんり、やるふーじさい。

私はあきらめないといけないのでしょうか」「違います
よ、まず待つて下さい。私も今日貴方に会つて、貴方
に情もかけてもらつた。私は天からの使いであつても、
貴方の命を取ることはできない。これはもう氣の毒で
はあるんだが、是非別の人と、金武の村に貴方より先
に行つて、是非貴方の同年生を選ばないといけない」
と。

そうして、今まで元気だつた人が、突然亡くなつた
ようだ。幽靈マジムンにいわすれば、命を取つたとい
うことである。それでその日は、ちょうど荼毘が行な
われていたようだ。そういうことからこの沖繩では、
同年生が亡くなつても、なるべく荼毘には行くなとい
うことである。それからの由来だそうだ。

話者 当山千代(明治四十四年十月一日生)

翻字上原ヨシ

糸満の一^い行^だち戻^{もど}いすんと^うくるやたんりがら一^や。唐^{とう}から、唐^{とう}ぬ。あぬ、糸満で一^い言^いらんよーい、沖繩^{おきなわ}り言^いらん^なー、あんしーるんしぇー、沖繩^{おきなわ}中^{なか}んかい子^こんちやー広^{ひろ}がいるじやしえーや。あんさーになー、やな普通^{ふつう}ぬ子^こんちやー産^{まつ}まらちくいんそーりりち、う願^{ねが}えしちやぐどうる、かんし普通^{ふつう}になーんりさりる話^{はなし}、昔^{むか}ぬ話^{はなし}いあたしが。

あんさぐどう、唐^{とう}から唐^{とう}旅^{たび}しちめんそーちやーに、あんさーに、宿泊^{すくはく}いしんそーやーにしちやぐどう、あんさーに、沖繩^{おきなわ}人^{ひと}とう夫婦^{ふうふ}なやーに あんし夫婦^{ふうふ}な^い、いつペー美^みらん子^こぬ産^{まつ}まりやーに、むる合^あいの子^こやぐどう美^みらん子^こぬ産^{まつ}まりやーに、美人^{ひじん}、むるなー沖繩^{おきなわ}中^{なか}かいうぬ子^こんちやー広^{ひろ}がてい、むる美^みらかーぎーなたぐどう、美^みらさしんでー、なーすぐ唐^{とう}んかい引^ひち上^あげて、なーだー、かーら上^あんかいる引^ひちまるかつとーぐどう、あんさーに、上^あぬ言^いし聞^きかんねーならんしぇー

糸満は唐と行き来する所であつたらしい。糸満とは言わない沖繩と言おうね。そしたら沖繩中に子孫は広がるということになるからね。そうして、普通の子孫達が産まれるようにとお願ひしたから、このようにして普通になつたという昔の話があつたが。

そして、唐から旅に来た人が、(沖繩に)宿もとつたので、沖繩の人と夫婦になつた。そして、夫婦になり、みんな合^あいの子であるので、大変美しい子どもが産まれた。沖繩中にその子孫が広がつて、みんな美人になつたので、美しい人達はみんな唐に連れ去られてしまつた。もう上から連れに来るのでね、上の言うことは聞かないといけないしね。

やー。

あんさーに、うぬなー上うぬ人じんちやーが、うぬ美まら
かーぎーびけーん、むる引ひち上あげてい、連つてい行いち行い
ちしちやぐとう。なーちやーしん考かえらんねーならん
むーりち、いえーりん吟ぎん味みしみそーちえーるばーるや
はに。あんさーにからくぬ手てぬ紋もん様ようあ突つちやーに、う
ぬ手てぬ紋もん様ようあ見みしてい、「私わねー土ど入いる、かんるやんどー」
りち、かんし見みしてい、うりしはんちやんりさりぬはな話はな
ぐわー私わねー聞きちやしが。

それで、その上の人たちが、美人だけをみんな連れ
て行つたりしたのでね。もうどうにかしないといけな
いと考えて、たぶん吟味したんでしようね。それから
手に紋様を突いて、その紋様を見せて、「私は土人だよ」
と、このように見せて、それでまぬがれたという話を
私は聞いた。

採集 S52・2・27 読谷村民話調査団第三班 〈阿波根初美〉

注 ハジチ 明治三十年代頃まで盛んに行われていた入墨習俗。年

頃十七、八歳の手甲に、針と墨で施術をした。士族と平民の区
別があり、また地域によつても多少異なつていた。宮古、八重

山地方では織物の模様もあつたようだが、沖縄本島内は指には
弓の矢、手の甲には丸星などの模様がある。これをしていない
と後生で困るとか、大和に連れて行かれるとの伝説がある。



ハジチ

翻字 島袋フジエ

ある親ぬ家かい行ぢよ、一茶碗茶あ飲むなり。あん
し今がちきて、うぬ一茶碗茶あ飲むなよーぬーぬー
り言んでー、子供達んかい。急じよーぬばーねーすぐ
一杯飲でい行ちゆる時間ぬあしえーやー、一茶碗茶や
絶対飲むしえーあらん。なー一茶碗飲むんえーまねー
難の一防じゅんどーりちやぬちむ。

うれーよー、親ぬ家かい行ぢやーなかい、茶や飲めー
りち出じやしーねー、一茶碗飲でい出じえーるばーてー、
親のー「なー」一茶碗のー飲まん、一茶碗飲むしえーあ
らんどー「り言いながなー。山から猪ぬ上がてい来る
時期あたていよー、猪んかい引かつたんりち。一茶碗
茶あ飲むなでいち言んしえーたん。私たー親んちやー
や、あんぐどう。うれー昔やぐとうりち思いしがよ、
慎みーしやいびんや。

親の家に行つてね。一杯茶は飲むな(ということば
があるよ)、それで、今につけて、お茶は一杯飲むも
のではないよと、子供たちに言つてゐるよ。急いでい
るときは一杯しか飲む時間はないでしよう。一杯茶は
絶対飲むものではない。あと一杯飲む間には難を防ぐ
ことができるということである。

これはね、親の家へ行つて、お茶を飲みなさいと出
されて、一杯だけ飲んで行つたようだね。親は、「あと
一杯飲みなさい。一杯だけ飲むものではないよ」と言
われながら(飲まなかつたんでしようね)山から猪が
出る頃に遭つて、猪に襲われたそうだ。それで、一杯
茶は飲むなと言われた。私たちの親はね、それは昔の
ことと思うかもしれないが、慎んだ方がいいですね。

翻字 村山友江

うぬ吉屋チル一がどー、吉屋チル一が
注

比謝矼ぬ橋や誰が架きていうちえが
情ねらん人ぬ架きていうちえさ

りち。橋がねーらんねー私ねー売らんたるむん、り
ち。自分ししえーんばーてー童そーに。

この吉屋チル一がね
比謝矼の橋は誰が架けたんだろうか
情ない人が架けておいてあるよ

と歌つた。この橋がなければ私は売られなくともよかつ
たのに、この橋から越えていかなくてもすんだのに、

と。子供の頃に自分で歌つたようだ。

担みているめーたんりぐとう、那霸かい売ちういが
りち、うり吉屋チル一りしえー。とーあんきーにうり
が掛け歌しえーるばー、吉屋チル一が。うり担みて
るめーたんり。担みてい、あんし卖いがもーちえーる
ばー。なさりんそーらんてーるばーてー。

この吉屋チル一を那霸に売りに行くということで、
担いで行つたというんだからね。そこで吉屋チル一が掛け
歌をしたようだ。貧しかったので、吉屋チル一を担
いで売りに行つたんでしょうね。

採集 S 52・2・27 読谷村民語調査団第十三班 (伊波百合子・兼村 実)

注 吉屋チル一 (一六五〇? 一六八?) 恩納なべと並び称される女流歌人。十三歳 (または八歳) のとき、仲島遊郭へ売られ、ある男と恋仲になるが、抱え主に人の嫌う病人の相手をさせられたためそれを苦に自殺したと伝えられる。

話者 比嘉利吉（明治四十一年十一月二十日生）

翻字 棚原めぐみ

あれはねー、山田の人であつたといふことも聞いてゐるな。

しかし、げいりは、わみや恩納村といふてあるさーね。恩納村。昔は山田まで読谷であつたといふ話だが、それを親が貧乏であるから、ジュリ卖いしに連れて行つたといふ事だな。

そして比謝橋を渡つて行つたといふ事。

比謝橋の橋や、情きねん人ぬ

わん渡さどうむてい、架きていうちえさ

といふこと歌つたそうだ。

吉屋は、売られて行つたからさ、もう向こうで有名な人だつたわけだな、辻に行つて。そしてあの一昔のジュリだから、アンマーはお金取ればいいさーね。お金取ればいいから、物乞やーの非常に汚ない者に呼ばれたわけだな。そのう客お暗しんむんう客やんりぐとう。そうしてその人に呼ばれてしまつてあくる日見たら非常に汚ない人間であつたといふこと。それから吉屋はも一生きる気持ちもなくて、海上の崖から、落していく死じやんといふ話だな。それからもーアンマーが、うぬ海上の崖んかい通つて泣いたから。

生ちちうるえまや、わん粗末にひちょーてい

死ぬはバクチャヤに通つていなしば

そういうて、死んでからも歌を歌つたといふことだな。

著者 照屋カマド（明治三十一年七月十日生）

翻字 安里和子

仲泊か、多幸山から北ぬ人ぬ恩納ん人んれー、仲泊ん人人んれーやんしえーてーんてー。那霸に行つて買物しーが行ぢ、なー家かい来に夜ぬ夕暮たぐとうや、「なー夜や夕暮ていちゅーい、多幸山やフェーレー やるむん、喜名番所んかい泊までい行か」りちやぐとう。道中あ喜名ぬ番所んかい、喜名番所んかい泊までい行かり。一人の者が言つたから、言ちやぐとう、「女ぬでいらむん番所んかい泊まいなー。急げ急げ、しまかからでいち、歌ぬあたるばー。あんすぐとううれー」。

多幸山 フエーレーていんどー

喜名番所に泊まらなやー

女ぬでいらむん番所に泊まいみ

急ぎ急ぎ しまかから

り、ただうつび。

仲泊が多幸山より北の方の人、恩納か仲泊の人であつたんでしょうね。その人が那霸に買い物に行つての帰り、日が暮れたからね。山原（北部）の人が、那霸に買い物に行つて家へ帰る時、日が暮れたので「もう暗くなつてくるし、多幸山にはフェーレーがいるといふことだし、喜名番所に泊まつて行こうよ」と言つた。途中の喜名番所にね。もう一人の人が、「女のくせに番所なんかに泊まるか。急げ！急げ！家へ帰ろう」という歌があつたよ。それは、

多幸山にはフェーレーがいるよ

喜名番所に泊まろうよ

女のくせに 番所に泊まるか

急げ急げ 家へ帰ろう

と、ただそれだけ。

注 多幸山 恩納村にある山の名で、読谷村との境にある。旧道が残つてお

一里塚も存在する。フェーレー(盜賊)の出没した場所として多幸山フェー

レーは有名である。

121 多幸山 フエーレー

話者 當山ハツ(明治三十九年五月十日生)

翻字 島袋フジエ

多幸山 フエーライやよ、ある力持ちぬよ、石えエイ
エイ担みて行ちゆる場合に、石るやしが宝物でいち取
いんでいさーに落ていて死じやんでい。うれー聞ちや
ん。

多幸山 フエーレーといるのはね、ある力持ちが、石
をエイエイ担いで、(多幸山の)山道を通つてゐる時、
石であるのに宝物と思つて、取ろうとして、(山から)
落ちて死んだという話。これを聞いた。

盗ぬすどうちやーさつてーる子、孫んぢやーがやてーん
てー。りいうれーなーかんしえーならんさりち。命ん
取いん、金ぬん取らり、今かいあさましいやてーんてー。



フェーレー岩 (多幸山)

直接取いぐとう、うぬ話。

石、力持ちぬ女んかい、とうかちみらさーい、あん
しかきてい取やーに、パタみかち、ひんぎてーるばー
てー。あんしねーなー落ていていちゅーしえー石は重
いから、あんり言いたしが。

ら、その話。

石を力持ちの女が頭にのせ、(そこへフェーレーが釣
り針のようなもので) つりあげると同時に (女はその
場を) 逃げた。そうすると石は重いから (山から) 落
ちたわけだ。そんな話を聞いたよ。

採集 S 63・3・18 読谷ゆうがおの会 (知花春美・棚原めぐみ)

122 大木 フエーレー

話者 玉城マツ (明治三十五年五月十五日生)

翻字 知花春美

フェーレー、うまんかい立つちゅんりよー。立つちや
ぐどう、ちゅーん立つちるすら一分からんぐどう、ちゅー
や物じやくいしわるないりち、重むん、砂かみて
行ぢよ、うちゅくいんかい、すぐかみてい行ぢやーい。
ぬぶらしららんしえーや、うじんちちょーぐとう、く
まんくぬ盜人お重きぬ転りていすくなたんりしえー聞
ちょーるばー。

フェーレーがそこに出たようだ。出たので、きょう
も出るかもしれない、きょうは何かし掛けをしない
といけないと、重い物、砂を持って行き、ふろしきに
入れて、頭に載せて行つた。(そのフェーレーは) 砂が
重いので転んだそうだ。転んでしまつたということを
聞いたんだがね。

著者 當山ハツ(明三十九年五月十日生)

翻字 島袋フジエ

旅人や、那覇から山原までい歩ちる山田や半ばや
しえーや。夜暮いる、夜なたんばーてー、夜なたぐとう。
うぬ金の一持つち歩ちゅしえー男あ、金の一持つちえー
ちゅぐどう男あ。

「入る人やうしが 戻る人やうらん」うまうてい、
泊まらさーに、女ん子あ相手しみやーに 金取いぐら
やたんりぬ話るやしが。

あんさーに、うぬ歌作らつとーんりさりたんろー、
山田ヌン殿内やさ。殺ち、あんさーにななか戻る人お
うらんりちる、妻、子んでーぬる歌作てーる。

旅人は、那覇から山原まで歩いて行き、その半ばが
山田だつた。(山田で) 夜が暮れて、夜になつたので、
(そこに泊まつたようだ)。男の人はお金を持って歩い
ているでしよう。

「入る人はいるが 出て行く人はいない」ここに泊
らせて、そこの娘に相手をさせて、お金を取つていた
という話だがね。

それで、その歌が作られたということだよ、山田ヌ
ン殿内さ。(旅人を)殺して、なかなか戻る人はいない
と、妻や子が歌を作つたんだね。

採集 S 63・3・18 読谷めうがおの会(知花春美・棚原めぐみ)

喜名トウクハンジャーの話

話者 与儀マス(明治三十八年十月十日生)

翻字 安里和子

喜名ぬトウクハンジャーが、山田から女を、娘を探しに行つて、行ち戻い戻い、毎晩したから、向こうは山猪どころだから。

多幸山猪、驚くな山猪

喜名トウクハンジャーが山田戻り
りち言うたわけさ。「驚くな山田戻いるやんどー」り
ちやるばー。有名な男やでーんてー。

喜名トウクハンジャーが山田に女、娘を求めて、毎晩行つたり来たりしていた。向こうは山猪どころだから、

多幸山の山猪、驚くな山猪

喜名トウクハンジャーが山田から戻る途中だよ
と言つたそうだ。「驚くんじやないよ、山田から戻る途中だよ」と言つたわけだ。有名な男だつたんでしょうね。

採集 S 52・2・27 読谷村民話調査団第十四班(伊芸弘子)

◆ 参考文献

- 1 「日本昔話名集」柳田国男監修 日本放送協会編 日本放送出版協会 昭和四九年二月 二二版
- 2 「日本昔話集成」関敬吾著 角川書店 昭和二十五年一三三年
- 3 「沖縄語辞典」国立国語研究所編 大蔵印刷局 昭和五十年三月 四版
- 4 「琉球史辞典」中山盛茂編著 文教図書 昭和五十年
- 5 「沖縄大百科事典」沖縄タイムス社編 一九八三年五月
- 6 「今帰仁方言辞典」仲宗根政善著 角川書店 昭和五八年二月
- 7 「沖縄ことわざ事典」仲井真元楷著 月刊沖縄社 一九八二年五月
- 8 「沖縄の伝説2」大城立裕・星雅彦・茨木憲著 角川書店 昭和五一年二月
- 9 「組踊全集」當間清弘編集 一九七七年一月
- 10 「琉歌大観」島袋盛敏著 沖縄タイムス社 昭和五十三年七月
- 11 「読谷の文化財第一集」読谷村教育委員会 昭和五三年三月
- 12 「伊良皆の民話」読谷村立歴史民俗資料館編 昭和五四年三月
- 13 「喜名の民話」読谷村立歴史民俗資料館編 昭和五五年三月
- 14 「長浜の民話」読谷村立歴史民俗資料館編 昭和五六六年三月
- 15 「瀬名波の民話」読谷村立歴史民俗資料館編 昭和五七年三月
- 16 「儀間の民話」読谷村立歴史民俗資料館編 昭和五八年三月
- 17 「宇座の民話」読谷村立歴史民俗資料館編 昭和五九年三月
- 18 「渡慶次・高志保の民話」読谷村立歴史民俗資料館編 昭和六十年三月
- 19 「波平の民話」読谷村立歴史民俗資料館編 平成元年三月

第二編
資料



話者別一覧表

凡例

一、話者番号は話者の数を表わす番号である。話者の配列は調査班の若い順に並べたが割り付上前後したものもある。

二、話者欄には、話者の氏名を示し、できるだけ写真を載せた。

三、住所欄については、話者のすべてが読谷村に住所を有するので、字名と番地を記入した。生年月日は、便宜上M(明治)、T(大正)、S(昭和)の略号を用いた。

四、話型番号に○を付したのは、翻字資料が掲載されていることを示す。

五、話型名欄のへはモチーフ名を表わす。話は調査年月日の古い順に、テープ収録順に並べた。また、同話者による同じ話の再録分については調査の古い順に並記した。

六、語りの欄の○印は方言×印は共通語、△印は方言共通語混じりの語りを表わす。

七、テープ欄には字ごとに編集したテープ番号を示した。

八、調査欄には調査年月日を示した。

3	2	1	話者番号
松元ウト	当山千代	山城ウシ	
M 44 ・ 3 ・ 25	M 44 ・ 10 ・ 1	M 29 ・ 6 ・ 20	生年月日
八 座喜味二三九	七 座喜味二五三	座喜味一五二	話型番号
(①)	4 ③ ② ①	2 1	話型名
66	79 65 116		翻字番号
154	170 153 268		掲載頁
○	○ ○ ○ ○	○ ○	語り
1 A 5	1 A 7 1 6 A 4 3	1 A 2 1 A 1	番号 テープ
ノ	ノ ノ ノ ノ	ノ	調査
		S 52 ・ 2 ・ 27	

8		7		6		5		4	
真栄田 カマド		喜友名 ウシ		喜友名 ウシ		波平ハツ		玉城マツ	
M 40 ・ 1 ・ 20	座喜味二〇	M 32 ・ 10 ・ 10	座喜味二五	M 29 ・ 2 ・ 21	座喜味五八八	T 1 ・ 12 ・ 5	座喜味六四	M 35 ・ 5 ・ 15	座喜味一二七
1	9 8 7 6 5 ④ ③ 2 1		5 4 3 2 1	② ①	⑧ ⑦ 6 ⑤ ④ 3 2 ①				
鍋蓋アカマタ	念仏者の話 菊酒由来 五月五日由来 真玉橋の人柱 雨蛙不孝 吉屋チルー(比謝橋の歌)	ハジチの話 継子の弁当 継子話(麦つき) 火正月	雀孝行 姥捨て山 銘苅子 継子話	嫁と姑(芋に刺) 炭焼き長者	嫁と姑(肝焼木) 鳴料理	吉屋チルー(恨みの歌) 嫁と姑(麦搗き) 嫁と姑(二十日月) 聞き違い	大木フエーレ(鉤釣り)		
	118 64			85 75	74 47 78 77	122			
	271 152			191 166	165 100 169 168	275			
○	△ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○	○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○				
1 B 6	4 4 4 4 4 4 4 4 4 B A A A A A A A A 1 33 32 31 29 25 22 21 17		1 1 1 1 1 B B A A A 4 2 23 22 18	1 1 A A 15 13	1 1 1 1 1 1 1 1 A A A A A A A A 17 16 14 12 11 10 9 8				
リ	リ リ リ リ リ リ リ リ リ		リ リ リ リ リ リ	リ リ	リ リ リ リ リ リ リ リ			S 52 2 •	

13	12	11	10	9
波 平 蒲 助	山 城 幸 一	比 嘉 テ ル	松 田 カ マ	島 袋 カ マ
M 42 • 8 • 16 座喜味一四九	M 32 • 8 • 20 座喜味一九五	M 43 • 7 • 13 座喜味六一八	M 28 • 7 • 25 座喜味一五七	M 34 • 3 • 5 座喜味六九
④ 3 2 1	3 2 1	⑥ ⑤ ④ ③ ② ①	8 7 6 5 4 3 2 1	4 3 2 1
肝試し 十二支由来 鬼餅由来 山田スン殿内	雀酒屋 鳥が入つたら '民'	白銀堂由来 五月五日由来 真玉橋の人柱	雀孝行 浜下りの話 夫振岩 猫の話 子育て幽靈 モーイ親方 (難題) 真玉橋の人柱	猿長者 山原と団亀 姥捨て山 子供の肝
35		105 53 10 15 28 5		
81		247 113 22 34 53 10		
○ ○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○
2 2 2 2 A A A A 6 5 4 3	2 2 2 A A A 7 2 1	1 1 1 1 1 B B A A A 3 1 24 21 20 19	1 1 1 1 1 1 1 1 B B B B B B B 17 13 11 10 9 8 7 5	1 1 1 1 B B B B 16 15 14 12
〃 〃 〃 〃	〃 〃 〃	〃 〃 〃 〃 〃 〃	S 52 • 2 • 27	〃 〃 〃 〃

18	17	16	15	14
与儀マス	波平カマ	照屋カマド	山内松	上地弘治
M 38 • 10 • 10	M 36 • 4 • 20	M 31 • 7 • 10	M 30 • 5 • 10	M 29 • 10 • 5
座喜味二四一	座喜味四二九	座喜味六六	座喜味一八八	座喜味三〇〇
2 1	2 1	10 ⑨ ⑧ 7 ⑥ 5 ④ 3 ② 1	6 ⑤ 4 ③ 2 ①	⑦ ⑥ ⑤ 4 ③ ② ①
読谷にアダン葉を取りに来た人 五月五日の歌	キジムナーの話 三月三日浜下りの話	婆捨て山 東上地の粟上納 継子と赤肉 サーカ 仲順大王 アカマタ聟入 雀幸行 五月五日由来 多幸山フェーレーの話	葉しへ長者 お茶二杯 聞き違い ハジチ由来 アカマタ聟入 五月五日由来 多幸山フェーレーの話	キジムナー(魚取り) 五月五日(菖蒲) 蚊になつた男 黄金の瓜種 蚊餅由来 五月五日(菖蒲) 雀酒屋 キジムナー(山仕事+魚取り) 嫁と姑(うどんはミミズ) 鬼餅由来
		60 71 81 120 24	45 61 17	92 50 11 73 19 4
		148 162 174 273 49	97 149 39	215 103 27 163 41 9
○ ○	○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
2 2 B B 6 4	2 2 B B 11 2	2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 B B B B B B B B B B 23 22 16 15 14 12 10 5 3 1	2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 A A A A A A A A A A 20 19 18 15 13 12 11 10 9 8	2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 A A A A A A A A A A 17 16 14 12 11 10 8
〃 〃	〃 〃	〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃	〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃	S 52 • 2 • 27

30	28	28		27		26		25
波 平 常 安	当 山 ウ シ	比 嘉 勝 一		島 袋 ウ シ		玉 城 五 衛 門	照 屋 清 太 郎	
M 39 • 10 • 2	M 43 • 4 • 5	M 45 • 12 • 23	M 座喜味 一八四	M 29 • 12 • 20	M 座喜味 一〇四	M 14 • 12 • 2	M 座喜味 三六	M 41 • 6 • 10
①	③ 2 1	①	6 5 4 3 2 1	⑤ ④ 3 2 1	7 6 5 4 3 2 1	城間仲 猿長者	五月五日由來 菖蒲	
鬼餅由來	子育て幽靈 大歳の火 （子供は黄金）	北谷モーし （歌）	城間仲 （盜人）	雀幸行 果てなし話 （蟻つなぎ） 多幸山フェーレー （かぎ釣り）	流星 （イリガン星）	城間仲 （致富）	五月五日由來 菖蒲 名護親方と眞志頭親方 親捨て山（灰縄）	屋良ムルチ （説明）
16	26		83		62 80			
37	51		187		150 172			
○	○ ○ ○	○	○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○	× × × × × × ×			
4 B 2	4 4 4 A A A 30 27 26	3 B 4	4 4 4 4 4 4 A A A A A A 28 24 23 20 19 18	4 4 4 4 4 4 A A A A A A 16 15 14 13 12	4 4 4 4 4 4 A A A A A A 11 10 9 8 7 6 3			S 52 • 2 • 27
〃	〃 〃 〃	〃	〃 〃 〃 〃 〃 〃	〃 〃 〃 〃 〃 〃	〃 〃 〃 〃 〃 〃	〃 〃 〃 〃 〃 〃	〃 〃 〃 〃 〃 〃	

	36		35	
	比嘉利吉	照屋カマ一		
M 41 ・ 12 ・ 20	座喜味三六七	M 37 ・ 9 ・ 10	座喜味二〇六	
⑯ ⑮ ⑭ ⑬ ⑫ ⑪ ⑩ ⑨ ⑧ ⑦ ⑥ ⑤ ④ ③ ② ①	6 5 4 3 2 1	6 5 4 3 2 1	21 20 19 18 17 16	
西ぬ松金 名護親方と具志頭親方 西ぬ松金 白銀堂 田場大工 普天間権現 赤犬子 本部サールーと喜屋武ミーベーカー	座喜味棒の始まり 喜屋武ミーベーカー 佐久川三郎 赤犬子 水船速船 モーイ親方 譲佐丸と阿麻和利 勝連バーマ 大歳の客 繼子話(双葉草) 繼子話(麦と涙) 繼子話(二十日月)	雀孝行 キジムナー(魚取り) 大歳の客 鬼餅の話 鬼餅の話 大歳の客 雀孝行 キジムナー(魚取り)	打ち紙由来 うない神 天人女房 屋敷御願の説明 按司加那志と女の歌問答	大歳の客 天人女房 按司加那志と女の歌問答
102 98 99 39 38 36 37 109 31 32				
239 233 235 85 84 82 83 256 71 75				
△ △ △ × △ × △ △ △ × △ △ × × ×	△ △ △ △ △ △	○ ○ ○ ○ ○ ○		
12 12 12 12 12 12 12 12 12 12 12 12 5 5 5 B B B A A A A A A A A A A B B B 3 2 1 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 22 9 3	5 5 5 5 5 5 5 5 B B B B B B B B 16 14 11 8 7 5 5 5	6 6 6 6 6 6 6 6 A A A A A A A A 8 7 6 5 4 3		
S 63 〃 〃 4 • 12	S 63 〃 〃 4 • 9	S 52 〃 〃 〃 〃 2 • 27	S 52 〃 〃 〃 〃 2 • 27	

	38	37	
	島袋 亀次郎	喜友名 カ メ	
M 28 ・ 1 ・ 29	座喜味 五 七 七	M 25 ・ 3 ・ 15	
⑨ 8 7 6 ⑤ ④ ③ 2 1		1	33 32 31 30 ② ② ⑦ ⑥ ⑤ 24 ③ 22 21 ② 19 18 ⑦
豆と 糞と 糞と炭 糞しべ 長者 八十八 由来 タブラー 割 ちぎりの 話	護佐丸と 座喜味の 御歳	雀孝行	大歳の客 もの言う牛 犬の足 酒の始まり 吉屋ナル 阿麻和利 チーグー王 護佐丸 阿麻和利 チーグー王 護佐丸
9 55 87 29			108 27 25 20 88 6 119 103
19 134 198 59			255 53 51 43 200 11 272 240
○ ○ ○ ○ ○ △ △ △ △	○	×	× × × × × × × × △ × × × × × × △
6 6 6 6 6 6 6 6 6 B B B B B B A A 7 6 5 4 3 2 1 11 10	6 A 9	13 13 13 13 13 12 12 12 12 12 12 12 12 12 12 12 A A A A A B B B B B B B B B B B 5 4 3 2 1 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4	
〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃	S 52 • 8 • 16	S 63 • 5 • 4	S S 63 63 • 4 • 4 20 12

43	当 真 タ ケ		42
T 6 • 2 • 5	座喜味 六三九	M 41 • 3 • 20	座喜味 一八二
2 1	24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 ⑫ 11 10 9 8 7 6 ⑤ 4 3 2 1	24 23	厄払い 五月五日由來 お茶二杯 十二支由來 ヘビ除け呪文 五月五日由來 お茶二杯 厄払い
継子話 (<small>アカマタ</small>)	アカマタ ナーチャミー由來 ハジチ由來 クラガ一発見 屋良ムルチ 親棄て山 モーイ親方 多幸山フェーレー 火正月 吉屋チルー 山田ヌン殿内	シビランカの歌 蛇の始まり 蚊の始まり 鬼ムーチー 泊阿嘉 嫁と姑 一日橋の由來 真玉橋の人柱	吉屋チルー クラガ一発見
		97	13
		232	31
× ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ × × × × × × × ×	○ ○	
12 12 A A 3 2	11 11 11 11 11 11 11 11 11 11 11 11 11 11 10 10 10 10 10 10 10 10 10 B B B B B B B B A A A A A A B B B B B B B B 9 8 7 6 5 4 3 2 1 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1	12 11 A B 1 6	
S 63 • 4 • 5	S 63 • 3 • 22	S 63 • 3 • 17	S 63 • 3 • 24



民話調査風景（座喜味公民館）

44								
松 元 カ メ								
M 41 • 5 • 10	座喜味 一六五							
4 3 2 1	7 6 5 4 3							
吉屋ナル 危払い	お茶二杯 雀幸行							
		喜名タカハンジャー						鬼餅由来
		聞き違い（ビル）						モーイ親方（煙草）
		しようぶ由来						（ハンドル）
○ × △ ○	△ ○ △ ○ ×							
12 12 12 12 A A A A 12 11 10 9	12 12 12 12 12 A A A A A 8 7 6 5 4							
〃 〃 〃 4 • 8	S 63 • 4 • 8							

話型一覧表

凡例

一、昔話の分類は【日本昔話集成】に従つて分類し、動物昔話、本格昔話、笑話の順に並べた。

二、話者名は【日本昔話名彙】(柳田国男監修)【日本昔話集成】に対応する話はなるべくその話型名に従つたが「アカマタ聟入」「真玉橋の人柱」など地域に密着した題名についてはそれを用いた。その他の話型については調査者及び編集者が付した話型名を用いた。へゝはモチーフ名を示す。

三、上段は話型名、下段の数字は話数を表わす。

6	5	4	3	2	1	9	8	7	6	5	4	3	2	1				
動物昔話																		
雀孝行	雨蛙不孝	雀酒屋	十二支由来	犬の足	猫と鼠	猿の生肝	豆と糞と炭	舌切り雀	本格昔話	本格昔話	本格昔話	本格昔話	本格昔話	本格昔話				
キジムナー	豚化け美女	ハブの恩返し	アカマタ聟入	天人女房	木魂女房	子育て幽靈	塩吹き臼	真玉橋の人柱	死んだ娘	親の声は神の声	子供の寿命	契りの話	唐に行つた兄弟	願いことは大きく				
3	4	1	2	10	12	1	1	1	1	1	1	4	4	5	14			
26	25	24	23	22	21	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7
後生貧乏	願いことは大きく	死んだ娘	親の声は神の声	子供の寿命	炭焼き長者	塩吹き臼	真玉橋の人柱	子供の寿命	木魂女房	天人女房	ハブの恩返し	アカマタ聟入	四疊半由来	ハブの恩返し	アカマタ聟入	キジムナー	豚化け美女	城間仲
1	1	1	1	1	1	2	3	8	2	4	1	3	4	2	1	2	3	4
46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	30	29	28	27	28
嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑
嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑
嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑	嫁と姑
1	1	1	1	2	3	1	1	1	1	2	2	3	1	2	3	9	4	3

12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47		
モーイ親方 （難題）	田場大工	モーイ親方 （複数モチーフ）	モーイ親方 （複数モチーフ）	箱の鼠	本部サールーと喜屋武ミーぐわー	喜屋武ミーぐわー	佐久川三郎	肝試し	恐いもの比べ	勝連バーマ	笑い話	唐旅をした兄弟	黄金の瓜種	男の友情	塩がいちばんうまい	マジムンと友達になつた人間	蚊になつた男	猿長者	火正月	大年の火	大年の客	子供の肝	大年の客	子供の肝	大年の客		
1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	4	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	3	4	3	4	7	4	
11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13		
屋良ムルチ	普天間権現	尚円王の話	白銀堂由来	阿麻和利	護佐丸	夫振岩	一日橋の由来	沖縄の始まり	伝説	夕顔と人の頭	高名の鼻きき	牛どろぼうの話	垢湯は腹薬	国頭大宜味カナチク	鳩料理	屁ひり嫁の踵栓	山原と田龜	親捨て山（柴折り）	親捨て山（難題）	親捨て山	親捨て山	モーイ親方（煙草）	モーイ親方（勉強）	モーイ親方（煙草）	モーイ親方（勉強）		
5	2	3	1	1	2	2	1	2	1	1	1	1	1	1	2	3	3	2	2	2	6	1	1	1	1		
38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	
泊阿嘉	喜名トクハンジヤーの話	支那の張良の話	名護親方と具志頭親方	西ぬ松金	チーグー王	仲泊親方	北谷モーシー	喜名タカハシジヤー	多幸山フェーレー	山田ヌン殿内	大木フェーレー	吉屋チル	吉屋チル	歌い骸骨	同干支の茶毎には行くな	お茶一杯	ハジチ由来	墓の始まり	位牌の始まり	打ち紙由来	盆踊りの由来	ナーチャミー由来	ナーチャミー由来	赤大子（水船速船）	クラガ	赤大子（水船速船）	クラガ
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	

その他

東上地の粟上納

米戦法

クプラ割

座喜味の人と御嶽

サーカ迎えという所の話

アダン葉を取りに来た人

世間語

民俗

	6	5	4	3	2	1
総話数	363	9	23	12	2	1
					1	1

◆座喜味の民話調査者名簿

沖縄国際大学口承文芸研究会

遠藤庄治（顧問教授）・宮里光雄・富村朝夫・宮里洋子・上原利津子・

山城悦子・村山義隆・○山入端孝子・伊波百合子・兼村 実・連天悦子・

金城清美・渡慶次勲・伊波洋子・崎浜博子・小橋川清一・大本敬子・大

浜芳美

沖縄民語の会

照屋寛信・伊芸弘子

読谷ゆうがおの会

安里和子・島袋オツル

読谷村立歴史民俗資料館

○名嘉真宜勝・○知花春美・○村山友江・○棚原めぐみ・松田千賀子

注 ○印はゆうがおの会会員

その他

田中文雅・上田加代子・横田和子

翻字者一覧表

														番号
														翻字者名
7	6	5	4	3	2	1								
十	島袋智子	島袋喜美子	國吉トミ	具志堅タケ	上原ヨシ	伊波邦子	安里和子	北谷町桑江四七	八一二					
沖縄市仲宗根六	一四七	読谷村字座喜味	読谷村字楚辺一	読谷村字高志保	読谷村字瀬名波	読谷村字大湾六	伊波邦子	安里和子	北谷町桑江四七					
51 44	39 38 36	101 41 33	84 68	116 79 66 65	67 23 14	124 120 81 72 24								番号
箱の鼠	高名の鼻きき	田場大工	喜屋武ミーぐわー	垢湯は腹薬 支那の張良の話	床柱の逆立て 継子話（井戸掘り）	親捨て山 宝物の話	継子と杓子 ハジチ由来	クスケー由來 アカマタ簪入り	多幸山フェーレー	喜名トウクハンジャーの話	アカマタ簪入り 継子と赤肉	仲順大主の話	アカマタ簪入り 喜名トウクハンジャーの話	話柄
山城盛吉	比嘉利吉	比嘉利吉	比嘉利吉	照屋寛良	照屋寛良	当山寛良	松元ヨヨトヨ	当山ハヨトヨ	當山ハハハ	當山ツツツ	當山ツツツ	當山ツツツ	當山ツツツ	話者
108 91	85 84 82	237 87 77	189 158	268 170 154 153	155 46 33	277 273 174 162 49								掲載頁

														8
														島袋フジエ
七九四ノ一	読谷村字長浜一	知花春美	七三一二	読谷村字大木三	知花孝子	八三五一二	棚原めぐみ	北谷町宮城一	六三一					
16 15 12 10 9 5 3 1	86 70 60 7	119 103 88 27 25 20 13 6	123 121 117 97 96											
鬼餅由来	食わぬ女房	五月五日由来	豆と煮と炭	雨蛙不孝	十二支由来	大年の客	猫と鼠	東上地の栗上納	吉屋チル	クスケー由來	犬の足	豚化け美女	夫振岩一日橋の由來	
波平常安	比嘉テカルナル	島袋嘉テ次郎	照屋寛良	照儀屋良	与力良	比嘉吉	比嘉吉	比嘉吉	比嘉吉	比嘉吉	比嘉吉	比嘉吉	比嘉吉	當山山山山山
比嘉内常	嘉テ次郎	嘉テ次郎	照儀屋良	照儀屋良	照儀屋良	嘉嘉嘉嘉嘉嘉	嘉嘉嘉嘉嘉嘉	嘉嘉嘉嘉嘉嘉	嘉嘉嘉嘉嘉嘉	嘉嘉嘉嘉嘉嘉	嘉嘉嘉嘉嘉嘉	嘉嘉嘉嘉嘉嘉	嘉嘉嘉嘉嘉嘉	ハハハトハハ
山常安	山常安	山常安	山常安	山常安	山常安	山山山山山山	山山山山山山	山山山山山山	山山山山山山	山山山山山山	山山山山山山	山山山山山山	山山山山山山	ミツ
37 34 30 22 19 10 6 1	183 161 148 12	272 240 200 53 51 43 31 11	276 274 270 232 230											

15	14	13	12
村山友江 読谷村字喜名二 三〇七一四	名嘉真宣勝 読谷村字波平三 一九	長堂加代子 読谷村字波平二 一七一	津波古米子
89 82 80 72 62 59 57 54 43 42 40 34 30 26 22 18 8 2	92 61 50 45	109 49 37 32 31	73 35 19
塩が一番おいしい 城間仲 大晦日の棺 継子の茶腹飯腹 神の美作	蚊になつた男 赤犬子(水船速船) 山原と団亀 本部サールーと喜屋武ミー モーライ親方 勝連バーマ ぐわー	聞き違い(ひる) 黄金の瓜種 わらしへ長者 雀孝行 猿の生き肝 キジムナ! ハブよけ呪文 子育て幽霊 唐旅をした兄弟 肝試し 恐いもの比べ 夕顔と人の頭 果てなし話 願いごとは大きく 脈とり名人	嫁と姑へうどんはミミズく 肝だめし キジムナ! モーライ親方 勝連バーマ ぐわー
山当玉山玉当当照山山山当当山山照当 内山城内城山山屋屋城城城山山内城屋山 カ三次郎ナカ三次郎ナカ三次郎ナ 次衛門ナ次衛門ナ次郎良良吉吉吉シナ吉良郎	上山上山地内地内弘弘治松治松	比當嘉利ハ吉ツ 比嘉利吉吉治治治	上波上地平地弘蒲弘治助治
201 176 172 162 150 145 140 119 90 89 86 79 63 51 44 40 14 3	215 149 103 97	256 83 83 75 71	163 81 41

村山友江

後生貧乏
易者の話
マジムンと友達になつた人

國頭大宣味のカナチク

名護親方と具志頭親方

仲泊親方

チヨーフグン親方

118 115 112 111 110 107 104 102 100 99 98 95 94 93 90

名護ぬ親方
西ぬ松金
屋良ムルチ
墓の始まり
盆踊りの由来
位牌の始まり
友人の茶毘には行くな
古屋チル一

喜照又山又山比當比當比當照當
喜友名屋吉内吉城城嘉山嘉嘉山山屋山
ウ寛矢カ矢ウ盛利三次利利三次次郎
シ良助ナ助シ吉吉郎吉吉良栄

271 263 260 259 257 254 244 239 236 235 233 226 223 218 202



読谷ゆうがおの会

編集後記

このたび、読谷村民話資料集十の『座喜味の民話』が発刊されました。

座喜味における民話調査は、沖縄国際大学遠藤庄治先生ゼミ、同大学口承文芸研究会、読谷ゆうがおの会、読谷村立歴史民俗資料館等によって共同で行われました。その後、昭和六十三年三月

～昭和六十三年五月にかけて補足調査が資料館とゆうがおの会で行われ採集総話数が三六三話（九十分録音テープ十三本）にのぼりました。その中から語りの良い百三十話を選定しゆうがおの会々員一人当たり三～五話の翻字作業を依頼しました。

翻字原稿の点検作業は資料館に於て行われ、会員から提出された原稿を再度テープを回し、話者の語りに忠実に翻字されているかどうかことばひとつを点検していました。段落や対訳についても検討し原稿の空白部分は直接話者のところへ出向いて

確認しました。

部立ては前編に翻字資料、後編に資料編を持ってきており、話者別一覧では話者の顔写真もできるだけ掲載するようしました。校正作業は名嘉真・知花・村山・棚原が担当し五校正行いました。

写真撮影は知花・村山によるものです。

このようにして『座喜味の民話』の発刊までには、座喜味老人会（話者総数四十二人）、公民館長さんをはじめその他多くの方々の多大な御協力があり、紙面をかりて心よりお礼申し上げます。

現在、第十一集『楚辺の民話』刊行のための翻字作業を進めております。今後も、なお一層の御協力をよろしくお願い申し上げます。

平成二年二月一日

編集者

館長　名嘉眞 宜 勝
主事　知花 春 美
非常勤　村山 友 江
リ　棚原 めぐみ

座喜味の民話　　読谷村民話資料集 10

印刷年月日 平成2年2月20日

発行年月日 平成2年3月25日

編集・発行 読谷村教育委員会
歴史民俗資料館
〒904-03 沖縄県読谷村字座喜味708-4
電話 098958-3141

印 刷 文 進 印 刷 株 式 会 社
沖縄県那覇市上間567番地
電 話 0988(55)2323(代)